東関東自動車道水戸線酒々井ＰＡ
埋蔵文化財調査報告書３

－ 酒々井町墨古沢遺跡 －
中世編

平成 18 年 3 月

東日本高速道路株式会社
財団法人　千葉県教育振興財団

東関東自動車道水戸線酒々井ＰＡ
埋蔵文化財調査報告書３

－ 酒々井町墨古沢遺跡 －

中世編

序　　文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年９月１日付で名称変更）は埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第542集として，東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）の東関東自動車道水戸線酒々井パーキングエリア増築工事に伴って実施した，印旛郡酒々井町墨古沢遺跡（中世編）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，主に中世の多くの遺構と陶磁器を中心とした遺物の発見があり，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として，また，郷土研究の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年３月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長　佐藤健太郎

凡　　例

1　本書は，東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）による東関東自動車道水戸線酒々井パーキングエリア増築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書（中世編）である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県印旛郡酒々井町墨字台１３３７－１ほかに所在する墨古沢遺跡（遺跡コード３２２－００６）である。

3　発掘調査から報告書刊行に至る業務は，東日本高速道路株式会社の委託を受け，財団法人千葉県文化財センター（平成17年９月１日付けで財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者，実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は上席研究員　柴田龍司が担当した。

6　中近世陶磁器・土器については，小野正敏氏（大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国立歴史民俗博物館），藤澤良祐氏（愛知学院大学），簗瀬裕一氏（千葉市立加曽利貝塚博物館）の各氏に御教示いただいた。また，馬骨については，松井章氏（独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所）に御教示いただいた。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，東日本高速道路株式会社，酒々井町教育委員会の御指導，御協力を得た。

8　本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第２図　酒々井町役場発行　1/2,500地形図「Ⅸ-LF00-3」

第３図　国土地理院発行　1/25,000地形図「酒々井」（ＮＩ-54-19-10-4）

9　本書で使用した図面の方位は，すべて座標北である。測量は日本測地系による。

10　本書で使用した遺構番号は基本的には調査時のものを使用しているが，一部整理時に新たに付したものがある。

本 文 目 次

第1章　はじめに …… 1
　第1節　調査の概要 …… 1
　　（1）調査の経緯と経過 …… 1
　　（2）調査の方法 …… 2
　第2節　遺跡の位置と環境 …… 3
　　（1）遺跡の位置と周辺の地形 …… 3
　　（2）周辺の中近世遺跡 …… 3

第2章　中近世の遺構・遺物 …… 7
　第1節　検出遺構 …… 7
　　（1）区画遺構 …… 26
　　（2）地下式坑 …… 44
　　（3）井戸跡 …… 52
　　（4）粘土貼土坑 …… 65
　　（5）大型竪穴状遺構 …… 71
　　（6）方形竪穴遺構 …… 82
　　（7）土坑墓 …… 85
　　（8）火葬施設 …… 85
　　（9）馬埋葬土坑 …… 85
　　(10) その他の遺構（道路遺構，製鉄関連遺構，やぐら状遺構，大型不整形竪穴遺構，建物跡）…95
　第2節　出土遺物 …… 112
　　（1）陶磁器　a．中国製品 …… 112
　　b．瀬戸美濃窯製品 …… 113
　　c．志戸呂・初山窯製品 …… 120
　　d．肥前窯，備前窯製品 …… 121
　　e．常滑窯，渥美窯製品 …… 121
　　（2）土器　a．カワラケ …… 133
　　b．土器鍋 …… 139
　　c．土器擂鉢 …… 142
　　d．土器香炉 …… 143
　　（3）石製品　a．石塔 …… 145
　　b．その他の石製品 …… 145
　　（4）金属製品　a．銭貨 …… 150
　　（5）木製品　a．木製品 …… 150

第３章　中近世以外の遺構・遺物 ……159
第１節　古墳時代 ……159
（１）1210号址（竪穴住居跡） ……159
（２）1240号址（竪穴住居跡） ……159
（３）1388号址（竪穴状遺構） ……163
第２節　平安時代，その他 ……163
（１）1268号址（土坑） ……163
（２）1280号址（竪穴住居跡），1387号址（竪穴状遺構） ……163
（３）遺構外出土遺物 ……164

第４章　まとめ ……165
第１節　中近世の検出遺構 ……165
第２節　中世～近世初頭の陶磁器・土器 ……167
第３節　陶磁器からみた墨古沢遺跡の変遷 ……170
第４節　県内の主要な中世遺跡と墨古沢遺跡 ……182
第５節　墨古沢遺跡における瀬戸美濃製品の搬入状況 ……186
第６節　墨古沢遺跡の歴史的位置付け ……188

報告書抄録

表　目　次

第１表　遺構一覧表 ……100
第２表　中近世陶磁器観察表 ……125
第３表　中近世土器観察表（カワラケ）……137
第４表　古代・中世銭貨一覧表（遺構順）……155
第５表　中国製品集計表 ……167
第６表　瀬戸美濃窯製品集計表 ……168
第７表　志戸呂・初山窯製品集計表 ……169
第８表　常滑・渥美窯製品集計表 ……169
第９表　千葉県内の主要中世～近世初頭遺跡
陶磁器・土器出土点数表 ……182

挿　図　目　次

第１図　グリッド配置図・中近世遺構全測図 … 4
第２図　墨古沢遺跡周辺地形図 …… 5
第３図　墨古沢遺跡の位置と周辺の中近世
遺跡 …… 6
第４図　遺構配置図制付図 …… 8
第５図　古代・中近世遺構配置図① …… 9
第６図　古代・中近世遺構配置図② ……10
第７図　古代・中近世遺構配置図③ ……11
第８図　古代・中近世遺構配置図④ ……12
第９図　古代・中近世遺構配置図⑤ ……13
第10図　古代・中近世遺構配置図⑥ ……14
第11図　古代・中近世遺構配置図⑦ ……15
第12図　古代・中近世遺構配置図⑧ ……16
第13図　古代・中近世遺構配置図⑨ ……17

第14図　古代・中近世遺構配置図⑩ ……18
第15図　古代・中近世遺構配置図⑪ ……19
第16図　古代・中近世遺構配置図⑫ ……20
第17図　古代・中近世遺構配置図⑬ ……21
第18図　古代・中近世遺構配置図⑭ ……22
第19図　古代・中近世遺構配置図⑮ ……23
第20図　古代・中近世遺構配置図⑯ ……24
第21図　古代・中近世遺構配置図⑰ ……25
第22図　区画１（１） ……28
第23図　区画１（２）　1SB-001　1SB-002
1SB-003 ……29
第24図　区画１（３）　1SB-004　1SB-005 ……30
第25図　区画１（４）　1SB-006　1SB-007 ……31
第26図　区画２・３（１） ……32
第27図　区画２・３（２）　2SB-001　2SB-002
2SB-003 ……33
第28図　区画２・３（３）　2SB-004　3SB-001
3SB-002 ……34
第29図　区画２・３（４）　3SB-003　3SB-004
3SB-005 ……35
第30図　区画４（１） ……38
第31図　区画４（２）　4SB-001　4SB-002
4SB-003　4SB-004 ……39
第32図　区画４（３）　4SB-001　4SB-002
4SB-003　4SB-004 ……40
第33図　区画４（４）　4SB-005 ……41
第34図　区画５ ……42
第35図　区画６ ……43
第36図　地下式坑分布図 ……45
第37図　地下式坑（１） ……46
第38図　地下式坑（２） ……47
第39図　地下式坑（３） ……48
第40図　地下式坑（４） ……49
第41図　地下式坑（５） ……50
第42図　地下式坑（６） ……51
第43図　井戸跡分布図 ……53
第44図　井戸跡（１） ……54
第45図　井戸跡（２） ……55
第46図　井戸跡（３） ……56
第47図　井戸跡（４） ……57
第48図　井戸跡（５） ……58
第49図　井戸跡（６） ……59
第50図　井戸跡（７） ……60
第51図　井戸跡（８） ……61
第52図　井戸跡（９） ……62
第53図　井戸跡（10） ……63
第54図　井戸跡（11） ……64
第55図　粘土貼土坑分布図 ……66
第56図　粘土貼土坑（１） ……67
第57図　粘土貼土坑（２） ……68
第58図　粘土貼土坑（３） ……69
第59図　粘土貼土坑（４） ……70
第60図　粘土貼土坑（５） ……71
第61図　大型竪穴状遺構・
方形竪穴遺構分布図 ……72
第62図　大型竪穴状遺構（１） ……73
第63図　大型竪穴状遺構（２） ……74
第64図　大型竪穴状遺構（３） ……75
第65図　大型竪穴状遺構（４） ……76
第66図　大型竪穴状遺構（５） ……77
第67図　大型竪穴状遺構（６） ……78
第68図　大型竪穴状遺構（７） ……79
第69図　大型竪穴状遺構（８） ……80
第70図　大型竪穴状遺構（９） ……81
第71図　方形竪穴遺構（１） ……83
第72図　方形竪穴遺構（２） ……84
第73図　土坑墓・火葬施設・
馬埋葬土坑分布図 ……86
第74図　土坑墓（１） ……87
第75図　土坑墓（２） ……88
第76図　火葬施設（１） ……89
第77図　火葬施設（２） ……90
第78図　火葬施設（３） ……91
第79図　馬埋葬土坑（１） ……92

第80図　馬埋葬土坑（2）……93
第81図　馬埋葬土坑（3）……94
第82図　その他（1）：道路遺構……96
第83図　その他（2）：製鉄関連遺構・
　　やぐら状遺構……97
第84図　その他（3）：やぐら状遺構・
　　建物跡……98
第85図　その他（4）：大型不整形竪穴遺構…99
第86図　中国製品……112
第87図　瀬戸美濃窯製品（1）……114
第88図　瀬戸美濃窯製品（2）……116
第89図　瀬戸美濃窯製品（3）……117
第90図　瀬戸美濃窯製品（4）……118
第91図　瀬戸美濃窯製品（5）……119
第92図　志戸呂・初山窯，肥前（唐津）窯，
　　備前窯製品……120
第93図　常滑窯・渥美窯製品（1）……122
第94図　常滑窯・渥美窯製品（2）……123
第95図　常滑窯・渥美窯製品（3）……124
第96図　カワラケ……136
第97図　土器鍋……141
第98図　土器擂鉢……144
第99図　石製品（1）……146
第100図　石製品（2）……147
第101図　石製品（3）……148
第102図　石製品（4）……149
第103図　銭貨（1）……151
第104図　銭貨（2）……152
第105図　銭貨（3）……153
第106図　銭貨（4）……154
第107図　木製品……158
第108図　1210号址（竪穴住居跡）……160
第109図　1240号址（竪穴住居跡）（1）……161
第110図　1240号址（竪穴住居跡）（2）……162
第111図　1388号址（竪穴状遺構）……163
第112図　1268号址（土坑）……163
第113図　1280号址（竪穴住居跡），
　　SI1387号竪穴状遺構……164
第114図　遺構外出土遺物……164
第115図　渥美窯・前期常滑窯製品
　　出土分布図……172
第116図　常滑窯製品出土分布図
　　（甕・片口鉢）……173
第117図　瀬戸美濃窯古瀬戸後期段階
　　出土分布図（平碗）……174
第118図　瀬戸美濃窯古瀬戸後期段階
　　出土分布図（緑釉小皿）……175
第119図　瀬戸美濃窯擂鉢出土分布図……176
第120図　瀬戸美濃窯天目茶碗出土分布図……177
第121図　瀬戸美濃窯大窯1～3段階
　　出土分布図（碗・皿類）……178
第122図　瀬戸美濃窯大窯4～登窯2段階
　　出土分布図（碗・皿類）……179
第123図　中国製品出土分布図……180
第124図　陶磁器接合図……181
第125図　瀬戸美濃窯製品各期別出土点数……187
第126図　瀬戸美濃窯製品各期別（10年当たり）
　　出土点数……187
第127図　墨りゅうがい城跡概念図……189

図版目次

図版1　1．遺跡周辺航空写真（南東から）
　　2．遺跡周辺航空写真（南から）
図版2　1．遺跡周辺航空写真（南から）
　　2．遺跡周辺航空写真（北から）
図版3　中国製品　・　瀬戸美濃窯製品（1）
図版4　瀬戸美濃窯製品（2）（3）
図版5　遺跡航空写真
図版6　区画1全景（南から）（南東から）

図版7　区画1北東部斜面（北東から）
　　区画3全景（真上から）
図版8　区画2全景（北から）
　　区画4全景（東から）
図版9　区画5全景（南東から）（北西から）
図版10　地下式坑（1）
図版11　地下式坑（2）
図版12　井戸跡（1）
図版13　井戸跡（2）
図版14　粘土貼土坑（1）
図版15　粘土貼土坑（2）
図版16　大型竪穴状遺構
図版17　方形竪穴遺跡・土坑墓
図版18　火葬施設
図版19　馬埋葬土坑・道路遺構
図版20　その他の遺構
図版21　瀬戸美濃窯製品（4）（5）
図版22　瀬戸美濃窯製品（6）（7）
図版23　瀬戸美濃窯製品（8）志戸呂・初山窯，
　　肥前窯，備前窯製品
図版24　常滑窯製品（1）（2）
図版25　常滑窯製品（3）（4）
図版26　常滑窯製品（5），渥美・常滑窯製品（1）
図版27　渥美・常滑窯製品（2），常滑窯製品（6）
図版28　常滑窯製品（7）
図版29　瀬戸美濃窯製品（9）
図版30　瀬戸美濃・志戸呂・初山・肥前・備前・
　　常滑・渥美窯製品
図版31　カワラケ（1）
図版32　カワラケ（2）
図版33　カワラケ（3），土器鍋・擂鉢・香炉

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

（1）調査の経緯と経過

酒々井パーキングエリア増築事業に伴う埋蔵文化財調査のうち，上り線側の「墨古沢南Ⅰ遺跡」については既に報告書を刊行している（以下「南Ⅰ」とする）（横山2005）。本稿の「墨古沢遺跡」は下り線側の事業に伴うものである。調査の経緯と経過の詳細は『南Ⅰ』を参照していただきたい。

発掘調査及び整理作業に係わった各年度の担当職員，作業内容等は下記のとおりである。

平成11年度

期　間　平成11年7月1日～平成12年3月31日

組　織　東部調査事務所

所　長　三浦和信

担当職員　研究員　鈴木弘幸　研究員　遠藤治雄

内　容　発掘調査　対象面積　当初は31,250㎡であったが年度途中で11,100㎡に変更となった。

確認調査　（上層）1,110㎡　（下層）296㎡

本調査　（上層）7,950㎡　（下層）0㎡

平成12年度

期　間　平成12年4月3日～平成13年3月31日

組　織　東部調査事務所

所　長　折原　繁

担当職員　上席研究員　遠藤治雄　上席研究員　矢野敦夫　研究員　大内千年

研究員　田中　裕

発掘調査　対象面積　当初は26,450㎡であったが年度途中で23,782㎡に変更となった。

確認調査　（上層）2,525㎡　（下層）500㎡

本調査　（上層）15,532㎡　（下層）0㎡

平成13年度

期　間　平成13年4月2日～平成13年8月31日

組　織　東部調査事務所

所　長　折原　繁

担当職員　室　長　大野康男　研究員　大内千年

発掘調査　対象面積　3,860㎡

確認調査　（上層）0㎡　（下層）97㎡

本調査　（上層）3,860㎡　（下層）0㎡

平成14年度

期　間　平成14年４月１日～平成15年３月31日

組　織　東部調査事務所

所　　長　折原　繁

担当職員　室　長　今泉　潔　研究員　大内千年

整理作業　水洗・注記の一部，記録整理の一部

平成15年度

期　間　平成15年４月１日～平成16年３月31日

組　織　調査部整理課

課　　長　深澤克友

担当職員　上席研究員　横山　仁　上席研究員　新田浩三

整理作業　水洗・注記の残部，記録整理の残部，分類選別

平成16年度

期　間　平成16年４月１日～平成17年３月31日

組　織　調査部整理課

課　　長　及川淳一

担当職員　主席研究員　加藤修司　主席研究員　栗田則久　上席研究員　横山仁

上席研究員　鈴木弘幸　上席研究員　新田浩三

整理作業　復元～実測の一部，挿図・図版作成の一部

平成17年度

期　間　平成17年４月１日～平成18年３月31日

組　織　調査部整理課

課　　長　加藤修司

担当職員　上席研究員　柴田龍司

整理作業　（中世編）挿図作成の一部から報告書刊行まで

（２）調査の方法

『南Ⅰ』と同様に，公共座標を基準として40m×40mの大グリッドを設定し，さらにその大グリッド内を４m×４mに分割し，100個の小グリッドに細分した。大グリッドは西から東へG，H，Ⅰ・・・，北から南へ１，２，３・・・と記号を付けＩG，２H・・と呼称した。小グリッドは北西隅を起点として西から東へ００，０１，０２・・・，北から南へ００，１０，２０・・・と番号を付けた。これらを組み合わせて表すと１G－11，２B－２２のようになる（第１図）。

発掘調査は上層の確認調査，本調査に続いて下層の調査へと順に実施した。上層の確認調査は対象面積の10%を原則にトレンチを設定し，遺構，遺物の分布状況を調べ，本調査範囲を限定した。下層の確認調査は対象面積の４%を原則にグリッドを設定し，石器の分布状況を調べた。遺構の調査は，表土除去後土

層断面用のベルトを設置して掘り下げ，平断面図作成，写真撮影を実施した。なお，遺構番号については基本的には調査時の番号を踏襲している。

第２節　遺跡の位置と環境

（１）遺跡の位置と周辺の地形

墨古沢遺跡は印旛沼南側，鹿島川に流入する高崎川中流域左岸の台地上に位置する。東関東自動車道路を挟んで『南Ⅰ』の反対側に位置する（第３図）。『南Ⅰ』との間に谷津が入り，道路はその地形に沿うように建設されている。行政的には酒々井町墨字台1337-1ほかに所在する。標高は約34m～36mを測り，遺跡中央部からやや北側に高まりをもち，その先は谷津に至る。『南Ⅰ』に比べ高崎川に近い台地であり，北西側に比較的広い沖積低地面を望むことができる（第２図）。

（２）周辺の中近世遺跡（第３図）

『南Ⅰ』では縄文時代の遺跡を紹介した。ここでは主に中近世の遺跡に限定して紹介するが未調査，未発掘資料が多いため，断片的な紹介となる。４は墨字戸域の通称りゅうがいと呼ぶ畑地が城跡であり，それが要害城であったとされている。虎口と見られる辺りに空堀の一部が残されている（高橋1987）。５の墨馬場遺跡は『馬場遺跡』として昭和54年に一部が発掘調査されている（新井1979）。昔から『馬捨て場』であることが知られており，人骨及び獣骨等が出土した土坑及び古墳時代の竪穴住居跡が検出されている。６の上岩橋城跡は『酒々井町史』では『上岩橋城砦跡群』に含まれ，複数の千葉氏関連遺構が連なっている。８のカンカンムロ横穴群は古墳時代末期の築造であるが，古く昭和22年に調査がされており，銅椀の出土から，仏教文化の波及が指摘されている。その後，当地では『長熊廃寺』が奈良時代に至って創建されている（北詰1987）。11は国指定史跡の本佐倉城跡である。現在も佐倉市と酒々井町で整備計画に基づく確認調査が実施されているが，本格的な調査としては昭和55年に本丸部分の確認調査，一部地域の地形測量等が実施されている（小室1980）。その後，平成２年度から５年計画で酒々井町と財団法人印旛郡市文化財センターとの間で委託契約が結ばれ，確認調査，測量調査が継続的に実施され，報告書が刊行されている（木内1995）。詳細は原典を参照いただきたい。なお，平成９年には佐倉市と合同で保存管理・整備基本計画策定報告書が刊行されている。12の向根古谷遺跡は本佐倉城跡の発掘調査において調査され，優れた入口の防備構造等について報告されている（木内1995）。16の上本佐倉上宿遺跡は本佐倉城の「城下」の一部であり，掘立柱建物跡や柱穴群の他，古墳時代や平安時代の竪穴住居跡も検出されている（高谷1996）。

引用文献

新井和之ほか　1979「馬場遺跡」『北総線』東京電力北総線遺跡調査会

木内達彦ほか　1995『本佐倉城発掘調査報告書－戦国佐倉城の調査』財団法人印旛郡市文化財センター

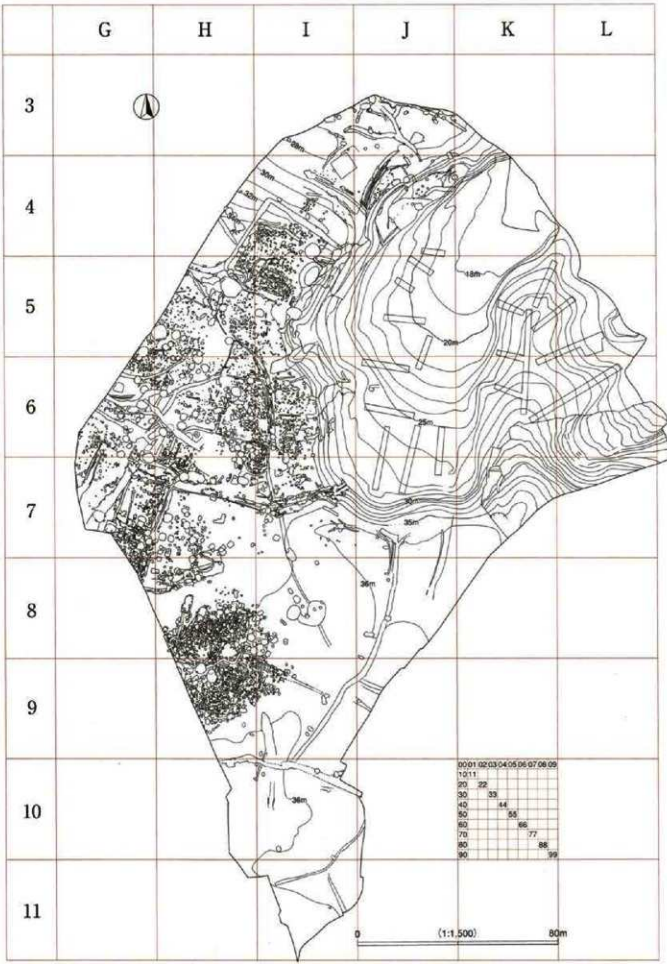
北詰栄男　1987「第三章　古代」『酒々井町史　通史編　上巻』酒々井町

小室栄一ほか　1980「佐貫城・本佐倉城発掘調査報告」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第1集』千葉県教育委員会

高橋三千男　1987「第四章　中世」『酒々井町史　通史編　上巻』酒々井町

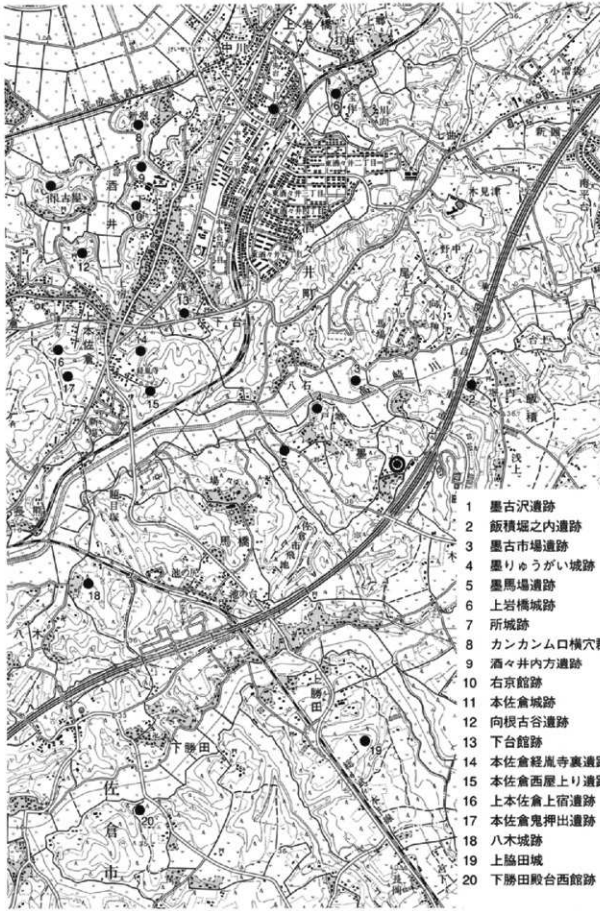
高谷英一ほか　1996『上本佐倉上宿遺跡』』財団法人印旛郡市文化財センター

横山仁ほか　2005『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書２－酒々井町墨古沢南Ⅰ遺跡－縄文時代編』　財団法人千葉県文化財センター



第1図　グリッド配置図・中近世遺構全測図

第2図　墨古沢遺跡周辺地形図



第3図　墨古沢遺跡の位置と周辺の中近世遺跡（1/25,000）

第２章　中近世の遺構・遺物

第１節　検出遺構

本遺跡からは多数の遺構・遺物が検出されている。遺構については発掘調査時に基本的に小穴に至るまで個々に遺構番号が付されていた。しかしながら，報告書作成にあたり個々の遺構について図示し，かつ記述することは紙幅の関係上困難であったことと，果たしてすべての遺構について図示し記述することが理解しやすい内容かどうか問題となった。検討の結果，遺構番号については，調査時の番号を基本的に踏襲することとし，整理作業時に明らかとなった区画遺構とその内部で復元された建物跡については，新たに遺構番号を付している。さらに，小穴，土坑，溝等の遺構に関しては，個々に図示せず遺構配置図での表示とし，また記述も一覧表での表示とした。しかし，地下式坑，井戸跡，粘土貼土坑，土葬墓，火葬施設，馬埋葬土坑，大型竪穴状遺構，方形竪穴遺構等，本遺跡を特徴づける中近世遺構については，個々に図示するとともに一覧表では表せない事項に関しては個々に記述することとした。

個々に図示した遺構については，まず遺構配置図で位置を表示し，次に各遺構ごとに全体図の中で表示して，個々の遺構を種類ごとにまとめている。個々に図示しなかった遺構については，上記の理由から遺構配置図のみでの表示に留め，規模，出土遺物，時期等は一覧表にまとめている。

出土遺物については，極力図示する点数を多くすることを第１の方針としたため，実測は断面実測に留めたものが多くなっている。また出土した陶磁器には近世～近代の製品も多く出土しているが，本遺跡の中心となる時期である中世を理解する上で必要と考えられた時代(具体的には17ｃ前半）までを取り扱うこととし，それ以降の17ｃ後半以降の遺物は割愛していることをあらかじめお断りしておきたい。

また，出土した陶磁器については，中世から近世初頭にかけての製品については，中国製品に関しては小野正敏氏(国立歴史民俗博物館）に，国産製品は常滑・渥美窯製品を除く瀬戸美濃窯，志戸呂・初山窯製品については藤澤良祐氏(愛知学院大学）に，それぞれ全点にわたって産地，時期等指導を受けている。常滑・渥美窯製品については，整理作業担当者である柴田が主に中野晴久氏(常滑市民俗資料館）の業績を参考にし時期決定を行っている。

なお，陶磁器の分類にあたっては下記の文献を参考にした。

貿易陶磁

森田勉　「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№２　1982

上田秀夫　「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№２　1982

小野正敏　「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№２　1982

瀬戸美濃窯，志戸呂・初山窯製品

藤澤良祐　「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『(財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第３輯　1995

藤澤良祐　「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第８号　1982

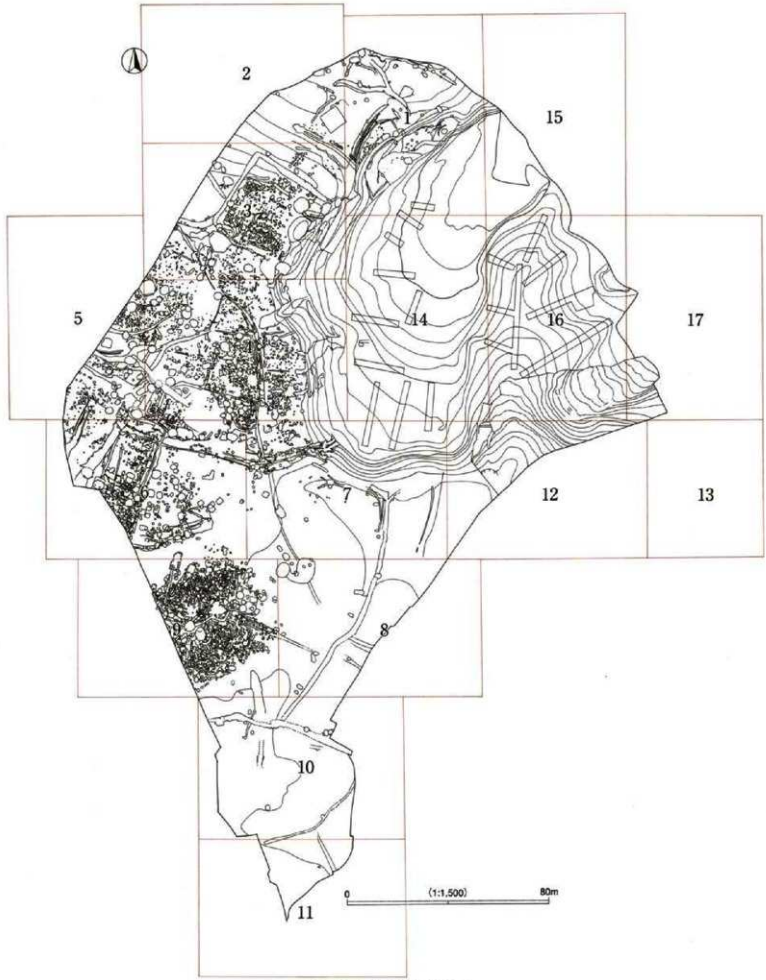
藤澤良祐　「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ｘ　1991

藤澤良祐　「瀬戸大窯の時代」『瀬戸市史　陶磁史篇四』　1993

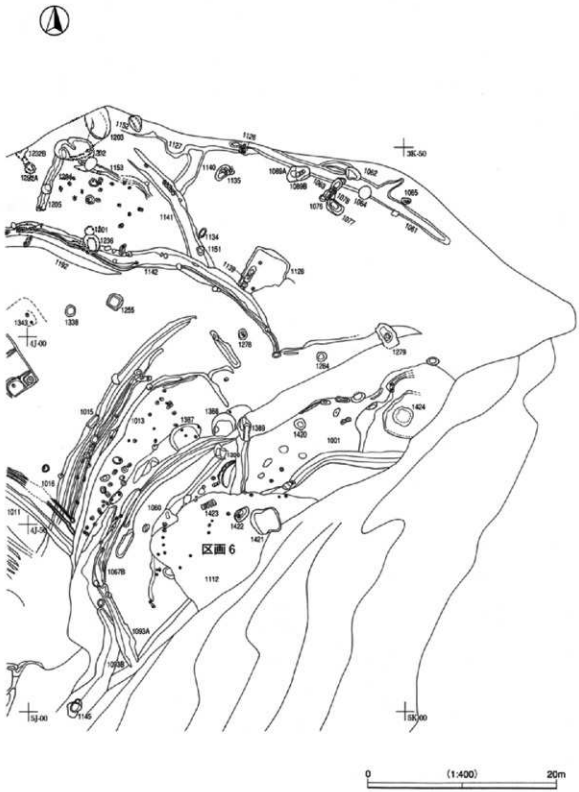
常滑・渥美窯製品

中野晴久　「常滑・渥美系」『中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年－』　2005

楠崎彰一・青木修「常滑窯研究報告１」『(財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第７輯　1999

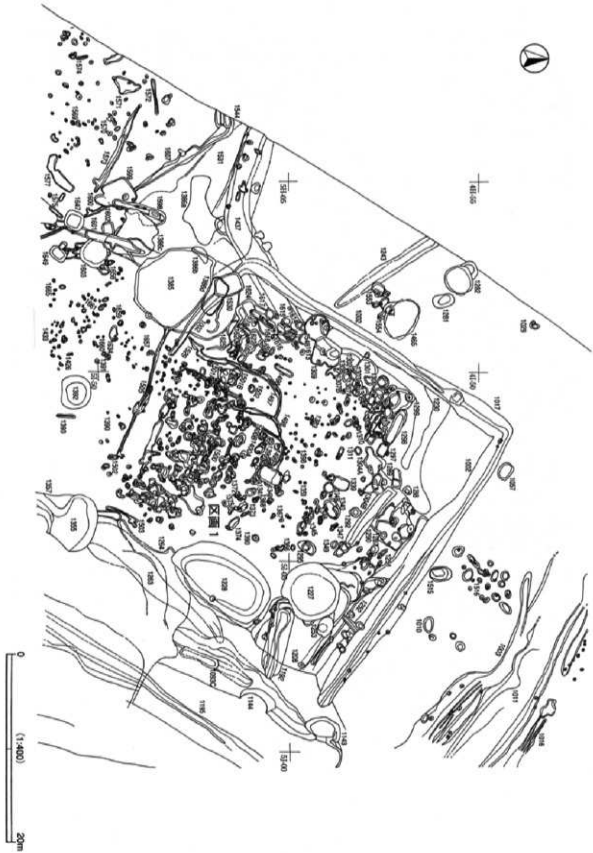


第４図　遺構配置図割付図



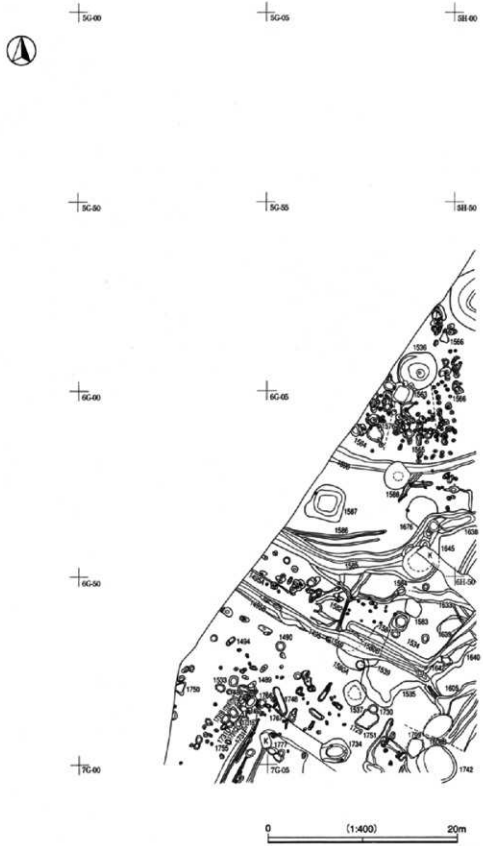
第5図　古代・中近世遺構配置図①

第6図　古代・中近世遺構配置図②



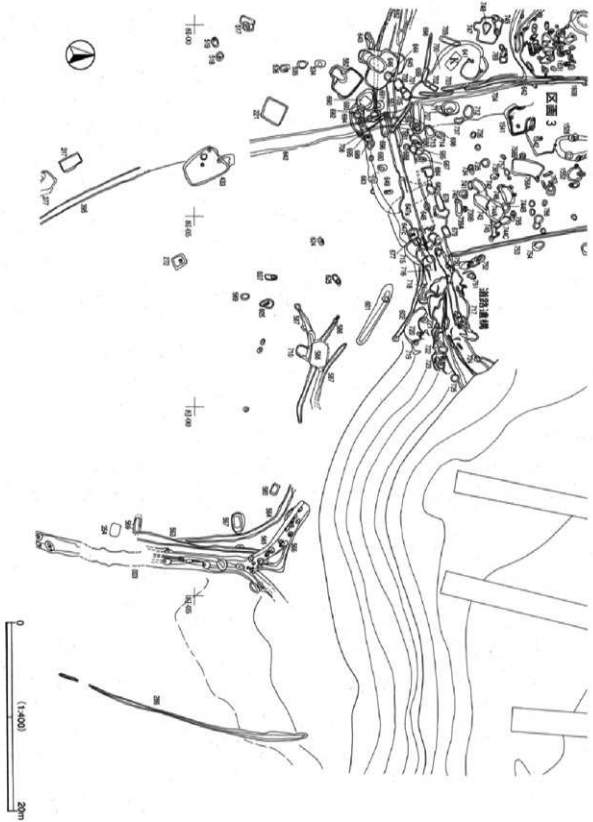
第7図　古代・中近世遺構配置図③

第8図　古代・中近世遺構配置図④

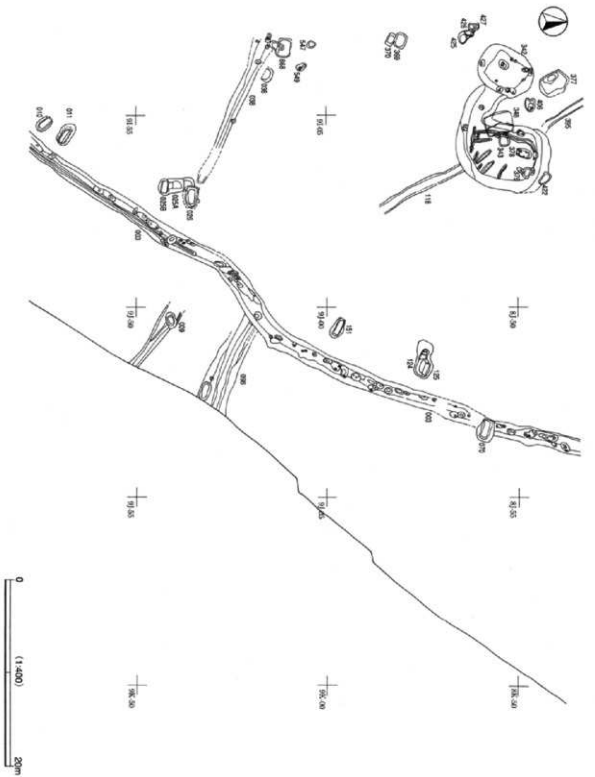


第９図　古代・中近世遺構配置図⑤

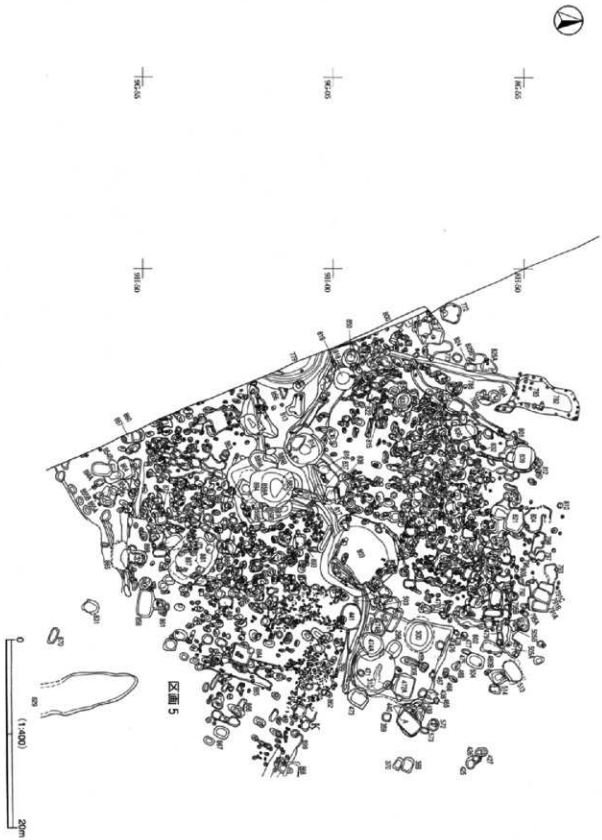
第10図　古代・中近世遺構配置図⑥



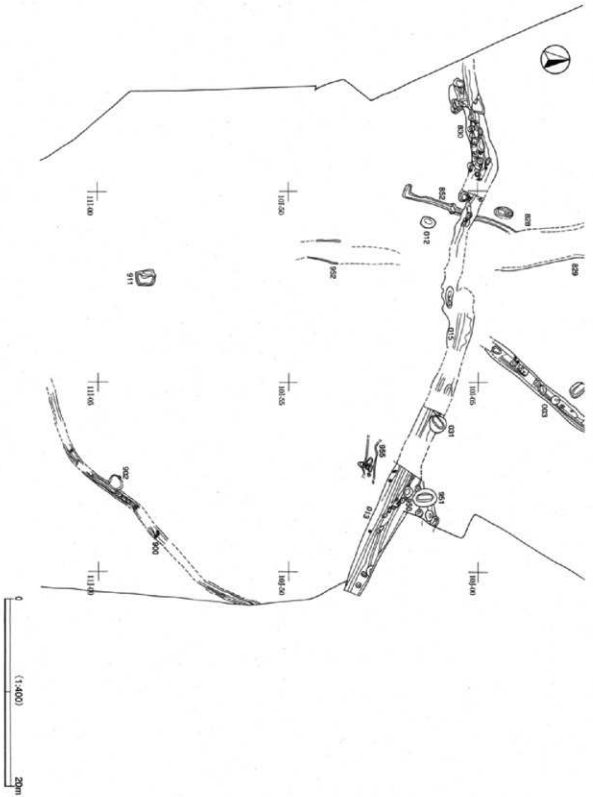
第11図　古代・中近世遺構配置図⑦



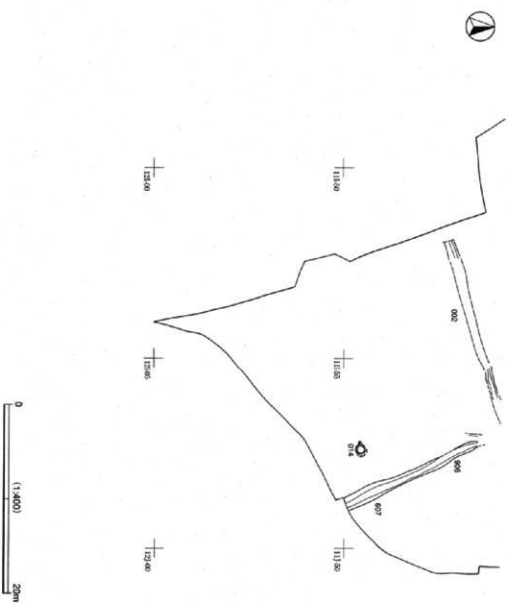
第12図　古代・中近世遺構配置図⑧



第13図　古代・中近世遺構配置図⑨



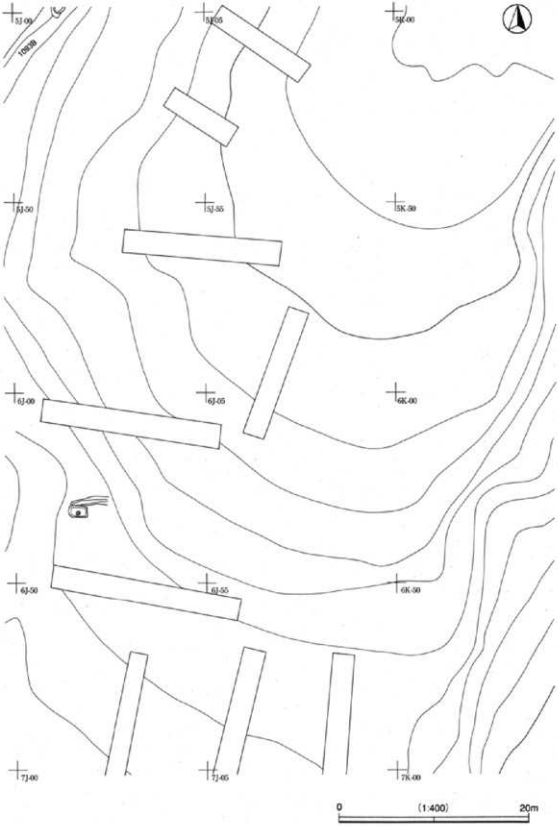
第14図　古代・中近世遺構配置図⑩



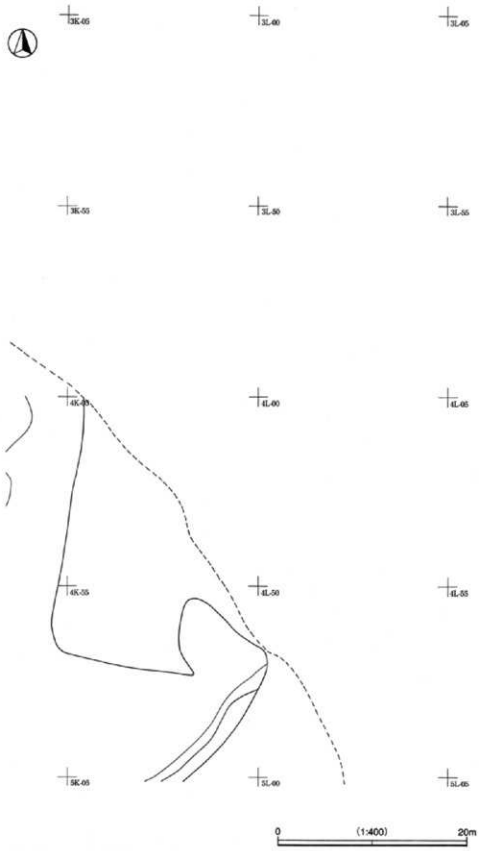
第15図　古代・中近世遺構配置図⑪

第16図　古代・中近世遺構配置図⑫

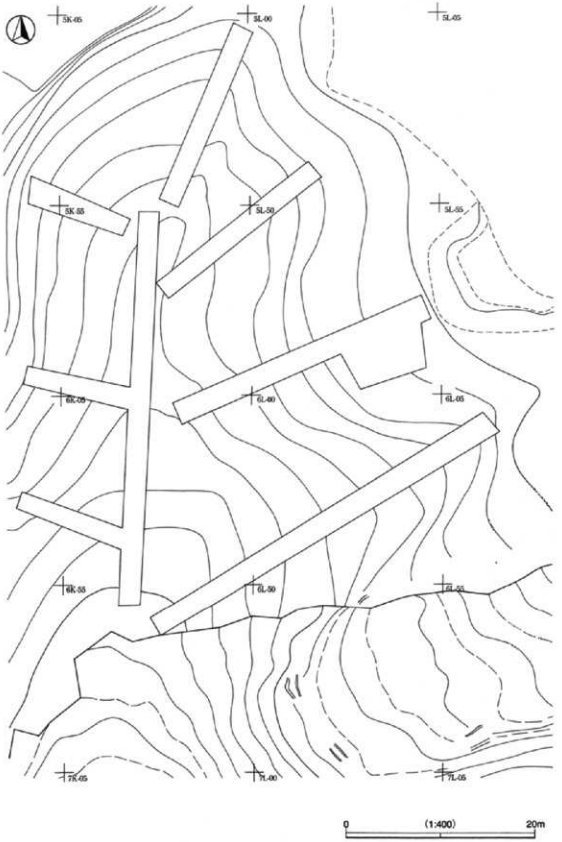
784.00
784.05
784.10
784.15
784.20
784.25
784.30
784.35
784.40
784.45
784.50
784.55
784.60
784.65
784.70
784.75
784.80
784.85
784.90
784.95
785.00
785.05
785.10
785.15
785.20
785.25
785.30
785.35
785.40
785.45
785.50
785.55
785.60
785.65
785.70
785.75
785.80
785.85
785.90
785.95
786.00



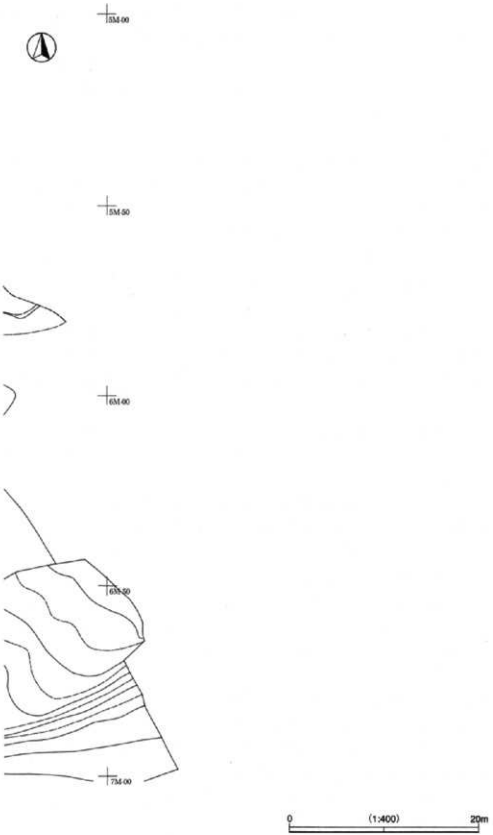
第18図　古代・中近世遺構配置図⑭



第19図　古代・中近世遺構配置図⑮



第20図　古代・中近世遺構配置図⑯



第21図　古代・中近世遺構配置図⑰

（1）区画遺構

土塁や溝および地割図によってある程度の範囲で区画された空間が認識されたので，区画遺構として取り上げた。区画遺構は現場作業時には認識されておらず，整理作業時に付したものである。このため各区画内には現場作業時に付けられた遺構番号が多数認められる。また，各区画内で復元された掘立柱建物跡も整理作業時に復元したもので，新たに遺構番号を付けている。区画は総計6区画認定された。

区画1（第22～25図，図版6・7）

4H，4I，5H，5Iの4カ所の大グリッド（40m×40m）にまたがって検出されている。遺跡の北東から入り込む小支谷の西側台地上に立地している。区画の規模は長辺が溝や土塁からなる区画施設の外側で34.2m，内側31.5m，短辺が外側33m，内側32mで，ほぼ正方形の平面プランである。区画の軸はN－33°－Eである。区画の内部面は大部分灰白色粘土（常総粘土層）が露呈しており，ローム層は完全に削平されていた。北東辺は削り出しの土塁とその外側の溝によって画されている。また，北東辺から北東に向かって4m程傾斜して低くなっている。北西辺の北半部は削り出し土塁で，南半部は溝によって画されている。北東辺と北西辺が交わるコーナー部は台状にローム層が残存していたが，台上から遺構は検出されていない。南西辺は溝によって画されている。東南辺は小支谷に面していることから段差によって画されている。さらに前面には盛り土造成によって平場が造り出されている。区画内への入口は小支谷に面した東南辺に位置する1227号址（井戸跡）と1228号址（大型竪穴状遺構）に挟まれた狭い空間である。この箇所を入口施設としたのは，四街道市池ノ尻館跡で本遺跡と極めて類似した構造の入口施設が検出されたことによっている。

内部からは掘立柱建物跡が計8棟検出されている。入口を入って左側が主屋で右側と中央奥が副屋となる。主屋は計5棟復元されたが，長軸がN－34°－Eと N－18°－Eの2通りの軸方向の建物が存在した。前者の軸が区画軸に近似する。

区画の存続時期については，区画内の遺構から出土した陶磁器でみてみると（第115～123図），遺跡全体からはそれなりにまとまって出土している中世前半期の瀬美・常滑窯製品は全く出土していない。常滑窯製品については，時期不詳の甕体部片が出土しているのみで，片口鉢は出土していない。さらに古瀬戸後期様式を中心とする瀬戸美濃窯製品の平碗，縁釉小皿も全く出土していない。最も古いものは瀬戸美濃窯の擂鉢で古瀬戸後期様式のものが1点出土しているが，まとまって出土するのは大窯期以降で，碗・皿類も含めて登窯2期までは継続して出土している。区画内の全体的な陶磁器の出土状況からみて，本区画が設定された時期は大窯期の初めである15c末葉と考えるのが妥当であろう。その後17c前半までは確実に継続して使用されている。

区画の性格としては主屋と副屋から構成される建物配置からみて屋敷地とすることができる。しかも，削り出しの土塁の存在から，この場所に屋敷地が計画された当初から，ローム層を削平して灰白色粘土層まで掘り下げるとともに土塁を削り残して構築することが計算された工程であった。屋敷地の規模が一辺が33～34mで他の遺跡で検出されている同時期の屋敷規模と比較した場合，小規模な部類に入ることから在地小領主層か上層農民層レベルの屋敷とみることが妥当であろう。

区画2（第26～28図，図版8）

6Hおよび6I大グリッドにかけて検出されている。遺跡の北西から南端に向かって通る南北道路（北半部）の西側の台地平坦面に立地する。区画の規模は北辺が19.5m，東辺が26m，南辺が23m，西辺が

23.5m，平面プランが台形状となる。西辺の区画が不明瞭であるが，他の三辺は溝によって画されている。区画内からは計4棟の掘立柱建物跡が復元されている（２ＳＢ－001～２ＳＢ－004）。２ＳＢ－001から２ＳＢ－003の建物跡が規模的にみて主屋と考えられる。それぞれの建物跡は重複しており，２回建て替えが行われている。新旧関係は不明である。２ＳＢ－004の建物跡は規模からみて副屋にあたる建物と思われる。区画内への入口部は南北道路（北半部）に面した東辺中央部よりやや南側，２ＳＢ－003建物の東側に遺構が希薄な部分があるが，この場所が前庭部とすればここに入口が想定される。区画内からは地下式坑，井戸跡，粘土貼土坑は検出されていない。

区画２の存続時期は，区画の北西コーナーで12ｃ～13ｃ代の渥美窯の甕が出土しているが，古瀬戸後期段階の平碗と緑釉小皿が区画内から出土していないことと，大窯段階の製品から継続して出土するようになることから，区画２の成立も区画１と同様に大窯期に入った段階の15ｃ末葉以降とみてよいであろう（第115～123図）。また登窯期段階の製品もややまとまって出土していることから近世になっても継続していたものと思われる。

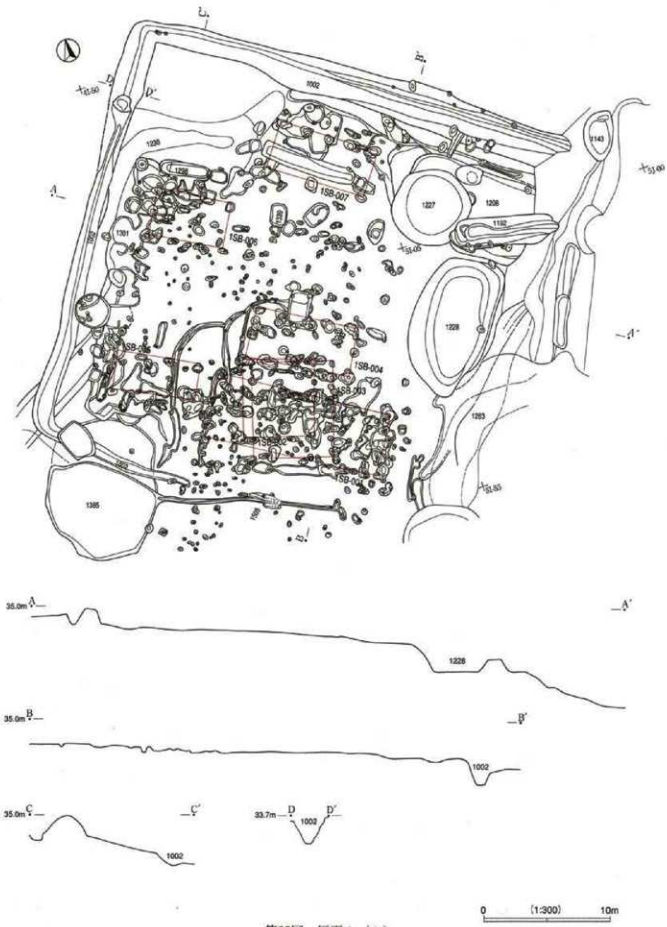
区画２は建物跡の検出とその配置から屋敷地とみて間違いないものと考えられる。また，区画の成立時期および存続時期が区画１の屋敷と同様であることから，区画１の屋敷と区画２の屋敷は一体の関係にあったとみることができる。ただし，区画の規模は区画１に比べ2/3程度なことから，区画１の屋敷主よりもやや階級的に低い農民層の屋敷地であったであろう。

区画３（第26・28・29図，図版７）

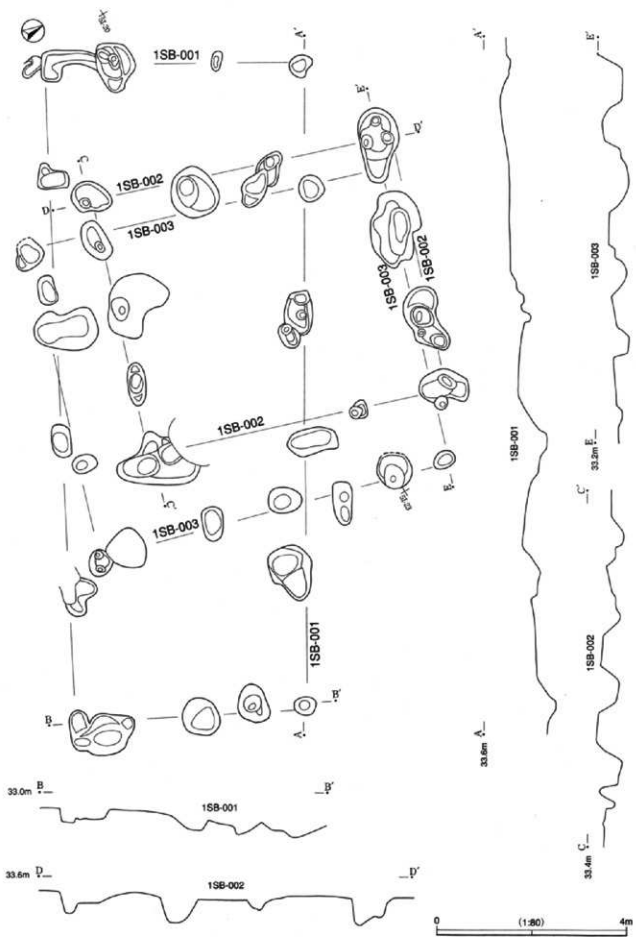
６Ⅰおよび７Ⅰ大グリッドにかけて検出されている。遺跡の北西から南端に向かって通る南北道路（北半部），および遺跡の中央部を東西に通る東西道路（東半部）に接して立地する。東辺は北東から入り込む支谷に面する。区画の規模は北辺が13m，東辺が46m，南辺が15m，西辺が48mと，南北に細長い長方形プランを呈する。区画施設は北辺が溝，支谷に面する東辺が段差と溝，南辺が道路，西辺が道路および溝によって画されている。区画内からは計５棟の掘立柱建物跡が復元されている。建物跡は３ＳＢ－001と３ＳＢ－002が検出されている地区（Ａ区）と，３ＳＢ－003～３ＳＢ－005が検出されている地区（Ｂ区）に二分される。５棟のうち３ＳＢ－003が最も大規模な建物跡であることから，Ｂ区の建物群が主屋とみられる。それに対してＡ区の建物群は副屋となる。区画内への入口部は主屋群と副屋群の間が遺構が希薄なことから，この部分が前庭部と捉えられるので南北道路（北半部）から前庭部に入るあたりに入口が想定される。なお，区画内からは地下式坑は検出されず，井戸跡は１基（1276号址）検出されている。ただ，1276号址は支谷斜面に続く溝状遺構に掘られたもので，水留施設の可能性も考えられる。粘土貼土坑は南西コーナー部で１基（707号址）検出されている。

区画３の存続時期は，12ｃ～13ｃ代の常滑窯，渥美窯製品が周辺から出土しているが，区画２と同様に古瀬戸後期段階の平碗と緑釉小皿が区画内からは出土せず，大窯期以降の製品に出土が限られることからみて，区画３もまた区画１，区画２と同じく15ｃ末葉以降に成立したと考えられる（第115～123図）。そして登窯期の製品も出土していることから，近世までは継続していたものと思われる。

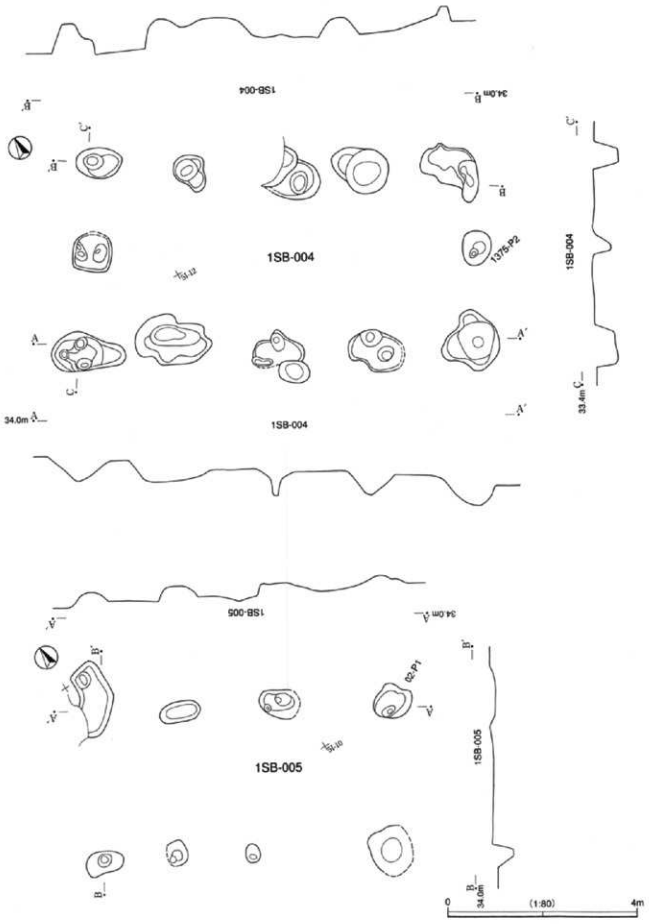
区画３は建物跡の検出とその配置状況からみて屋敷地とみてよいであろう。そして屋敷の成立時期および存続時期が区画１と区画２の屋敷と同様なことから，それぞれの屋敷とは一体の関係があったものと思われる。区画３の屋敷主層は，屋敷地の面積だけで比較すれば区画２の倍近い面積となるが，主屋と副屋が占める範囲に限ってみれば面積的には大きな違いは認められないことから，区画２と区画３の屋敷主層


B
B'
D
D'
A
A'
1002
1143
1227
1206
1192
1228
1301
1293
1385
SB-007
SB-006
SB-005
SB-004
SB-003
SB-002
35.0m
35.0m
35.0m
33.7m
0
(1:300)
10m

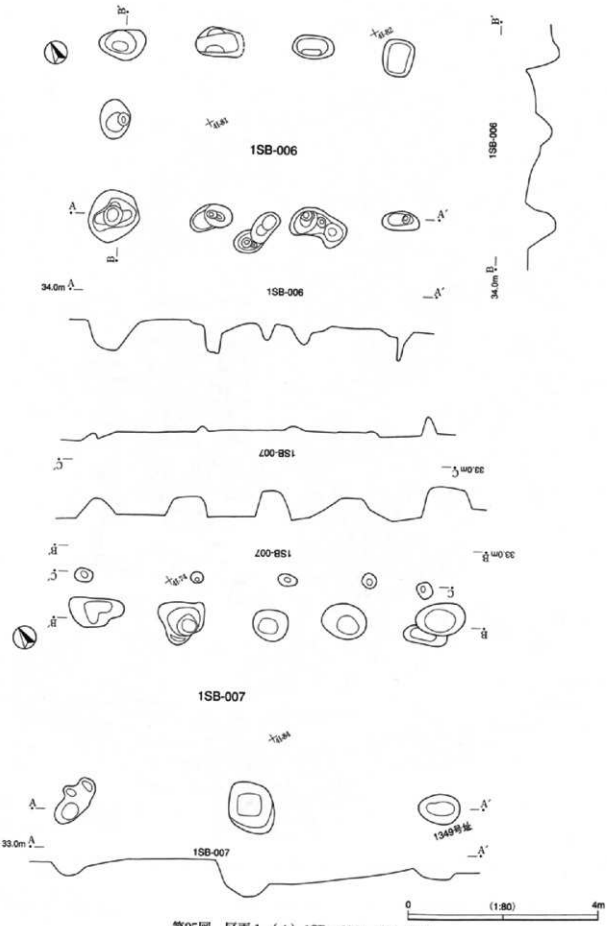
第22図　区画1（1）



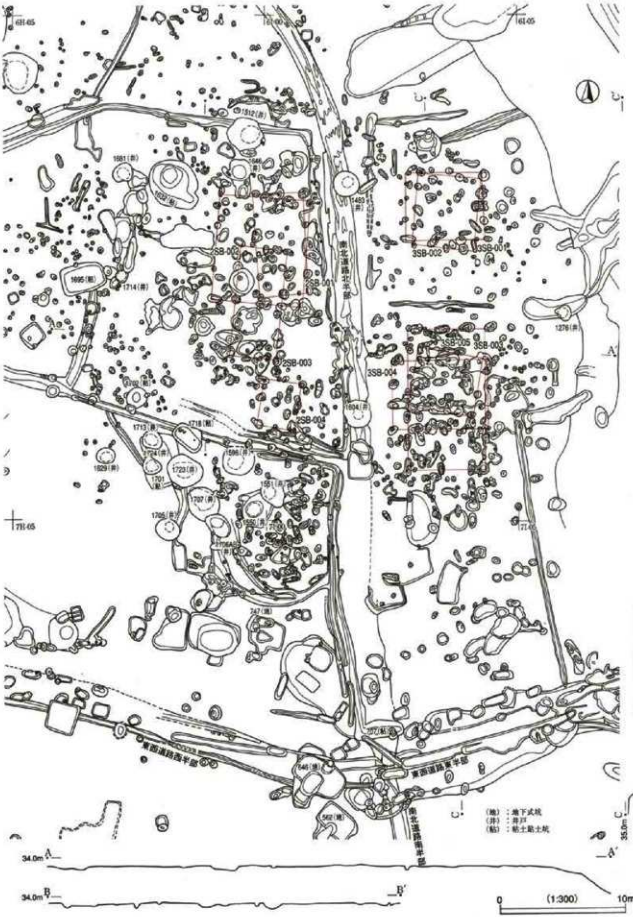
第23図　区画１（２）1SB－001　1SB－002　1SB－003



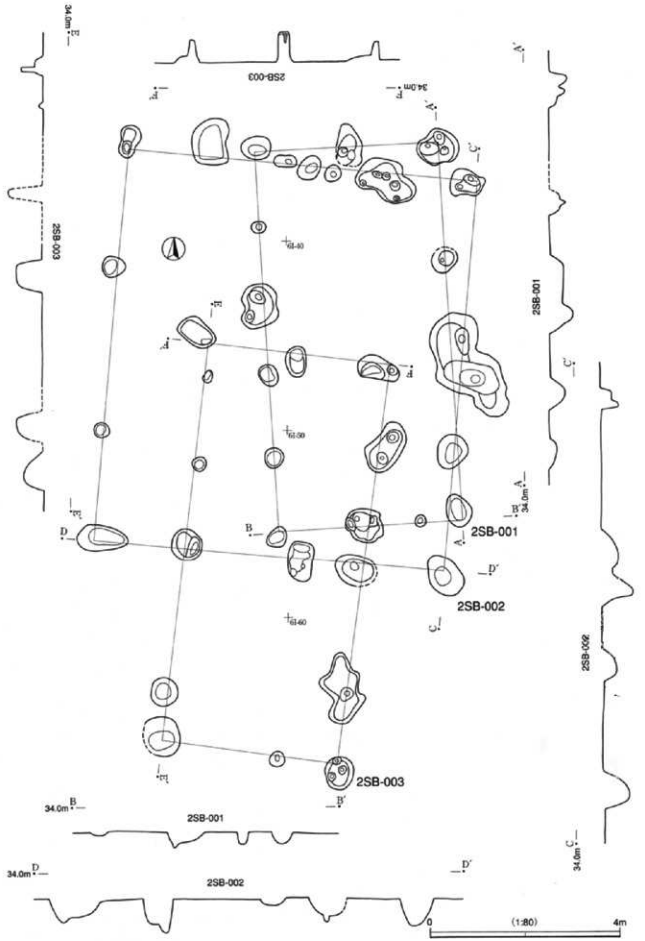
第24図　区画1（3）1SB－004　1SB－005



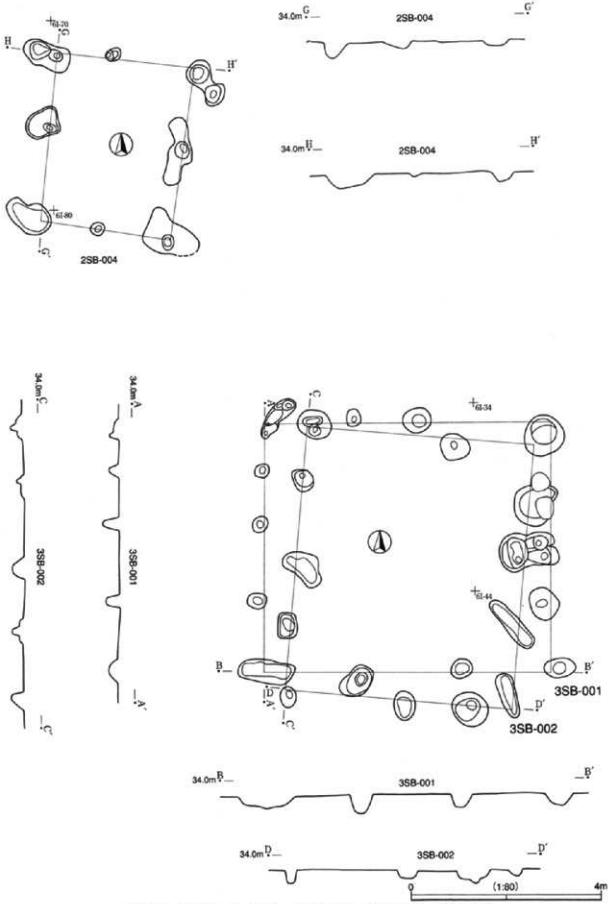
第25図　区画1（4）1SB－006　1SB－007



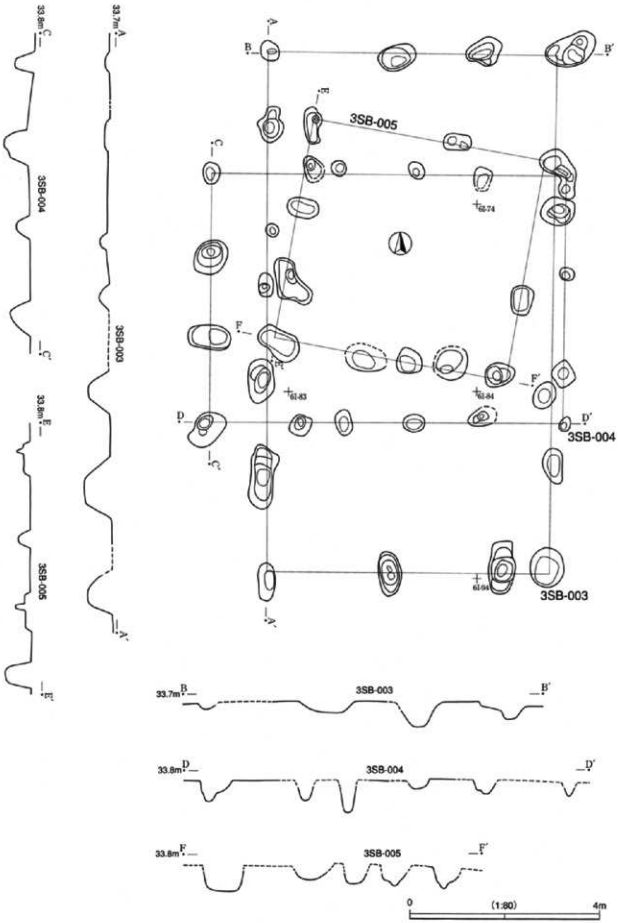
第26図　区画２・３（１）



第27図　区画２・３（２）2SB－001　2SB－002　2SB－003



第28図　区画２・３（３）　2SB－004　3SB－001　3SB－002



第29図　区画２・３（４）　3SB－003　3SB－004　3SB－005

は階層的にはほとんど変わらないと考えられる。

区画４（第30～33図，図版８）

７Ｇ，７Ｈ，８Ｇの大グリッドにまたがって検出されている。遺跡中央部西端に立地する。区画の南半部は調査区外に延びるため全域を検出していない。区画の規模は北辺が17m，東辺が41.5m以上，南辺は調査区外のため不明，西辺は26m以上をそれぞれ測る。区画施設は検出された三辺とも溝によって画されている。区画内からは計５棟の掘立柱建物跡が復元されている。規模からみて４ＳＢ－001～４ＳＢ－003が区画内の主屋群にあたると思われる。そして４ＳＢ－005が副屋に相当する建物であろう。４ＳＢ－004は位置的には主屋が建っていた場所となるが，主屋を構成する建物とは軸を異にすることと，建物が小規模なことから，主屋建物ではなかった可能性が高い。４ＳＢ－001～４ＳＢ－004は重複関係を有するが，新旧関係については不明である。区画内に入るための入口施設は，遺構が希薄なところを重視するならば４ＳＢ－005の南側に想定される。区画１の入口施設に類例を求めるとすれば，1798B号址と1811号址の２カ所の井戸跡の間が想定される。ただし，いづれの入口施設とも区画北辺が東西道路（西半部）に接しているにもかかわらず，主要な道路には面していないことになる。区画内からは地下式坑は検出されていないが，井戸跡は５基（585C号址，1798B号址，1809号址，1811号址，1812号址），粘土貼土坑は２基（1745号址，1786号址）検出されている。なかでも井戸跡は主屋が建てられていたと想定される地区に集中して検出されている。建物と井戸との新旧関係は不明である。

区画４の存続時期は12ｃ～13ｃ代の常滑窯，渥美窯製品が区画内およびその北側から集中して出土している（第115図）。さらに古瀬戸後期段階の平碗と緑釉小皿も区画内からまとまって出土している（第117，118図）。しかし大窯期段階に入ると区画１～３とは異なり出土量が皆無に近い状況となる。遺物の時期別出土傾向をみる限り，区画４の成立は早ければ12ｃ後半代も考えられる。そして廃絶時期は古瀬戸後期Ⅳ段階の15ｃ後半と捉えられる。ただし，成立時期については12ｃ～13ｃ代の遺物が常滑窯と渥美窯製品に限定され，碗・皿類が共伴しないことから，この段階での成立はなかったものと思われる。

区画４は建物跡の検出とその配置状況からみて屋敷としてよいであろう。ただ，区画１～３の屋敷群と比べ先行して機能しており，しかも遺跡内では同じ時期の屋敷地は他に検出されていないことから，屋敷主の階層性を判断する資料に欠ける。強いていえば出土した陶磁器に特に高級品を伴わないことから，区画１～３の屋敷地で想定された有力農民層と同程度の階層の屋敷とみられる。

区画５（第34図，図版９）

８Ｈ，８Ｉ，９Ｈ，９Ｉの４カ所の大グリッドにまたがって検出されている。遺跡南半部の西側に位置し，区画の南東方向から北西方向に向かって極く緩やかに傾斜する地形上にある。

区画５は西端が調査区外に延びるため正確な規模は不明であるが，おおよそ一辺が50m前後の規模を有し，周囲よりも30～40cm掘り下げられて区画が構築されている。区画内には地下式坑，井戸跡，粘土貼土坑，大型竪穴状遺構，火葬施設，土坑墓，溝跡，小穴等，様々な性格の遺構が混在し，かつ稠密な分布状況を呈している。掘立柱建物跡については復元を試みたが，柱穴状の小穴が無数にあるため復元しようとすれば何通りも可能であったため，今回は復元図は提示しなかった。ただ，建物跡の軸が区画の軸であるＮ－66°－Ｅであるのに対して，Ｎ－16°－Ｅ前後の軸を有する傾向があることを指摘しておきたい。

出土遺物は遺構が稠密なことと，区画内が周囲より低位で流れ込み量が多かったこともあり，本遺跡では最も集中する地区であった。区画内全域の時期別の出土傾向を古い方からみると，まず12ｃ～13ｃ代の

渥美窯製品がまとまって出土している（第115図）。次に中世後半代の製品も含めて常滑窯の片口鉢が多数出土しているが，甕は極くわずかにしか含まれない（第116図）。古瀬戸後期段階の平碗および緑釉小皿も多数出土している。瀬戸美濃窯産の擂鉢は遺跡全体からみれば出土集中域とはいえなくなるが，古瀬戸後期段階とともに大窯期段階の製品も出土している（第119図）。瀬戸美濃窯産の天目茶碗については，古瀬戸後期段階の製品がわずか1点のみ出土しているが（第120図），このことは区画の性格を考える上で注目される。大窯期段階の碗・皿類も出土している（第121図）。大窯4～登窯2段階の碗・皿類は1点だけであるが出土している（第122図）。中国製品は染付も含めてまとまって出土している（第123図）。次に陶磁器の接合関係をみると，区画の内と外での接合がかなり認められる（第124図）。

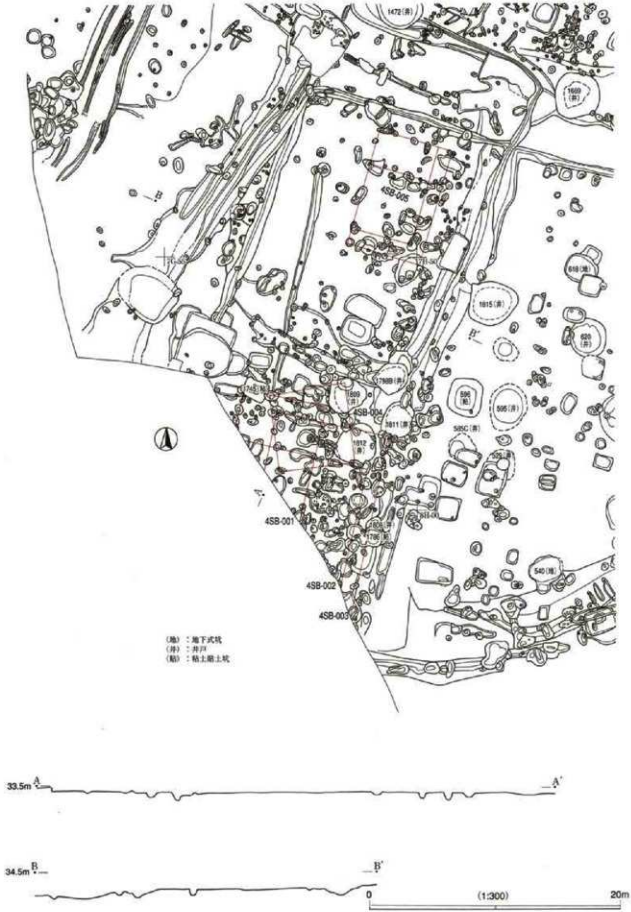
区画5の存続時期は12c～13c代の渥美窯製品がそれなりにまとまって出土していることから，この段階に形状は別として既に成立していた可能性が高いと考えられる。量的には古瀬戸後期段階の製品が圧倒的に多いが，大窯3段階までの製品もまとまって出土している。しかし大窯4段階以降の製品は1点しか認められないことから，近世までは継続しなかったと思われる。区画4は15c後半代に廃絶し，替わるように区画1～3が成立するが，それに対し区画5は両者の区画と共存していたことになる。

区画5の性格については，区画内で検出されている地下式坑，井戸跡，粘土貼土坑等の遺構の性格をどう捉えるかによって様々な考えが可能となる。しかしながら，一ついえることはこの区画を屋敷地と想定することはできない。掘立柱建物が何度も造り替えられながら存在したことは確実ではあるが，まず区画1～4の屋敷地でみられるような溝で区画する形状になっていないこと，周囲よりも低位であること，屋敷地であれば不可欠な広場や庭といった空閑地が認められないこと，などから屋敷地と捉えることはできない。考えられる性格としては，地下式坑を基本的な性格を倉とすれば倉庫施設となる。または地下式坑を葬送に関連する宗教施設とすれば，墓域のような宗教空間とみることができる。ここでは，ほぼ中世の全般にわたって継続した点と，近世に入ると急速に廃絶した点を重視して，宗教空間であったとみておきたい。

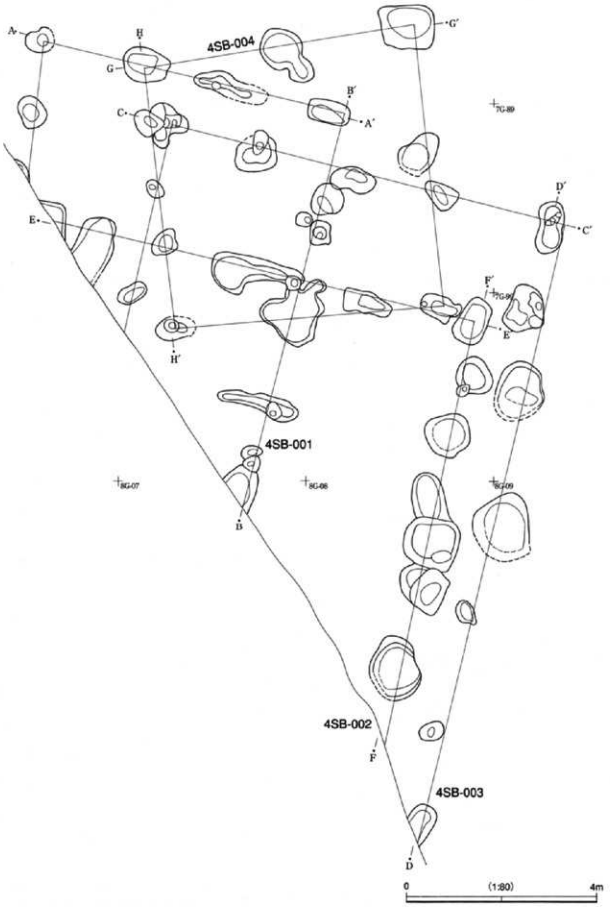
区画6（第35図）

4Ｊ大グリッドを中心とした地区に立地する。区画1の北西に位置するが，この場所は区画1が位置する台地からさらに5m程低位の地区で，遺跡が立地する台地の北端部にあたる。区画6はこの北端平坦面の東端部の支谷に面した緩斜面を掘削と盛り土造成でもって造り出された平坦面である。区画内で検出された遺構は，粘土貼土坑1基（1420号址），馬埋葬土坑4基（1389A号址，1389B号址，1396号址，1422号址）等である。掘立柱建物跡は復元されておらず居住域としては使用されていなかったと考えられる。馬埋葬土坑が集中していることを考えると，集落における不浄の地か，あるいは何らかの作業の場として機能していたのであろうか。

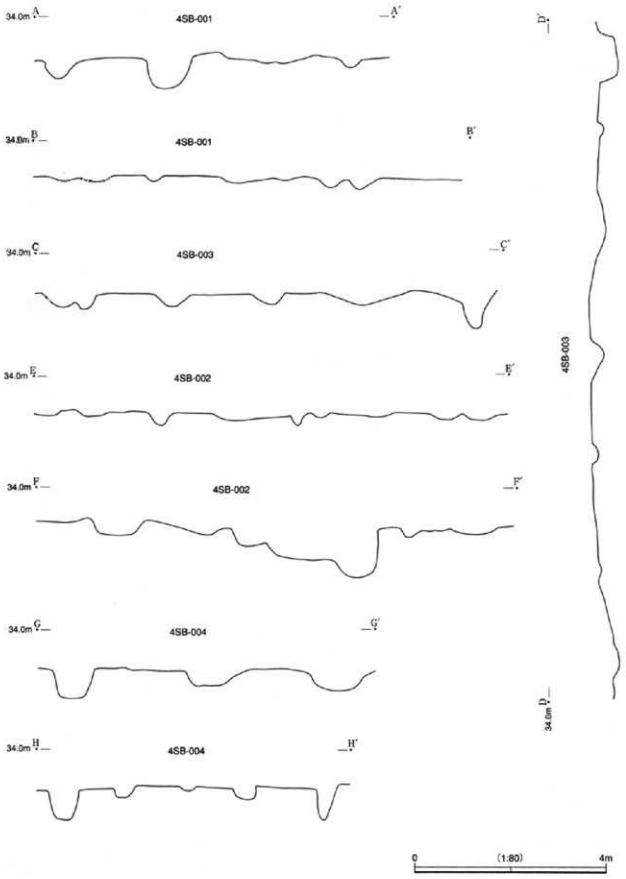
出土遺物は居住域として使われていなかったことからも極めて少量である。区画6の周辺も含めてみても，古瀬戸後期と大窯3段階の瀬戸美濃産の天目茶碗が各1点，大窯期段階の皿が1点出土しているのみである。


4SB-001
4SB-002
4SB-003
(地)：地下式坑
(井)：井戸
(粘)：粘土貼土坑
33.5m
A
A'
34.5m
B
B'
0
(1:300)
20m

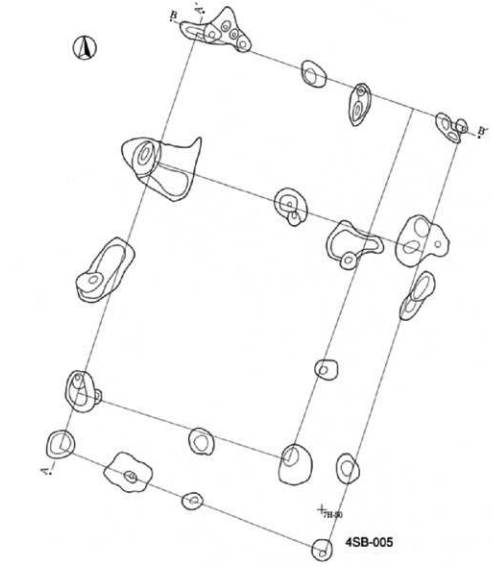
第30図　区画４（１）



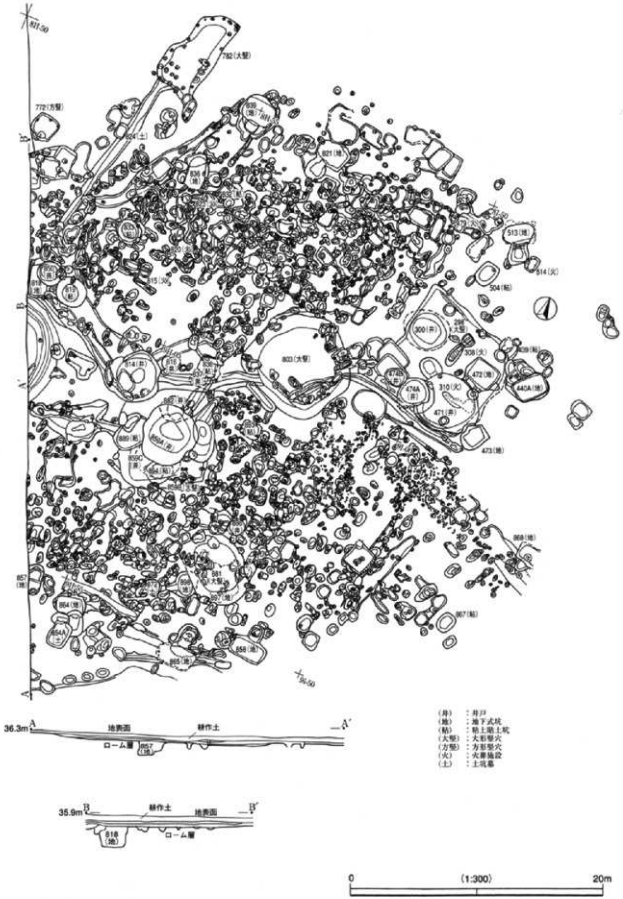
第31図　区画４（２）4SB－001　4SB－002　4SB－003　4SB－004



第32図　区画４（３）　4SB－001　4SB－002　4SB－003　4SB－004



第33図　区画４（４）　4SB－005


A
A'
B
B'
36.3m
35.9m
地表面
耕作土
ローム層
(井)　：井戸
(地)　：地下式坑
(貯)　：貯土穴土坑
(大竪)：大形竪穴
(方竪)：方形竪穴
(火)　：火葬施設
(土)　：土坑墓
0
(1:300)
20m

第34図　区画5

A
A'
B
B'
1279
1434
1001
1420
1001底面
25.4m
1112
1060
27.4m
3884-B
1431
1388
1396
1432
1429
1387
1112
1060
1388
1038
0
(1:200)
10m

第35図　区画 6

（2）地下式坑（第36～42図，第1表（1），図版10・11）

地下式坑は総数36基検出されている。遺跡全体での分布傾向をみると（第36図），調査区北端で4基および区画1（屋敷地）の背後にあたる地区（4H大グリッド）に2基検出された以外は，残りの30基は調査区中央より南半部に集中する（7H，7I，8H，8I，9H，9Iグリッド）。その中でも特に集中する地区は区画2（屋敷地）南側から区画3（屋敷地）南西にかけての地区で5基，8H－05・06グリッドを中心に位置する大型竪穴状遺構（481A・B号址）周辺で6基，区画5（墓域）で16基である。ただし，明確に屋敷地として認められた区画1～4の内部では地下式坑は全く検出されていない。

248号址　天井部は調査時には既に陥落していた。覆土は4層と8層が黒褐色を主体とする他は，ローム粒，ブロックを多く含む茶褐色土を主体とする。

348号址　天井部は343号址によって切られ上半部を失っていた。覆土は16～19層は崩落した天井部の土と思われるロームブロックを主体とする土。

377号址　床面よりやや浮いた状態で馬骨が出土している。

440a号址　天井部は既に崩落していた。覆土は4層～8層が天井部崩落土であるロームブロックを主体とする暗褐色土。

472号址　竪坑部は不明確。天井部は既に崩落し，4層は天井部崩落土であるロームブロックを主体とした黄褐色土。

473号址　天井部は既に崩落し，1層～6層までロームブロック・粒を多く含む褐色土系の覆土。

489号址　竪坑部の底面の8層は淡い褐色粘土層，9層は黄褐色土粘土層で，共に踏み固められている。

513号址　天井部は既に崩落していたが，一部竪坑部と横坑部の間に地山であるローム層が残っていた。

540号址　天井部は既に崩落し，6層が天井崩落土でロームブロックを主体とする黄褐色土。

544号址　6層が崩落天井部の土で，ロームブロックを主体とする黄褐色土。

562号址　竪坑部底面が横坑部底面より若干低い。全体的に覆土はロームブロック・粒を多く含む地層。

588号址　井戸跡（710号址）に竪坑部を構築する。11層はロームブロックを多く含む黒褐色土。17層はローム土を主体とする褐色土で固くしまっている。

646号址　1層はローム土主体の褐色土で，天井崩落土と思われる。

777号址　天井部のローム土（1層）が残る。竪坑部底面の横坑部側に仕切溝と思われる小溝が認められる。瀬戸美濃窯の緑釉小皿（古瀬戸後期Ⅰ），香炉（古瀬戸後期Ⅱ）等が出土。

821号址　6層は地山であるローム層の残存部。瀬戸美濃窯の緑釉小皿（第87図－77，古瀬戸後期Ⅲ），カワラケ（第96図－9），等が出土。

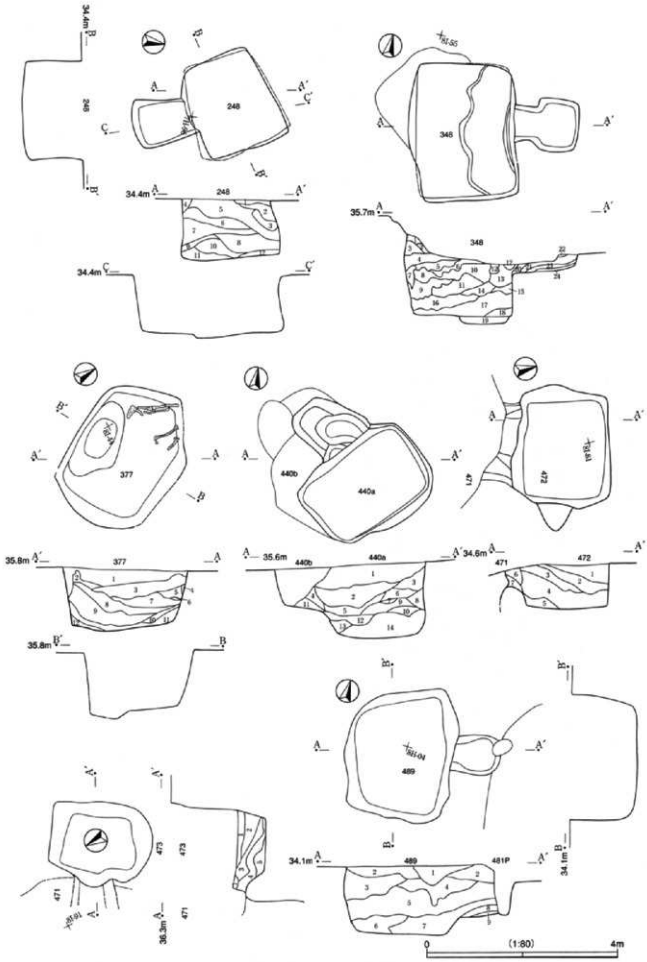
836号址　2層は地山であるローム層の残存部。瀬戸美濃窯古瀬戸後期Ⅳ新段階の灰釉腰折皿（第88図－95）が出土。底部に「玉」の墨書銘がある。

865号址　竪坑部底面に小穴が多数認められる。9層はローム土主体の褐色土で固くしまっている。古瀬戸後期Ⅲ段階の鉄釉緑釉小皿，白色系カワラケが出土。

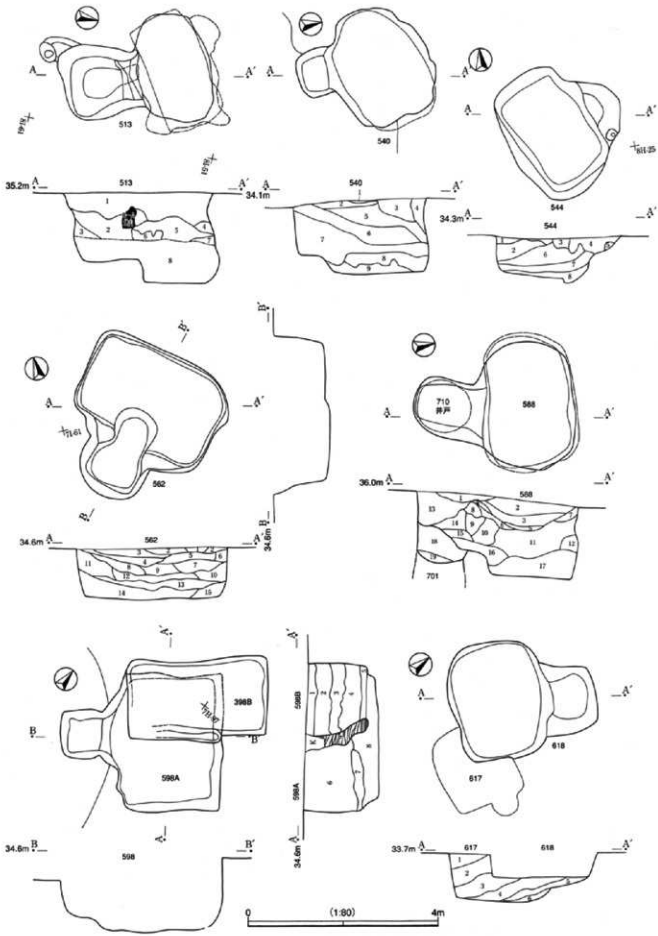
1282号址　1～11層は黒褐色系土，12～16層はローム土を主体とする褐色系土，17～23層は黒色系土，24層以下は黒褐色系土と褐色系土の互層。出土遺物は土器擂鉢が1点のみ。

1465号址　4層は均質はローム土で天井崩落土。32～34層もローム土主体の褐色土。出土遺物は常滑窯質の擂鉢が1点のみ。

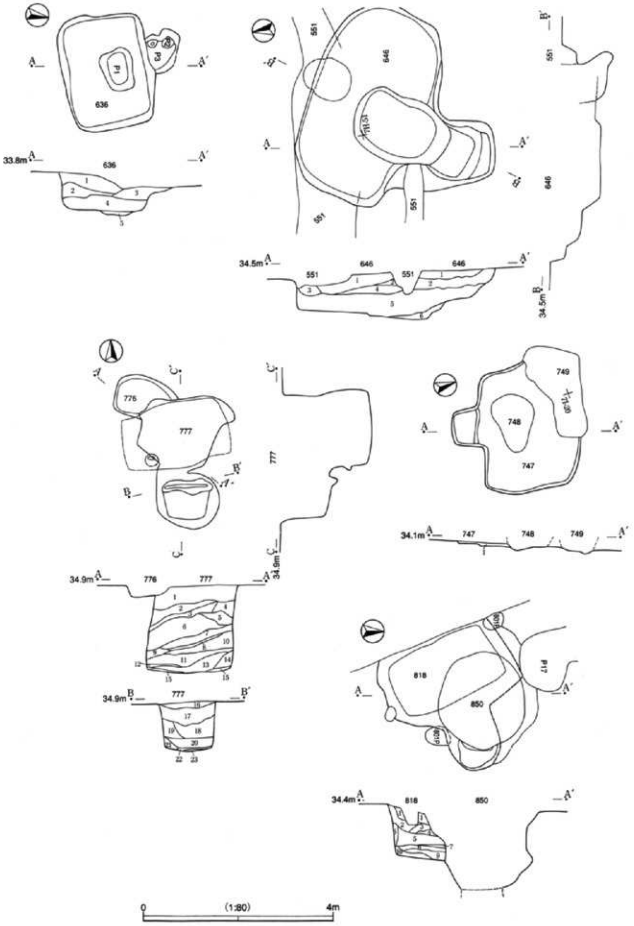
第36図　地下式坑分布図



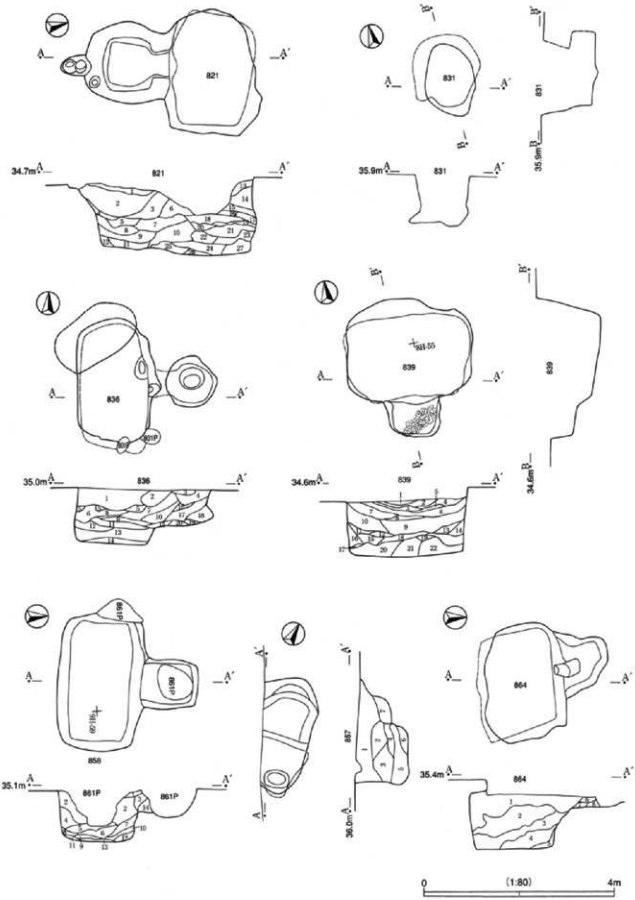
第37図　地下式坑（1）



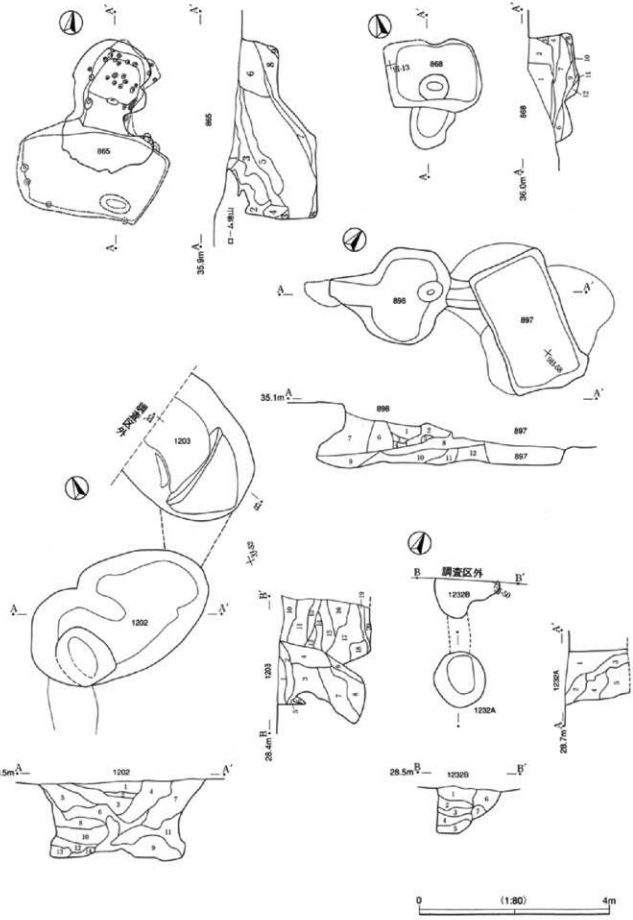
第38図　地下式坑（2）


636
P4
P3
33.8m
636
646
551
P13
P12
34.5m
646
551
775
777
776
34.9m
P14
748
749
747
34.1m
747
748
749
818
850
P17
P16
34.4m
818
850
0
(1:80)
4m

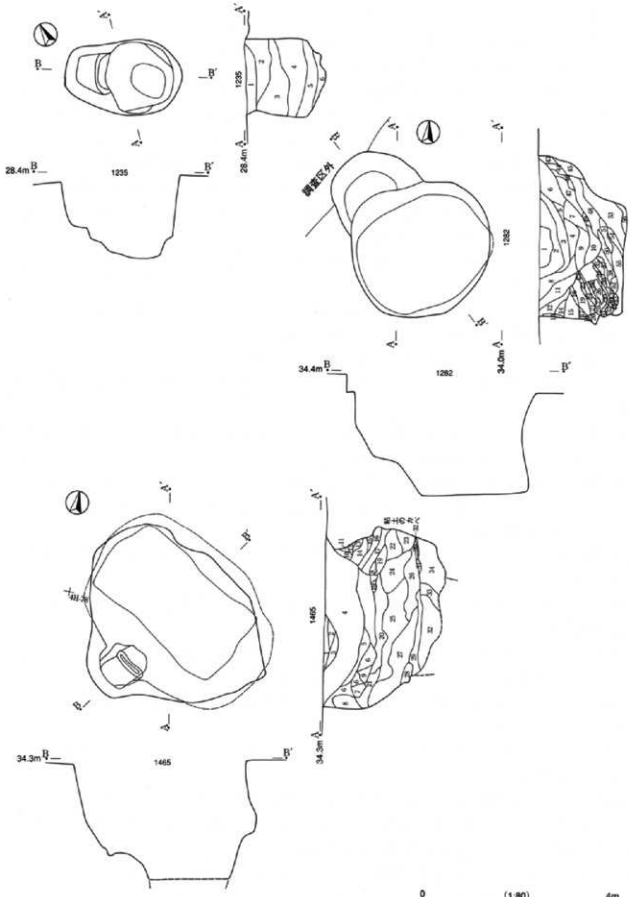
第39図　地下式坑（3）


821
831
35.9m
836
35.0m
839
34.6m
858
861P
35.1m
857
36.0m
864
35.4m
0
(1:80)
4m

第40図　地下式坑（4）


865
35.5m
868
36.0m
898
897
35.1m
1203
1202
28.4m
28.5m
調査区外
1232B
1232A
29.7m
0
(1:80)
4m

第41図　地下式坑（5）



第42図　地下式坑（6）

（3）井戸跡（第43～54図，第1表（1～3），図版12・13）

井戸跡は総数78基検出されている。遺跡全体での分布傾向をみると（第43図），区画1の南側から区画2の西側，さらに区画4の北側から東側の地区に大部分の井戸跡は集中する。他の集中域は区画5の内部に10基認められる。屋敷地である区画1～4との関係をみると，区画1では1基（1227号址），区画2では3基（1512号址，1646号址，1681号址），区画3では1基（1276号址），区画4では4基（1798B号址，1809号址，1811号址，1812号址）と，屋敷内では計9基検出されているが，総数78基に対してみると井戸跡は屋敷地に伴うよりも屋敷地外に掘られた方が圧倒的に多いことが読み取れる。なお，調査時における安全対策上の問題から大部分の井戸跡は井戸底まで掘り下げていないことと，出土遺物の取り上げはほとんど一括で行っていることをあらかじめお断りしておく。

300号址　1層～4層ともロームブロックを多く含む。特に2，3層はロームブロックを主体とし人為的に一気に埋め戻された感がある。

471号跡　3層～7層はロームブロックおよび灰白色粘土ブロックを主体とし，人為的堆積である。

474A・B号址　A号址の方がB号址よりも新しい所産。11層は灰白色粘土ブロックを主体とした層。

510号址　覆土はロームブロックを主体としているが，しまりは弱い。

767号址　2層～4層，および7層はロームブロックを主体とした褐色土系の覆土。人為的な埋め戻しが行われている。

850号址　7層がロームブロックを主体とする他は，暗灰褐色や黒褐色の比較的ローム土を多く含まない地層で占められている。武蔵型板碑の完形品が出土している。

1227号址　区画1の屋敷入口部に位置し，区画1内では唯一検出された井戸跡。井戸に付設すると考えられる施設（1277B号址）を伴う。入口施設あるいは水場作業施設であろうか。井戸跡の覆土は灰黒～黒色土系で，調査開始時には窪みと認識されていた。

1276号址　1層はロームブロックを多量に含み，かつしまりの強い褐色土。最終的には人為的に埋め戻されている。

1537号址　1層～2層は明褐色粘質土，4層～5層は暗褐色粘質土で，人為的に埋め戻されている。

1588号址　2層は宝永火山灰層。

1603号址　1～2層はローム土を多く含む黒褐色系土。4～6層は黄褐色砂や灰白色粘土ブロックを多く含む。人為的に埋め戻されている。大窯3段階の瀬戸美濃窯天目茶碗が出土している。

1645号址　覆土上位で木材片がまとまって出土。他にD1類の青磁碗（第86図－15）と10型式の常滑窯片口鉢（第96図－273）などが出土している。

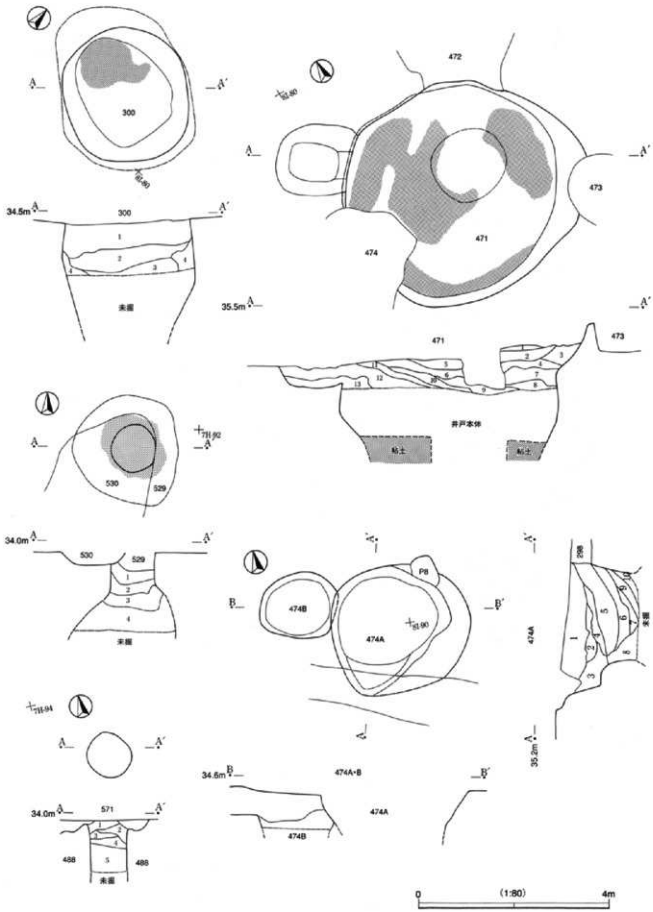
1688号址　4～9層は灰白色粘土や淡褐色砂を多く含み，人為的に埋め戻されている。大窯3後半段階の初山窯擂鉢が出土。

1722号址　1～3層は褐色系粘土を主体とする。4～6層は木材片を多く含み，青灰色を呈している。古瀬戸後期Ⅳ新の瀬戸美濃腰折皿（第88図－100），B群の白磁皿（第86図－23），古瀬戸中期Ⅰ～Ⅱの灰釉合子（第91図－209），3型式の渥美窯甕（第94図－292）等が出土。

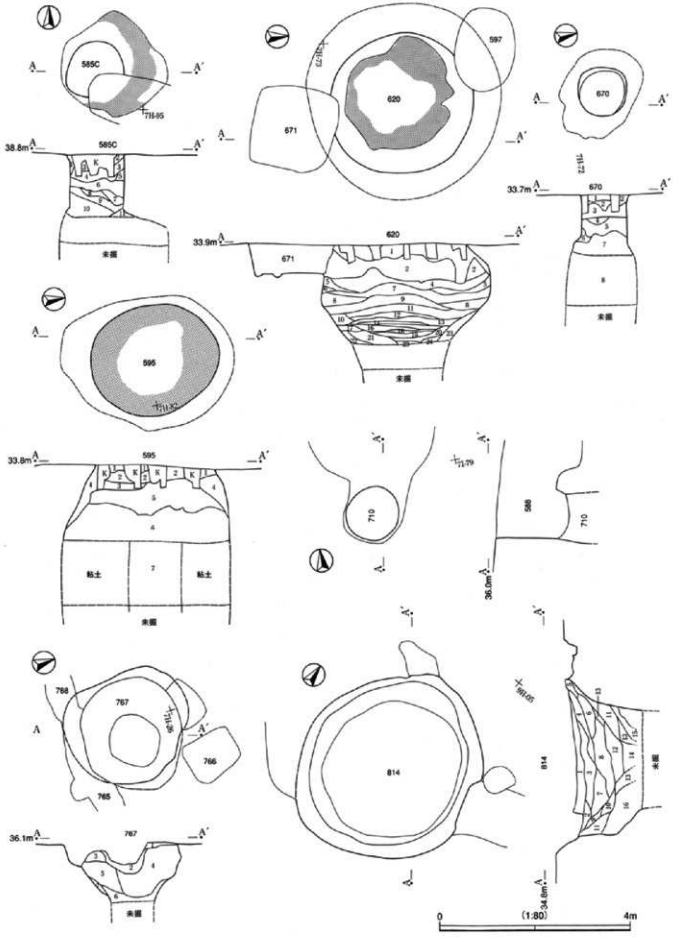
1812号址　3～17層はローム土を多く含む褐色系土。それより下層は灰白色粘土が混じってくる。

1815号址　1～11層はローム土を多く含む褐色系土。40層は灰白色粘土主体，それより下層はローム土を多く含む層。

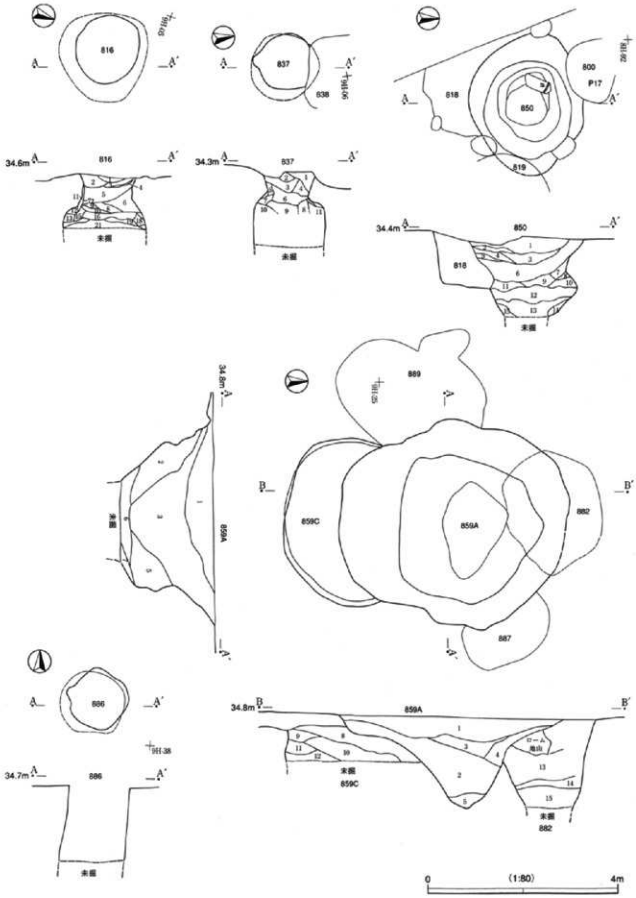
第43図　井戸跡分布図


300
472
473
474
471
井戸本体
粘土
530
529
474B
474A
P8
474A-B
571
488
未掘
0
(1:80)
4m

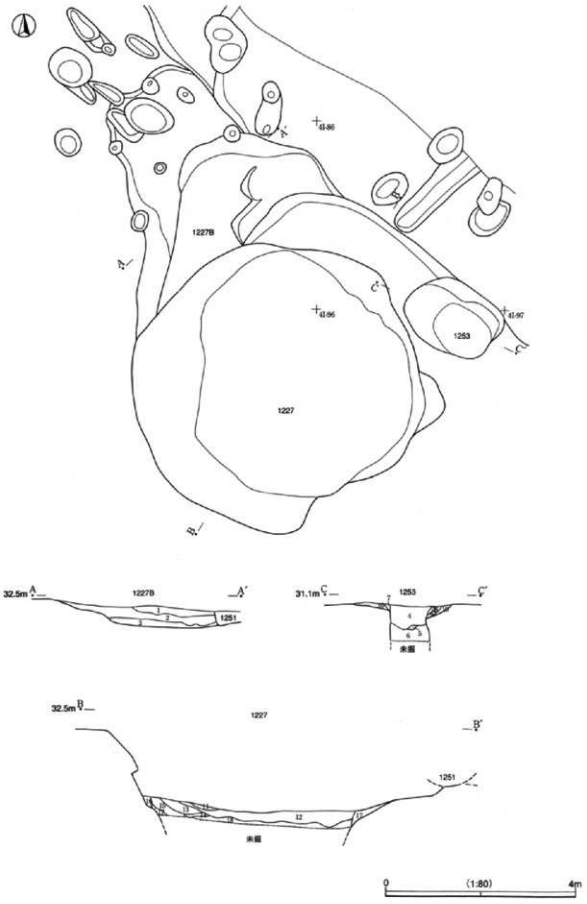
第44図　井戸跡（1）


585C
A
A'
38.8m
未掘
620
671
597
33.9m
670
33.7m
595
33.8m
粘土
710
566
36.0m
768
767
766
765
814
36.1m
34.8m
0
(1:80)
4m

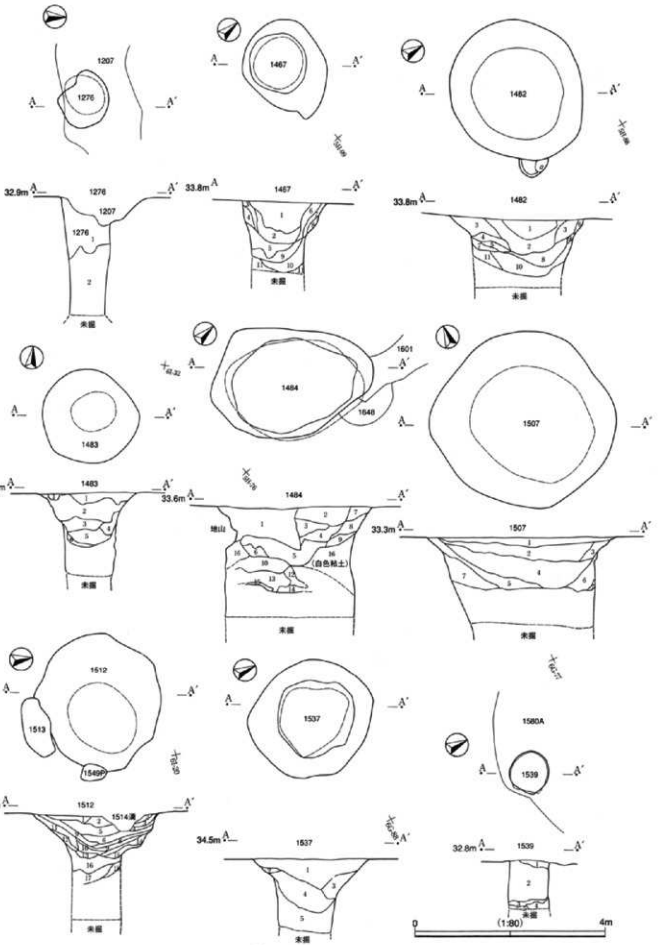
第45図　井戸跡（2）


816
837
838
818
850
800
P17
819
889
859C
859A
882
887
886
未掘
0
(1:80)
4m

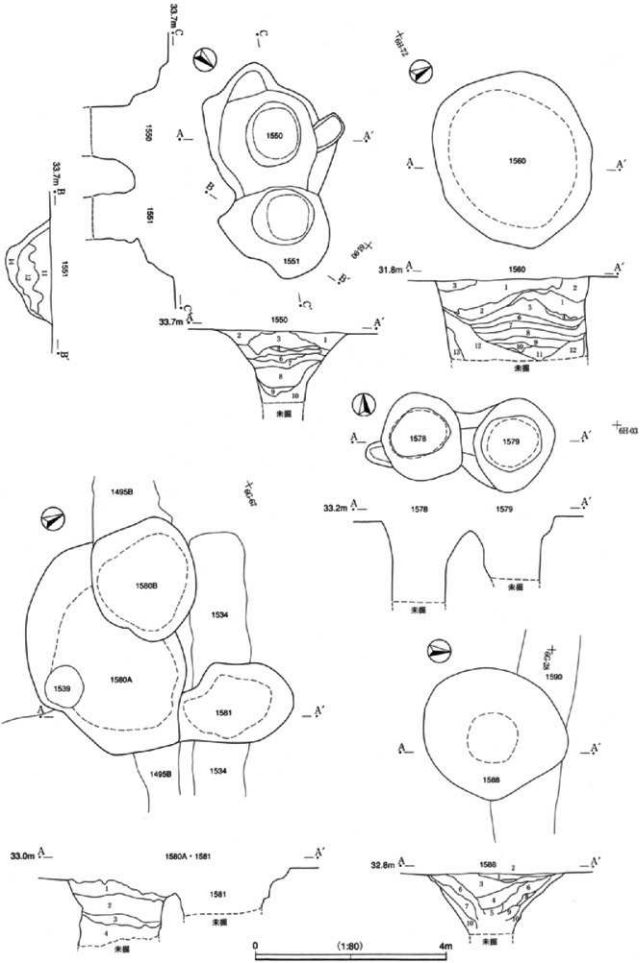
第46図　井戸跡（3）


41.86
41.95
41.97
1227B
1253
1227
32.5m
1227B
1251
31.1m
1253
未掘
32.5m
1227
1251
未掘
0
(1:80)
4m

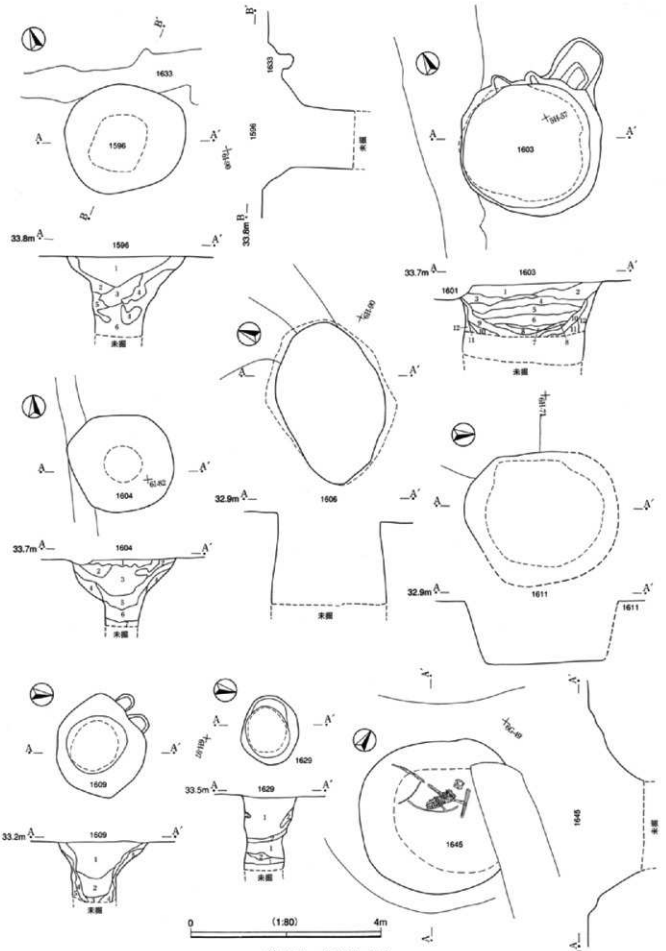
第47図　井戸跡（4）


1207
1276
1467
1482
32.9m
33.8m
33.8m
未掘
1483
1484
1601
1648
1507
33.6m
33.6m
33.3m
地山
(白色粘土)
1512
1513
1514
1514B
1537
1580A
1539
34.5m
32.8m
0
(1:80)
4m

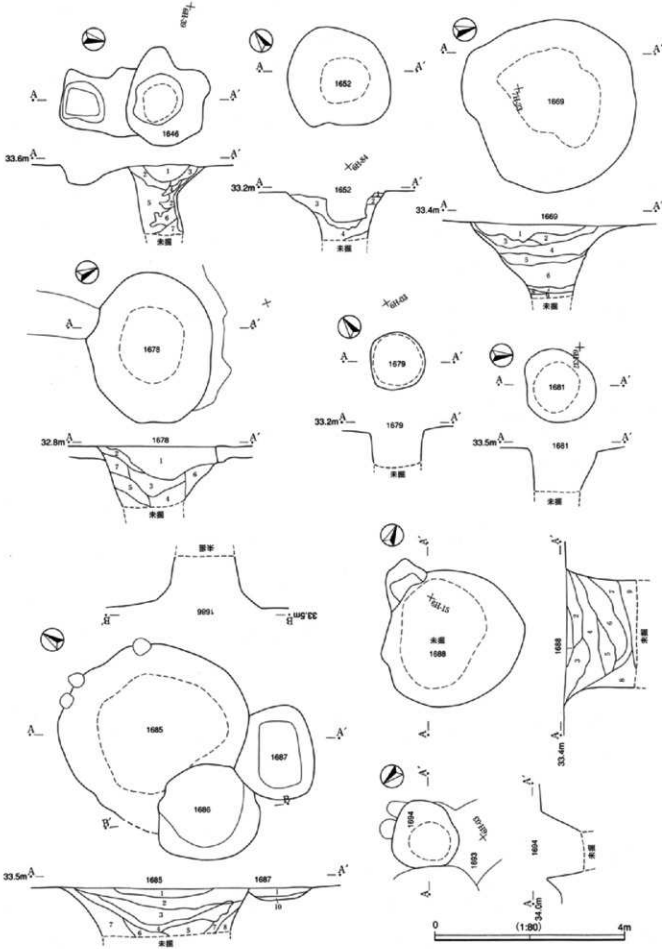
第48図　井戸跡（5）


1550
1551
1560
1578
1579
1580A
1580B
1581
1588
1590
1534
1539
1495B
未掘
0
(1:80)
4m

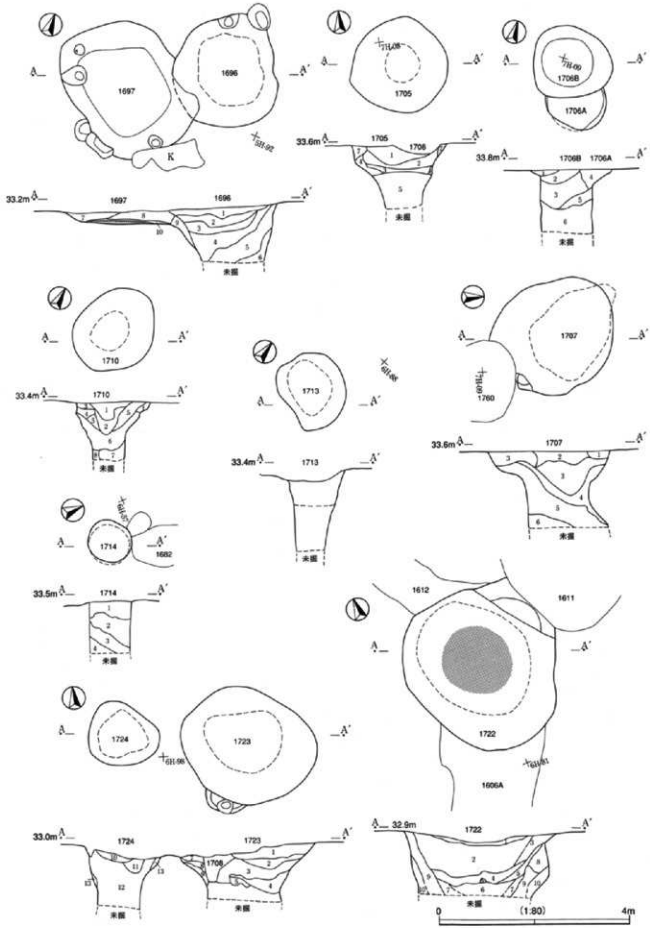
第49図　井戸跡（6）


1596
1633
33.8m
1603
33.7m
1601
1604
32.9m
1606
1611
1609
33.2m
1629
33.5m
1645
未掘
0
(1:80)
4m

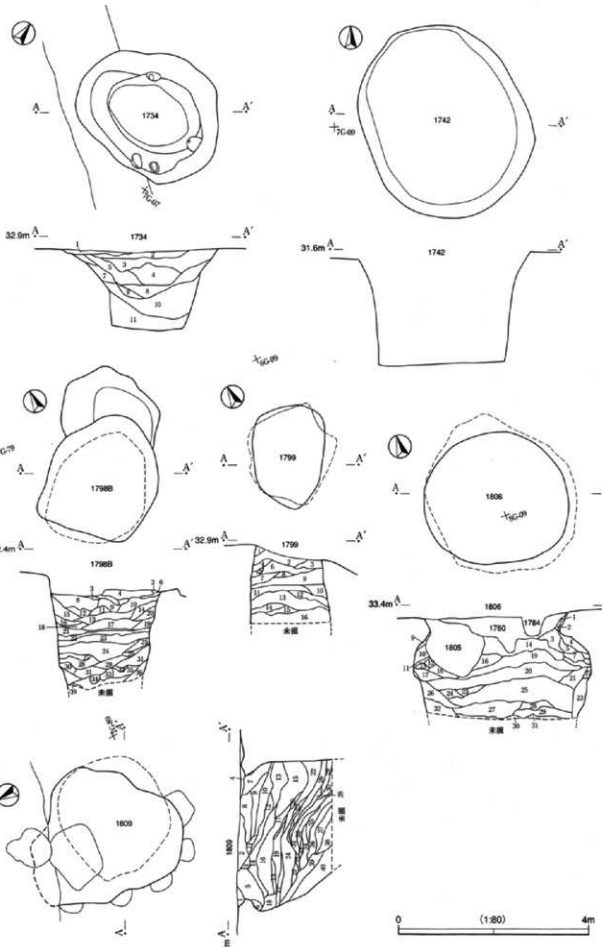
第50図　井戸跡（7）


SI630
1646
33.6m
SI652
1652
33.2m
SI669
1669
33.4m
SI678
1678
32.8m
SI679
1679
33.2m
SI681
1681
33.5m
SI686
1686
33.5m
SI688
1688
33.4m
1685
1687
1686
33.5m
SI693
1693
1694
34.0m
未掘
0
(1:80)
4m

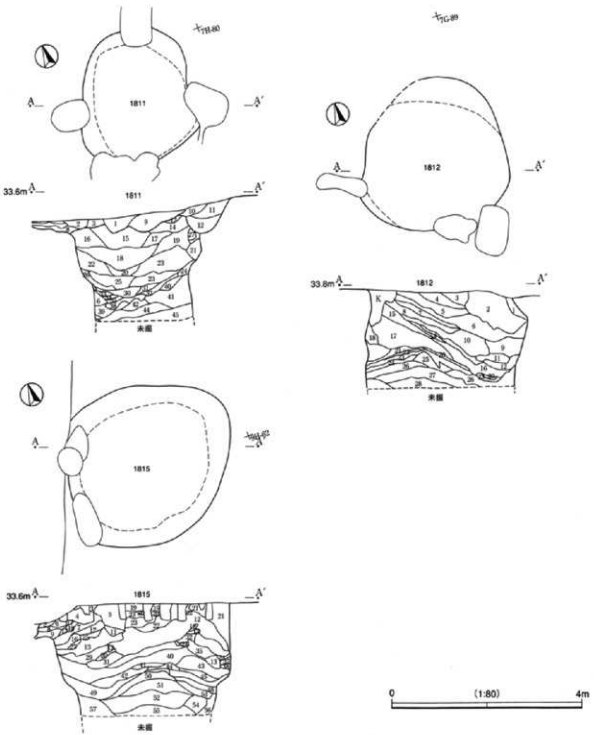
第51図　井戸跡（8）


1697
1696
K
SH.92
33.2m
未掘
1705
SH.105
33.6m
1708
1706B
1706A
SH.99
33.8m
1710
33.4m
1713
SH.101
1714
1682
33.5m
1724
1723
SH.98
1706
33.0m
1612
1611
1722
1606A
SH.91
32.9m
1760
SH.100
1707
33.6m
0
(1:80)
4m

第52図　井戸跡（9）


1734
1742
1798B
1799
1806
1760
1784
1805
1809
32.9m
31.6m
32.4m
33.4m
33.2m
未掘
0
(1:80)
4m

第53図　井戸跡（10）



第54図　井戸跡（11）

（4）粘土貼土坑（第55～60図，第1表（3），図版14・15）

粘土貼土坑とは土坑の底面から壁面にかけて，あるいは底面のみに灰白色粘土を貼り付けたものをいい，総数32基検出されている。遺跡全体での分布傾向をみると（第55図），集中域は区画1，2，4の屋敷地の背後にあたる5H，6G，6Hグリッドに認められる。もう一つの集中域は区画5の内部である。2カ所の集中域とも井戸跡の集中域と重なる。屋敷地との関連をみると，区画1と3では検出されていない。区画2で4基（1632号址，1695号址，1702号址，1718号址）である。ただし1695号址は区画2の西辺を画する溝より新しく掘り込まれ，1718号址は逆に南辺の区画溝より古い遺構のため，区画2の内側に伴う可能性のある粘土貼土坑は1632号址と1702号址の2基である。区画4では1基（1745号址）のみで，屋敷内で検出された数は計3基である。粘土貼土坑も井戸跡と同様に屋敷外に大部分が分布することが認められる。また，井戸跡と同様な分布傾向を示すことは，井戸と粘土貼土坑は密接な関連を示すものといえる。

439号址　1層は淡灰褐色粘砂土でしまりがある。灰褐色粘土は壁部分のみで，底面には認められない。

504号址　1層は焼土・炭粒を少量含む暗褐色土。2層～4層はローム粒を多く含む層でしまりが強い層。

596号址　1層は焼土ブロック，炭化粒を多く含む暗褐色土。粘土上面には磨製石器が2点貼り付いた状態で出土している。

707号址　1層はローム粒を少量含む黒褐色土。

819号址　1層はローム粒と白色粘土粒を少量含む黒褐色土。底面に小穴が多く認められる。

832号址　覆土は黒褐色土を主体とした層。

833号址　覆土は全体的にロームブロック・粒を主体とし，人為的な埋め戻しを受けている。

838号址　覆土は全体的にロームブロック・粒を主体とし，人為的な埋め戻しを受けている。

867号址　1層，2層ともロームブロックを多く含み，人為的に埋め戻されている。

889A号址　1層は白色粘土粒，炭粒を少量含む暗赤褐色土。2層は白色粘土ブロックを主体とする灰褐色粘土。

893号址　1層はローム粒を多く含む暗褐色土。しまりは弱い。2層はローム粒主体の暗黄褐色土。3層はロームブロックを多く含む暗褐色土。

894号址　1層は淡灰褐色の純砂層。2層はローム粒，白色粘土粒を少量含む暗灰褐色粘質土，3層はローム粒を多く含む暗褐色土。

1420号址　1層は砂のブロックを多く含む暗褐色粘質土。2層は粘土粒を少量含む暗褐色土。

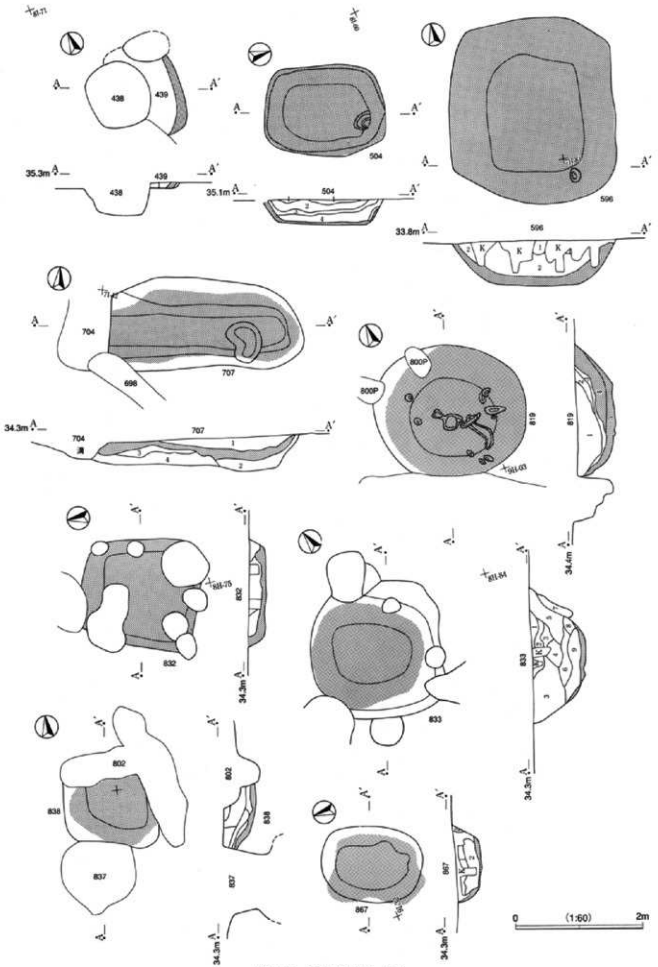
1583号址　1層はロームブロック，焼土粒，炭化物粒を多く含む暗褐色土。

1632号址　1層はローム粒をやや含む暗褐色土。近世陶磁器を多く出土しているが，中世陶器もまとまって出土。瀬戸美濃窯製品では古瀬戸後期Ⅱの平碗（第87図－53），後期Ⅳ古の平碗（第87図－68），常滑窯片口鉢10型式（第93図－269・270），Ⅱa類のカワラケ（第96図－6・7）等が出土している。

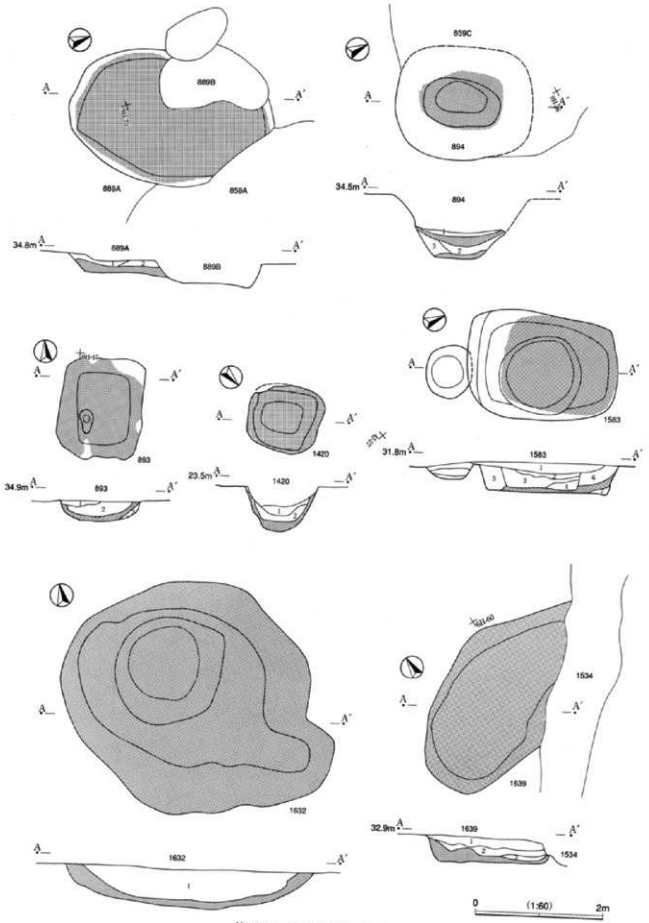
1695号址　中世から近世初頭にかけての陶器がまとまって出土。瀬戸美濃窯製品では古瀬戸後期Ⅲの卸皿（第89図－155），後期Ⅲの直縁大皿（第89図－146），登窯2の志野丸皿（第88図－130），初山窯産の大窯3後半段階の擂鉢，10～11型式の常滑窯片口鉢などが出土しているが，時期的にはバラツキが大きい。

1701・1718号址　1708号址の溝が1701号址より新しく，1718号址より古いことから，1701（古）・1718（新）の関係となる。また，1701号址，1718号址の下からは1723号址，1724号址の井戸跡が検出されている。1701号址からは中世から近世初頭までの陶磁器が多数出土している。中国製染付皿（第86図－3・4）

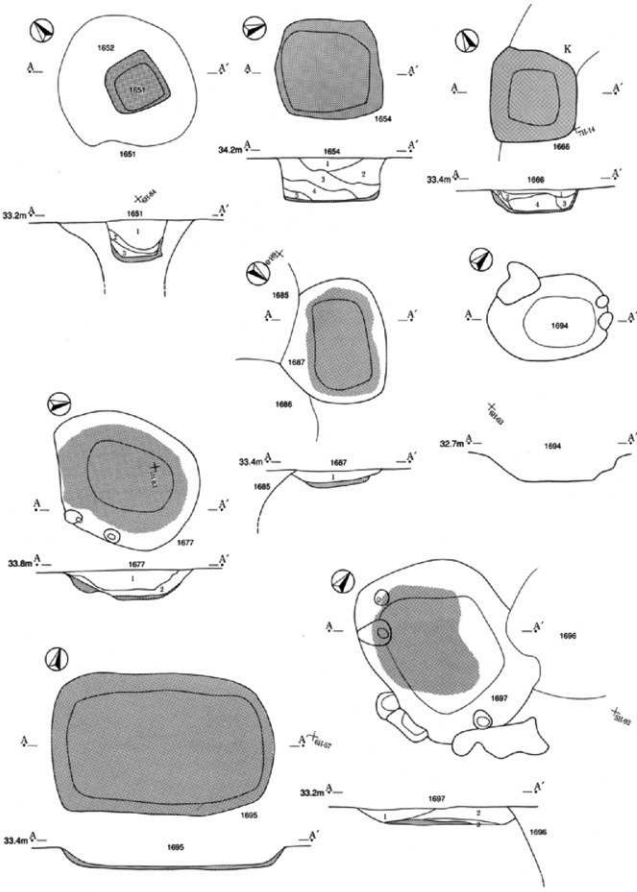
第55図　粘土貼土坑分布図


438
439
504
596
704
707
698
800P
819
832
833
802
838
837
867
0
(1:60)
2m

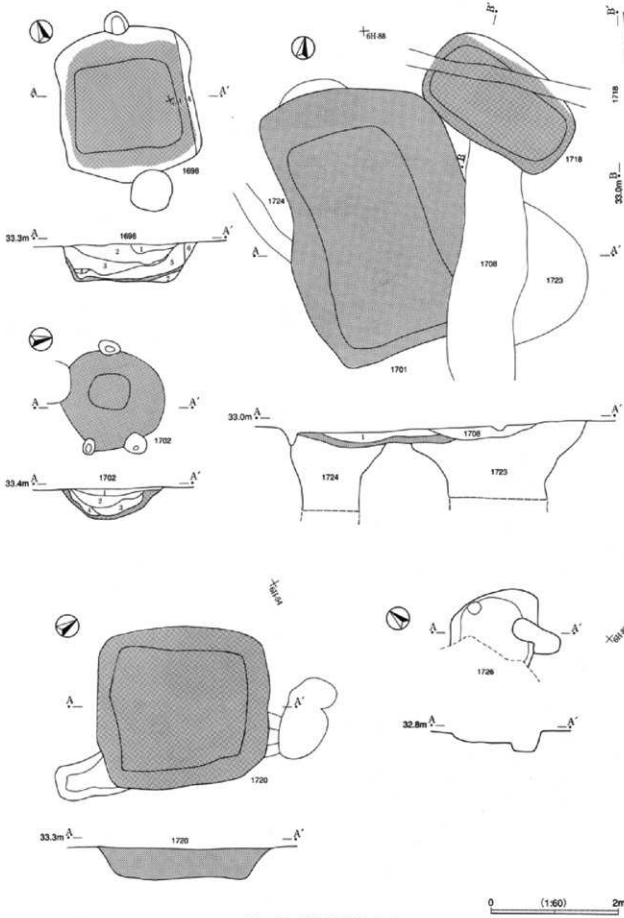
第56図　粘土貼土坑（1）


889B
889A
858A
34.8m
889A
889B
859C
894
34.5m
894
893
34.9m
893
1420
23.5m
1420
1583
31.8m
1583
1632
1632
1534
1639
32.9m
1639
1534
0
(1:60)
2m

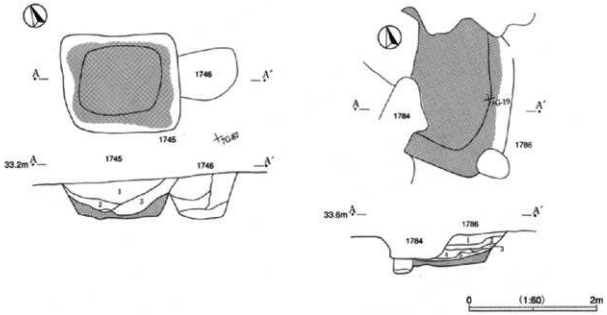
第57図　粘土貼土坑（2）


1652
1651
1651
33.2m
1654
34.2m
1654
K
1666
33.4m
1666
1685
1687
1686
33.4m
1687
1685
1694
32.7m
1694
1677
33.8m
1677
1696
1697
1697
33.2m
1697
1696
1695
33.4m
1695
0
(1:50)
2m

第58図　粘土貼土坑（3）


1698
33.3m
1702
33.4m
1701
1708
1723
1724
1718
1726
32.8m
1720
33.3m
33.0m
0
(1:60)
2m

第59図　粘土貼土坑（4）



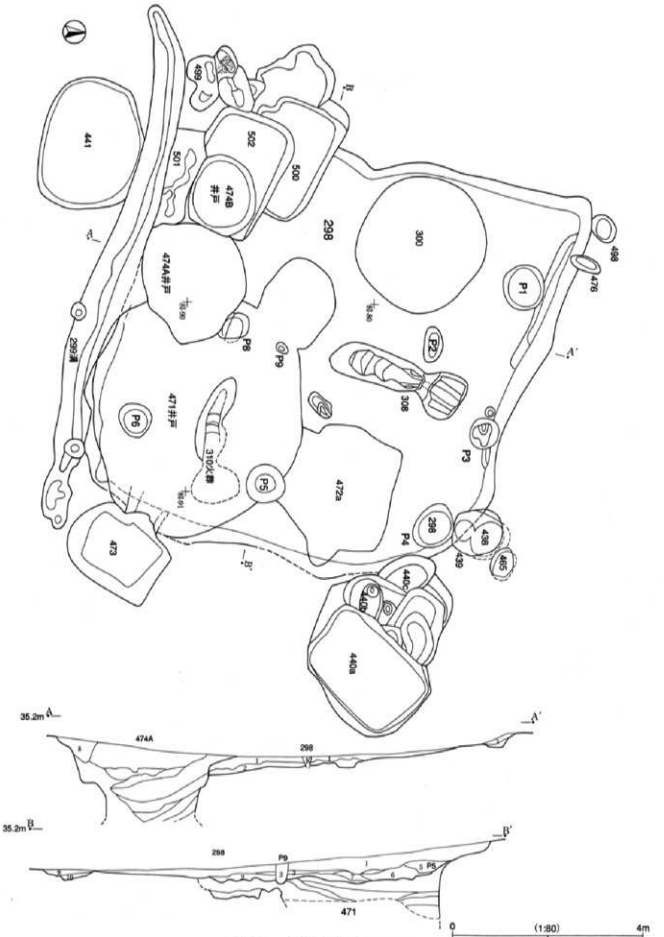
第60図　粘土貼土坑（5）

や古瀬戸後期Ⅳ段階の志戸呂窯水注（第92図－225）が含まれる。

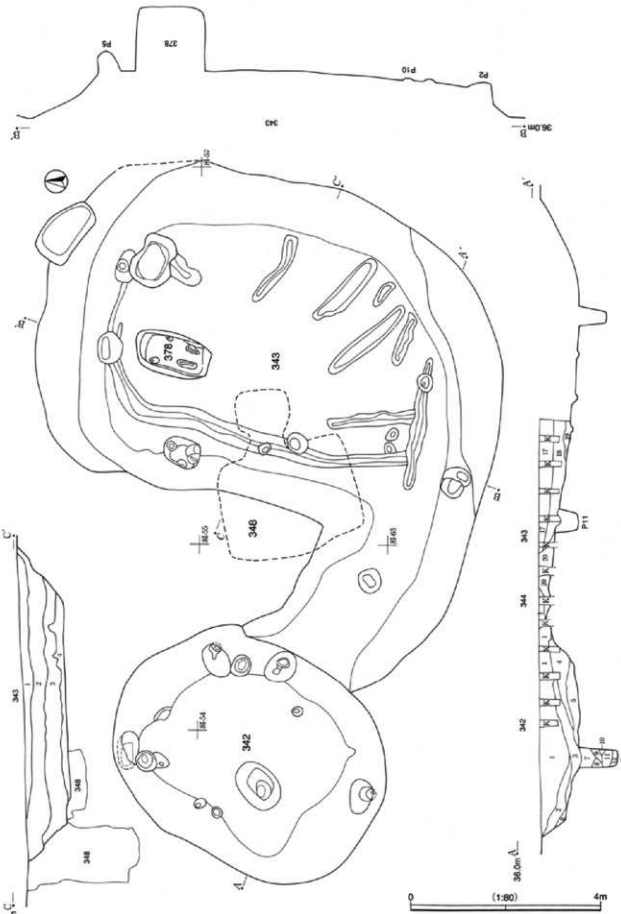
（5）大型竪穴状遺構（第61～70図，第1表（3），図版16）

計16基検出されているが，単に形状および規模が近似していることからまとめて取り扱っている。このため個々の遺構に即して性格を考えると様々な性格が導き出される。1208号址と1228号址は区画1の屋敷地の入口部に位置しているが，場所的にみて入口施設に伴うもので排水のための水溜施設として機能していたと考えられる。481A号址および481B号址は，A号址の方がB号址より古い遺構であるが，遺構の周囲に4基の地下式坑（248号址，489号址，544号址，598A号址）が各々竪穴部を481号址に向けて検出されている。このことは大型竪穴状遺構が本来は地下式坑と密接な関連を持った性格の遺構であることを示している。782号址は底面に柱穴を規則的に配置していることから，倉庫あるいは作業用の竪穴建物とすることができる。

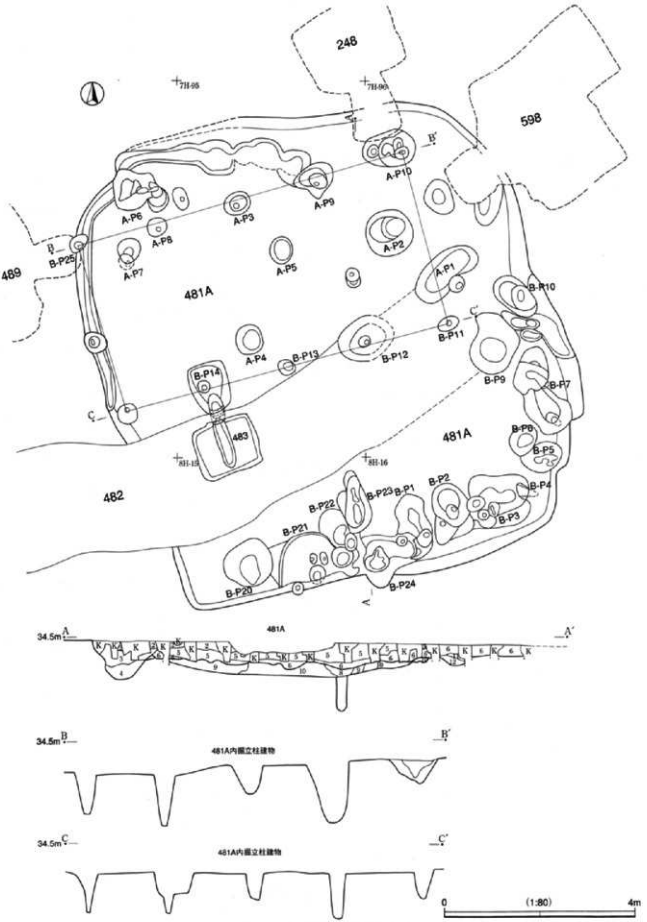
区画6
区画5
区画3
区画2
区画1
東西道路（南）
東西道路（東）
南北道路（南）
1129
1208
1209
1214
1215
1216
1217
1218
1219
1220
1221
1222
1223
1224
1225
1226
1227
1228
1229
1230
1231
1232
1233
1234
1235
1236
1237
1238
1239
1240
1241
1242
1243
1244
1245
1246
1247
1248
1249
1250
1251
1252
1253



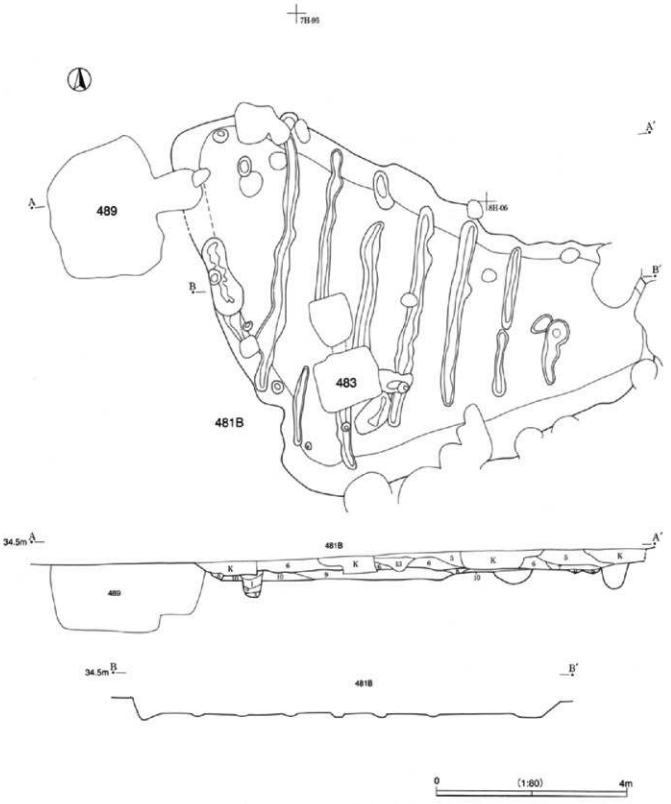
第62図　大型竪穴状遺構（1）



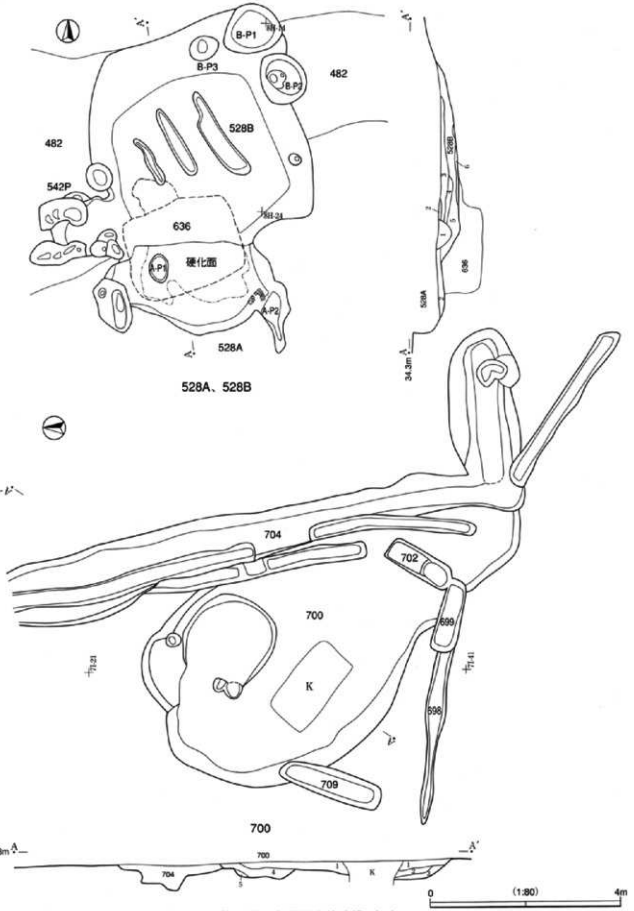
第63図　大型竪穴状遺構（2）



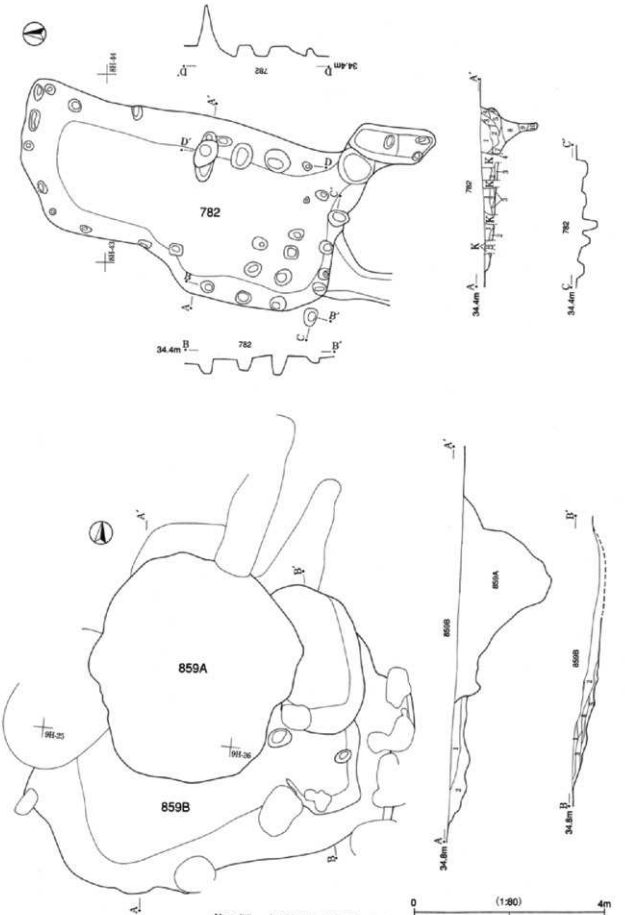
第64図　大型竪穴状遺構（3）



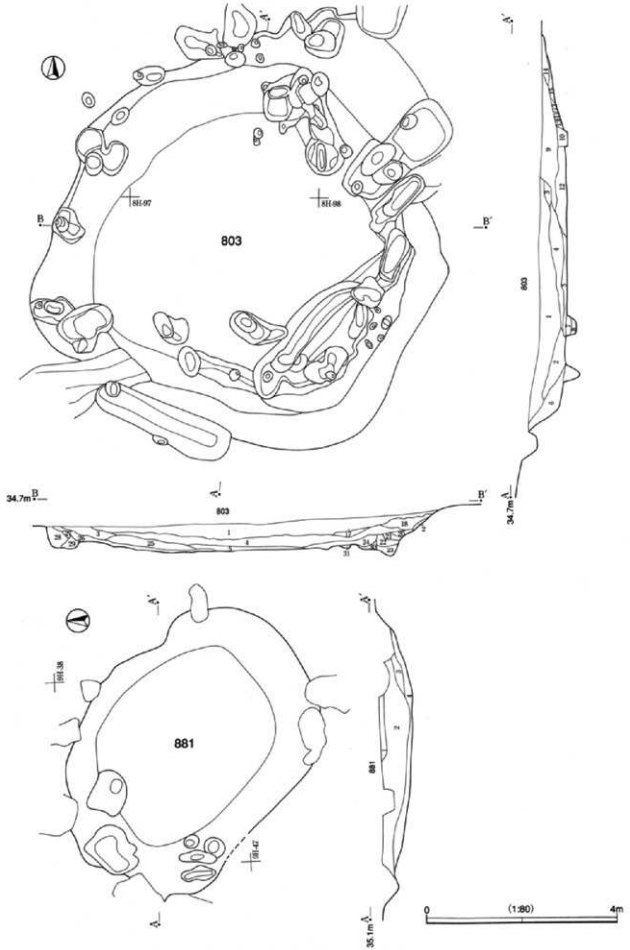
第65図　大型竪穴状遺構（4）



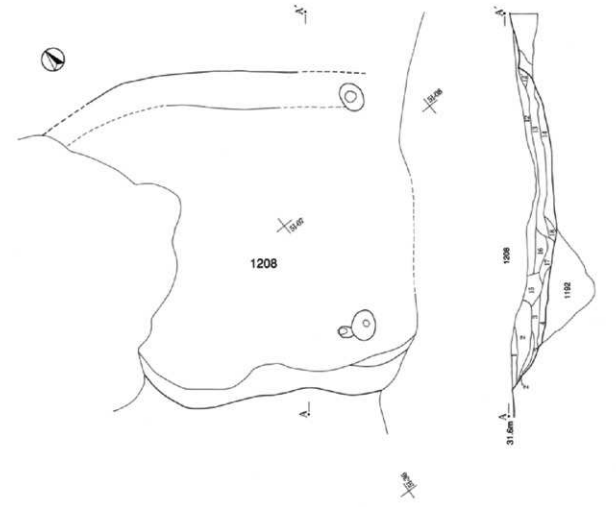
第66図　大型竪穴状遺構（5）



第67図　大型竪穴状遺構（6）

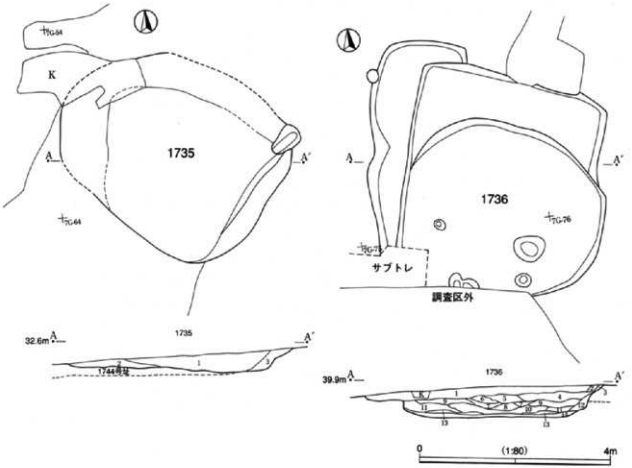


第68図　大型竪穴状遺構（7）



第69図　大型竪穴状遺構（8）

0　(1:80)　4m



第70図　大型竪穴状遺構（9）

（6）方形竪穴遺構（第61・71・72図，第1表（4），図版17）

長軸が2m以上，6m未満でプランが方形を呈する竪穴を方形竪穴として一括した。なお，長軸が2m未満のものは土坑に，長軸が6m以上のものについては大型竪穴状遺構に分類している。総数13基検出されている。

221号址　覆土はロームブロックを多く含む黒褐色土と褐色の互層で人為的堆積と考えられる。出土遺物は近世後半代の陶磁器だけで中世陶磁は全く含まれない。

244号址　覆土はロームブロックを多く含む黄褐色土，暗褐色土によって占められ人為堆積である。出土遺物は瀬戸美濃窯鉄釉縁釉小皿（古瀬戸後Ⅲ期），土器鍋，カワラケが各1点である。

433号址　平面プランは明瞭であるが，深さは16cmしかなく底面の形態は不明確である。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土が主体。出土遺物はない。

530号址　529号址（土坑）よりは新しく掘り込まれている。覆土は1，2層が純砂土で3，4層が白色粘土ブロックを多く含み，人為的に埋め戻された状況を示している。出土遺物は瀬戸美濃窯灰釉盤類（古瀬戸後Ⅰ～Ⅲ期），同灰釉縁釉小皿（同後Ⅳ古），同志野釉丸碗（登窯1），常滑窯甕が1点である。遺構の時期は15c中葉か17c前葉と考えられる。

582号址　平面プランはL字状を呈するが，二つの遺構の切り合いの結果かどうかは不明である。覆土はロームブロック，炭粒，焼土粒を多く含む暗茶褐色土が主体である。出土遺物はない。

619号址　覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土が主体。出土遺物は瀬戸美濃窯灰釉瓶子or壷（古瀬戸中期様式）と近世後期染付磁器碗が各1点である。

634号址　覆土は1層がローム粒多含，焼土粒少含の黒褐色土，2層がローム粒を多含する暗黄褐色土，3層は淡黄橙色砂の純層でややしまりがある。意図的な堆積である。出土遺物はない。

715号址　他の遺構との切り合いが激しく平面プランは明瞭ではない。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土を主体とする。出土遺物はない。

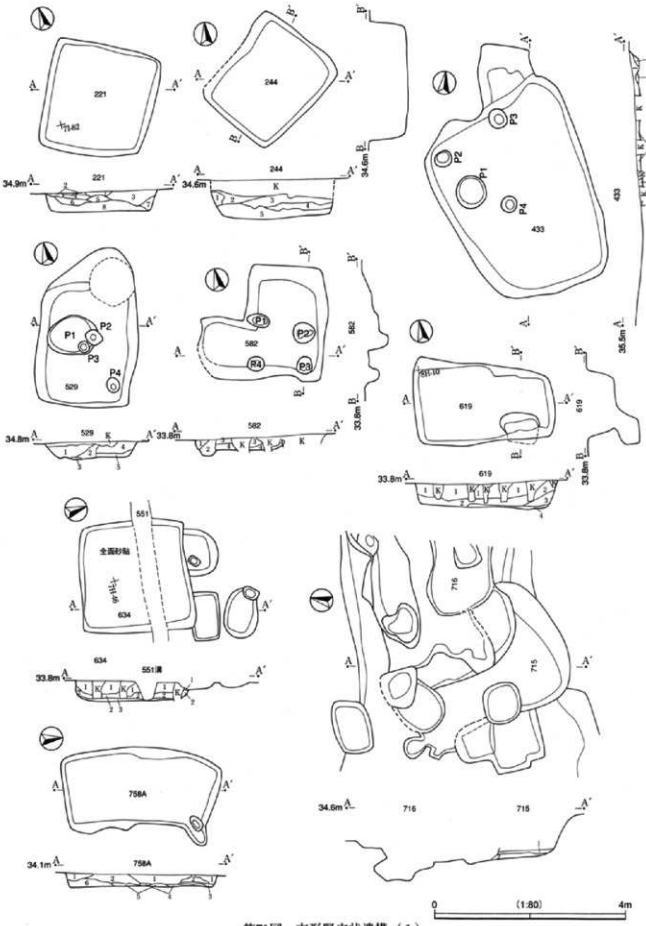
758号址　覆土はロームブロックを多く含む黒褐色土と暗褐色土互層である。出土遺物はない。

772号址　壁面の下部に棒を押したような小ピットが多数認められる。覆土はロームおよび白色粘土ブロックを少含する黒褐色土を主体とし，炭化材が底面直上に残されていた。出土遺物は常滑窯甕胴部片が1点出土している。

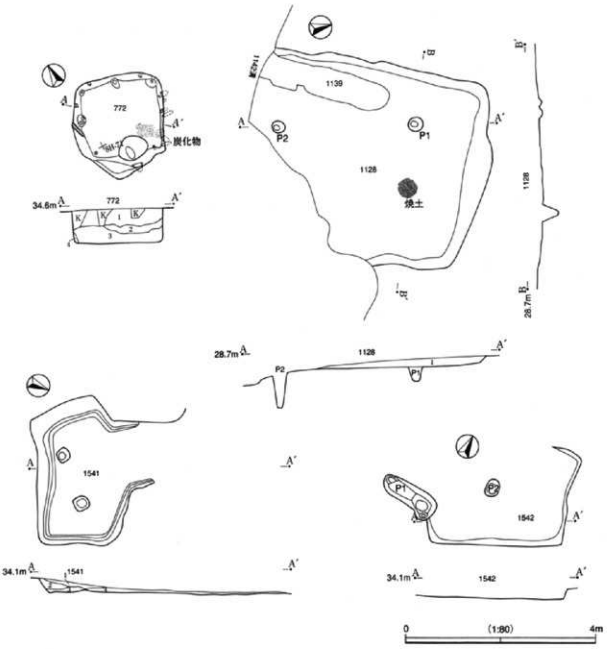
1128号址　平面プランには1142号址（溝）および撹乱によって切られ全体の形状は不明確である。覆土はローム粒を多く含む暗褐色土の単層。底面に小穴を2基伴う。出土遺物は常滑窯片口鉢体部片1点，同甕体部片2点である。

1541号址　平面プランは北辺の一部が他の遺構と切り合い一部不明瞭である。覆土はローム粒，白色粘土ブロックをやや多く含む暗褐色土，黄褐色土が主体となる。出土遺物は肥前（唐津）陶器碗，カワラケが各1点出土している。肥前陶器の時期は唐津焼編年でⅠ－2期からⅡ期にあたり，16c末葉～17c前半の年代に相当する。当遺構の時期も該期となる。

1542号址　平面プランは掘り込みが浅いこともあり，北辺が不明瞭である。出土遺物はない。



第71図　方形竪穴状遺構（1）



第72図　方形竪穴状遺構（2）

（7）土坑墓（第73～75図，第1表（4），図版7）

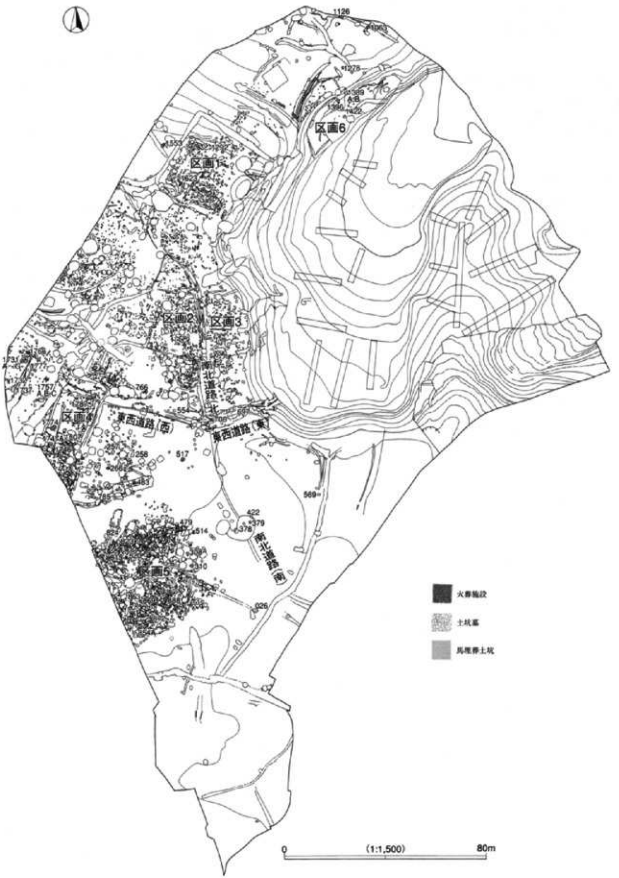
計25基検出されている。銭貨が出土している土坑は土坑墓として認定してまず間違いないであろう。問題となるのは遺物の出土していない土坑を土坑墓と認定した判断基準であるが，これについては調査時に覆土の状況や形状から判断された結果をここでは踏襲している。遺跡全体からの分布状況をみると（第73図），遺跡の北半部には全く分布せず，南半部のみに分布している。その中でも特に区画4の屋敷地の西側に集中することが特色である。この地区の土坑墓は銭貨を伴う事例が多いことから，16c代の墓域がこの地区に設定されていた可能性が高い。

（8）火葬施設（第73・76～78図，第1表（4）（5），図版18）

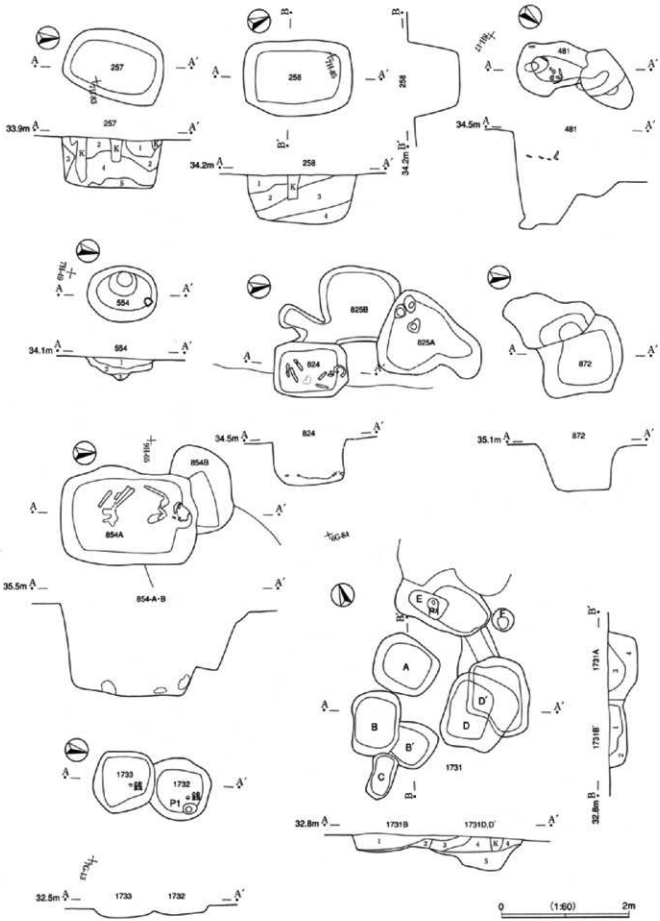
計34基検出されている。遺跡全体での分布状況をみると（第73図），土坑墓と同様に遺跡南半部に集中する傾向がみられる。もう一つは土坑墓が全く分布していない遺跡北半部に数は少ないものの分布が認められる。南半部については区画5内に集中して検出されていることが特色である。土坑墓は区画5内には3基しか検出されていないが，火葬施設は11基検出されている。北半部については区画1の内部に2基，その外に1基，さらに遺跡北端に3基検出されている。

（9）馬埋葬土坑（第73・79～81図，第1表（5），図版19）

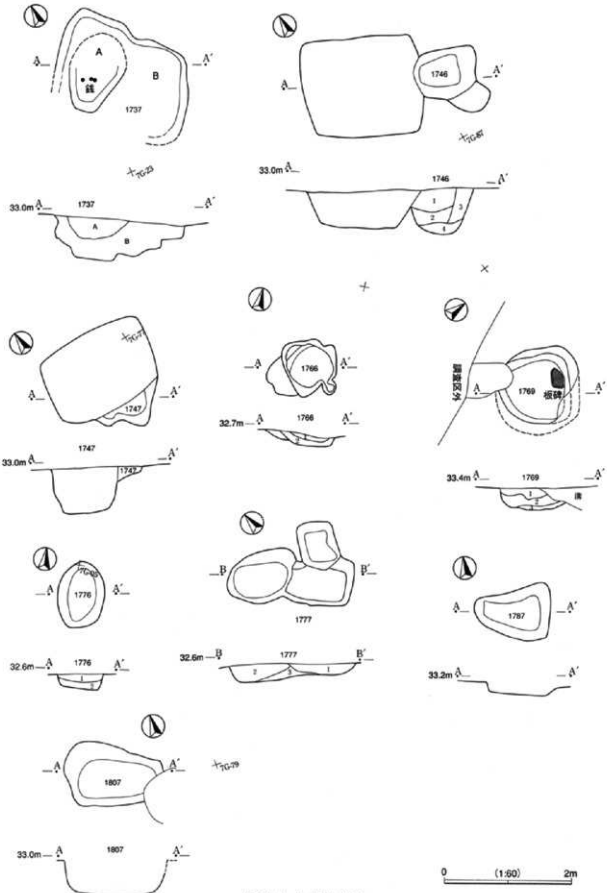
計9基検出されている。遺跡全体の中での分布状況をみると（第73図），大きくは遺跡北端部に位置する区画6内で近接して4基が検出されている。遺跡の南半部では5基が分散した状況で検出されている。居住域である屋敷地からは離れた場所に埋葬されていることが窺える。026号址からは二頭検出されているが，その内の一頭は体高120cm～125cmとかなり小型の馬である。馬令は15才前後と考えられる。



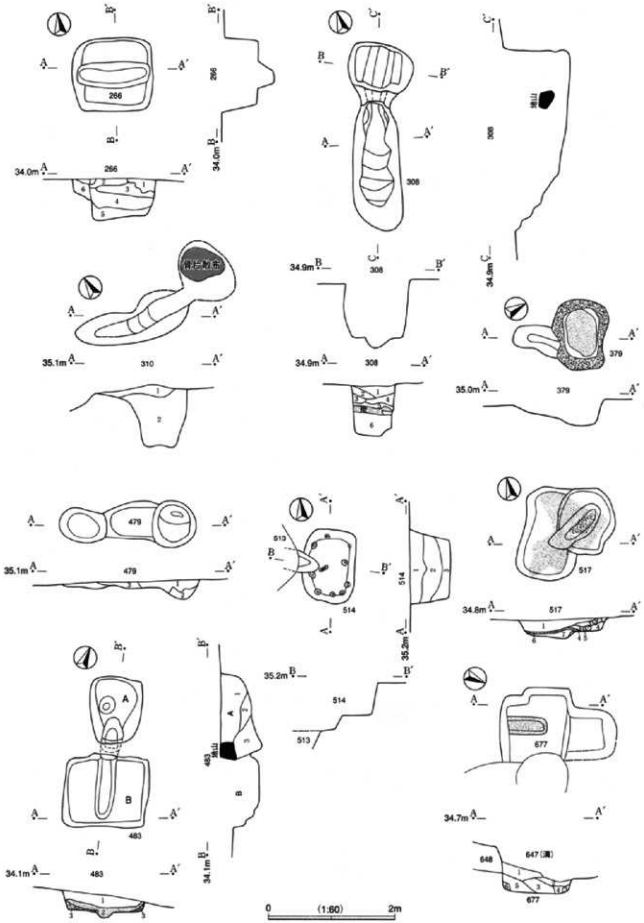
第73図　土坑墓・火葬施設・馬埋葬土坑分布図


257
258
481
554
825B
825A
824
872
854B
854A
854-A-B
1733
1732
P1
1731
1731A
1731B
1731C
1731D,D'
1731E
0
(1:60)
2m

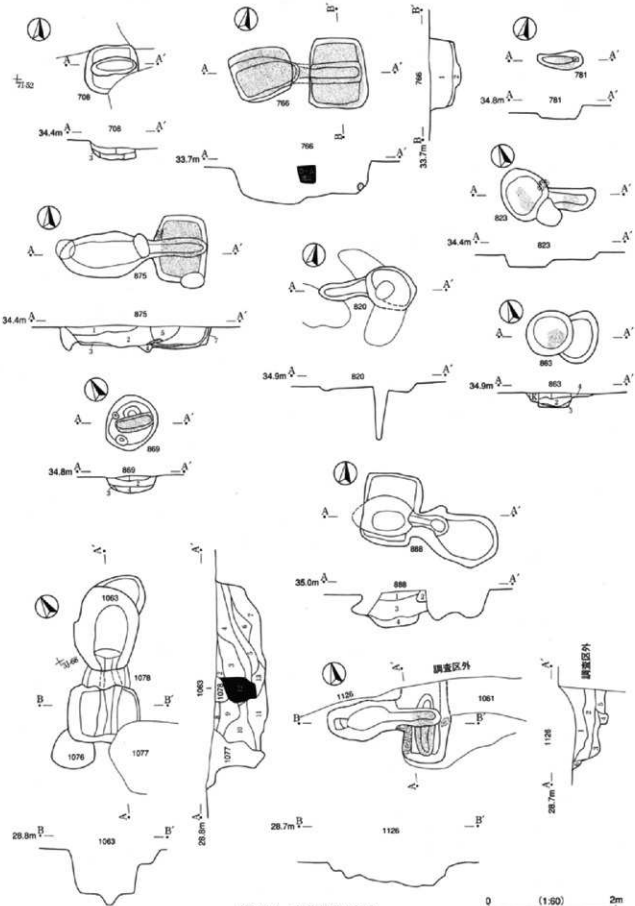
第74図　土坑墓（1）


A
B
1737
A
A'
33.0m
1737
A
B
1746
1
2
3
4
1747
1747
1747
1766
1766
32.7m
1769
板碑
33.4m
1769
1776
1776
32.6m
B
B'
1777
1777
32.6m
1787
33.2m
1807
1807
33.0m
0
(1:60)
2m

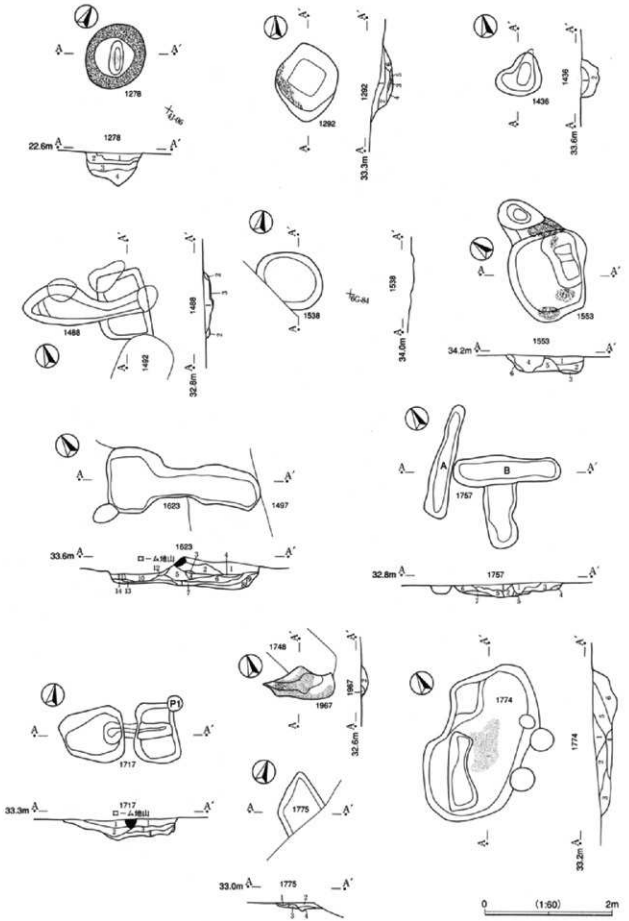
第75図　土坑墓（2）


266
34.0m
310
35.1m
308
34.9m
379
35.0m
479
35.1m
513
514
35.2m
517
34.8m
677
34.7m
483
34.1m
647
648
0
(1:60)
2m

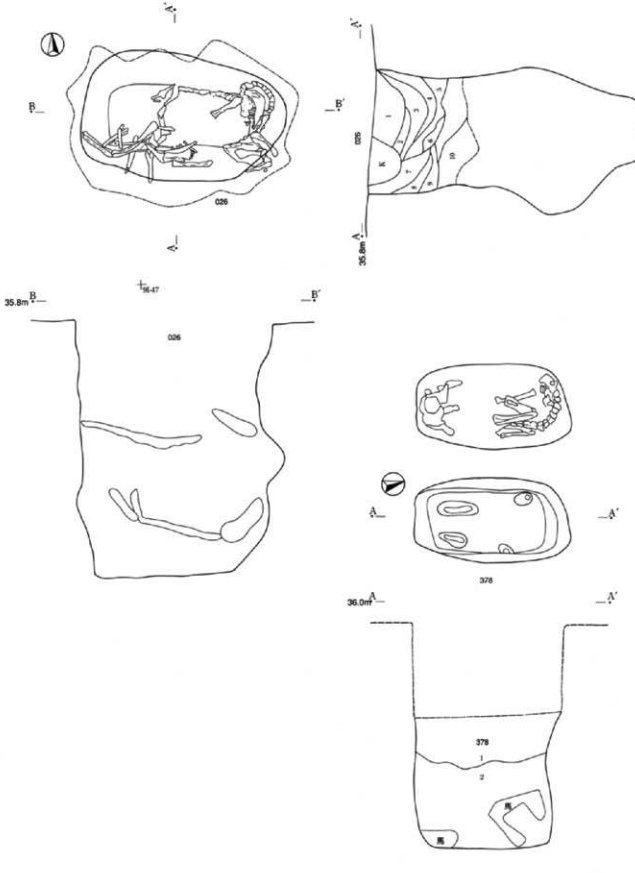
第76図　火葬施設（1）


708
706
766
781
823
875
820
869
888
1063
1078
1076
1077
1061
1126
調査区外
0
(1:60)
2m

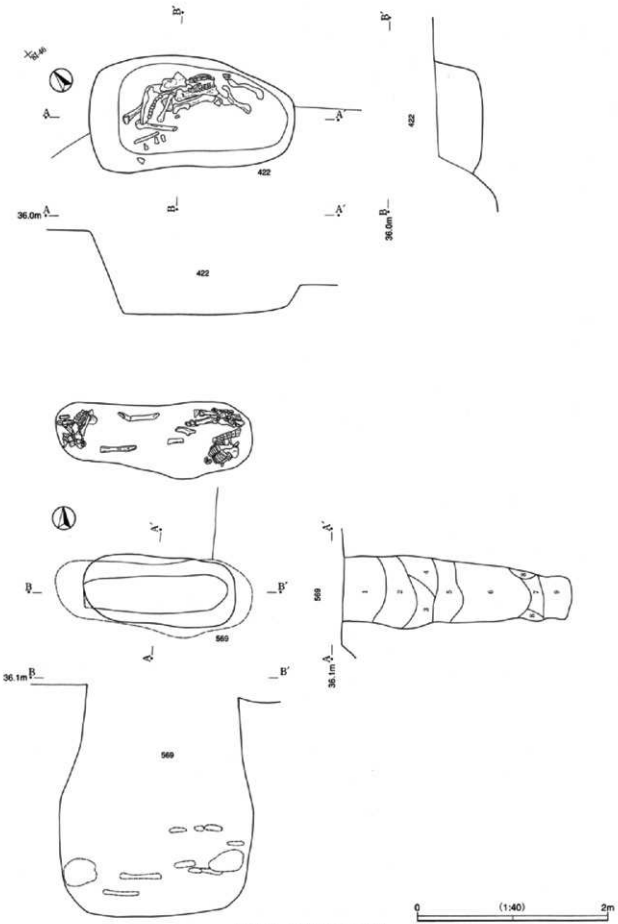
第77図　火葬施設（2）


1278
22.6m
1292
33.3m
1436
33.6m
1488
32.8m
1538
1539
34.0m
1553
34.2m
1623
33.6m
A
B
1757
32.8m
1748
1967
32.6m
P1
1717
33.3m
1775
33.0m
1774
33.2m
0
(1:50)
2m

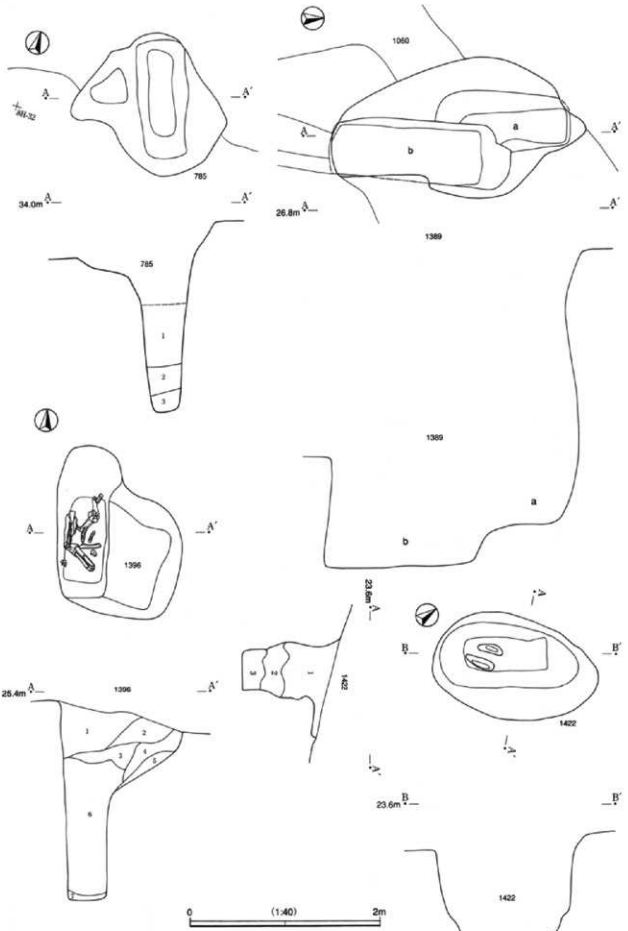
第78図　火葬施設（3）



第79図　馬埋葬土坑（1）



第80図　馬埋葬土坑（２）


AH-32
785
34.0m
1060
a
b
26.8m
1389
1
2
3
1396
25.4m
4
5
6
1422
23.6m
0
(1:40)
2m

第81図　馬埋葬土坑（3）

(10) その他の遺構（第82～85図，第1表（5），図版19・20）

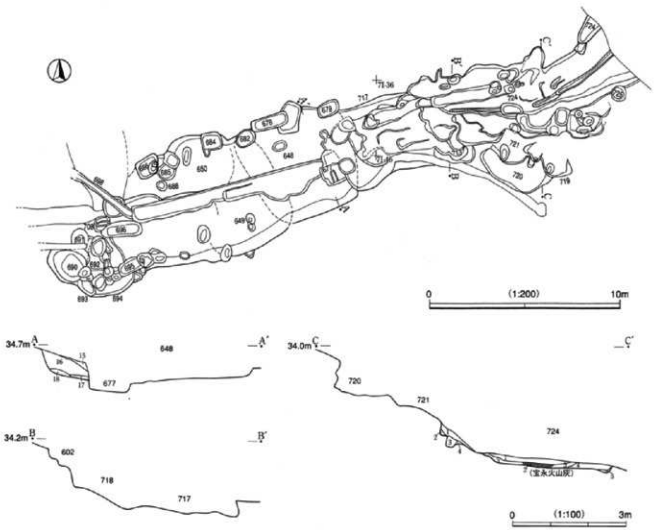
道路遺構　7I－35・36グリッドに位置し，東西方向に30m程検出された道路跡である。遺跡の南東部から北西方向に向かって緩やかに傾斜する地形上に支谷に開口する形で通っている。このため支谷に向かうに従い道路の南側が高くなる。道路法面や道路際には多くの土坑等の遺構が掘り込まれているため，本来の道路幅および路面幅は不明確な部分が多い。最も良好な部分でみると（第82図，C－C′断面），路面幅は3m程の規模である。調査開始時まで農作業用道路として利用されていたが，路面直上で富士山宝永火山灰が認められたことから，遅くとも近世前半には使用されていたことは確実である。この道路遺構を遺跡全体の中で位置付けてみると，この部分は遺跡の中央部を横断する東西道路の東半部にあたる。さらに遺跡の北西から南東部にかけて縦断する南北道路が東西道路と交差する地点が本道路遺構の西端にあたる。南北および東西道路は最近まで農道として利用されていたことと，掘割状の構造をとっていないこともあり成立時期は道路遺構そのものからは不明である。しかしながら，区画2，3，4の屋敷地が二本の道路に規制されて展開していることを考えるならば，南北，東西の二本の道路は区画4の成立時期である14c後半には既に村落内の幹線道路として機能していたと思われる。

製鉄関連遺構　878A号址は長軸3.5m，短軸0.9mを測り，878C号址は長軸2.8m，短軸1.5mを測る。二つの遺構は共に壁面はよく焼けて赤色化している。また両遺構とも内部から鉄滓が多く出土している。878A号址の覆土は1層は黒褐色土，2層は白色粘土粒を多く含む淡褐色粘質土，3層は白色粘土粒を少量含む暗褐色土。878C号址の覆土は1層がローム粒，粘土粒を多く含む暗褐色土，2層はローム粒を少量含む暗褐色土，3層はローム粒，焼土粒を少量含む明褐色土である。出土遺物は土器鍋・擂鉢である。

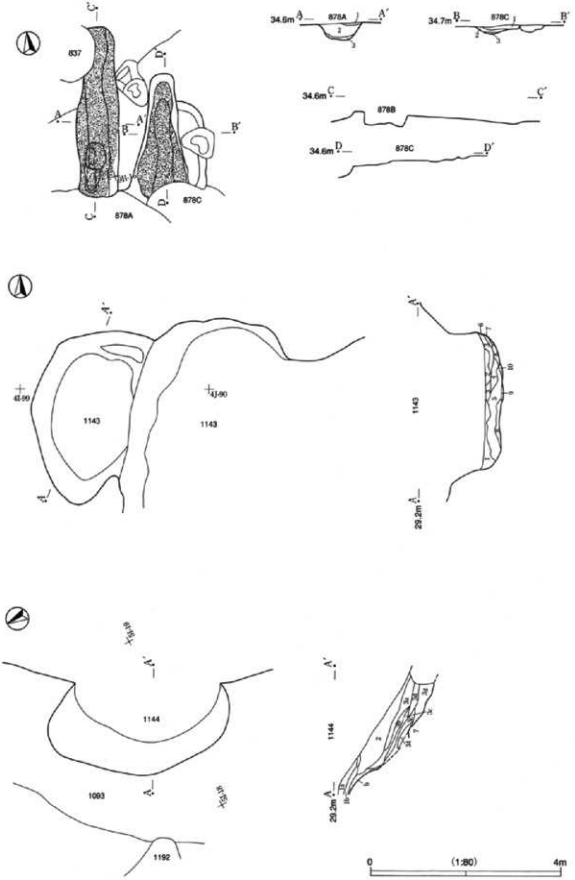
やぐら状遺構　やぐら状と名称が付されているが，中世の葬送施設のひとつである「やぐら」とは異なる遺構である。計4基検出されているが，いずれも区画1の東側の支谷に向かって傾斜を始める地形変換点に横穴状に掘られた遺構である。機能は不明であるが，少量出土した遺物からみて中世後半代以降の所産とみられる。

大型不整形竪穴遺構　5H－16～19グリッドを中心とする地点に位置する。区画1の西コーナー近くの外側にあたる。浅い皿状の断面形態を取り，長軸11m，短軸8.7mと大規模な割りには最も深いところで84cmしかない。覆土の特色として部分的に灰白色粘土によって埋め戻されていることがあげられる。出土遺物は比較的豊富で，瀬戸美濃窯製品では古瀬戸後期Ⅲ段階の灰釉折縁深皿，古瀬戸後期Ⅳ古段階の灰釉平碗，大窯4段階の志野菊皿，登窯1～2段階の鉄釉筒形碗，16c末葉～17c初頭の備前窯擂鉢，常滑窯甕，渥美窯甕，土器擂鉢，土器鍋，火鉢，カワラケ，と中世の様々な時期の陶器，土器が出土している。これらの遺物の内，大窯期から登窯期の瀬戸美濃窯製品や備前窯産の擂鉢は区画1の屋敷で使用されたものであろう。

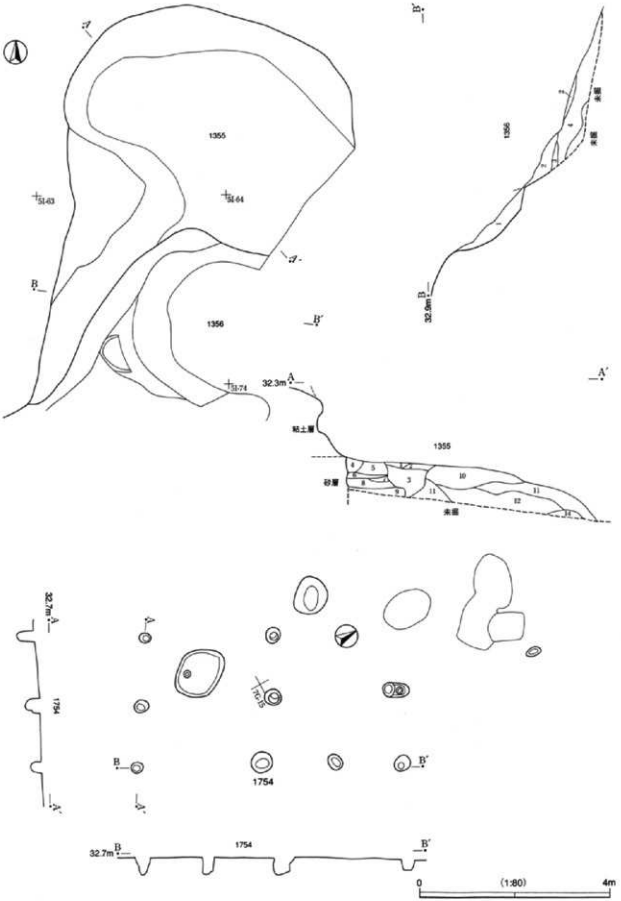
建物跡　区画遺構外で唯一復元された掘立柱建物跡である。6G－95から7G－04グリッドにかけて検出されている。北西部の二ヵ所の柱穴が不明であるが2間×3間の小規模な建物であったと思われる。柱穴内から古瀬戸後期段階の盤類の小片が出土している。



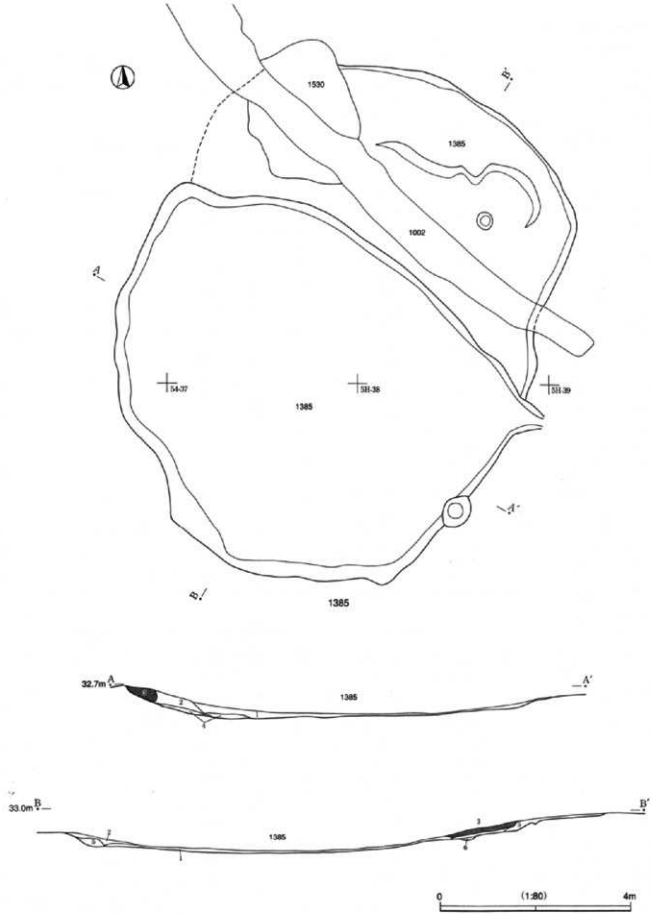
第82図　その他（1）：道路遺構（724号址）



第83図　その他（2）：製鉄関連遺構・やぐら状遺構



第84図　その他（3）：やぐら状遺構・建物跡



第85図　その他（4）：大型不整形竪穴遺構

第1表 遺構一覧表(1)

(2)地下式坑 (36基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
248	なし	中近世	7H-85.86.95.96	297	212	124	
348	なし	中近世	8I-55	360	290	240	
377	瀬美平碗・近世陶磁・鳥骨	中世後期以降	8I-33.34.43.44	310	280	140	
440A	瀬美平碗・近世陶磁	中世後期以降	8I-71	300	260	170	
472	常滑片口鉢	15c後半	8I-81	(230)	240	90	513(地下式坑)と遺物接合
473	なし	中近世	8I-91	210	(180)	200	
489	なし	中近世	7H-93	330	285	140	
513	瀬美水注・常滑片口鉢	15c後半	8I-50	312	252	192	472(地下式坑)と遺物接合
540	常滑壺	15c前半以降	8H-12	280	240	160	
544	瀬美緑釉小皿	15c中葉以降	8H-14.24	280	240	80	
562	カワラケ・土器鍋	中世後半以降	7I-51.61	300	300	110	
588	なし	中近世	7I-68.78	150	110	160	
588A	なし	中近世	7H-86.87.96.97	342	298	156	
618	なし	中近世	7H-53	310	250	100	
636	なし	中近世	8H-23	250	240	90	
646	土器鍋・近世磁器	中世後半以降	7I-51	220	220	110	
747	なし	中近世	7H-29.7I-20	270	270	6	
777	瀬美緑釉小皿・香炉	15c中葉以降	8H-37.38	280	(200)	184	342(大型竪穴) 819(粘土貼土坑)と遺物接合
818	瀬美擂鉢・カワラケ	15c後半以降	8H-92	(300)	280	110	
821	瀬美平碗・緑釉小皿	15c中葉	8H-56	370	260	180	
831	近世陶磁	近世	9H-69	160	106	110	
836	瀬美擂折皿・常滑片口鉢	15c後葉	8H-64	270	150	120	
839	瀬美平碗・火舎	15c中葉以降	8H-44.45.54.55	290	260	140	
857	なし	中近世	9H-54	250	不明	110	
858	なし	中近世	9H-48.49.58.59	290	106	110	
864	瀬美緑釉小皿・土器鍋	14c末以降	9H-55	274	262	150	
865	瀬美緑釉小皿・カワラケ	15c前葉	9H-57	380	314	192	
868	常滑片口鉢・土器鍋	15c後半	9I-13	230	196	110	
897	常滑片口鉢	13c後半以降	9H-47.48.57.58	340	(154)	50	
898	なし	中近世	9H-57	(309)	203	140	
1202	なし	中近世	3J-40.41.50.51	400	250	122	1203とトンネルで連結
1203	なし	中近世	3J-41.42	(300)	250	186	1202とトンネルで連結
1232	なし	中近世	3I-59.3J-40.50	(370)	136	(140)	
1235	土器鍋	中世後半	3I-58.68	236	160	180	
1282	土器擂鉢・鍋	中世後半	4H-57	380	306	220	1278(井戸)と遺物接合
1485	土器擂鉢	中世後半	4H-68.78	440	360	(240)	

(3)井戸 (78基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
300	常滑片口鉢	15c後半	8H-79.8I-70	308	260	210以上	
471	常滑片口鉢	14c後半以降	8H-80.90	520	456	220以上	
474A	瀬美瓶子・常滑片口鉢	15c末～16c初	8H-89.99.8I-80.90	300	280	100以上	298(大型竪穴) 803(大型竪穴)と遺物接合.474Bより古
474B	なし	15c末以前	8H-89.99.8I-80.90	180	140	80以上	474Aより新
529	土器鍋	中世後半	7H-81.91	240	220	170以上	
571	常滑壺	中世後半	7H-94	100	90	110以上	
585C	なし	中近世	7H-80.81	130	(100)	190以上	
595	瀬美平碗・常滑片口鉢	中世後半	7H-71.72.81.82	270	240	300以上	
620	瀬美擂鉢・常滑片口鉢	15c後半	7H-62.63.73	300	300	270以上	
670	なし	中近世	7H-61	100	100	230以上	
710	なし	中近世	7I-78	120	110	200以上	
767	瀬美平碗・常滑片口鉢	中世後半	7H-15.16.25.26	270	350	126以上	
814	常滑片口鉢・カワラケ	15c後半以降	9H-04.05.14.15	420	380	180以上	
816	瀬美瓶子	14c後半以降	9H-05	200	196	115以上	441(土坑)と遺物接合
837	瀬美小鉢・カワラケ	14c後半以降	9H-05	120	(120)	160以上	
850	瀬美花瓶・板碑	15c前半以降	9H-92	300	250	170以上	板碑　文和4年(1355)銘
859A	瀬美緑釉小皿・擂鉢	15c後葉	9H-15.16.25.26	480	430	196	298(大型竪穴) 803(大型竪穴) 878(土坑)と遺物接合. 859Cより新
859C	常滑片口鉢・カワラケ	15c後半	9H-25.26	360	(280)	110以上	859Aより古

第1表　遺構一覧表(2)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
882	なし	中近世	9H-15	260	(220)	190以上	859Aより古
886	常滑片口鉢	中世後半	9H-27	120	120	160以上	
1227	瀬美小鉢・近世陶器	中世後半～近世	4I-74.84～86.95.96.5I-08	630	580	170以上	入口施設伴う
1253	カワラケ・土器鍋	中世後半	4I-86.96	120	100	80以上	
1276	カワラケ・土器鍋	中世後半	6I-55.56	120	110	250以上	1282(地下式坑)と遺物接合
1467	青磁碗・カワラケ・土器擂鉢	15c	5H-88.98	210	160	150以上	
1482	志野丸碗・常滑片口鉢	15c後半～17c初	5H-87	310	260	150以上	
1483	なし	中近世	6H-31	200	200	170以上	
1484	なし	中近世	5H-65.66	360	240	230以上	
1507	瀬美壺・常滑壺	中世	5H-71.72.81.82	400	380	190以上	
1512	瀬美筒形碗・土器鍋	近世初	6H-29	300	270	220以上	
1537	常滑壺・近世陶磁	中世以降	6G-77.78	270	250	160以上	
1539	なし	中近世	6G-77	90	80	100以上	
1550	志野鉄絵丸皿	17c前葉	6H-99.6I-90	280	240	170以上	
1551	なし	中近世	6H-99.6I-90	220	210	90以上	
1560	常滑壺・片口鉢	14c前半以降	6H-62.63.72.73	370	320	180以上	
1578	なし	中近世	5H-91.92.6H-01.02	190	160	170以上	
1579	なし	中近世	5H-92.6H-02	200	170	140以上	
1580A	常滑壺・片口鉢	中世後半	6G-66～68.76～78	470	320	150以上	
1580B	なし	中近世	6G-66～68.76～78	260	240	190以上	
1581	なし	中近世	6G-67.68	(260)	170	100以上	
1588	常滑壺・土器片口鉢	中世後半	6G-17.27	310	270	130以上	
1596	常滑壺	14c以降	6H-89.99	260	230	170以上	
1603	瀬美天目茶碗・常滑壺	16c後葉以降	5H-46.47.56.57	310	310	120以上	
1604	貴瀬戸鉢	中世後半～17c前半	6I-71.72.81.82	230	210	150以上	
1606B	瀬美筋干・常滑片口鉢	15c後半	6G-98.99	340	220	200以上	
1609	常滑壺・片口鉢	中世後半	6H-12.13.22.23	220	190	130以上	
1611	瀬美筋干	14c後半以降	6H-61.71	(320)	(310)	130	
1629	なし	中近世	6H-86.87	150	120	170以上	
1645	常滑片口鉢	15c後半以降	6G-48.49	340	(340)	120以上	
1646	なし	中近世	6H-29.39	190	180	150以上	
1652	常滑壺	15c後半以降	6H-74	230	220	100以上	
1669	瀬美平碗・常滑片口鉢	15c前半	7H-12.13.22～25	360	340	160以上	
1678	瀬美平碗	15c前葉	6H-30.31	320	260	130以上	
1679	土器擂鉢	中世後半	6H-02	120	120	80以上	
1681	なし	中近世	6H-27.37	160	150	90以上	
1685	瀬美卸目付大皿	15c前半以降	5H-94.6H-04	400	360	100以上	
1686	常滑片口鉢	15c後半	5H-94	230	210	110以上	
1688	初山擂鉢	16c後葉	6H-04～06.14.15	300	280	150以上	
1693	常滑壺・土器鍋	中世後半	5H-93	160	140	90以上	
1696	常滑片口鉢	中世	5H-81	250	220	120以上	
1705	瀬美擂鉢・志野丸皿	15c後葉～17c前半	6H-97.98.7H-07.08	210	200	130以上	
1706A	常滑壺,カワラケ	中世後半	7G-89.99.6H-99.7H-09	130	(100)	125以上	
1706B	常滑壺,カワラケ	中世後半	7G-89.99.6H-99.7H-09	170	150	140以上	
1707	常滑片口鉢・壺	中世	6H-98.99	(290)	(240)	160以上	
1710	なし	中近世	6H-14	190	160	120以上	
1713	志野皿・碗	17c前葉	6H-87	160	130	180以上	
1714	なし	中近世	6H-57	90	90	110以上	
1722	瀬美腰折皿・常滑片口鉢	15c後葉	6H-70.71	360	320	130以上	
1723	常滑壺	中世	6H-88.98	290	240	120	
1724	なし	中近世	6H-88.98	150	130	130以上	
1734	染付便利	19c	6G-96.97	320	210	170	
1742	瀬美壺類・擂鉢・カワラケ	15c後半	6G-99.7G-09	410	340	230	1495(溝)　1605(溝)　1751(溝)と遺物接合
1798B	瀬美緑釉小皿・常滑片口鉢	15c後半	7G-89.79	260	230	240以上	
1799	常滑壺・カワラケ	中世後半	6G-98.99	200	190	170以上	
1806	瀬美平碗	14c後半以降	7G-98.99.8G-08.09	310	280	220以上	
1809	常滑壺・壺・カワラケ	中世後半	7G-78.88	(340)	290	200以上	
1811	常滑片口鉢・土器鍋	15c後半	7G-79.89	(290)	220	230以上	
1812	常滑片口鉢・カワラケ	中世後半	7G-88.89.98.99	340	310	200以上	

第1表 遺構一覧表(3)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
1815	常滑片口鉢	中世	7H-51.61	380	340	240以上	

(4)粘土貼土坑 (32基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
439	なし	中近世	8I-71	(160)	(110)	8	
504	なし	中近世	8I-60	192	146	40	
596	カワラケ・近世陶器	中近世	7H-81	295	260	74	
707	土器鍋鉢・近世陶器	中近世	7I-42	(330)	150	55	
819	瀬美香炉・平碗	15c前葉	8H-92.93	240	210	60	777(地下式坑)と遺物接合
832	カワラケ	中世	8H-64.65	190	180	28	
833	カワラケ	中世	8H-73.83	220	206	90	
838	なし	中近世	8H-95.96.9H-05.06	150	(130)	50	
867	近世陶器	中近世	9I-22.32	160	124	40	
888A	常滑壺・片口鉢	中近世	9H-14.15.24.25	(320)	210	30	
893	なし	中近世	9H-17	154	130	32	
894	なし	中近世	9H-25.26	215	180	92	
1420	なし	中近世	4J-27	112	104	70	
1583D	カワラケ・近世陶磁	中近世	6G-68	223	173	48	
1632	瀬美平碗・壺類	15c中葉	6H-27.28.37.38	455	380	65	
1639	瀬美壺	14c後半以降	6G-69.6H-60	(320)	(200)	40	
1651	瀬美平碗	15c中葉	6H-74	90	88	67	1652(井戸)より新
1654	常滑壺・土器鍋	中世後半	7H-02	167	160	70	
1666	なし	中近世	7H-03.04	150	135	38	
1677	瀬美折縁深皿	15c中葉	5H-72.73.82.83	250	200	50	
1687	土器鍋	中世後半	5H-94	200	(180)	32	
1694	なし	中近世	5H-92.93	200	135	40	
1695	近世陶磁	中近世	6H-56	335	225	33	
1697	常滑片口鉢	15c前葉	5H-81.91	330	255	27	
1698	なし	中近世	6H-03.04.13.14	245	215	60	
1701	瀬美鉢縁皿・志野丸皿	17c前葉	6H-87.88.97.98	437	300	25	1708(溝)より古.1723(井戸)より新
1702	瀬美天目茶碗・土器鍋	中世後半	6H-77	165	155	58	
1718	常滑壺	15c前半以降	6H-88	250	153	18	1708(溝)より新
1720	なし	中近世	6H-53.54.64	273	260	50	
1726	なし	中近世	6H-71	178	108	14	
1745	なし	15c前葉以降	7G-76.77	186	154	58	
1786	なし	中世	8G-08.09.18.19	290以上	240以上	50	1784(溝)より古

(5)大型竪穴 (16基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
298	志戸呂天目茶碗・瀬美縁釉小皿	15c中葉	8H-69.79.88.8I-60.70	910	(850)	55	
342	瀬美香炉・近世陶磁	15c前葉以降	8I-43.44.53.54	600	460	85	
343	瀬美平碗・東海系羽釜	15c以降	8I-45.46.54～56.64～66	1015	685	90	
481A	瀬美縁釉小皿・常滑片口鉢	15c後半	7H-95.8H-05	1000	940	50	481B(大型竪穴)より古
481B	瀬美瓶子・擂鉢	15c	8H-05.06	840	800	40	481A(大型竪穴)より新
528A	瀬美天目茶碗・折縁深皿	15c後葉以降	8H-13.23	630	430	66	528Bより新
528B		15c後葉以降	8H-13	(440)	430	105	
700	近世陶磁	18c～19c	7I-20.21.30.31	895	468	38	
782	瀬美平碗・近世陶磁	15c前葉以降	8H-33.42.43.52.53	730	370	34	掘立建物あり
803	瀬美縁釉小皿・擂鉢	15c後葉～16c前葉	8H-86～88.96～98.9H-06	790	790	60	
859B	瀬美縁釉小皿・擂鉢	15c後葉	9H-25.26	780	(480)	30	
881	なし	中近世	9H-36～38.47.48	620	450	70	
1208	瀬美天目茶碗・信利	16c後葉	4H-96.97.5I-06.07	(900)	690	80	
1228	瀬美折縁皿・丸皿	16c後葉～17c前葉	5I-05.06.14～16.24～26	1110	630	90	
1735	常滑壺	中世	7G-54.55.64.65	470	(390)	40	
1736	瀬美天目茶碗・平碗	15c後半	7G-55.56.75.76	(500)	430	64	

第1表 遺構一覧表(4)

(6)方形竪穴 (13基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
221	近世陶磁	中近世	7I-71.72.81.82	237	231	42	
244	瀬戸後釉小皿・土器鍋	15c前葉	7H-87.88	240	208	84	
433	なし	中近世	7I-93.88-03.04	440	327	16	
530	瀬戸後釉小皿・志野丸碗	15c前葉or17c前葉	7H-91	264	216	34	
582	なし	中近世	7G-99.7H-90	260	240	34	
619	瀬戸瓶子・近世磁器	14c以降	8H-10	300	170	56	
634	なし	中近世	7H-35.36.45.46	234	230	46	
718	なし	中近世	7I-35.36.45.46	(400)	(280)	90	
758A	なし	中近世	7I-03.13	330	160	30	
772	常滑壺	中世	8H-60.61.70.71	200	180	72	
1128	常滑壺・片口鉢	中世	3J-66.95.96	(520)	410	20	
1541	肥前碗	17c前半	7I-11.12	303	(180)	32	
1542	なし	中近世	7I-02.03.12.13	300	(220)	24	

(7)土坑墓 (25基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
257	なし	中近世	7H-83	157	110	78	
258	なし	中近世	7H-85	173	120	80	
481B	なし	中近世	8H-06.07	(130)	83	155	
554	なし	中近世	7H-38.39	115	90	38	
824	人骨	中近世	8H-62	114	90	70	
854A	人骨	中近世	9H-55.65	220	160	140	
872	なし	中近世	9H-46	130	(125)	76	
1731A	なし	中世後半	6G-83.84.93	104	92	49	
1731B	銭貨(11枚)	中世後半	6G-83.84.93	104	78	32	皇宋1.熙寧1.紹聖1.永楽8
1731C	なし	中世後半	6G-83.84.93	(80)	70	27	
1731D	銭貨(15枚)	中世後半	6G-83.84.93	75	34	24	開元1.天聖1.嘉祐1.熙寧1.元豊2.元祐1.元符1.聖宋1.永楽6
1731E	なし	中世後半	6G-83.84.93	120	115	48	
1731F	なし	中世後半	6G-83.84.93	130	100	55	
1731G	なし	中世後半	6G-83.84.93	155	96	43	
1732	銭貨(5枚)	中世後半	7G-02	104	102	12	元豊2.大観1.淳熙1.永楽1
1733	銭貨(1枚)	中世後半	7G-02.12	105	100	14	天聖
1737	銭貨(6枚)	中世後半	7G-12.13	(130)	100	34	開元3.元豊2.紹聖1
1746	瀬戸平碗・銭貨(3枚)	14c後葉～15c前葉	7G-76.77	100	82	72	皇宋1.紹聖1.永楽1
1747A	常滑甕・銭貨(5枚)	中世後半	7G-66.67.76.77	120	110	20	淳化1.祥符1.熙寧2.永楽1
1766	銭貨(8枚)	中世後半	6G-84	94	90	18	永楽6
1769	板碑	中世	8G-08.18	(135)	(135)	34	
1776	銭貨(6枚)	中世後半	7G-04.05	108	74	27	開元1.皇宋1.熙寧1.元祐1.政和1.永楽1
1777	銭貨(5枚)	中世後半	6G-95	115	80	30	天聖1.皇宋1.聖宋1.永楽2
1787	瀬戸花瓶・銭貨(1枚)	14c後葉～15c前葉	7G-39	120	98	34	永楽
1807	銭貨(2枚)	中世後半	7G-68	154	103	61	開元1.洪武1

(8)火葬施設 (34基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
266	瀬戸平碗・銭貨(1枚)	15c中葉以降	7H-92	130	115	80	永楽
308	なし	中近世	8I-70	293	103	105	
310	なし	中近世	8I-80	270	103	90	
379	なし	中近世	8I-46	147	110	40	
479	瀬戸擂鉢	15c中葉以降	8H-59	(150)	75	30	
483	なし	中近世	8H-04	240	80	46	
514	なし	中近世	8I-50.51	118	85	65	
517	近世陶磁	中近世	7H-89.7I-80	152	140	30	
677	なし	中近世	7I-45	(120)	110	70	
708	なし	中近世	7I-42	84	75	33	
766	なし	中近世	7H-16	212	112	62	
781	なし	中近世	8H-37	72	28	20	
815	なし	中近世	8H-83.84	235	105	38	

第1表 遺構一覧表(5)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規 模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
B20	なし	中近世	8H-84	155	(65)	18	
823	なし	中近世	8H-74	150	78	20	
863	なし	中近世	9H-24	74	72	20	
869	なし	中近世	9H-25	90	78	28	
888	なし	中近世	9H-27.28	217	115	58	
1063	なし	中近世	3J-58.67.68	250	110	84	1061(溝)より新
1126	なし	中近世	3J-45.46.55.56	198	(140)	40	
1278	なし	中近世	3J-95.4J-05	108	95	50	
1292	近世香炉	近世	4I-83	124	98	34	
1436	なし	中近世	5H-89	80	70	28	
1488	近世陶器	近世	6G-74.84	215	110	12	
1538	銭貨(6枚)	中世後半	6G-73.83	110	(90)	8	景裕1絹聖2.洪武2.永楽1
1553	なし	中近世	4H-77	205	135	26	
1623	なし	中近世	5H-09.19	244	105	44	1497(溝)より新
1717	なし	中近世	6H-43	180	96	30	
1757A	カワラケ・銭貨(1枚)	中世後半	7G-06	180	35	12	永楽
1757B	なし	中世後半	7G-06	170	47	20	
1757C	なし	中世後半	7G-06	130	55	4	
1767	なし	中世	6G-85	110	50	10	
1774	土器鍋	中世後半	7G-56.57	130	75	20	
1779	近世陶磁	近世	7G-26	270	155	40	

(9)馬埋葬土坑 (9基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規 模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
026	土器鍋	中世後半以降	9I-36.37	235	163	282	
378	なし	中近世	8I-45.46.55.56	163	90	240	
422	なし	中近世	8I-46	218	118	88	
569	なし	中近世	8J-13	160	123	250	
785	瀬美擂鉢	中世後半以降	8H-22.32	164	(80)	200	
1389A	土器鍋	中世後半以降	4J-25	140	58	290	1389Bと新旧不明
1389B	なし	中世後半以降	4J-25	175	65	335	
1396	土器鍋	中世後半以降	4J-24.25.34.35	162	(85)	215	
1422	なし	中近世	4J-45	176	110	105	

(10)その他の遺構 (9基)

遺構番号	種　類	主な出土遺物	時　期	規 模(cm)			グリット	備　考
				長軸	短軸	深さ		
724	道路遺構	初山釉皿.志野丸皿	中近世	3000	800	50～300	7I-35.36	東西道路東半部
878A	製鉄関連遺構	土器擂鉢・鍋	中世後半	350	90	36	9H-05.06.15	
878C	製鉄関連遺構	なし	中世	280	150	20	9H-06.16	
1143	やぐら状遺構	なし	中世	540	370	133	4I-89.99.4J-80.90	
1144	やぐら状遺構	常滑壺.土器鍋	中世後半	380	240	(200)	5I-08.09.18	
1355	やぐら状遺構	土器鍋	中世後半	(600)	(450)	(170)	5I-53.54.63.64	
1356	やぐら状遺構	瀬美平碗・筒形碗	15c後葉～17c前葉	380	(330)	114	5I-63	
1385	大型不整形竪穴遺構	瀬美平碗.志野菊皿.備前擂鉢	15c前葉～17c前葉	1104	875	84	5H-16～19.26～29	
1754	建物跡	瀬美壺類	中世後半	564	280	-	6G-95.7G-04.05.14.15	3間×2間

(11)溝 (99条)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリット	備考
001	常滑片口鉢	中世以降	11I-17.27.37.38.48	
002	なし	中近世	11I-06.07.15.16.22.25.10I-88.97.98.99.10J-60.70	
003	青磁碗服・志野丸碗	中近世	9I-38～94.8J-53	
008	近世陶器	近世	9J-40.41	
013	瀬美天目茶碗・近世陶磁	中近世	9H-97.98.10I-00～06.16	
024	なし	中近世	6L-53.80.92.7L-03.04.6L-96	
038	瀬美緑釉小皿・平碗	中世後半	9I-13.23～25	068(地下式坑)より新
286	なし	中近世	7J-78.88.98.8J-08.17.27	
287	なし	中近世	7K-14.24.34	

第1表 遺構一覧表(6)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリット	備考
288	なし	中近世	7K-13.14	
299	瀬美卸皿・土器鍋	中世後半	7H-69.79.8H-60.70.80	
482	瀬美緑釉小皿・近世陶磁	15c中葉以降	8G-09.19.29.8H-05.10～13.20～24	484(溝)より古
484	青磁稜花皿・近世磁器	15c後半以降	8H-13.14.23.24	
541	瀬美瓶子・近世陶磁	15c前半以降	8G-29.8H-20～22.30.31	
551	瀬美緑釉小皿・近世陶磁	16c前半以降	7H-21.31～35.45～49.7I-50～52	
586	なし	中世	7I-67～69.77～79.7J-70	588(地下式坑)より古
601	近世陶器	近世	7I-56.57	
602	近世陶器	近世	7I-46～48	
647	瀬美擂鉢・輪禿皿	16c後葉以降	7I-34.35.42～45.52～54	
698	なし	中近世	7I-30.31.41.42	
703	土器鍋	中世後半	7I-11.21.31.41	707(粘土貼土坑)より新
753	白磁皿・近世磁器	中近世	6I-85.95.7I-05.15.25.35	
764	土器鍋	中世後半	7H-16.26	
786	志戸呂天目茶碗・近世陶磁	15c中葉以降	8H-52.62.72	
799	祖母懐茶壺・常滑片口鉢	15c後半	9H-02.12	808(溝)より新
808	土器鍋	中世後半	9H-02.03	818(地下式坑)より古
817	瀬美平碗・常滑片口鉢	15c中葉	9H-05.06	
885	土器鍋	中世後半	9I-10.20.30	
899	常滑片口鉢・近世陶器	中近世	9I-01.02.11.12	
1011	瀬美水注	13c後半以降	4I-15.16.25～27.37.38.49.4J-40.50.51	
1016	なし	中近世	4I-38.39.4J-30.40.41.51	
1061	カワラケ	中世後半	3J-56～59.3K-60.70.71	1063(火葬施設)より古
1093	瀬美卸皿・近世香炉	中世後半以降	5I-07.17.18.27	1192(溝)より新
1127	常滑甕・カワラケ	中世後半	3J-40～45.3J-60～3K-61	
1132	なし	中近世	5I-96.6I-06.07.17.28	
1146	常滑片口鉢・土器擂鉢	中世後半	6I-37～39	
1192	手づくねカワラケ・東海系羽釜	中世後半	4I-96.5I-06～08	1208(大型竪穴)より古
1195	志野丸皿・土器香炉	17c前半	5J-00.5I-19.29.38.39.47.48.56.57.67	
1207	瀬美擂鉢・天目茶碗	16c後葉以降	6I-35～39.45～47.56.65	1146(溝)より古
1243	なし	中近世	4H-66.76.77.87.88	
1251	土器擂鉢・鍋	中世後半	4I-63.64.74.75.85～87.97	1002(区画1溝)より古.1227(井戸)より新
1263	瀬美はさみ皿・土器鍋	15c後半	5I-35.36.44.45.54	
1290	土器擂鉢	中世後半	4I-73.74.83.84	
1333	なし	中近世	3I-77.78.87	
1361	土器擂鉢・鍋	中世後半	6I-23.24	
1377	カワラケ	中世	5I-72.73	
1437	瀬美擂鉢	15c後半以降	4H-98.5H-03～08.13～17	1002(区画1溝)より古.1230(区画1土壇)より新
1479	初山天目茶碗・近世陶磁	16c後半以降	6I-01～03.11～13	
1495	中国天目茶碗・瀬美平碗	15c後半	6G-44.54～56.66	1534(溝)より新
1497	中国染付・皿	16c後葉～17c前葉	5H-09.19.29.5I-00.01	1363(火葬施設)より古
1498	なし	中近世	5I-00.01.10.11	
1499	なし	中近世	5I-01.02	
1503	なし	中近世	5I-43.44	
1505	瀬美天目茶碗	16c後葉以降	5H-38.39.5I-30.31.40～42	
1511	瀬美擂鉢	15c後半以降	5H-87.97.6H-06.07.16.17	
1514	なし	中近世	6H-17.18.28	
1529	常滑甕・土器鍋	14c後半	5H-29	
1531	常滑甕・土器鍋	中世後半	5H-03～05.13～17.24～26.35.36	1437(溝)より古
1534	瀬美緑釉小皿・常滑甕	15c中葉	6G-67～69.78.79.6H-50.60	1495(溝)より古.1640(溝)より新
1572	なし	中近世	5H-32.33	
1573	なし	中近世	5H-32.33.43～45.54.55	
1574	なし	中近世	5H-51	
1575	なし	中近世	5H-55.65	
1582	常滑甕・土器鍋	15c前半	6G-46.47.56～58.66.67	
1585A	瀬美壺類・近世陶磁	15c	6G-35.45～48.58.59	1585B(溝)より新
1585B	瀬美緑釉小皿	15c前葉	6G-35.45～48.58.59	1585A(溝)より古
1586	瀬美端反碗・近世陶磁	15c中葉以降	6G-35～38.45～47	
1589	なし	中近世	6H-10.11	1590(溝)より古
1590	なし	中近世	6G-16～19.5H-82.92.6H-02.10.11.20	1588(井戸)より新
1598	瀬美擂鉢	16c後葉	5H-35.36.45	1531(溝)より新

第1表 遺構一覧表(7)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリット	備考
1601	瀬美はさみ皿・腰折皿	15c後葉	5H-36.37.46.47.56.6	1607(溝)より古.1603(井戸).1647(方形土坑)より新
1605	瀬美経筒小皿	15c後半	6G-89.6H-70.80	1606(溝)より古
1606	瀬美瓶子・常滑片口鉢	15c後半以降	6H-70.80.80.6G-89.99	1605(溝).1722(井戸)より新
1607	土器鍋	中世後半	5H-13.23.24.34.45.55.66.76	1601(溝).1647(方形土坑)より新
1608	土器鍋・近世陶器	中近世	6H-68.6H-98.7H-08	
1612	土器鍋・カワラケ	中世後半	6H-60.61.70	1640(溝).1722(井戸)より新
1633	土器鍋・近世陶器	中世後半以降	6H-29.6I-31.41. 71.80	
1635	瀬美平碗・常滑片口鉢	15c前半	6G-58.59.6H-50	1612(溝)より古
1636	土器鍋・近世陶磁	中世後半以降	6H-15.16.22～26.31.32	1637(溝)より新
1637	常滑擂鉢	15c後半	6H-31.32.41.42.50.51	1636(溝)より古
1638	瀬美平碗・常滑片口鉢	15c後半以降	6G-38.39.49.6H-30.31	1585(溝)の続き
1640	瀬美皿類・土器鍋	15c前葉	6G-69.79.89.6H-60.70	1534(溝).1613(溝)より古
1667	瀬美擂鉢・土器鍋	中世後半	6H-72～77	
1682	瀬美擂鉢・近世磁器	16c後葉以降	6H-37.47.57	
1691	瀬美天目茶碗	14c後半以降	7H-31.41	
1703	瀬美平碗	14c後葉～15c前葉	6H-21.31.40	1678(井戸)より古
1708	なし	近世	6H-88.98	1701(粘土貼土坑).1705(井戸)より新
1725	なし	中近世	6H-87	1701(粘土貼土坑)より古
1744	常滑壷・志野丸皿・近世陶磁	13c後半～近世	7G-17.26.27.35～37.44～46	
1751	瀬美天目茶碗・盤類	15c中葉	6G-88.97.98	1742(井戸).1799(井戸)より古
1758	近世陶器	近世	7G-24	
1761	なし	中近世	7G-66.76	
1762	なし	中近世	7G-18.19.29.7H-20.21	
1772	瀬美瓶子・平碗	14c後葉～15c前葉	7G-27.37.46.56	
1781	常滑壷・近世陶磁	中近世	7G-37.47.57.67.77	
1782	なし	中近世	7G-46	
1784	常滑壷・片口鉢・土器鍋	中世後半	7G-99.8G-08.09.18.19	
1791	常滑壷・片口鉢	14c後半	7G-66～68.77.78	
1801	青磁碗・皿・瀬美平碗	15c中葉	7H-21.31.40.41.50.51.607G-79	

(12)方形土坑 (60基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
275	なし	中近世	7H-93	144	100	68	
317	なし	中近世	8H-33	230	130	58	
359	なし	中近世	8I-81	90	88	22	
531	なし	中近世	7H-78	80	60	84	
532	なし	中近世	7H-57.58.67.67	120	90	20	
542F	なし	中近世	8H-01.11	108	76	40	
542G	なし	中近世	8H-11	110	76	68	
542L	なし	中近世	8H-12.13	96	62	40	
543C	常滑壷	中世	8H-03.04	145	142	35	
555A	なし	中近世	7H-39	94	36	20	
555B	なし	中近世	7H-39	80	50	30	
575	なし	中近世	7H-54.64	180	122	20	
576	土器鍋・近世陶器	中世以降	7H-74	150	53	21	
580	なし	中近世	7I-72.82	110	78	20	
584	瀬美平碗	14c後葉～15c前葉	7H-52.62	140	100	42	
585A	瀬美折縁深皿	14c後葉～16c前葉	7H-80.81.90.91	(180)	120	30	
585B	瀬美瓶子	14c以降	7H-90	204	166	50	
597	なし	中近世	7H-62.63	176	126	60	
599	瀬美平碗	15c前葉	7H-90.8H-00	190	180	50	
607	なし	中近世	7I-76.86	122	52	15	
617	なし	中近世	7H-53	170	160	32	
635	なし	中近世	7H-36	126	100	26	
671	青磁鏡花皿	15c後葉以降	7H-73	175	175	60	620(井戸)より新
678A	近世磁器	近世	7I-34	200	70	20	
678B	なし	中近世	7I-34	170	(110)	20	
679	なし	中近世	7I-35	120	80	20	
686	なし	中近世	7I-52.53	120	100	44	
690	常滑片口鉢・土器擂鉢	中世後半	7I-51.52	220	210	60	

第1表 遺構一覧表(8)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
697	なし	中近世	7I-42	120	110	40	
705	なし	中近世	7I-41	94	85	20	
706	なし	中近世	7I-41	116	98	26	
713	なし	中近世	7I-32	130	90	20	
761	なし	中近世	7H-17.27	180	140	90	
763A	初山香炉・土器鍋	16c後葉	7I-04	102	92	36	
774	なし	中近世	8H-25	146	80	54	
781A	常滑片口鉢・近世陶磁	中近世	8H-48	228	127	48	
781B	瀬美平碗・緑釉小皿	15c中葉	8H-48	192	128	(56)	
781C	土器鍋・近世陶磁	中近世	8H-48	176	112	(28)	
792	カワラケ	中世以降	8H-48.58	(245)	95	(16)	
793	なし	中近世	8H-47.48	(212)	(120)	(6)	
796	なし	中近世	8H-47	117	70	(18)	
797	なし	中近世	8H-47	101	(90)	11	
798	なし	中近世	8H-46.47	164	121	(20)	
822	土器鍋 カワラケ	中世後半	8H-83.93	160	145	70	
883	なし	中近世	9H-28.38	150	115	53	
884	なし	中近世	9H-29.9I-20	200	200	80	
911	志野丸皿	17c前葉	10I-82	205	160	45	
1134	なし	中近世	3J-74	100	82	62	
1563	なし	中近世	5G-98.6G-08	212	210	40	
1576	なし	中近世	6G-7.8.17.18	198	174	36	
1587	近世陶磁	中近世	6G-26.27.36.37	462	414	72	
1647	なし	中近世	5H-55.56	202	192	60	
1650	なし	中近世	5H-66.67	178	128	40	
1653	瀬美緑釉深皿・常滑壺	14c中葉以降	6H-65	170	170	26	
1716	なし	中近世	6H-54.55	80	80	18	
1719	なし	中近世	7H-08	210	106	15	
1793	常滑甕・カワラケ	中世後半	7G-58.59.68.69	320	174	40	
1794	カワラケ	中世後半	7G-68.69	260	220	106	
1798A	瀬美平碗・緑釉小皿	15c中葉	7G-69.79	203	(114)	103	
1813	常滑片口鉢	15c後葉	7H-40.50	310	160	38	

(13)中近世土坑 (235基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
012	なし	中近世	11I-10.11	146	116	32	
014	なし	中近世	11I-47	124	100	126	
036	なし	中近世	9I-13.14	(158)	(90)	90	
070	常滑片口鉢	14c前半以降	8J-52.53.63	236	186	216	
245	和同開珎	不明	7H-96.97	133	103	32	
256	近世陶磁	近世	7H-73.74.83.84	374	320	60	
272	なし	中近世	8I-06	136	120	32	
369	なし	中近世	8I-72.73.82.83	150	165	32	
370	近世陶器	18c	8I-82.83	134	76	60	
406	瀬美擂鉢	15c後葉	8I-44	130	110	66	
425	なし	中近世	8I-62.63	(80)	104	52	
426	なし	中近世	8I-62	100	(90)	66	
427	なし	中近世	8I-62	114	(70)	50	
438	なし	中近世	8I-71	(100)	100	27	
441	瀬美瓶子	14c後半以降	8H-98	280	210	10	
480B	なし	中近世	8H-59.69.8I-50	220	110	36	
501	瀬美平碗	14c末以降	8H-89～99	200	(70)	68	
505A	近世陶器	近世	8H-49.59.8I-50	190	160	61	
505B	近世陶器	近世	8H-49.59.8I-50	210	120	87	
534	なし	中近世	7I-60.61	110	70	40	
535	なし	中近世	7I-70.71	(90)	80	40	
538	なし	中近世	7I-71	(90)	70	34	
545A	なし	中近世	7G-99.8G-9.18	(85)	36	70	
545B	近世陶器	中近世	7G-99.8G-9.18.8H-00	58	58	70	
545D	なし	中近世	7G-99.8G-19.28	76	54	25	

第1表 遺構一覧表(9)

遺構番号	主な出土遺物	時期	グリッド	規模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
547	なし	中近世	9I-03	90	70	25	
572	常滑片口鉢	15c後半	8I-71.72	120	110	70	
573	なし	中近世	8I-72	90	82	22	
605	なし	中近世	7I-77.87	143	98	28	
638	なし	中近世	8H-24	188	120	不明	
643	土器鍋	中世後半	7I-50	180	70	60	
645	なし	中近世	7I-40.41	200	(130)	8	
682	なし	中近世	7I-34	100	80	10	
683	なし	中近世	7I-54	90	50	97	
684	なし	中近世	7I-33	110	88	54	
685	なし	中近世	7I-43	160	180	13	
687	なし	中近世	7I-33.34	95	40	31	
688	なし	中近世	7I-43	40	40	26	
689	なし	中近世	7I-53	160	98	23	
691	なし	中近世	7I-52	(120)	90	41	
692	常滑甕・土器鍋	中世後半	7I-52	(200)	120	31	
693	なし	中近世	7I-52	110	(80)	29	
695	なし	中近世	7I-52	(130)	80	55	
696	近世磁器	近世	7I-52	218	80	35	
699	近世陶器	近世	7I-31	160	50	65	
701	近世陶器	近世	7I-31.41	(280)	240	28	
702	なし	中近世	7I-31	(150)	54	30	
709	なし	中近世	7I-30	220	60	50	
711	近世陶磁	近世	7I-32	220	140	120	
712	なし	中近世	7I-22	130	100	10	
719	なし	中近世	7I-47.48	(200)	(160)	40	
720	土器擂鉢・鍋	中世後半	7I-47.48	380	(260)	40	
721	瀬美反り皿	17c前半	7I-47	(400)	(240)	8	
739A	なし	中近世	7I-24.34	170	70	44	
742A	カワラケ	17c前半	7I-24	(210)	100	23	
742B	なし	中近世	7I-24	(210)	100	8	
743	なし	中近世	7I-24	(170)	150	20	
744A	なし	中近世	7I-14.24	220	180	30	
746	なし	中近世	7I-14	230	110	60	
748	なし	中近世	7H-29.7I-20	120	92	14	
749	なし	中近世	7H-29.7I-20	220	110	8	
750	なし	中近世	7I-26	(140)	90	50	
751	なし	中近世	7I-26	(140)	80	20	
752	なし	中近世	7I-26	(210)	80	46	
754	なし	中近世	7I-05.15	130	110	32	
762	瀬美平碗	14～15c	7H-17	180	76	30	
775	なし	中近世	8H-27.37	144	116	16	
776	なし	中近世	8H-37.38	(130)	94	22	
787	土器鍋・カワラケ	中世後半	8H-53	170	80	60	
788A	瀬美平碗・土器鍋	15c中葉	8H-53.63	126	120	90	
788B	なし	中近世	8H-53.63	150	120	90	
789	瀬美平碗・志戸呂天目茶碗	15c中葉	8H-62.63	166	120	40	
790	常滑片口鉢	15c後半	8H-72	160	110	20	
804	なし	中近世	8H-46.56	260	190	20	
813	土器鍋	中世後半	9H-03.13	270	200	48	
825A	土器鍋	中世後半	8H-52.62	160	(110)	43	
825B	なし	中近世	8H-52.62	180	120	7	
855A	なし	中近世	9H-55.56.65.66	480	380	20	3基の小穴から構成
855B	なし	中近世	9H-55.56.65.66	230	140	20	
870	土器鍋	中世後半	9H-79	170	74	12	
871	なし	中近世	8H-25	160	120	4	
878B	土器擂鉢・鍋	中世後半	9H-05.15	108	42	60	859A(井戸)と遺物接合
879A	カワラケ	中世	9H-36	140	(80)	57	
879B	なし	中近世	9H-36	140	114	78	
887	土器鍋	中世後半	8H-16	200	140	130	
889B	中国天目茶碗・常滑甕	14c後半	9H-14.15.24.25	176	90	26	
902	なし	中近世	10I-97	160	(140)	21	

第1表　遺構一覧表(10)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
1010	なし	中近世	4I-66	162	118	23	
1015	なし	中近世	4J-21	160	79	40	
1029	なし	中近世	4H-38	100	54	48	
1057	なし	中近世	4I-42	175	138	44	
1062	なし	中近世	3J-60	299	124	50	
1065	なし	中近世	3J-89.3K-60	98	56	42	
1076	なし	中近世	3J-67	70	60	不明	
1078	なし	中近世	3J-68	(100)	74	80	
1135	なし	中近世	3J-54.55	190	130	95	
1139	なし	中近世	3J-85.86	(270)	60	32	
1145	なし	中近世	4J-91.5J-01	210	140	60	
1206	なし	中近世	3I-83	132	120	130	
1249	なし	中近世	4H-66.76	180	135	40	
1255	カワラケ	中世	3J-82.92	160	156	36	
1279	なし	中近世	3J-99.4J-9	284	144	218	
1284	なし	中近世	4J-07	110	108	38	
1287	カワラケ	中世	4I-63.64.73.74	560	376	20	
1288	なし	中近世	4I-62.63	110	78	58	
1289	なし	中近世	4I-72.73	198	100	10	
1295	なし	中近世	4I-94	200	124	32	
1297	なし	中近世	4I-71.72	144	98	28	
1298	常滑要・カワラケ	中世	4I-61.71	400	118	35	
1299	なし	中近世	4I-60.70.71	338	274	92	
1300	なし	中近世	4I-70	124	116	38	
1301	なし	中近世	4H-79.89.4I-70.80	210	(178)	130	
1302	なし	中近世	4H-89	224	175	84	
1303	なし	中近世	4H-79.88.4I-70.80	(288)	95	15	
1304A	なし	中近世	4I-71～73.83	294	200	24	
1304B	土器擂鉢	中世後半	4I-71～73.83	250	218	34	
1305	土器鍋	中世後半	4I-70.71.80	424	90	36	
1306	常滑要	中世	4I-70.80	320	(238)	34	
1307A	なし	中近世	4H-89.4I-70.80	180	115	15	
1307B	なし	中近世	4H-89.4I-70.80	108	82	15	
1308	なし	中近世	4H-89.4I-80	(215)	96	8	
1309	土器鍋	中世後半	4H-89.99	(314)	286	86	
1332	なし	中近世	3I-78.88	164	100	50	
1338	なし	中近世	3J-90.91	120	106	20	
1339	土器擂鉢	中世後半	4I-82.83.92.93	192	130	16	
1340	なし	中近世	4I-83.93	216	145	15	
1342	土器鍋・カワラケ	中世後半	4I-92.5I-2.3	320	184	54	
1358	瀬美筒形碗・志戸呂筒形碗	17c前葉	5I-73.74	(240)	(180)	(80)	
1359	志野丸皿・反り皿	17c前葉	5I-83.84	500	120	52	
1374	なし	中近世	5I-13.14	158	72	20	
1376	瀬美擂鉢	16c後半	5I-62	188	126	58	
1378A	黄瀬戸大皿	16c末～17c初	5I-74.84.85	180	(100)	(80)	
1378B	黄瀬戸大皿	16c末～17c初	5I-74.84.85	(240)	200	(80)	
1392	なし	中近世	5I-50	344	300	17	
1394	なし	中近世	5I-61	283	115	12	
1397	なし	中近世	4J-35.45	(300)	(120)	50	
1421	なし	中近世	4J-445.46.55.56	292	234	26	
1423	なし	中近世	4J-44	158	50	45	
1469	初山天目茶碗	16c後葉	5I-70	130	100	48	
1485	土器鍋	中世後半	6I-20.30	220	200	64	
1490	近世陶器	近世	6G-65	94	92	18	
1492	なし	中近世	6G-84	138	86	26	
1493	なし	中近世	6G-73.74	112	84	38	
1494	なし	中近世	6G-63.64	106	46	35	
1496	なし	中近世	4H-99.4I-90.5H-9.5I-00	218	48	17	
1501A	土器擂鉢	中世後半	5H-19.5I-10	160	115	60	
1501B	カワラケ	中世後半	5H-19.5I-10	192	90	32	
1513	なし	中近世	6H-29	130	60	42	

第1表 遺構一覧表(11)

遺構番号	主な出土遺物	時期	グリッド	規模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
1528	近世磁器	中近世	8I-92.93.9I-2.3	440	270	32	
1530	なし	中近世	5H-17.18	304	222	28	
1536	瀬美平碗	15c前半	5G-98.99.5G-8	422	392	62	
1540	志野鉄絵皿	17c前葉	6H-59.69	245	230	22	
1543	近世陶磁器	近世	6H-39.49	250	190	52	
1544	なし	中近世	5H-13	174	(156)	76	
1548	初山大皿	16c後葉	4H-88.98.99	280	(264)	50	
1552	カワラケ	中世	6I-93.7I-03	175	150	10	
1561	瀬美平碗	15c中葉	6H-73.83	348	(174)	48	
1583A	近世陶磁	近世	6G-68	130	120	36	
1583B	近世陶磁	近世	6G-68	84	84	24	
1584	近世陶磁	近世	6G-58	90	83	20	
1597	なし	中近世	6I-95	130	102	100	
1599	なし	中近世	5H-44.45	(298)	292	12	
1600	なし	中近世	5H-45.55	(200)	100	12	
1602	なし	中近世	5H-46	160	126	54	
1610	瀬美緑釉小皿	14c後葉	6H-33	185	166	74	
1613	土器鍋	中世後半	4H-98.99	(246)	170	17	
1614	なし	中近世	4H-98	144	94	32	
1615	なし	中近世	4H-98.5H-08	130	102	27	
1616	なし	中近世	4H-98.99.5H-08.09	222	196	46	
1617	なし	中近世	5H-08	98	96	11	
1618	なし	中近世	5H-08	324	80	52	
1619	なし	中近世	5H-08	82	48	35	
1620	なし	中近世	5H-18.19	174	62	24	
1621	なし	中近世	5H-09	(116)	70	17	
1622	なし	中近世	5H-08.09.19	380	176	36	
1624	なし	中近世	5H-08.18	(210)	120	40	
1625	なし	中近世	5H-18.19	176	(110)	10	
1634	黄瀬戸丸皿	17c前葉	5H-48.49	168	82	15	
1642	なし	中近世	6G-79	100	90	24	
1643	常滑壺	中世	6H-31.32	(100)	70	20	
1648	なし	中近世	5H-66	(128)	(56)	7	
1649A	土器鍋,カワラケ	中世後半	5H-56.57.66.67	192	120	42	
1649B	土器擂鉢	中世後半	5H-56.57.66.67	204	100	10	
1663	土器擂鉢	中世後半	5H-84	120	110	20	
1673A	近世陶器	近世	6H-16.26	280	90	12	
1673B	常滑片口鉢	15c後半	6H-16.26	(280)	110	12	
1683	なし	中近世	6I-82.91.92	320	208	26	
1689	土器鍋	中後半	6H-48	290	150	30	
1704	近世磁器	近世	7H-18	185	150	40	
1712	なし	中近世	7H-18.27.28	320	220	30	
1721	常滑片口鉢	中世	6H-43	148	112	14	
1728	なし	中近世	7G-02	118	116	14	
1729	カワラケ	中世	6G-87.97	212	178	6	
1730	近世陶器	18c後半	6G-87	90	82	36	
1740	土器鍋	中世後半	7G-22.23	180	38	60	
1741	なし	中近世	7G-22	(150)	100	68	
1747B	常滑壺	中世	7G-66.67.76.77	178	126	72	
1748	なし	中近世	6G-85	30	70	8	
1752	なし	中近世	7G-22	(100)	89	20	
1753	なし	中近世	7G-22	120	105	20	
1756	なし	中近世	7G-25.26	(240)	50		
1759	瀬美緑釉小皿	15c前半	7G-77	138	(118)	30	
1763	土器鍋・カワラケ	中世後半	7G-19.29	230	120	46	
1765	なし	中近世	7G-87	180	134	44	
1768	なし	中近世	7G-87.88	142	110	42	
1770	なし	中近世	7G-97.98.8G-7.8	166	150	15	
1771	なし	中近世	7G-27.28	160	94	54	
1773	土器鍋	中世後半	7G-98	160	80	18	
1778	土器鍋	中世後半	8G-18.28	266	(94)	(108)	
1780	なし	中近世	7G-37	190	(130)	56	

第1表 遺構一覧表(12)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
1783	土器鍋	中世後半	7G-46	120	86	36	
1785	土器鍋	中世後半	8G-08.09	274	160	60	
1790	なし	中近世	7G-49	120	90	40	
1792	なし	中近世	7H-20	(100)	79	20	
1795	なし	中近世	7H-30	230	110	44	
1797	なし	中近世	7G-58	200	120	22	
1800	なし	中近世	7H-20	(100)	90	30	
1803	常滑壺	中世	7G-07.08	214	110	29	
1804	なし	中近世	7H-60.70	112	75	66	
1814	なし	中近世	7G-17	94	62	39	
1817	近世陶磁	中近世	7G-28	140	68	10	
1818	景徳平碗・皿類	15c中葉	7G-79	126	64	36	
1819A	近世磁器	近世	7G-89.7H~70.80	120	110	66	
1819B	なし	近世	7G-89.7H~70.80	70	45	65	
1821	なし	近世	7G-29	80	45	14	
1822	常滑片口鉢	中世後半	7H-21	180	64	47	
1823	なし	中近世	7H-10.11.20.21	560	145	15	
1826	なし	中近世	7G-35	118	75	不明	
1827	なし	中近世	7G-28.38	126	50	47	
1828	なし	中近世	7G-39	160	130	26	
1835	なし	中近世	7G-48.7H~40	80	74	53	
1837	なし	中近世	7H-51	74	64	54	
1839	中国天目茶碗	中世	7G-59.7H~50	150	80	64	
1840	なし	中近世	7G-09.7H~00	160	100	21	
1841	なし	中近世	7G-69	118	112	60	

(14)シシ穴状遺構 (21基)

遺構番号	主な出土遺物	時　期	グリッド	規　模(cm)			備考
				長軸	短軸	深さ	
009	なし	中近世	9J-40	168	100	240	
010	なし	中近世	9I~75	174	114	248	
011	なし	中近世	9I~65	250	140	260	
025A	なし	中近世	9I~38.37.46.47	200	144	95	025Bより新
025B	なし	中近世	9I~38.37.46.48	168	105	246	
031	なし	中近世	10I~5.6.15.16	195	178	320	
124	なし	中近世	8J~60.61	410	160	290	
125	なし	中近世	8J~60.62	200	86	260	
151	常滑片口鉢	15c後半以降	8J~90	226	120	210	
354	なし	中近世	8J~13.23	130	102	180	
567	常滑片口鉢	中世後半以降	7J~83	220	140	230	
640	なし	中近世	7H~47	120	60	164	
828	なし	中近世	9I~90	180	130	250	
951	なし	中近世	10I~17.18	250	180	340	
1077	なし	中近世	3J~67.68	200	120	150	
1089	なし	中近世	3J~56.57	246	146	192	
1152	なし	中近世	3J~42.43	180	134	150以上	
1236	なし	中近世	3J~71	210	154	180	
1281	なし	中近世	4H~57.58.67.68	220	140	190	
1331	なし	中近世	3I~88.89	220	148	208	
1515	なし	中近世	4I~55.65	230	148	225	

第2節　出土遺物

（1）陶磁器（第86～95図，第2表，図版3・4・21～30）

a．中国製品（第86図，第2表（1），図版3）

中国製品はいずれも磁器で合計52点（接合後破片数，以下断らない限り接合後点数とする）出土している。製品別の内訳は染付15点，青磁21点，白磁8点，青白磁梅瓶1点，天目茶碗7点，である。

染付は15点出土したうち11点図示している。1～4は皿B群でいずれも小破片であるが，15c後半から16c前半の時期に捉えられる。5は小坏で1～4の皿と同時期と捉えられる。6・11は碗，7～10は皿でいずれも16c後半代の時期に捉えられる。本遺跡では15c後半～16c前半の一群と16c後半の一群が出土

第86図　中国製品

していることになる。

青白磁は1点のみで，12の梅瓶である。時期的には13ｃ代に捉えられる。本遺跡では該期の遺構は確認されていないことから伝世品と考えられる。

青磁は22点出土したうち，9点図示している。13～17は碗で13はＢ１類（13ｃ後半），14～16はＤ１類（14ｃ後半～15ｃ前半），17はＤ２類（15ｃ前半）である。18は鉢，19は端反大皿，20は大皿，21は盤で，18は15ｃ前半，19，20は14ｃ後半，21は13ｃ後半～14ｃの時期に捉えられる。本遺跡で出土した青磁の時期は13ｃ後半～15ｃ前半となる。

白磁は8点出土したうち，4点図示している。22～25はいずれも皿で，22・23はＢ群（14ｃ後半～15ｃ前半），24はＣ1群（15ｃ後半～16ｃ前半），25は無高台で時期は不詳。他に小片のため図示していないがＢ群の面取坏が1点出土している。本遺跡の白磁は14ｃ後半～16ｃ前半の時期に属し，青磁よりも後出の感がある。

天目茶碗は7点出土しているが，個体数は4個体である。3点（3個体）を図示している。26は体部上半部に錆釉の下塗りが施されている。889B号址（土坑）からの出土で常滑窯甕（8型式：14ｃ後半）が共伴している。27は同一個体4点の一つで，1495号址（溝跡）と1839号址（土坑）から出土している。1495号址からは瀬戸美濃窯の平碗（古瀬戸後Ⅲ）・縁釉小皿（古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ新），常滑窯甕（3型式，6a型式，6b～7型式）等が共伴している。1839号址からは共伴遺物は出土していない。28は1500号址（柱穴群）からの出土であるが，この一帯からは瀬戸美濃窯の大窯4～登窯1段階の製品がまとまって出土している。中国製天目茶碗の時期については，生産年代は13ｃ～14ｃと思われるが，本遺跡で使用された時期は，26は14ｃ後半以降，27は15ｃ中葉以降，28は16ｃ末葉以降の可能性がある。

ｂ．瀬戸美濃窯製品（第87～91，第2表（1）～（5），図版3・4・21～23・29・30）

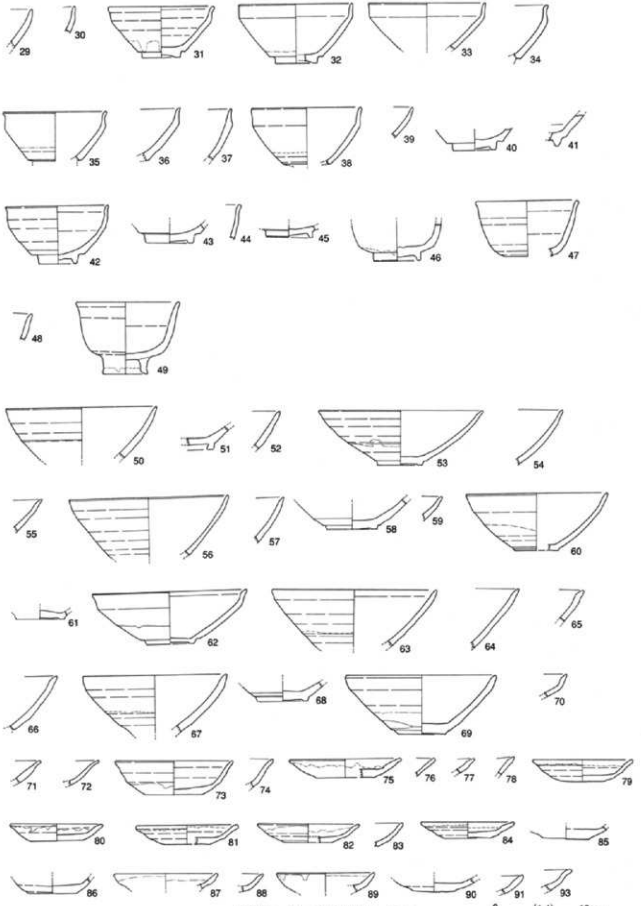
本遺跡からは瀬戸美濃窯製品の陶磁器が多量に出土し，時期的には中世から近世・近代にわたっている。このため紙幅の関係上すべての時期について触れることができないため，中世から近世初頭までの主な陶器について図示しているが，それ以降の時期のものについても若干ではあるが図示した。

天目茶碗は古瀬戸後期13点，大窯期10点，登窯期19点，計42点出土している。その内17点図示している。29は古瀬戸後期Ⅱ，30は後期Ⅲ，31は大窯3前半，32・33は大窯3後半，34・35は大窯3，36は大窯4前半，37は大窯4後半，38は登窯1，39は登窯1～2，40は登窯3，41～43は登窯4，44は登窯1～4，45は登窯5～6の時期である。古瀬戸後期Ⅳ期から大窯2期までの製品が欠落している。また，31と32には漆つぎの痕跡が認められる。

鉄釉筒形碗は大窯4前半期1点，登窯1期1点，登窯1～2期2点の計4点出土している。その内2点を図示している。46が大窯4前半，47が登窯1の時期で，47は1356号址（やぐら状遺構）と1358号址（土坑）から出土し接合している。なお，1358号址からは志戸呂窯鉄釉筒形碗（登窯1～2）が共伴して出土している。

その他の碗としては，緑釉丸碗2点（いずれも登窯1），灰釉端反碗2点（古瀬戸後Ⅳ新，登窯2），志野釉丸碗1点（登窯1）の計5点出土している。その内2点図示している。48は緑釉丸碗，49は登窯1の灰釉端反碗で完形に近い遺存状況である。49が出土した1682号址（溝跡）からは他に瀬戸美濃窯の擂鉢（大窯3後半と大窯4前半）が伴出している。

灰釉平碗は計98点出土している。時期別の内訳は，古瀬戸中期Ⅳ2点，後期Ⅰ4点，後期Ⅱ9点，後期Ⅰ



第87図　瀬戸美濃窯製品（1）

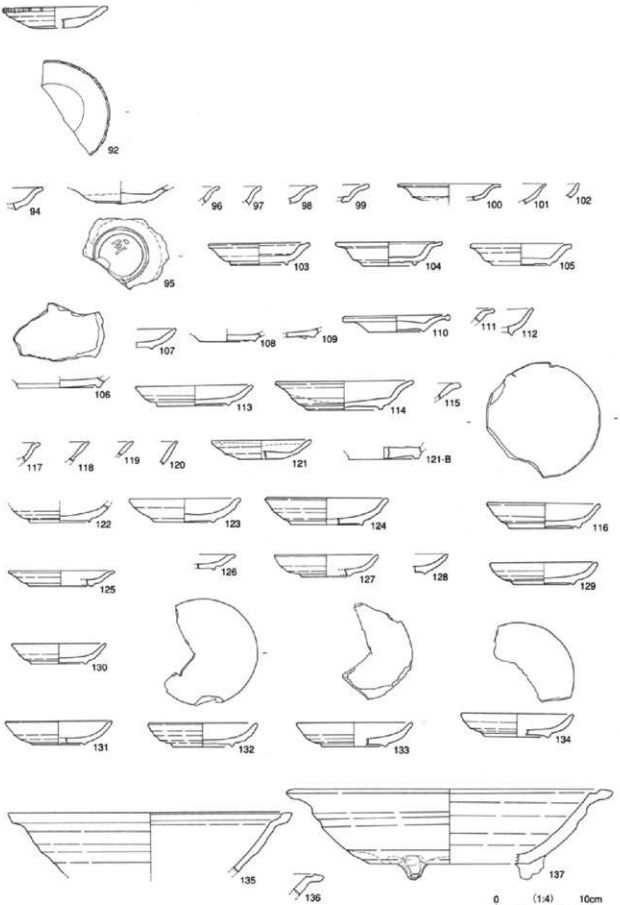
～Ⅱ5点，後期Ⅲ19点，後Ⅲ～Ⅳ古5点，後期Ⅳ古13点，後期Ⅰ～Ⅳ41点である。時期的には古瀬戸中期Ⅳ段階から後期Ⅳ古段階まで継続して出土している。後期Ⅳ新段階のものは認められない。98点中図示したものは21点である。50，51は後期Ⅰ，52～57は後期Ⅱ，58～63は後期Ⅲ，64は後期Ⅲ～Ⅳ古，65～70は後期Ⅳ古，の各時期である。

灰釉皿は計137点出土している。緑釉小皿は計83点（後期Ⅰ6点，後期Ⅱ11点，後期Ⅲ6点，後期Ⅳ古16点，後期Ⅲ～Ⅳ古8点，後期Ⅳ新11点，後期Ⅲ～Ⅳ新14点，大窯1期11点）出土している。その内23点図示している。腰折皿は計11点（いずれも古瀬戸後Ⅳ新）出土し，その内7点図示している。端反皿は計3点（大窯1期2点，大窯1～2期1点）出土し，その内1点図示している。丸皿は計25点（大窯2期3点，大窯3期4点，大窯2～3期12点，登窯6点）出土し，その内7点図示している。折縁皿は計10点（古瀬戸後期Ⅰ～Ⅱ1点，大窯3後半4点，大窯4前半5点）出土し，その内7点図示している。反り皿は5点出土し，いずれも登窯1～2期のものである。その内，2点図示している。灰釉皿は出土した137点のうち47点を図示している。71～93は緑釉小皿で，71～74は古瀬戸後期Ⅰ段階のものである。71～73は内面に灰釉がハケ塗りされている。75，76は後期Ⅱ，78～80は後期Ⅲ，81～84は後期Ⅳ古，85，86は後期Ⅲ～Ⅳ古，87～89は後期Ⅳ新，90は後期Ⅲ～Ⅳ新，91～93は大窯1期，の段階のものである。90は底部破片であるが内面全体にスス状の物質が付着し，灯明皿に使用されている。91～93は生産地での窯道具の一つである挟み皿である。また，91は口唇部に焼成後の細かい刻目が施されている。94～100は腰折皿で，いずれも後期Ⅳ新段階のものである。95には底面に墨書で「玉」の文字が書かれている。101は端反皿で大窯1期の製品である。102，107～109，112，113，116は丸皿で，102は大窯2期，107は大窯3期，108・109は大窯2～3期，112・113・116は登窯1期の製品である。116は黄瀬戸釉で内面に緑釉の斑文が施されている。103～106，110，111，117は折縁皿で，103～106は大窯3後半の製品，103・105は見込み部は無釉，106は見込み部に菊花文が押印されている。114・115は反り皿で2点とも登窯1～2期の製品である。

鉄釉皿は計17点出土している。緑釉小皿が10点でいずれも古瀬戸後Ⅲ期の製品である。その内4点図示している。稜皿は1点出土し大窯3期，輪禿皿が6点（いずれも登窯2期）である。118～121が後Ⅲ期の緑釉小皿である。121－Bは輪禿皿で登窯2期の製品。

志野釉皿は計40点出土している。丸皿17点（大窯4期4点，登窯1期3点，登窯1～2期7点，登窯2期3点）出土し，その内7点図示している。菊皿は5点（いずれも大窯4期）出土しているが細片の為図示はしていない。反り皿は2点（いずれも登窯1期）出土し2点とも図示している。鉄絵皿は16点（すべて登窯1期）出土し，その内4点図示している。122～124，127～130が丸皿で，122～124は大窯4期の，127・128は登窯1期，129・130は登窯2期の製品である。125・126は反り皿で登窯1期である。131～134は鉄絵皿でやはり登窯1期の製品である。

深皿，中皿，大皿を含めた盤類は計54点出土している。折縁深皿が14点（古瀬戸中期Ⅳ1点，後期Ⅰ4点，後期Ⅱ4点，後期Ⅲ3点，後期Ⅳ古2点）出土し，その内6点図示している。折縁中皿は2点（いずれも後期Ⅳ古）出土し，2点とも図示した。直縁大皿は2点（いずれも後期Ⅲ）出土し，1点図示した。深皿か大皿か判別できないものは盤類として一括した。32点（後期Ⅰ～Ⅲ15点，後期Ⅳ14点，鉄釉：後期Ⅳ古3点）出土し，2点図示している。黄瀬戸大皿は4点（いずれも大窯4期）出土し，4点とも図示した。ただし4点は接合はしないものの同一個体の可能性が高い。135～143は折縁深皿で，136・137は後期

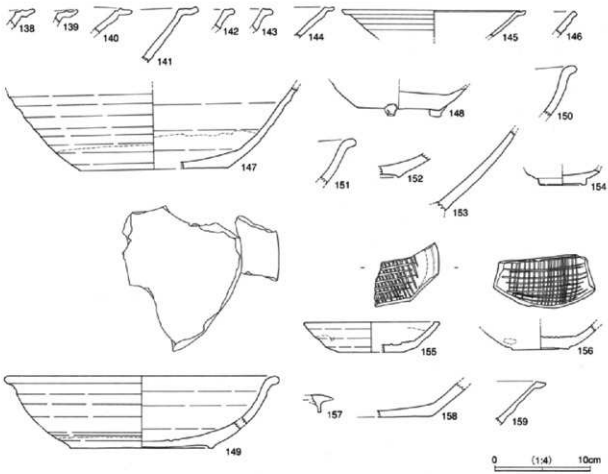


第88図　瀬戸美濃窯製品（2）

Ⅰ，138・139は後期Ⅱ，140・141は後期Ⅲ，142・143は後期Ⅳ古と，それぞれの段階の製品である。144・145は折縁中皿で２点とも後期Ⅳ古段階である。146は直縁大皿で後期Ⅲ段階。147・148は盤類で，147は後期Ⅰ～Ⅲ段階で漆つぎの痕跡が認められる。148は後期Ⅳ段階である。149～152は黄瀬戸大皿で大窯４段階の製品である。いずれも同一個体とすれば，1378号址（土坑），1385号址（池状遺構），1479号址（溝跡），1692号址（小穴）と，４カ所の遺構から各１点ずつ出土していることになる。

鉢類，卸皿類は，碗型鉢２点（後期Ⅰ～Ⅱ１点，後期Ⅲ～Ⅳ古１点），内図示１点，黄瀬戸鉢２点（いずれも登窯１～２期：図示なし），小鉢６点（後期Ⅰ～Ⅱ２点，後期Ⅳ古１点，後期３点），卸皿４点（後期Ⅲ１点，後期３点：図示２点），底卸目皿１点（中期Ⅰ：図示），卸目付大皿２点（後期Ⅲ：２点とも図示）が出土している。153は碗型鉢で後期Ⅲ～Ⅳ古段階の製品で，漆つぎ痕跡が認められる。154は小鉢で後期Ⅰ～Ⅱ，155・156は卸皿で，155は後期Ⅰ～Ⅱ，156は後期Ⅰ～Ⅳ段階の製品である。157は底卸目皿で中期Ⅰ段階，158・159は卸目付大皿で，いずれも後期Ⅲ段階である。

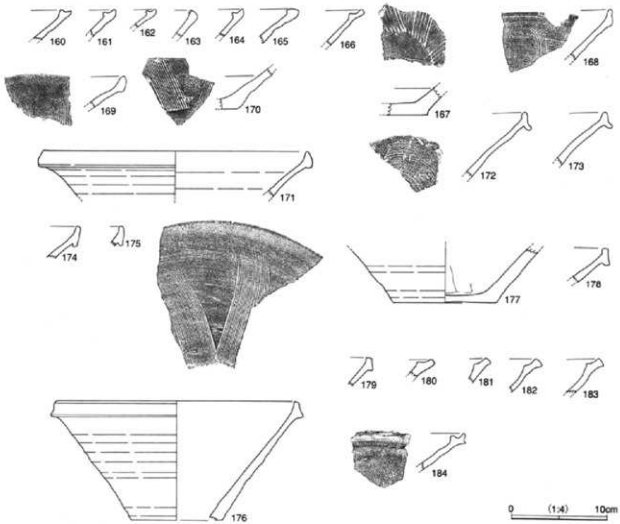
擂鉢は登窯２期までで計71点出土している。時期別にみると後期Ⅳ古１点，後期Ⅳ新７点，後期Ⅳ５点，大窯１期２点，大窯２期１点，後期Ⅳ～大窯２期８点，大窯３前半期２点，大窯３後半期８点，大窯３期１点，大窯４前半期３点，大窯４後半期１点，大窯３～４期１点，古瀬戸後期～大窯期16点，大窯１～４期８点，登窯１期５点，登窯２期２点，が出土している。後期Ⅳ古段階から登窯２段階まで継続して出土している。出土した71点中図示したものは25点である。160は後期Ⅳ古，161～166は後期Ⅳ新，167は後期，



第89図　瀬戸美濃窯製品（３）

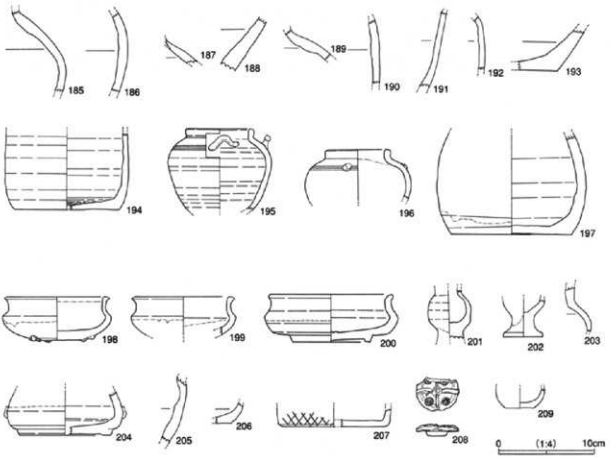
168は大窯１，169は大窯２，170は後期Ⅳ～大窯２，171は大窯３前半，172～176は大窯３後半，177は大窯３，178・179は大窯４前半，180は大窯４後半，181・182は登窯１，183・184は登窯２，と各段階の製品である。

その他の器種としては，瓶子，壷，徳利，香炉，花瓶，筒形容器，水注，水指，合子がある。瓶子は11点出土し，いずれも後期Ⅰ～Ⅱ段階である。その内185～188の４点を図示している。瓶子か壷か判別できないものは11点出土している。中期段階が８点，後期Ⅲ～Ⅳ段階が３点である。図示したものは２点で，189は中期，190は後期Ⅲ～Ⅳ，の段階の製品である。祖母懐茶壷は９点出土し，いずれも後期段階である。191～193の３点を図示している。有耳壷は３点出土している。194は口広の鉄釉有耳壷で，大窯１段階の製品である。195・196は灰釉の有耳壷で登窯７段階（18ｃ後半）の製品である。別々の遺構から出土しているが同一個体と思われる。徳利は６点出土している。大窯３段階が３点，大窯段階が３点である。図示したものは１点で，197の大窯３段階の製品である。香炉は計５点出土している。いずれの器形も袴腰形で後期Ⅱ段階が２点，後期Ⅰ～Ⅱ段階が２点，登窯４段階が１点である。図示したものは３点で，198・199は後期Ⅱ，200は鉄釉で登窯４の各段階である。花瓶は仏花瓶３点，尊式花瓶３点，計６点出土している。仏花瓶はいずれも鉄釉で中期Ⅱ段階が２点，後期Ⅲ～Ⅳ段階が１点出土している。尊式花瓶は後期Ⅰ



第90図　瀬戸美濃窯製品（４）

～Ⅱが2点，後期Ⅲ段階が1点である。図示したのは3点で，201の仏花瓶は中期Ⅱ，202の仏花瓶は後期Ⅲ～Ⅳ，203の摩式花瓶は後期Ⅲの各段階の製品である。筒形容器は2点出土している。いずれも後期Ⅰ～Ⅱ段階で204の1点を図示している。水注は4点出土している。古瀬戸前期Ⅲ～Ⅳ段階の灰釉水注が3点，後期Ⅲ～Ⅳ段階の鉄釉耳付水注が1点である。図示したものは2点で，205は前期Ⅲ～Ⅳ段階水注，206は後期Ⅲ～Ⅳ段階の耳付水注である。水差は1点出土し，大窯2～3段階の鉄釉である。207に図示している。合子は蓋と身が各1点出土している。いずれも中期Ⅰ～Ⅱ段階の製品で，208が蓋，209が身である。

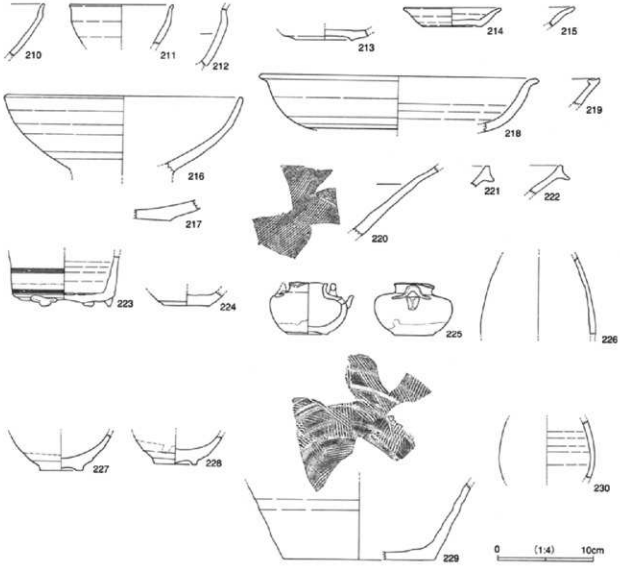


第91図　瀬戸美濃窯製品（5）

c．志戸呂・初山窯製品（第92図，第２表（５）・（６），図版23・30）

志戸呂窯（静岡県島田市および榛原郡金谷町所在）と初山窯（静岡県引佐郡細江町所在）の製品は登窯２期までで計39点出土している。器種ごとにみると天目茶碗は志戸呂窯産で古瀬戸後Ⅳ古段階のものが３点，ただし同一個体と思われる。初山窯産で大窯３後半段階のものが５点出土している。筒形碗は登窯１～２段階の志戸呂窯製品が４点，縁釉小皿は後期Ⅳ古段階の志戸呂窯製品が１点，内禿皿が大窯３後半段階の初山窯製品が１点，稜皿は大窯３後半段階の製品が１点，大皿・擂鉢・香炉は大窯３後半段階の初山窯製品がそれぞれ７点，４点，２点出土している。さらに大皿については大窯４～登窯１段階のものが６点出土している。

図示したものは210～226の17点である。210～212が天目茶碗で，210は志戸呂窯産で古瀬戸後期Ⅳ古段階，211・212は初山窯産で大窯３後半段階のものである。213は内禿皿，214・215は稜皿，216・217は大皿で，いずれも初山窯で大窯３後半段階である。218は志戸呂窯の大皿で大窯４～登窯１段階，219は志戸



第92図　志戸呂・初山窯，肥前（唐津）窯，備前窯製品

呂窯の擂鉢で古瀬戸後Ⅳ古段階，220～222は初山窯の擂鉢で，いずれも大窯３後半段階，223は初山窯の筒形香炉で大窯３後半，224・225は志戸呂窯の耳付水注でいずれも古瀬戸後Ⅳ段階，226は志戸呂窯の徳利で18ｃ代の製品である。

ｄ．肥前窯，備前窯製品（第92図，第２表（６），図版23・30）

若干ではあるが肥前窯陶器（唐津）と備前窯製品が出土している。肥前窯製品は17ｃ前半代に限れば10点出土している（それ以降の製品は磁器を主体に多数出土している）。備前窯製品は図示した２点が出土している。

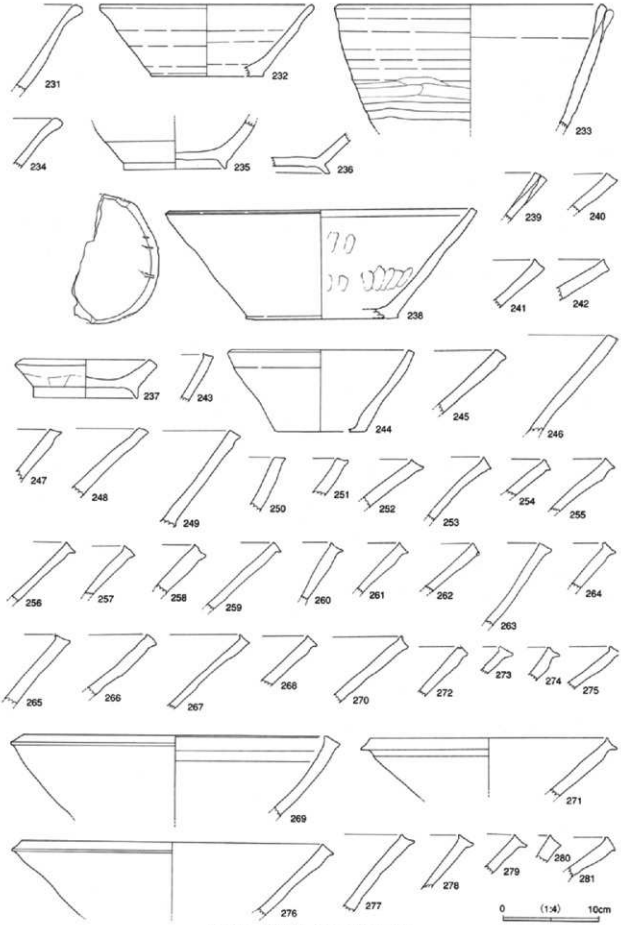
227，228は肥前窯製品の碗である。17ｃ前葉の時期と捉えられる。229は備前窯産の擂鉢，230も同じく備前窯産の徳利で，いずれも16ｃ後葉～17ｃ前葉の時期と思われる。

ｅ．常滑窯，渥美窯製品（第93～95図，第２表（６）～（８），図版24～28・30）

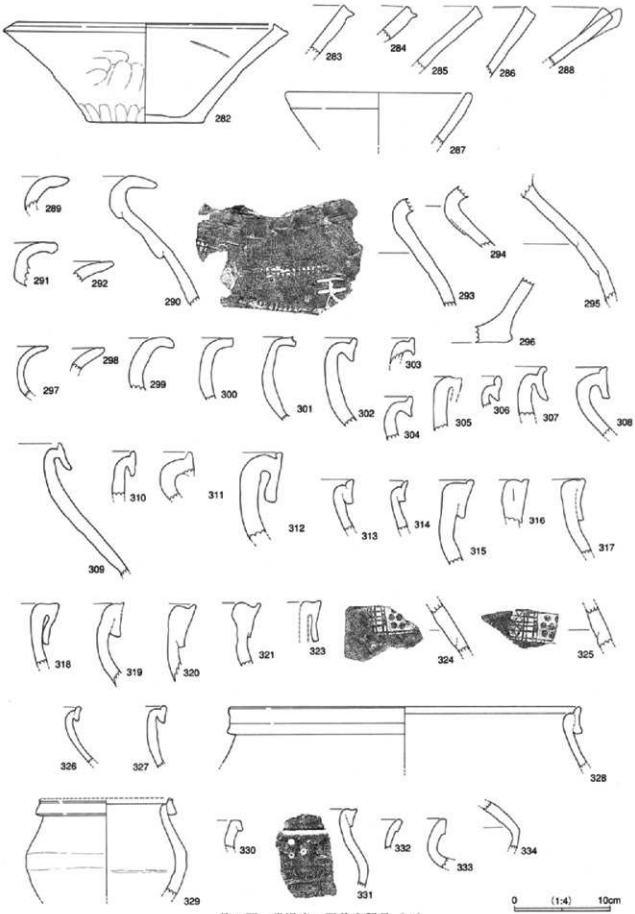
常滑窯製品は，片口鉢，甕，壺で合計1098点出土している。常滑窯製品の出土点数としては現段階では千葉県内で最大量である。

図示したものは片口鉢が231～289の59点，甕が290～325で36点，壺が326～334で９点，と口縁部を主にしている。片口鉢は235～237の有高台のⅠ類を除いて全て無高台のⅡ類である。Ⅱ類の片口鉢は５型式（231・234）から認められ，６a型式（232，233），７型式（238，239，244），８型式（240～243），９型式（245～251），10型式（252～284），11～12型式（285，286，288）と継続して出土している。甕は２型式（297）から認められ，３型式（298，299），４型式（300），４～５型式（301），６a型式（302～304），６a～６b型式（305，306），６b型式（307～310），７型式（311），８型式（312・323），９型式（313～315），10型式（316～318，320），９～10型式（319），11型式（321，322）と継続して出土している。322はほぼ完形に近い遺存状態である。324，325は胴部片で古手の様相であるが，押印文が施文されている。壺は６a型式（326，327）から認められ，６b～７型式（328，329），10型式（330，331），10～12型式（332，333）の各型式のものが出土している。

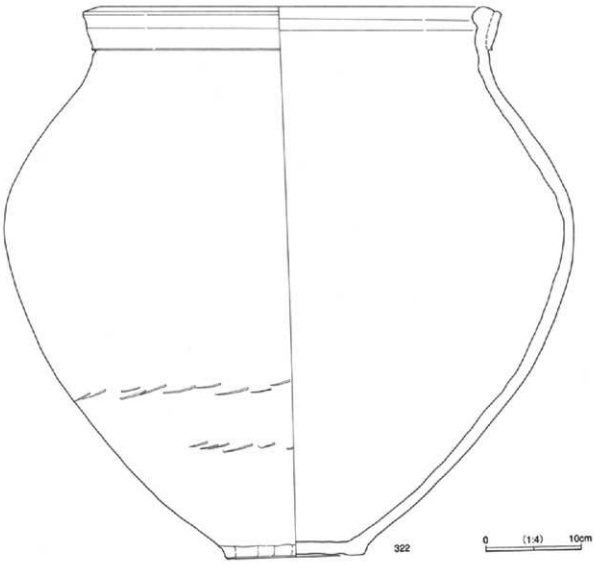
渥美窯製品はすべて甕で計50点出土している。図示したものは８点（289～296）で，289は２型式，290～292は３型式，293は肩部に「天」の刻字が認められる。



第93図　常滑窯・渥美窯製品（1）



第94図　常滑窯・渥美窯製品（2）



第95図　常滑窯・渥美窯製品（3）

第2表　中近世陶磁器観察表(1)

挿図番号	産地	器種	釉薬	法量(cm)【現存値】(復元値) 口径	底径	器高	遺存度(%)	部位	出土位置	接合関係	編年	時期	備考
86-1	中国	皿	染付	(13.0)	-	-	10	口縁～体部	859号址		B群	15C後～16C前	
2	中国	皿	染付	-	-	-	10	体部～底部	1500号址		B群	15C後～16C前	
3	中国	皿	染付	-	-	-	20	口縁～底部	1701号址	遺構内	B群	15C後～16C前	
4	中国	皿	染付	-	-	-	5	体部	1701号址		B群	15C後～16C前	
5	中国	小杯	染付	(5.5)	-	【2.4】	10	口縁～体部	1529号址			15C後～16C前	
6	中国	碗	染付	(3.1)	-	【3.8】	20	口縁～体部	1497号址			16C後	
7	中国	皿	染付	(10.0)	(5.4)	【2.9】	10	口縁～底部	1497号址			16C後	
8	中国	皿	染付	-	(7.4)	【1.3】	10	体部～底部	1497号址			16C後	
9	中国	皿	染付	(10.4)	(8.0)	2.5	10	口縁～底部	1500号址			16C後	
10	中国	皿	染付	-	-	-	10	底部	1500号址			16C後	
11	中国	碗	染付	-	-	-	10	底部	71-14グリッド			16C後	
12	中国	梅瓶	青白磁	-	(8.4)	【3.12】	10	体部～底部	003号址			13C後	
13	中国	碗	青磁	-	(5.5)	2.0	20	底部	1611号址		B1類	13C後	蓮弁文
14	中国	碗	青磁	-	(8.0)	2.1	20	底部	800号址		D1類	14C後～15C前	
15	中国	碗	青磁	-	(8.0)	2.1	10	底部	1645号址		D1類	14C後～15C前	
16	中国	碗	青磁	-	(5.2)	【1.7】	10	底部	1801号址		D1類	14C後～15C前	
17	中国	碗	青磁	(15.0)	-	-	20	口縁～体部	1467号址		D2類	15C前	
18	中国	鉢	青磁	-	(5.6)	【1.2】	20	底部	1632号址			15C前	
19	中国	塩反大皿	青磁	-	-	【1.4】	10	底部	8H-21グリッド			14C後	
20	中国	大皿	青磁	-	(8.1)	【2.3】	10	底部	1500号址			14C後	
21	中国	壺	青磁	-	-	-	10	口縁	861号址			13C後～14C	
22	中国	皿	白磁	(9.0)	(4.7)	2.3	40	口縁～底部	802号址		B群	14C後～15C前	削高台
23	中国	皿	白磁	-	4.0	【1.4】	30	底部	1722号址		B群	14C後～15C前	
24	中国	皿	白磁	(12.0)	-	【1.2】	10	口縁	743号址		C1群		
25	中国	皿	白磁	-	-	-	10	底部	1801号址				無高台
26	中国	碗	天目	(11.0)	-	【4.5】	20	口縁～体部	889B号址				体部上半鎬釉下ぬり
27	中国	碗	天目	-	-	-	20	口縁～体部	1495号址・1839号址	遺構間			5点(接合後4点)同一個体
28	中国	碗	天目	-	-	-	10	体部	1500号址				
87-29	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	-	-	-	10	口縁～体部	528A号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
30	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(12.0)	-	-	10	口縁	1751号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
31	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(10.3)	4.1	5.4	60	口縁～底部	1229号址	遺構内	大窯3前	1560～1575	波つぎ痕
32	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(12.2)	(4.5)	6.2	30	口縁～底部	1013B号址・1208号址	遺構間	大窯3後	1575～1590	波つぎ痕、33と同一個体
33	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(12.2)	-	【5.0】	20	口縁～体部	1208号址		大窯3後	1575～1590	32と同一個体
34	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	-	-	-	10	口縁～体部	013号址		大窯3	1560～1590	
35	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(11.0)	-	【5.2】	20	口縁～体部	5Gグリッド		大窯3	1560～1590	
36	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	-	-	-	20	口縁～体部	1500号址		大窯4前	1590～1600	
37	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(9.6)	-	-	20	口縁～体部	1500号址		大窯4後	1600～1610	
38	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(10.7)	-	【6.0】	50	口縁～体部	1207号址	遺構内	登窯1	1610～1625	
39	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(14.0)	-	-	10	口縁	1228号址		登窯1～2	1610～1650	
40	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	-	(4.6)	【2.3】	30	底部	4B-01グリッド		登窯3	1650～1675	
41	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	-	(6.0)	-	20	体部～底部	647号址		登窯4	1675～1700	
42	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(10.9)	(4.0)	6.2	30	口縁～底部	723号址		登窯4	1675～1700	
43	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	-	5.0	【2.1】	20	底部	724号址		登窯4	1675～1700	

第2表　中近世陶磁器観察表(2)

挿図番号	産地	器種	釉薬	法量(cm)【現存値】(復元値) 口径	底径	器高	遺存度(%)	部位	出土位置	接合関係	編年	時期	備考
87-44	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	(10.6)	–	–	10	口縁	1657号址 SH-49グリッド	遺構外	登窯1～4	1610～1700	
45	瀬戸美濃	天目茶碗	鉄釉	–	4.9	【1.3】	20	底部	1549号址		登窯5～6	1700～1750	
46	瀬戸美濃	筒形碗	鉄釉	–	5.0	【3.9】	30	体部～底部	1512号址		大窯4前	1590～1600	
47	瀬戸美濃	筒形碗	鉄釉	(10.9)	–	【5.6】	30	口縁～体部	1356号址・1358号址	遺構間	登窯1	1610～1625	
48	瀬戸美濃	丸碗	鉄釉	–	–	–	5	口縁	1665号址		登窯1	1610～1625	
49	瀬戸美濃	端反碗	灰釉	(11.0)	4.8	7.7	70	口縁～底部	1682号址		登窯2	1625～1650	付高台
50	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(16.0)	–	【5.5】	20	口縁～体部	581号址		古瀬戸後Ⅰ	1360～1380	
51	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	–	–	20	底部	SH-68グリッド		古瀬戸後Ⅰ	1360～1380	
52	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	–	–	10	口縁～体部	584号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
53	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(17.3)	4.7	5.7	40	口縁～底部	1632号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
54	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	–	–	20	口縁～体部	1635号址・1678号址・1703号址	遺構間	古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
55	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	–	–	10	口縁～体部	1690号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
56	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(16.6)	–	【6.3】	20	口縁～体部	1742号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	釉剥落激しい
57	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	–	–	20	口縁～体部	1806号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
58	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	5.3	【2.6】	30	体部～底部	723号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
59	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	–	–	5	口縁	1396号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
60	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(15.0)	(4.6)	【6.1】	30	口縁～底部	1495号址・1742号址	遺構間	古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
61	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	5.2	【0.9】	10	底部	1536号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
62	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(6.3)	(5.0)	5.6	30	口縁～底部	1669号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
63	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(17.4)	–	【6.1】	30	口縁～体部	1742号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
64	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(17.0)	–	–	20	口縁～体部	1818号址		古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ古	1420～1460	
65	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	–	–	5	口縁	801号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
66	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(12.0)	–	–	20	口縁～体部	817号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
67	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(15.3)	–	【6.2】	30	口縁～体部	1561号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
68	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	5.4	【2.1】	10	底部	1632号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
69	瀬戸美濃	平碗	灰釉	(16.0)	5.0	6.2	60	口縁～底部	1651号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
70	瀬戸美濃	平碗	灰釉	–	–	–	5	口縁	1801号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
71	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	–	–	–	10	口縁～体部	802号址		古瀬戸後Ⅰ	1360～1380	体部内面灰釉ハケ塗り
72	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	–	–	–	5	口縁～体部	1536号址		古瀬戸後Ⅰ	1360～1380	体部内面灰釉ハケ塗り
73	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(12.5)	(6.0)	3.6	50	口縁～底部	1610号址		古瀬戸後Ⅰ	1360～1380	体部内面灰釉ハケ塗り
74	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(10.0)	–	–	10	口縁～体部	1801号址		古瀬戸後Ⅰ	1360～1380	
75	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(11.8)	(6.2)	2.0	20	口縁～底部	481A号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
76	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	–	–	–	5	口縁	1002号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
77	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	–	–	–	5	口縁	821号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
78	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	–	–	–	5	口縁	861号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
79	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(10.7)	(4.8)	2.5	50	口縁～底部	1585B号址・1587号址	遺構間	古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
80	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	9.7	5.5	2.0	60	口縁～底部	1759号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
81	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(10.6)	(4.6)	2.1	30	口縁～底部	1506号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
82	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(10.6)	(4.9)	2.0	20	口縁～底部	1534号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
83	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(10.4)	–	–	10	口縁～体部	1644号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
84	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(9.5)	(5.0)	1.8	40	口縁～底部	1690号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
85	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	–	5.0	【1.4】	30	底部	482号址		古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ古	1420～1460	
86	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	–	5.3	【1.7】	30	底部	1587号址		古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ古	1420～1460	

第2表　中近世陶磁器観察表(3)

挿図番号	産地	器種	釉薬	法量(cm)【現存値】(復元値) 口径	底径	器高	遺存度(%)	部位	出土位置	接合関係	編年	時期	備考
87-87	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(11.0)	－	【1.7】	10	口縁～体部	859A号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
88	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(9.0)	－	－	5	口縁～体部	860号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
89	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(10.4)	－	【2.1】	20	口縁～体部	861号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
90	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	－	4.6	【1.6】	30	底部	1506号址		古瀬戸後Ⅳ～Ⅴ新	1420～1480	内面見込全面スス付着
91	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	－	－	－	5	口縁	866号址		大窯1	1480～1530	
88-92	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	(11.2)	(4.3)	2.2	40	口縁～底部	1263号址		大窯1	1480～1530	口唇部に刻目
87-93	瀬戸美濃	緑釉小皿	灰釉	－	－	－	10	口縁～体部	1601号址		大窯1	1480～1530	
88-94	瀬戸美濃	腰折皿	灰釉	(10.0)	－	－	10	口縁～体部	803号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
95	瀬戸美濃	腰折皿	灰釉	－	5.4	【1.8】	30	体部～底部	836号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	底部に墨書「玉」
96	瀬戸美濃	腰折皿	灰釉	(11.0)	－	－	5	口縁	859A号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
97	瀬戸美濃	腰折皿	灰釉	(9.0)	－	－	5	口縁	860号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
98	瀬戸美濃	腰折皿	灰釉	－	－	－	10	口縁～体部	1230号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
99	瀬戸美濃	腰折皿	灰釉	－	－	－	10	口縁～体部	1601号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
100	瀬戸美濃	腰折皿	灰釉	(11.0)	(7.3)	1.8	10	口縁～体部	1722号址	遺構内	古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
101	瀬戸美濃	端反皿	灰釉	－	－	－	5	口縁	861号址		大窯1	1480～1530	
102	瀬戸美濃	丸皿	灰釉	－	－	－	5	口縁	1133号址		大窯2	1530～1560	
103	瀬戸美濃	折縁皿	灰釉	(10.7)	(6.1)	2.3	30	口縁～底部	649号址		大窯3後半	1575～1590	見込み無釉
104	瀬戸美濃	折縁皿	灰釉	(11.3)	(5.6)	2.5	40	口縁～底部	1228号址		大窯3後半	1575～1590	全面施釉
105	瀬戸美濃	折縁皿	灰釉	10.7	6.1	2.3	30	口縁～底部	1500号址		大窯3後半	1575～1590	見込み無釉
106	瀬戸美濃	折縁皿	灰釉	－	(8.7)	【1.0】	30	底部	1701号址		大窯3後半	1575～1590	底部を除き施釉、見込みに菊花文押印
107	瀬戸美濃	丸皿	灰釉	(5.0)	(2.5)	【2.2】	10	口縁～底部	1228号址		大窯3	1580～1590	
108	瀬戸美濃	丸皿	灰釉	－	5.8	【9.0】	30	底部	642号址・686号址	遺構間	大窯2～3	1530～1590	底部に輪ト痕
109	瀬戸美濃	丸皿	灰釉	－	－	－	5	底部	1526号址		大窯2～3	1530～1590	底部に輪ト痕
110	瀬戸美濃	折縁皿	灰釉	－	(6.0)	(1.1)	30	口縁～底部	1500号址	遺構内	大窯4前半	1590～1600	
111	瀬戸美濃	折縁皿	灰釉	－	－	－	5	口縁	1500号址		大窯4前半	1590～1600	内面鎬文、連つぎ痕
112	瀬戸美濃	丸皿	灰釉	－	－	－	20	口縁～底部	1500号址		登窯1	1610～1630	
113	瀬戸美濃	丸皿	灰釉	12.5	7.7	2.2	90	口縁～底部	1500号址		登窯1	1610～1630	
114	瀬戸美濃	反り皿	灰釉	(14.6)	(9.2)	3.1	40	口縁～底部	721号址		登窯1～2	1610～1650	
115	瀬戸美濃	反り皿	灰釉	(11.0)	－	－	10	口縁～体部	860号址		登窯1～2	1610～1650	
116	瀬戸美濃	丸皿	灰釉	12.0	7.6	2.8	80	口縁～底部	1634号址		登窯1	1610～1630	内面銅釉流し
117	瀬戸美濃	折縁皿	灰釉	－	－	－	5	口縁	1801号址		古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ	1360～1420	
118	瀬戸美濃	緑釉小皿	鉄釉	－	－	－	5	口縁	861号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
119	瀬戸美濃	緑釉小皿	鉄釉	－	－	－	5	口縁	865号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
120	瀬戸美濃	緑釉小皿	鉄釉	－	－	－	5	口縁	1002号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
121	瀬戸美濃	緑釉小皿	鉄釉	(10.6)	(4.8)	2.0	30	口縁～底部	1690号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
121B	瀬戸美濃	輪禿皿	鉄釉	－	－	－	10	底部	1401号址		登窯2	1625～1650	
122	瀬戸美濃	丸皿	志野	－	6.4	1.8	30	体部～底部	723号址		大窯4	1590～1610	
123	瀬戸美濃	丸皿	志野	11.8	6.4	2.0	80	口縁～底部	1230号址・1744号址	遺構内・遺構間	大窯4	1590～1610	
124	瀬戸美濃	丸皿	志野	(13.1)	(7.5)	2.8	50	口縁～底部	1701号址	遺構内	大窯4	1590～1610	
125	瀬戸美濃	反り皿	志野				10	口縁～底部	1359号址		登窯1	1610～1630	
126	瀬戸美濃	反り皿	志野	－	－	－	10	口縁～底部	SI-32グリッド		登窯1	1610～1630	
127	瀬戸美濃	丸皿	志野	(11.0)	(5.2)	2.3	20	口縁～底部	1433号址		登窯1	1610～1630	
128	瀬戸美濃	丸皿	志野	(10.6)	－	－	10	口縁～底部	1701号址		登窯1	1610～1630	

第2表　中近世陶磁器観察表(4)

挿図番号	産地	器種	釉薬	法量(cm)【現存値】(復元値) 口径	底径	器高	遺存度(%)	部位	出土位置	接合関係	編年	時期	備考
88-129	瀬戸美濃	丸皿	志野	(10.4)	(7.7)	2.3	60	口縁～底部	1359号址	遺構内	登窯2	1630～1650	
130	瀬戸美濃	丸皿	志野	(10.0)	(5.9)	2.2	20	口縁～底部	1695号址		登窯2	1630～1650	
131	瀬戸美濃	鉄絵皿	志野	(11.3)	(5.7)	2.5	20	口縁～底部	1479号址		登窯1	1610～1630	
132	瀬戸美濃	鉄絵皿	志野	(10.6)	(6.4)	2.5	70	口縁～底部	1500号址	遺構内	登窯1	1610～1630	
133	瀬戸美濃	鉄絵皿	志野	(12.3)	(6.8)	2.5	40	口縁～底部	1550号址		登窯1	1610～1630	
134	瀬戸美濃	鉄絵皿	志野	(11.9)	(6.8)	2.5	60	口縁～底部	1540号址・1701号址	遺構間	登窯1	1610～1630	
135	瀬戸美濃	折縁深皿	灰釉	(30.0)	-	【6.4】	20	口縁～体部	1653号址		古瀬戸中Ⅳ	1345～1360	
136	瀬戸美濃	折縁深皿	灰釉	-	-	-	5	口縁	723号址		古瀬戸後Ⅰ	1360～1380	
137	瀬戸美濃	折縁深皿	灰釉	(34.5)	(16.7)	9.7	30	口縁～底部	1534号址		古瀬戸後Ⅰ	1360～1380	
89-138	瀬戸美濃	折縁深皿	灰釉	-	-	-	5	口縁	585号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
139	瀬戸美濃	折縁深皿	灰釉	-	-	-	5	口縁	803号址		古瀬戸後Ⅱ	1380～1420	
140	瀬戸美濃	折縁深皿	灰釉	-	-	-	5	口縁	620号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
141	瀬戸美濃	折縁深皿	灰釉	-	-	-	20	口縁～体部	1677号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
142	瀬戸美濃	折縁深皿	灰釉	-	-	-	5	口縁	482号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
143	瀬戸美濃	折縁深皿	灰釉	-	-	-	5	口縁	528号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
144	瀬戸美濃	折縁中皿	灰釉	-	-	-	5	口縁	1641号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
145	瀬戸美濃	折縁中皿	灰釉	(19.4)	-	【2.8】	10	口縁～体部	1742号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
146	瀬戸美濃	直縁大皿	灰釉				5	口縁	1695号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
147	瀬戸美濃	盤類	灰釉	-	(15.5)	8.5	30	体部～底部	1506号址・1577号址	遺構間	古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ	1360～1440	渥つぎ底あり
148	瀬戸美濃	盤類	灰釉	-	(8.1)	【3.2】	20	底部	1598号址		古瀬戸後Ⅳ	1460～1480	
149	瀬戸美濃	黄瀬戸大皿	灰釉	(29.1)	(15.0)	【7.8】	30	底部	1378号址		大窯4	1580～1610	
150	瀬戸美濃	黄瀬戸大皿	灰釉				10	口縁～体部	1385号址		大窯4	1590～1610	
151	瀬戸美濃	黄瀬戸大皿	灰釉	-	-	-	10	口縁～体部	1479号址		大窯4	1590～1610	
152	瀬戸美濃	黄瀬戸大皿	灰釉	-	-	-	5	底部	1092号址		大窯4	1590～1610	
153	瀬戸美濃	碗形鉢	灰釉				20	体部	1506号址		古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ古	1420～1460	渥つぎ底あり
154	瀬戸美濃	小鉢	灰釉	-	5.0	【1.7】	30	底部	1227号址		古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ	1360～1420	
155	瀬戸美濃	卸皿	灰釉	(14.3)	(7.0)	3.2	20	口縁～底部	1695号址		古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ	1360～1420	
156	瀬戸美濃	卸皿	灰釉	-	(5.0)	【2.6】	20	底部	299号址		古瀬戸後期	1360～1480	
157	瀬戸美濃	底卸目皿	灰釉	-	-	-	5	?	1669号址		古瀬戸中Ⅰ	1290～1310	
158	瀬戸美濃	卸目付大皿	灰釉	-	(18.0)	-	10	体部～底部	1559号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
159	瀬戸美濃	卸目付大皿	灰釉	-	-	-	10	口縁～体部	1685号址		古瀬戸後Ⅲ	1420～1440	
90-160	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	479号址		古瀬戸後Ⅳ古	1440～1460	
161	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	口縁	406号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
162	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	803号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
163	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	859号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
164	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	861号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
165	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	口縁	1705号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
166	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	20	口縁	1742号址		古瀬戸後Ⅳ新	1460～1480	
167	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	底部	721号址		古瀬戸後	1440～1480	
168	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	口縁	803号址		大窯1	1480～1530	
169	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	口縁	71-03グリッド		大窯2	1530～1560	
170	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	体部～底部	1437号址		古瀬戸後Ⅳ～大窯2	1440～1560	
171	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	(27.8)	-	【4.9】	20	口縁～体部	1376号址	遺構内	大窯3前半	1560～1575	

第2表　中近世陶磁器観察表(5)

挿図番号	産地	器種	釉薬	法量(cm)【現存値】(復元値) 口径	底径	器高	遺存度(%)	部位	出土位置	接合関係	編年	時期	備考
90-172	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	口縁~体部	647号址		大窯3後半	1575~1590	
173	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	口縁~体部	648号址		大窯3後半	1575~1590	
174	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	1133号址		大窯3後半	1575~1590	
175	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	1207号址		大窯3後半	1575~1590	
176	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	(24.8)	(9.6)	12.7	20	口縁~底部	1682号址		大窯3後半	1575~1590	
177	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	(11.0)	【5.9】	20	体部~底部	1207号址		大窯3	1560~1590	
178	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	1500号址		大窯4前半	1590~1600	
179	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	1682号址		大窯4前半	1590~1600	
180	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	6I-72グリッド		大窯4後半	1600~1610	
181	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	5	口縁	1207号址		登窯1	1610~1630	
182	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	口縁	1631号址		登窯1	1610~1630	
183	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	口縁	1401号址	遺構内	登窯2	1630~1650	
184	瀬戸美濃	擂鉢	錆釉	-	-	-	10	口縁	1401号址		登窯2	1630~1650	
91-185	瀬戸美濃	瓶子	灰釉	(16.0胴)	-	-	10	肩部	441号址・816号址	遺構間	古瀬戸後Ⅰ~Ⅱ	1360~1420	
186	瀬戸美濃	瓶子	灰釉	(16.0胴)	-	-	10	肩部~胴部	481B号址		古瀬戸後Ⅰ~Ⅱ	1360~1420	
187	瀬戸美濃	瓶子	灰釉	-	-	-	5	肩部	803号址		古瀬戸後Ⅰ~Ⅱ	1360~1420	
188	瀬戸美濃	瓶子	灰釉	-	-	-	10	胴下半部	1611号址		古瀬戸後Ⅰ~Ⅱ	1360~1420	
189	瀬戸美濃	瓶子or壺	灰釉	-	-	-	10	肩部	859C号址		古瀬戸中期	1290~1360	
190	瀬戸美濃	瓶子or壺	灰釉	-	-	-	5	胴部	1606号址		古瀬戸後Ⅲ~Ⅳ	1420~1480	
191	瀬戸美濃	祖母懐茶壺	鉄釉	-	-	-	10	胴部	803号址		古瀬戸後期	1360~1480	
192	瀬戸美濃	祖母懐茶壺	鉄釉	-	-	-	5	胴部	861号址		古瀬戸後期	1360~1480	
193	瀬戸美濃	祖母懐茶壺	鉄釉	-	-	-	10	底部	1535号址		古瀬戸後期	1360~1480	
194	瀬戸美濃	口広有耳壺	鉄釉	-	(11.0)	8.0	20	胴部~底部	1701号址	遺構内	大窯1	1480~1530	
195	瀬戸美濃	有耳壺	灰釉	(7.3)	-	8.6	40	口縁~胴部	1638号址	遺構内	登窯7	18C後半	
196	瀬戸美濃	有耳壺	灰釉	(6.8)	(11.2)	【5.3】	10	口縁~胴部	1695号址	遺構内	登窯7	18C後半	
197	瀬戸美濃	徳利	灰・錆釉	-	12.6	【10.7】	50	胴部~底部	1133号址		大窯3	1560~1590	
198	瀬戸美濃	袴腰形香炉	灰釉	(11.0)	6.0	4.8	60	口縁~底部	342号址・777号址・819号址	遺構間	古瀬戸後Ⅱ	1380~1420	
199	瀬戸美濃	袴腰形香炉	灰釉	(10.8)	-	【4.2】	10	口縁~体部	803号址	遺構内	古瀬戸後Ⅱ	1380~1420	
200	瀬戸美濃	袴腰形香炉	鉄釉	(13.1)	(8.2)	5.1	40	口縁~底部	724号址・1093B号址	遺構間	登窯4	17C第4四半期	
201	瀬戸美濃	仏花瓶	鉄釉	-	-	【5.3】	50	胴部	1561号址		古瀬戸中Ⅱ	14C第2四半期後	
202	瀬戸美濃	仏花瓶	鉄釉	-	4.2	【4.0】	20	脚部	1801号址		古瀬戸後Ⅲ~Ⅳ	1420~1480	
203	瀬戸美濃	尊式花瓶	灰釉	-	-	-	10	胴部	850号址	遺構内	古瀬戸後Ⅲ	1420~1440	
204	瀬戸美濃	筒形容器	灰釉	-	(9.5)	【4.7】	20	体部~底部	801号址・803号址・6Q-38グリッド	遺構間	古瀬戸後Ⅰ~Ⅱ	1360~1420	
205	瀬戸美濃	水注	灰釉	(11.0胴)	-	-	20	体部	513号址・803号址	遺構間・外	古瀬戸前Ⅲ~Ⅳ	1250~1290	
206	瀬戸美濃	耳付水注	鉄釉	-	-	-	5	底部	859A号址		古瀬戸後Ⅲ~Ⅳ	1420~1480	
207	瀬戸美濃	水滴	鉄釉	-	(11.6)	【2.0】	10	底部	648号址		大窯2~3	1530~1590	
208	瀬戸美濃	合子蓋	灰釉	5.0	-	1.2	70	-	488号址		古瀬戸中Ⅰ~Ⅱ	1290~1320	
209	瀬戸美濃	合子身	灰釉	-	(3.0)	【2.0】	40	体部~底部	1722号址		古瀬戸中Ⅰ~Ⅱ	1290~1320	
92-210	志戸呂	天目茶碗	鉄釉	-	-	-	30	口縁~体部	786号址・801号址	遺構間	古瀬戸後Ⅳ古	1440~1460	
211	初山	天目茶碗	鉄釉	(11.0)	-	【4.2】	5	口縁	1469号址・6I-14グリッド	遺構外	大窯3後半	1575~1590	
212	初山	天目茶碗	鉄釉	-	-	-	10	口縁~体部	1479号址		大窯3後半	1575~1590	
213	初山	内禿皿	鉄釉	-	6.2	【1.1】	40	底部	1229号址		大窯3後半	1575~1590	
214	初山	稜皿	鉄釉	(10.4)	6.0	2.0	40	口縁~底部	723号址	遺構内	大窯3後半	1575~1590	

第2表　中近世陶磁器観察表(6)

挿図番号	産地	器種	釉薬	法量(cm)【現存値】(復元値) 口径	底径	器高	遺存度(%)	部位	出土位置	接合関係	編年	時期	備考
92-215	初山	鉢皿	鉄釉	-	-	-	10	口縁	5I-23グリッド		大窯3後半	1575～1590	
216	初山	大皿	鉄釉	(24.8)	-	【8.5】	30	口縁～体部	1002号址・49I-99・5I-01グリッド	遺構外	大窯3後半	1575～1590	217と同一個体
217	初山	大皿	鉄釉	-	(14.0)	-	10	底部	1017号址		大窯3後半	1575～1590	216と同一個体
218	志戸呂	大皿	鉄釉	(29.4)	-	【5.8】	20	口縁～体部	647号址	遺構内	大窯4～登窯1	1590～1630	
219	志戸呂	擂鉢	鉄釉	-	-	-	5	口縁	1508号址		古瀬戸後IV古	1440～1460	
220	初山	擂鉢	鉄釉	-	-	-	10	体部	604号址・1605号址・7I-36グリッド	遺構間・外	大窯3後半	1575～1590	
221	初山	擂鉢	鉄釉	-	-	-	5	口縁	1688号址		大窯3後半	1575～1590	
222	初山	擂鉢	鉄釉	-	-	-	10	口縁	6H-45グリッド		大窯3後半	1575～1590	
223	初山	筒形香炉	鉄釉	-	10.8	5.5	40	体部～底部	624号址・1401号址・7I-29グリッド	遺構間・外	大窯3後半	1575～1590	
224	志戸呂	耳付水注	鉄釉	-	4.8	1.7	10	底部	802号址		古瀬戸後IV	1440～1460	
225	志戸呂	耳付水注	鉄釉	(3.9脚)	4.3	5.6	90	口縁～底部	1701号址		古瀬戸後IV	1440～1460	胴部に人為的な穿孔
226	志戸呂	橋利	鉄釉	(11.2脚)	-	-	10	体部	1535号址・1559号址	遺構間		18C	
227	肥前	碗	灰釉	-	4.1	【4.0】	40	体部～底部	1002号址・1017号址	遺構間		17C前葉	
228	肥前	碗	灰釉	-	4.5	【3.3】	50	体部～底部	1541号址			17C前葉	
229	唐前	擂鉢	無釉	-	-	-	20	体部～底部	1385号址・1500号址	遺構間		16C末葉～17C前葉	
230	唐前	橋利	自然釉	-	-	-	20	体部	7I-02グリッド			16C末葉～17C前葉	
93-231	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	620号址		5型式	1220～1250	
232	常滑	片口鉢	無釉	(22.6)	(11.1)	7.1	20	口縁～体部	620号址		6a型式	1250～1275	
233	常滑	片口鉢	無釉	(28.7)	-	【13.2】	20	口縁～体部	897号址		6a型式	1250～1275	
234	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1701号址		5型式	1220～1250	
235	常滑	片口鉢	無釉	-	(10.8)	5.1	30	体部～底部	1707号址			中世前半	Ⅰ類(有高台)
236	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	体部～底部	1722号址	遺構内		中世前半	Ⅰ類(有高台)
237	常滑	片口鉢	無釉	(15.0)	(11.0)	4.0	20	体部～底部	1743号址			中世前半	Ⅰ類(有高台)、砥石に転用
238	常滑	片口鉢	無釉	(32.6)	(16.0)	11.5	30	口縁～底部	620号址		7型式	14C前半	
239	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁	620号址		7型式	14C前半	
240	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	799号址		8型式	14C後半	
241	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1608号址		8型式	14C後半	
242	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1699号址		8型式	14C後半	
243	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1742号址		8型式	14C後半	
244	常滑	片口鉢	無釉	(19.7)	(9.7)	8.6	30	口縁～底部	298号址	遺構内	7型式	14C前半	
245	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	817号址		9型式	15C前半	
246	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	20	口縁～体部	1379号址		9型式	15C前半	
247	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁～体部	1685号址		9型式	15C前半	
248	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	20	口縁～体部	1697号址		9型式	15C前半	
249	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	20	口縁～体部	1722号址		9型式	15C前半	
250	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1722号址		9型式	15C前半	
251	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁	1742号址		9型式	15C前半	
252	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	151号址		10型式	15C後半	
253	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	300号址		10型式	15C後半	
254	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁	481号址		10型式	15C後半	
255	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	513号址		10型式	15C後半	
256	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	528号址		10型式	15C後半	
257	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	551号址		10型式	15C後半	

第2表　中近世陶磁器観察表(7)

挿図番号	産地	器種	釉薬	法量(cm)【現存値】(復元値) 口径	底径	器高	遺存度(%)	部位	出土位置	接合関係	編年	時期	備考
93-258	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	572号址		10型式	15C後半	
259	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	799号址		10型式	15C後半	
260	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	800号址		10型式	15C後半	
261	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁	803号址		10型式	15C後半	
262	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁	814号址		10型式	15C後半	
263	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	861号址	遺構内	10型式	15C後半	
264	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	868号址		10型式	15C後半	
265	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	1482号址		10型式	15C後半	
266	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	20	口縁～体部	1506号址		10型式	15C後半	
267	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	1606号址		10型式	15C後半	
268	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	1606号址		10型式	15C後半	
269	常滑	片口鉢	無釉	(24.6)	-	【8.6】	30	口縁～体部	1632号址・1637号址	遺構間	10型式	15C後半	櫛目あり
270	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	20	口縁～体部	1632号址		10型式	15C後半	
271	常滑	片口鉢	無釉	(26.9)	-	【8.3】	20	口縁～体部	1635号址		10型式	15C後半	刻線あり
272	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁	1638B号址		10型式	15C後半	
273	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1645号址		10型式	15C後半	
274	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1673号址		10型式	15C後半	
275	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁	1686号址		10型式	15C後半	
276	常滑	片口鉢	無釉	(33.8)	-	【7.7】	10	口縁～体部	1690号址	遺構内	10型式	15C後半	
277	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	1701号址		10型式	15C後半	
278	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	1742号址		10型式	15C後半	
279	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1744号址		10型式	15C後半	
280	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1798号址		10型式	15C後半	
281	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁	1801号址		10型式	15C後半	
94-282	常滑	片口鉢	無釉	(29.9)	(12.2)	10.4	30	口縁～底部	1811号址		10型式	15C後半	
283	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁	1813号址		10型式	15C後半	
284	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	5	口縁	1813号址		10型式	15C後半	
285	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	647号址		11～12型式	16C	
286	常滑	片口鉢	無釉	-	-	-	10	口縁～体部	1742号址		11～12型式	16C	
287	常滑?	片口鉢	無釉	(19.6)	-	【5.5】	20	口縁	472号址・513号址	遺構間	5～6a型式	1220～1275	
288	常滑?	片口鉢	無釉	-	-	-	20	口縁	803号址		11～12型式	16C	
289	瀬美	壺	自然釉	-	-	-	5	口縁	1610号址		2型式	1150～1175	
290	瀬美	壺	自然釉	-	-	-	20	口縁～肩部	1207号址		3型式	1175～1190	724号址、8H-33グリッドと同一個体
291	瀬美	壺	自然釉	-	-	-	5	口縁～頸部	1635号址		3型式	1175～1190	
292	瀬美	壺	自然釉	-	-	-	5	口縁	1722号址		3型式	1175～1190	
293	瀬美	壺	自然釉	-	-	-	20	頸部～肩部	1644号址・1684号址	遺構間		12C～13C	「天」刻字
294	瀬美	壺	自然釉	-	-	-	5	頸部	1701号址			12C～13C	
295	瀬美	壺	自然釉	-	-	-	10	肩部	1639号址・1744号址	遺構間		12C～13C	762号址、799号址と同一個体
296	瀬美	壺	自然釉	-	-	-	5	底部	1684号址			12C～13C	内面磨耗
297	常滑	壺	自然釉	(31.0)	-	-	5	口縁～頸部	1560号址		2型式	1150～1175	
298	常滑	壺	自然釉	-	-	-	5	口縁	1495号址		3型式	1175～1190	
299	常滑	壺	自然釉	-	-	-	5	口縁～頸部	1606号址		3型式	1175～1190	
300	常滑	壺	自然釉	-	-	-	5	口縁～頸部	1697号址		4型式	1190～1220	

第2表　中近世陶磁器観察表(8)

挿図番号	産地	器種	釉薬	法量(cm)【現存値】(復元値) 口径	底径	器高	遺存度(%)	部位	出土位置	接合関係	編年	時期	備考
84-301	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁～頸部	1708号址		4～5型式	1190～1250	
302	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁～頸部	1677号址		6a型式	1250～1275	
303	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁	1405号址		6a型式	1250～1275	
304	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁	1744号址		6a型式	1250～1275	
305	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁	1751号址		6a～b型式	1250～1300	
306	常滑	壺	無釉	−	−	−	5	口縁	1744号址		6a～b型式	1250～1300	
307	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁	1535号址・1606号址	遺構間	6b型式	1275～1300	
308	常滑	壺	無釉	−	−	−	10	口縁	1598号址	遺構内	6b型式	1275～1300	
309	常滑	壺	自然釉	(43.7)	−	【17.7】	40	口縁～体部	1605号址・1742号址・1751号址	遺構間・内	6b型式	1275～1300	
310	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁	1560号址		6b型式	1275～1300	
311	常滑	壺	無釉	−	−	−	5	口縁	1744号址		7型式	1300～1350	
312	常滑	壺	自然釉	−	−	−	10	口縁	1529号址		8型式	1350～1400	
313	常滑	壺	自然釉	(28.8)	−	−	5	口縁	1506号址		9型式	1400～1450	
314	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁	1582号址		9型式	1400～1450	
315	常滑	壺	無釉	−	−	−	10	口縁	1718号址		9型式	1400～1450	
316	常滑	壺	自然釉	−	−	−	10	口縁	1479号址		10型式	1450～1500	
317	常滑	壺	無釉	−	−	−	20	口縁	1534号址		10型式	1450～1500	
318	常滑	壺	無釉	−	−	−	5	口縁	1587号址		10型式	1450～1500	
319	常滑	壺	無釉	−	−	−	10	口縁	1701号址		9～10型式	1400～1500	
320	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁	1742号址		10型式	1450～1500	
321	常滑	壺	無釉	−	−	−	10	口縁	1002号址		11型式	1500～1550	
95-322	常滑	壺	無釉	(44.0)	(14.6)	【58.2】	70	口縁～底部	1002号址・1230号址	遺構間	11型式	1500～1550	
84-323	常滑	壺	無釉	−	−	−	5	口縁	1791号址		8型式	1350～1400	
324	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	胴部	1705号址			中世前半	押印文あり
325	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	胴部	1738号址			中世前半	押印文あり
326	常滑	壺	無釉	−	−	−	5	口縁	1534号址		6a型式	1250～1275	
327	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁	1632号址		6a型式	1250～1275	
328	常滑	壺	無釉	(37.2)	−	【6.5】	10	口縁	1495号址・1585A号址	遺構間	6b～7型式	1275～1350	
329	常滑	壺	無釉	(14.0)	−	【10.4】	20	口縁～胴部	1595号址		6b～7型式	1275～1350	
330	常滑	壺	無釉	−	−	−	5	口縁	724号址		10型式	1450～1500	
331	常滑	壺	無釉	−	−	−	20	口縁～胴部	1604号址・61-93グリッド	遺構外	10型式	1450～1500	「○」押印3カ所
332	常滑	壺	無釉	−	−	−	5	口縁	1652号址		10～12型式	1450～1600	
333	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	口縁～胴部	1801号址		10～12型式	1450～1600	
334	常滑	壺	自然釉	−	−	−	5	胴部	1809号址			13～14C	

（2）土器

a．カワラケ（第96図，第3表，図版31～33）

本遺跡のカワラケは，非ロクロカワラケと少数見られる静止糸切りのものを除くと，底部の切り離しは，回転方向が確認できるものはすべて右回転の糸切りによるものである。器形の分かるものを中心に分類した。

Ⅰa類

体部がやや丸みをもつ。見込みを軽くヨコナデする。糸切り底部の外周をナデて，底部と体部のなす角をとっている。池ノ尻館跡1a類に対応する。

Ⅰb類

体部に丸みがわずかに残る。見込みにヨコナデを加えている。

Ⅱa類

体部下半に屈曲をもって外反する。見込みにヨコナデを加えているものが確認できる。比較的薄手である。

Ⅱb類

体部の立ち上がりはやや急角度をもって外反するが，底部が少し突出する。口縁部に段ナデの見られるものがある。見込みのヨコナデは確認できない。底部の糸切り痕は細かい糸目である。

Ⅱc類

体部が直線的に外反する。Ⅱb類に類似するが，底部の突出がみられない。

Ⅱd類

浅い小皿。口唇部がやや薄手である。

Ⅱe類

小皿。薄手で体部が直線的に外反する。Ⅱa類とセット関係になるものと考えられる。

Ⅲa類

底部が小さく，体部が丸みをもって内湾する。内面に粘土ヒモの痕跡を残すものがある。見込みを強くヨコナデするものが多い。制作技術はⅢb類と共通するが，Ⅲb類より丁寧な作りである。

Ⅲb類

底部は小さめで，突出する。見込み中央が少し盛り上がり，見込み外周に線がみえるものが多い。これは制作時に見込みに団子状の粘土を貼り付けている手法による結果である可能性が大きい。口縁部に段ナデのみられるものが多い。Ⅲa類よりも雑なつくりで，それを時間差とみるならば，Ⅲa類よりも後出の可能性が大きい。

Ⅲc類

体部がやや急角度に立ち上がる。底部は小さく，内面見込み部分も平坦な部分がほとんどない。

Ⅲd類

体部にやや丸みを持って内湾する。口径がやや大きく，少し厚手で，凹凸の大きいロクロ目が強く残るものが多い。Ⅲa類の大型品としてセット関係になる可能性が大きい。

Ⅲe類

小皿。底部が小さく突出する。内面に粘土ヒモの痕跡を残すものがみられる。底部の糸切りは静止糸切りのものがみられる。胎土はややキメの粗い暗褐色のもので特徴的である。Ⅲa類・Ⅲb類とセットになる

可能性が高い。

Ⅲｆ類

小Ⅲ。Ⅲｅ類と胎土や粘土ヒモの痕跡を残すものがあるなど共通性が大きいが，底部の突出がみられない。Ⅲａ類・Ⅲｂ類とセットになる可能性が高い。

Ⅳａ類

体部下半にわずかに丸みをもって外反する。内面見込みと体部の境目が不明瞭で，内底面がやや小さい。

Ⅳｂ類

体部が直線的に外反し，器壁がやや厚手。体部と見込みの境が不明瞭で，内底面がやや小さい。底部の糸切りは１点は静止糸切り。

Ⅴ類

やや焼成の良いほぼ同じ胎土のものが２点。見込みに指頭によるロクロ目がやや強く残る。全体的に薄手である。

Ⅵ類

Ⅲ形の器形で，やや厚手。見込みのヨコナデははっきりしない。

Ⅶ類

体部の中央で屈曲しながら外反する。内面見込みには細かいロクロ目がやや強く残り，ヨコナデは加えられない。底部の糸切り痕は細かい糸目である。暗赤褐色の胎土で，古代の土師器に雰囲気が近い。

Ⅷ類

浅いⅢ形の非ロクロカワラケ。外面には粘土ヒモの痕跡がわずかに残るが，指頭痕は不明瞭である。内面にヘラ削り調整が加えられている。内外面全体に油煙が付着する。非ロクロカワラケは１点のみで，県内で少数検出されている非ロクロカワラケにもこれに類するものは確認できない。

編年的位置づけ

Ⅰ類は体部に丸みを残すもので，本遺跡でも古い様相の一群で，15ｃの前半から中葉までのものと考えられる。ただし，これらは点数は少なく，量的に多いのはⅡ類とⅢ類である。

Ⅱ類では，Ⅱａ類とⅡｄ類・Ⅱｅ類は千葉市生実城跡Ⅱ類に対応し，15ｃの後半になる。そのほかのⅡ類は，東総方面の山武郡横芝光町篠本城跡の例など15ｃ後半代のカワラケに類似する。

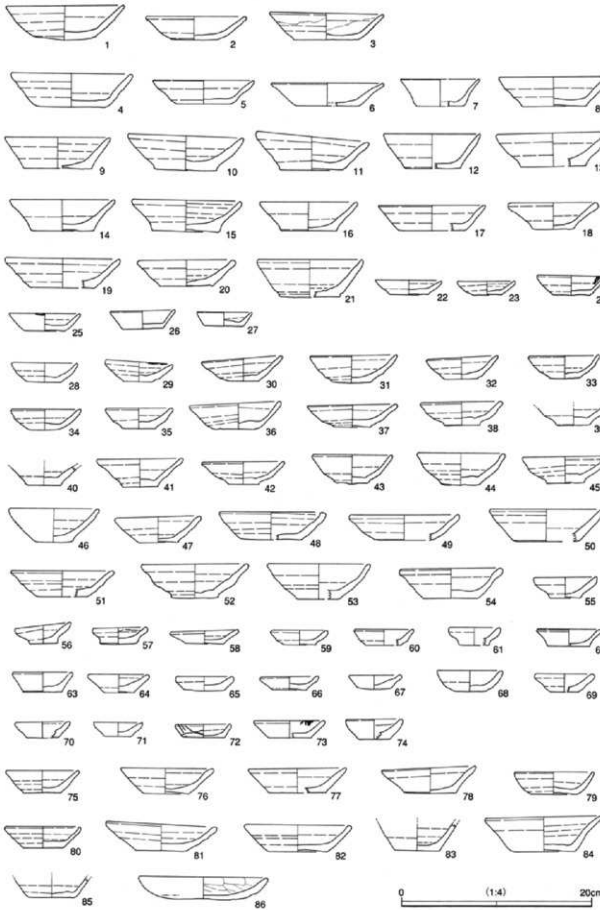
Ⅲ類は印旛郡酒々井町本佐倉北大堀遺跡の堀からの一括出土例（本年度報告書刊行予定）や酒々井町長勝寺脇館跡などに類例がみられ，16ｃの中葉以降におけるものと推定される。このⅢ類のうち，Ⅲａ・ｂ類には内面見込みに団子状の粘土を貼り付けたと推定される痕跡が確認され，注目される。同様の技法は茨城県の真壁城跡で既に報告されているが，県内で確認できたのははじめてである。これに伴うと考えられる小皿であるⅢｅ・ｆ類も，内面に粘土ヒモの痕跡を残す特徴的なもので，これらⅢ類はそれまでのカワラケの製作技法の伝統とは異質なものであり，その系譜が問題になってこよう。

四街道市和良比堀込城跡でも検出されている生実城跡Ⅲ類に相当するカワラケがここではみられず，カワラケの使用は16ｃ代にいったん途絶えた可能性がある。Ⅳ～Ⅵ類も16ｃ中葉以降におけそうだが，確定できない。Ⅶ類は15ｃ後半の体部が外反するタイプにも近いが，見込みにヨコナデがなく，胎土も異なり，時期的な位置づけが難しい資料である。

Ⅷ類としたのは，１点のみ検出された非ロクロカワラケであるが，浅い皿状を呈することから16ｃ代以降のもののように思われる。非ロクロカワラケは，近年ようやくその存在が確認され始めた検出例の非常に少ない遺物で，県内では柏市中馬場遺跡（未報告）・いすみ市畑合遺跡・香取郡神崎町仲台遺跡・佐原市伊地山藤之台遺跡第２地点・佐倉市臼井屋敷遺跡（現在整理中）についで６遺跡目の確認である。複数確認されているのは，畑合遺跡のみで他はいずれも１点のみである。本例は，浅い皿状を呈する点では伊地山藤之台遺跡第２地点の資料に類似するが，藤之台遺跡第２地点のものは比較的薄手で焼き上がりもより硬質であり，外観はかなり異なっている。

第96図－１はⅠａ類，２・３はⅠｂ類，４～７はⅡａ類，８～15はⅡｂ類，16～27はⅡｃ類，28～37はⅢａ類，38～45はⅢｂ類，46・47はⅢｃ類，48～54はⅢｄ類，55～61はⅢｅ類，62～74はⅢｆ類，75・76はⅣａ類，77・78はⅣｂ類，79・80はⅤ類，81・82はⅥ類，83～85はⅦ類，86はⅧ類で唯一の手づくねカワラケである。

引用文献
『仲台遺跡』1995年（財）香取郡市文化財センター調査報告書第36集
『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅵ』1992　佐原市教育委員会
『畑合遺跡・小箱台遺跡』2004　財団法人総南文化財センター


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
0
(1:4)
20cm

第96図　カワラケ

第3表　中近世土器観察表(カワラケ)(1)

挿図番号	器種	法量(cm)【現存値】復元値 口径	底径	器高	部位	遺存度(%)	整形・調整 外面	整形・調整 内面	胎土	焼成	色調 外面	色調 内面	出土位置	分類	時期	備考
96-1	カワラケ	12.5	6.6	3.8	口縁～底部	100	底部の外周ナデ	見込みヨコナデ	細砂粒微量	良好	灰橙	灰橙	866号址	Ⅱa	15C前～中	灯明皿に使用
2	カワラケ	(10.6)	5.2	2.5	口縁～底部	40	－	見込みヨコナデ	細砂粒微量	良好	暗灰	暗灰	1208号址	Ⅱb	15C前～中	灯明皿に使用
3	カワラケ	12.0	6.7	2.9	口縁～底部	80	－	見込みヨコナデ	細砂粒微量	良好	黒灰	暗灰	1809号址	Ⅱb	15C前～中	灯明皿に使用
4	カワラケ	(12.9)	(7.4)	3.2	口縁～底部	50	－	見込みヨコナデ	細砂粒微量	良好	暗灰	明灰	862号址	Ⅱa	15C後	灯明皿に使用
5	カワラケ	(10.8)	(5.7)	(2.6)	口縁～底部	40	－	－	砂粒微量	普通	灰褐	灰褐	1358号址	Ⅱa	15C後	
6	カワラケ	(8.4)	(5.0)	3.0	口縁～底部	30	－	－	細砂粒微量	普通	橙褐	橙褐	1632号址	Ⅱa	15C後	
7	カワラケ	(11.9)	(8.4)	2.5	口縁～底部	40	－	－	細砂粒微量	普通	橙褐	橙褐	1632号址	Ⅱa	15C後	
8	カワラケ	(11.6)	(8.7)	【3.2】	口縁～底部	50	口縁部段ナデ	－	細砂粒微量	良好	灰橙	灰橙	817号址	Ⅱb	15C後	
9	カワラケ	(11.2)	(7.2)	3.3	口縁～底部	40	口縁部段ナデ	－	細砂粒微量	良好	灰橙褐	灰橙褐	821号址	Ⅱb	15C後	
10	カワラケ	12.3	6.7	3.8	口縁～底部	50	底部突出	見込み調整	砂粒少量	良好	灰白	灰白	1002号址	Ⅱb	15C後	
11	カワラケ	(12.0)	6.6	【4.2】	口縁～底部	60	底部糸調整・口縁部段ナデ	－	細砂粒少量	良好	暗灰	暗灰	1208号址	Ⅱb	15C後	
12	カワラケ	(10.2)	(8.0)	3.6	口縁～底部	30	口縁部段ナデ	－	砂粒微量	普通	浪橙	浪橙	1227号址	Ⅱb	15C後	
13	カワラケ	(12.0)	(8.8)	3.5	口縁～底部	20	口縁部段ナデ	－	砂粒微量	良好	橙褐	橙褐	1385号址	Ⅱb	15C後	
14	カワラケ	(11.2)	6.7	【3.3】	口縁～底部	50	底部外周ナデ	－	砂粒少量	普通	橙褐	橙褐	1467号址	Ⅱb	15C後	
15	カワラケ	(11.7)	7.0	3.3	口縁～底部	60	底部糸調整	－	細砂粒微量	良好	橙褐	橙褐	1492号址	Ⅱb	15C後	
16	カワラケ	(10.3)	(5.8)	3.0	口縁～底部	30	－	－	細砂粒少量	良好	橙	橙	778号址	Ⅱc	15C後	
17	カワラケ	(11.4)	(7.1)	3.7	口縁～底部	20	－	－	細砂粒微量	良好	灰褐	灰褐	818号址	Ⅱc	15C後	
18	カワラケ	(9.5)	(4.4)	2.8	口縁～底部	20	口縁部段ナデ	－	砂粒少量	普通	灰褐	灰褐	1195号址	Ⅱc	15C後	
19	カワラケ	(12.2)	(8.8)	3.1	口縁～底部	30	口縁部段ナデ	－	細砂粒微量	良好	灰褐	灰褐	1208号址	Ⅱc	15C後	
20	カワラケ	(10.4)	(5.6)	2.7	口縁～底部	30	口縁部段ナデ	－	細砂粒微量	良好	灰褐	灰褐	1361号址	Ⅱc	15C後	
21	カワラケ	(11.3)	(8.4)	4.0	口縁～底部	20	－	－	細砂粒微量	良好	暗橙褐	暗橙褐	1378号址	Ⅱc	15C後	
22	カワラケ	(7.0)	(4.1)	1.5	口縁～底部	60	底部突出	－	細砂粒微量	良好	灰褐	灰褐	800号址	Ⅱd	15C後	灯明皿に使用
23	カワラケ	6.1	2.9	1.5	口縁～底部	100	－	－	細砂粒微量	良好	浪橙褐	浪橙褐	721号址	Ⅱe	15C後	
24	カワラケ	(7.2)	(4.0)	【2.1】	口縁～底部	80	－	－	細砂粒微量	良好	灰褐	灰褐	801号址	Ⅱe	15C後	灯明皿に使用
25	カワラケ	(7.5)	(4.3)	1.9	口縁～底部	30	－	－	細砂粒微量	良好	暗灰	暗灰	818号址	Ⅱe	15C後	灯明皿に使用
26	カワラケ	6.9	4.2	1.9	口縁～底部	90	－	－	細砂粒微量	良好	灰褐	灰褐	859C号址	Ⅱe	15C後	
27	カワラケ	5.9	4.1	1.5	口縁～底部	80	－	－	細砂粒微量	良好	浪橙褐	浪橙褐	1665号址	Ⅱe	15C後	
28	カワラケ	7.1	3.4	2.3	口縁～底部	100	－	見込み強いヨコナデ	細砂粒微量	良好	浪橙褐	浪橙褐	803号址	Ⅲa	16C中葉以降	灯明皿に使用
29	カワラケ	(7.0)	(3.6)	2.0	口縁～底部	30	－	－	砂粒微量	良好	茶褐	茶褐	803号址	Ⅲa	16C中葉以降	
30	カワラケ	8.6	3.2	3.1	口縁～底部	90	－	見込み強いヨコナデ	砂粒少量	良好	灰褐	灰褐	1378号址	Ⅲa	16C中葉以降	
31	カワラケ	9.5	3.9	2.5	口縁～底部	100	－	見込み強いヨコナデ	砂粒少量	良好	灰白	灰白	1742号址	Ⅲa	16C中葉以降	
32	カワラケ	9.7	3.4	3.0	口縁～底部	100	－	見込み強いヨコナデ	細砂粒微量	良好	橙褐	橙褐	1742号址	Ⅲa	16C中葉以降	
33	カワラケ	9.2	4.2	3.1	口縁～底部	70	－	見込み強いヨコナデ	細砂粒微量	良好	橙褐	橙褐	1742号址	Ⅲa	16C中葉以降	
34	カワラケ	7.5	3.2	2.5	口縁～底部	100	－	見込み強いヨコナデ	細砂粒微量	良好	橙褐	橙褐	1742号址	Ⅲa	16C中葉以降	
35	カワラケ	7.6	3.4	2.5	口縁～底部	90	－	見込み強いヨコナデ	細砂粒微量	良好	浪橙褐	浪橙褐	1742号址	Ⅲa	16C中葉以降	
36	カワラケ	7.4	2.3	3.2	口縁～底部	90	－	見込み強いヨコナデ	細砂粒少量	良好	浪橙褐	浪橙褐	1742号址	Ⅲa	16C中葉以降	
37	カワラケ	7.1	3.6	2.2	口縁～底部	100	－	見込み強いヨコナデ	細砂粒多量	良好	浪橙褐	浪橙褐	1742号址	Ⅲa	16C中葉以降	
38	カワラケ	(8.8)	3.8	2.5	口縁～底部	60	口縁部段ナデ	見込み盛りより	細砂粒少量	普通	橙褐	橙褐	803号址	Ⅲb	16C中葉以降	
39	カワラケ	－	3.6	【1.8】	体部～底部	30	－	見込み盛りより	細砂粒微量	良好	灰白	灰白	803号址	Ⅲb	16C中葉以降	灯明皿に使用
40	カワラケ	－	(3.7)	【2.0】	体部～底部	30	－	見込み盛りより	細砂粒微量	良好	橙褐	灰白	861号址	Ⅲb	16C中葉以降	
41	カワラケ	(9.2)	3.7	3.9	口縁～底部	40	口縁部段ナデ	見込み盛りより	細砂粒微量	良好	浪橙褐	浪橙褐	1209号址	Ⅲb	16C中葉以降	
42	カワラケ	8.8	3.2	2.4	口縁～底部	100	口縁部段ナデ	見込み盛りより	細砂粒微量	良好	灰黄	灰黄	1209号址	Ⅲb	16C中葉以降	
43	カワラケ	(8.5)	(3.6)	3.1	口縁～底部	50	口縁部段ナデ	見込み盛りより	細砂粒微量	良好	灰橙褐	灰橙褐	1358号址	Ⅲb	16C中葉以降	
44	カワラケ	(9.3)	(4.2)	3.4	口縁～底部	50	口縁部段ナデ	見込み盛りより	細砂粒微量	良好	灰白	灰白	1467号址	Ⅲb	16C中葉以降	灯明皿に使用
45	カワラケ	9.0	4.0	2.8	口縁～底部	100	口縁部段ナデ	見込み盛りより	細砂粒微量	良好	灰橙褐	灰橙褐	1505号址	Ⅲb	16C中葉以降	

第3表　中近世土器観察表(カワラケ)(2)

挿図番号	器種	法量(cm)【現存値】(復元値)			部位	遺存度	整形・調整		胎土	焼成	色調		出土位置	分類	時期	備考
		口径	底径	器高		(%)	外面	内面			外面	内面				
96-46	カワラケ	9.6	4.2	3.6	口縁～底部	100	–	–	細砂粒多量	良好	淡橙褐	淡橙褐	1208号址	IIIc	16C中葉以降	外面刺痕
47	カワラケ	9.2	4.2	2.8	口縁～底部	100	–	–	砂粒多量	普通	灰黒褐	灰黒褐	1500号址	IIIc	16C中葉以降	
48	カワラケ	(11.6)	(6.1)	【2.7】	口縁～体部	30	–	–	細砂粒少量	良好	淡灰褐	淡灰褐	551号址	IIId	16C中葉以降	
49	カワラケ	11.3	6.5	2.9	口縁～底部	90	–	見込み強いヨコナデ	細砂粒微量	良好	淡橙褐	淡橙褐	551号址	IIId	16C中葉以降	
50	カワラケ	(12.1)	(7.0)	3.4	口縁～底部	20	–	–	細砂粒微量	良好	暗灰	暗灰	721号址	IIId	16C中葉以降	
51	カワラケ	(10.8)	(5.5)	2.8	口縁～底部	20	–	–	砂粒少量	良好	茶褐	茶褐	799号址	IIId	16C中葉以降	
52	カワラケ	(11.4)	(5.0)	3.6	口縁～底部	30	底部突出	–	細砂粒微量	良好	橙褐	橙褐	837号址	IIId	16C中葉以降	
53	カワラケ	(10.9)	(4.6)	3.8	口縁～底部	30	底部突出	–	細砂粒微量	良好	淡橙褐	淡橙褐	1437号址	IIId	16C中葉以降	
54	カワラケ	(10.9)	(5.8)	3.2	口縁～底部	50	底部突出	–	細砂粒微量	良好	明灰褐	明灰褐	71-10グリッド・71-40グリッド	IIId	16C中葉以降	
55	カワラケ	(8.7)	3.2	2.2	口縁～底部	50	静止糸切り・底部突出	–	砂粒少量	良好	暗灰褐	暗灰褐	649号址	IIIe	16C中葉以降	
56	カワラケ	5.8	4.0	1.8	口縁～底部	100	底部突出	粘土七モ痕跡	砂粒多量	良好	暗橙褐	暗橙褐	721号址	IIIe	16C中葉以降	
57	カワラケ	5.9	2.9	2.3	口縁～底部	100	底部突出	粘土七モ痕跡	砂粒多量	良好	暗橙褐	暗橙褐	721号址	IIIe	16C中葉以降	
58	カワラケ	7.3	4.0	1.6	口縁～底部	100	–	–	細砂粒少量	良好	明茶褐	明茶褐	742号址	IIIe	16C中葉以降	
59	カワラケ	6.1	3.4	1.1	口縁～底部	100	底部突出	–	細砂粒微量	良好	暗灰褐	暗灰褐	858A号址	IIIe	16C中葉以降	
60	カワラケ	(6.3)	(3.6)	1.7	口縁～底部	20	静止糸切り・底部突出	–	細砂粒微量	良好	暗橙褐	暗橙褐	1354号址	IIIe	16C中葉以降	
61	カワラケ	(5.5)	(3.2)	1.9	口縁～底部	20	静止糸切り・底部突出	–	細砂粒微量	良好	明灰褐	明灰褐	1500号址	IIIe	16C中葉以降	
62	カワラケ	(6.9)	4.4	1.8	口縁～底部	30	–	–	細砂粒微量	良好	暗橙褐	暗橙褐	1356号址	IIIf	16C中葉以降	
63	カワラケ	(6.4)	4.2	2.1	口縁～底部	30	–	–	砂粒多量	良好	暗橙褐	暗橙褐	1356号址	IIIf	16C中葉以降	
64	カワラケ	6.2	4.4	1.6	口縁～底部	100	–	–	砂粒多量	良好	明灰褐	明灰褐	1401号址	IIIf	16C中葉以降	
65	カワラケ	(8.5)	3.3	1.9	口縁～底部	60	–	粘土七モ痕跡	砂粒少量	良好	明灰褐	明灰褐	1401号址	IIIf	16C中葉以降	
66	カワラケ	6.2	3.6	1.5	口縁～底部	70	–	–	細砂粒少量	良好	明灰褐	明灰褐	1433号址	IIIf	16C中葉以降	
67	カワラケ	5.6	3.6	1.1	口縁～底部	70	静止糸切り	–	砂粒多量	普通	橙褐	橙褐	1500号址	IIIf	16C中葉以降	
68	カワラケ	(7.0)	(3.5)	2.2	口縁～底部	30	–	–	砂粒微量	良好	明灰褐	明灰褐	1501B号址	IIIf	16C中葉以降	
69	カワラケ	(8.3)	(3.2)	1.9	口縁～底部	30	–	–	砂粒多量	良好	茶褐	茶褐	1501B号址	IIIf	16C中葉以降	
70	カワラケ	(5.8)	(3.5)	1.8	口縁～底部	30	静止糸切り	–	細砂粒多量	良好	橙褐	橙褐	1501B号址	IIIf	16C中葉以降	
71	カワラケ	(5.2)	3.0	1.5	口縁～底部	20	–	–	細砂粒少量	良好	明灰褐	明灰褐	1540号址	IIIf	16C中葉以降	
72	カワラケ	5.9	4.5	1.5	口縁～底部	50	静止糸切り	–	細砂粒少量	良好	暗橙褐	暗橙褐	1665号址	IIIf	16C中葉以降	
73	カワラケ	(7.5)	(4.4)	1.8	口縁～底部	40	静止糸切り	–	細砂粒微量	良好	暗橙褐	暗橙褐	1763号址	IIIf	16C中葉以降	灯明皿に使用
74	カワラケ	(8.0)	(3.4)	2.2	口縁～底部	60	静止糸切り	粘土七モ痕跡	細砂粒少量	良好	暗橙褐	暗橙褐	SI-56グリッド	IIIf	16C中葉以降	
75	カワラケ	(7.8)	4.2	2.4	口縁～底部	50	–	–	細砂粒微量	良好	暗茶褐	暗茶褐	1208号址	IVa	16C中葉以降	
76	カワラケ	(9.8)	4.8	2.8	口縁～底部	70	–	–	砂粒少量	良好	暗橙褐	暗橙褐	1360号址	IVa	16C中葉以降	内面二次焼成で斜落激しい
77	カワラケ	(10.4)	(5.2)	2.1	口縁～底部	50	静止糸切り	–	細砂粒微量	良好	暗灰	暗灰	614号址	IVb	16C中葉以降	
78	カワラケ	(10.6)	5.5	3.1	口縁～底部	70	–	–	細砂粒微量	良好	暗橙褐	暗橙褐	1208号址	IVb	16C中葉以降	
79	カワラケ	8.4	4.8	2.4	口縁～底部	100	–	指頭によるロクロ目強く残る	細砂粒微量	良好	暗橙褐	暗灰褐	013号址	V	16C中葉以降	
80	カワラケ	8.1	4.2	2.2	口縁～底部	50	–	指頭によるロクロ目強く残る	細砂粒少量	良好	暗灰褐	暗灰褐	013号址	V	16C中葉以降	
81	カワラケ	11.8	5.4	3.1	口縁～底部	80	–	–	細砂粒微量	良好	暗灰褐	暗灰褐	551号址	VI	16C中葉以降	
82	カワラケ	(10.4)	6.3	2.8	口縁～底部	70	–	–	砂粒少量	良好	灰黒褐	灰黒褐	1592号址	VI	16C中葉以降	
83	カワラケ	–	4.7	2.9	体部～底部	20	–	ロクロ目が強く残る	細砂粒多量	良好	黒灰	黒灰	859B号址	VII	?	
84	カワラケ	12.4	5.5	3.8	口縁～底部	70	–	ロクロ目が強く残る	細砂粒微量	良好	淡橙褐	淡橙褐	1208号址	VII	?	
85	カワラケ	–	4.7	2.2	体部～底部	20	–	ロクロ目が強く残る	細砂粒微量	良好	黒灰褐	黒灰褐	1357号址	VII	?	
86	カワラケ	13.8	8.0	2.4	口縁～底部	90	粘土七モ痕跡あり	へラ削り	砂粒少量	良好	灰黒	灰黒	1192号址	VIII	?	赤ロクロ

b．土器鍋（第97図，図版33）

胎土・焼成法により，大きく3種類に分類でき，体部の形で体部の上部に屈曲を持つものと持たないものに分けられる。全体的な形では，深さの深いものから，焙烙のように非常に浅いものまでみられるが，深いものは少なく，中間的な深さのものが主体となる。全形がわかるものが少ないので，ここでの分類は内耳の形状を中心として分類している。

①胎土・焼成

A類：還元焼成系（瓦質系）　灰色の須恵器に近い色のものから，褐色味を帯びたり，黒味の強いものまで幅がある。

B類：酸化炎焼成系　黄褐色～黒褐色の焼成

C類：酸化炎焼成系　胎土に雲母を含むもの

②器形

体部のプロポーションで2分類できる。体部の上部で屈曲するものをⅠ類とし，屈曲のないものをⅡ類とした。ただし，C類には明瞭な屈曲をもつものが確認できなかったので，この分類の対象としていない。全体的な形では，深さの深いもの（深鍋型），焙烙のように非常に浅いもの（焙烙型），両者の中間タイプ（浅鍋型）に分けられる。

③内耳の取り付け方

内耳を取り付ける場合，粘土紐を折り曲げて内壁に貼り付けるが，その貼り付けによる内耳の作り方により分類が可能である。粘土紐を上下に貼り付けたあと，その間の内壁に調整を加えないもの。そこに，わずかに調整を加えるもの。内耳部の内壁を軽く外側に押し出すもの。内耳部の内壁を外側に強く押し出してふくらますものがある。

④内耳の断面

内耳の粘土紐は，粘土紐の断面が円形のものと帯状の扁平なものとがある。扁平なものは円形のものに比べれば新しい傾向がある。

以上の胎土と器形および内耳の取り付け方の組み合わせにより，次のとおり分類した。

AⅠ－1類

内耳を口縁上部から付けており，内耳部分の内壁を軽くなでる。口縁端面は平坦面となっている。

AⅠ－2類

内耳下端が，体部の屈曲より下がった位置に付けられる。口縁端面はやや丸みをおびる。内耳部分の内壁を外側に押し出す。体部の屈曲がやや不明瞭になっている。

AⅡ－1類

内耳は口縁端部から少し下がった位置から付けられ，幅の広めのアーチ状となる。内耳断面はやや扁平化している。内耳部分の内壁には調整を加えない。

AⅡ－2類

AⅡ－1類よりも内耳の付く位置が下がっている。内耳部分の内壁には弱いナデ調整を加えている。

BⅡ－1類

やや薄手で内面側に張り出しを持たない口縁部から内耳を付けており，内耳部分の内壁にわずかにナデを加える。

ＢⅡ－２類

口縁端面がややくぼみ，内側に張り出す。内耳は口縁から少し下がった位置から貼り付けている。内耳の断面は扁平でやや幅広である。内耳部の内壁を軽く外側に押さえている。

ＢⅡ－３類

口縁部は外側に斜めに下がる。

Ｃ－１類

平坦な口縁部で，体部の上部にすこし屈曲をもち，内壁に稜状の突出がある。内耳の断面は少し扁平で，内耳内壁を少し押し出している。胎土に細かい雲母を含み，長石が多く入る。

Ｃ－２類

口縁は平らで内側に張り出す。内耳の断面は円形で，内耳内壁には調整を加えないか，少し調整を加える程度。体部上部にわずかに屈曲を持つものがある。胎土に金雲母を多く含む。

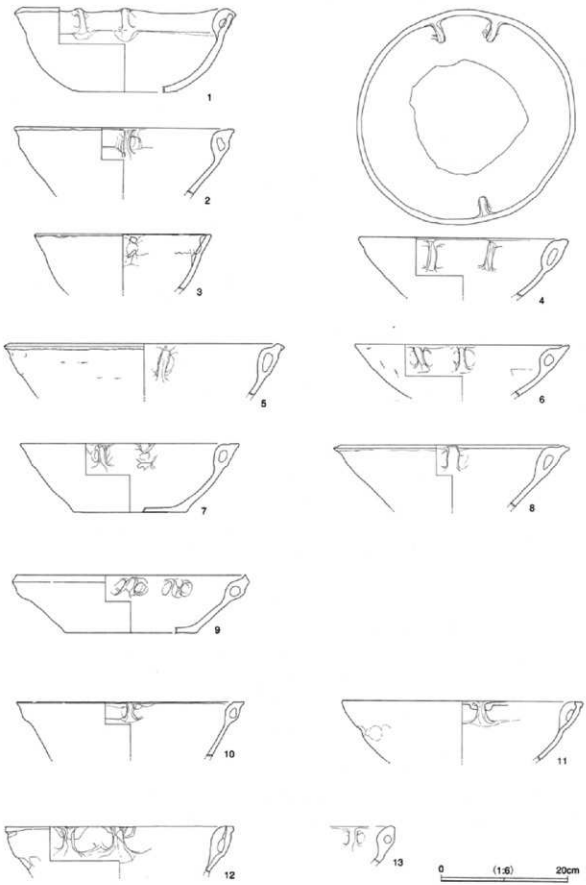
Ｃ－３類

Ｃ－２類に似ているが，口縁の内側への張り出しは小さくなる。内耳部の内壁を少し外に押し出す。内耳の断面は扁平化している。胎土に雲母を含む。

Ｃ－４類

口縁部は丸みを持ち，口縁の内側への張り出しは小さくなる。内耳部の内壁を外に押し出す。内耳の穴は小さめである。

第97図－１はＡⅠ－１類，1588号址（井戸跡）出土。共伴遺物は常滑窯甕，カワラケの小片のみ。２はＡⅠ－２類で1378号址（土坑）出土。共伴遺物は大窯４段階の瀬戸美濃窯黄瀬戸大皿，Ⅲ類のカワラケ。遺構の時期は１６ｃ末葉以降か。３はＡⅠ－３類で859Ａ号址（井戸跡）出土。共伴遺物は中国製染付Ｂ群（15ｃ後半～16ｃ前半），瀬戸美濃窯緑釉小皿（古瀬戸後期Ⅳ新）。遺構の時期は15ｃ後葉。４はＡⅡ－１類で1208号址（大型竪穴状遺構）出土。カワラケのⅡｂ，Ⅱｃ，Ⅲｃ，Ⅳａ，Ⅶ類が共伴している。５はＡⅡ－２類で1309号址（土坑）出土。共伴遺物は土器鍋の小片のみ。６もＡⅡ－２類で1632号址（粘土貼土坑）出土。共伴遺物は古瀬戸後期Ⅱ～Ⅳの瀬戸美濃窯製品が主体。遺構の時期は15ｃ後半。７はＢⅡ－１類で1002号址（溝跡）出土。共伴遺物は大窯３後半段階の初山窯大皿，完形に近い常滑窯11型式の甕などが出土している。遺構の時期は16ｃ後半以降。８はＢⅡ－２類で1526号址（土坑）出土。共伴遺物はⅣ類の土器擂鉢（第98－８），大窯２～３段階の瀬戸美濃窯丸皿などが出土。遺構の時期は16ｃ中葉以降。９はＢⅡ－３類で６Ⅰ－55～57グッリドを中心とした整地面からの出土で，大窯３前半段階の瀬戸美濃窯天目茶碗，大窯３後半段階の初山窯内禿皿が共伴する。10はＣ－１類で1742号址（井戸跡）出土。古瀬戸後期Ⅱ～Ⅳの瀬戸美濃窯製品，常滑窯８～10型式の甕・片口鉢などが共伴する。遺構の時期は15ｃ後半以降。11はＣ－２類で788号址（土坑）からの出土。共伴遺物はなし。12はＣ－３類で803号址（大型竪穴状遺構）出土。共伴遺物は古瀬戸後期Ⅳ新～大窯１段階の瀬戸美濃窯製品を主体とする。遺構の時期は15ｃ末葉～16ｃ前葉。13はＣ－４類で1528号址（土坑）からの出土。共伴遺物はカワラケ，土器鍋の小片の他に18ｃ以降の近世磁器も含まれるので，遺構の時期は近世の可能性もある。



第97図　土器鍋

C．土器擂鉢（第98図，図版33）

胎土・焼成法により，大きく２種類に分類できる。

A類：還元焼成系（瓦質系）　灰色の須恵器に近い色のものから，褐色味を帯びたり，黒味の強いものまで幅がある。

B類：酸化炎焼成系　赤みが強く，明らかに酸化炎焼成系と見られるものが代表的だが，黒っぽく還元焼成との区別のつきにくいものもある。他に点数は少ないが胎土に雲母を含むものもみられる。

口縁部の形状により，下記の５タイプに分類した。このうちⅠ～Ⅳ類は千葉市の生実城跡における分類（千葉市2002）と同じである。Ⅴ類はいまのところ，本遺跡以外では確認されていない。

Ⅰ類

１点のみ確認されている。口縁部内側に突出部をもつもの。古瀬戸後期Ⅳ新段階の擂鉢によく似ており，そのコピーと考えられる。還元焼成により比較的硬質に焼かれている。本遺跡の土器擂鉢のなかでは最も古いタイプと考えられる。

Ⅱ類

口縁に沈線を持つもので，沈線は口縁内側に明瞭に施される。

Ⅲ類

口縁部が角ばってきており，口縁端面中央に弱い沈線が残る。

Ⅳ類

口縁が角ばっているもの。

Ⅴ類

口縁部の外側に縁帯をもつもの。その形状が瀬戸美濃窯の大窯１段階の擂鉢によく似ており，その模倣品と考えられる。内外面とも表面はやや平滑に仕上げられており，比較的丁寧な仕上げである。胎土に雲母を含むものもみられる。クシ目が見えるものは少ないが，横方向に加えられているものがある。

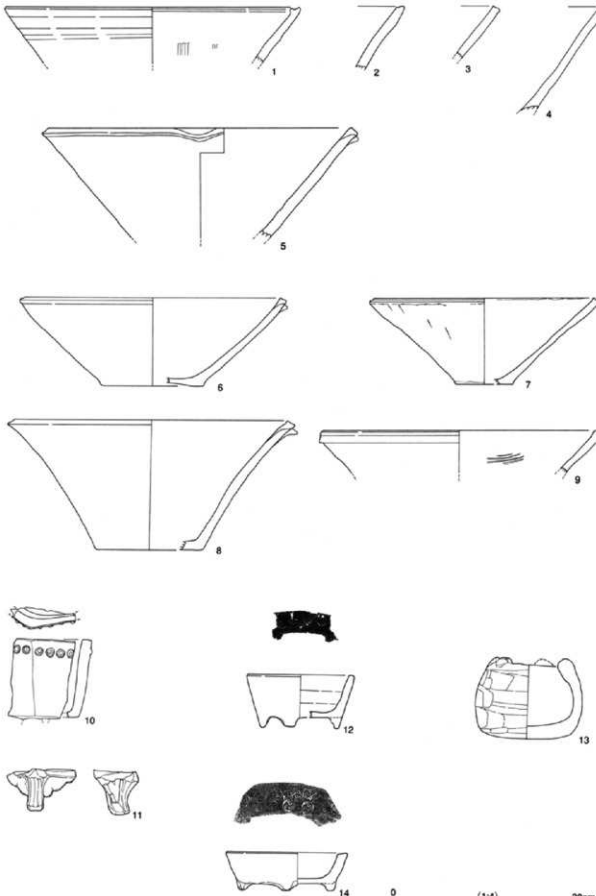
第98図－１はⅠ－３類で803号址（大型竪穴状遺構）出土。土器鍋第97図－12と同じ遺構で，遺構の時期は１５ｃ末葉～16ｃ前葉。２はⅡ－３類で1290号址（溝跡）出土。共伴遺物はⅢｂ類のカワラケと土器鍋で，遺構の時期は中世後半。３～７はⅢ類。３は803号址（大型竪穴状遺構）出土で１の土器擂鉢および土器鍋12と同じ遺構。遺構の時期は15ｃ末葉～16ｃ前葉。４は1467号址（井戸跡）からの出土。共伴遺物はⅡｂおよびⅢｂ類のカワラケ，Ｄ２類の中国産青磁碗，土器鍋などが出土。遺構の時期は15ｃ後半以降。５は1227号址（井戸跡）出土。共伴遺物は古瀬戸後期Ⅰ～Ⅱ段階の瀬戸美濃窯灰釉小鉢，Ⅱｂ類のカワラケ，近世陶磁器，などが出土。遺構の時期は15ｃ後半以降か。６は1208号址（大型竪穴状遺構）からの出土で，土器鍋の第97図－４と同じ遺構。カワラケのⅡ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅶ類が共伴している。７は1356号址（やぐら状遺構）出土。共伴遺物はカワラケのⅡａ・Ⅲｂ・Ⅲｆ類，古瀬戸後期Ⅰ～Ⅲ段階盤類，古瀬戸後期Ⅲ段階の平碗，登窯１段階の鉄釉筒形碗などが出土。時期的には15ｃ中葉～17ｃ前葉と幅が大きい。８はⅣ類で1526号址（土坑）からの出土。共伴遺物は大窯２～３段階の灰釉丸皿，土鍋などがある。遺構の時期は16ｃ中葉以降か。９はⅤ類で1002号址（溝跡）出土。土器鍋の第97図－７と同じ遺構で16ｃ後半以降の時期。

引用文献

『千葉市生実城跡－昭和63年度・平成３～６年度調査－』2002　財団法人千葉市文化財調査協会

d．土器香炉（第98図，図版33）

10は多角形（八角形か）を呈し，脚部を含めた器高12.0cm，器厚0.95cmを測る。外面は灰黄褐色，内面は使用されたため全面的に黒灰色をなす。胎土は灰黄色の緻密な細砂粒。非在地系の製品と考えられる。839号址（地下式坑）からの出土で，共伴遺物は古瀬戸後期Ⅳ古段階の平碗，土器鍋，土器擂鉢などがある。遺構の時期は15ｃ中葉以降。同一個体が541号址（溝跡）から出土。541号址の時期は中世と近世の遺物が混在しているため，15ｃ前半以降としか捉えられない。11は10の香炉に付く脚部で獣脚状をなす。299号址（溝跡）からの出土。12は残存部20%，推定口径11.4cm，推定底径8.4cm，器高5.7cmを測る。底面を除いて内外面とも赤彩が施されている。胎土は小石を僅かに含むものの細砂粒で緻密である。外面には菱形のスタンプ文が巡っている。内面は部分的に黒灰色化し，全体的に器壁は荒れている。859Ａ号址（井戸跡）と878号址（製鉄関連遺構）からそれぞれ出土し接合する。858Ａ号址は他にＢ群の中国製染付皿，古瀬戸後期Ⅳ新段階の緑釉小皿・腰折皿などが出土している。遺構の時期は15ｃ後葉と捉えられている。878号址は他に土器鍋・擂鉢が出土し，遺構の時期は15ｃ以降と思われる。13はほぼ完存品で，口径8.8cm，胴径11.3cm，底径6.2cm，器厚0.9から1.4cm，を測る。口縁部に５カ所の突起を有する（１カ所欠損）。脚部は元々付いていなかった。内外面はヘラ削り，ナデ調整が施されているが，調整痕は明瞭である。口縁端の内外面とも二次焼成を受けている。在地産の製品と思われる。1294号址（土坑）からの出土。共伴遺物は他にない。14は残存部25%，推定口径12.7cm，推定底径10.2cm，器高4.0cm，を測る。色調は内外面とも暗赤褐色で，胎土は雲母粒を多く含み緻密である。煤の付着が認められないことから，香炉としては未使用と思われる。器壁外面には巴と菱形のスタンプ文が施されている。1195号址（溝跡）からの出土で，共伴遺物はⅡｃ類のカワラケ，登窯１段階の瀬戸美濃窯産の志野釉鉄絵丸皿などがある。



第98図　土器擂鉢・土器香炉

（3）石製品

a．石塔（第99～101図）

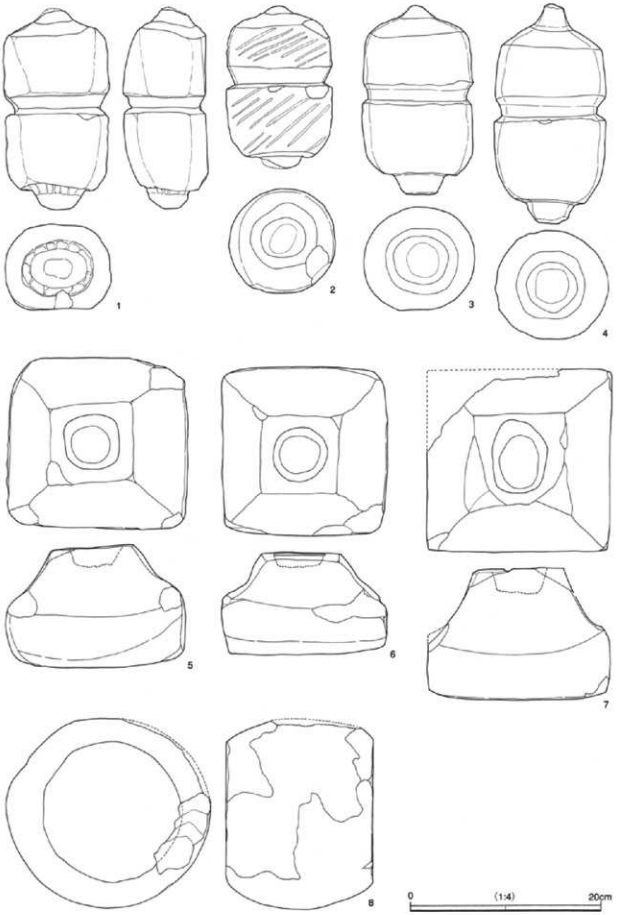
本遺跡からは多量の石塔が出土している。五輪塔では空風輪11点，火輪８点，水輪５点，地輪５点，宝篋印塔は相輪１点，笠２点，武蔵型板碑は細片が多いため個体数は不明である。下総型板碑も細片が多く個体数は不明である。

第99図－１～４はいわゆる「伊豆石」といわれる安山岩製の五輪塔の空風輪。１は重さ2.4kgで，1002号址（溝跡）出土。２は重さ2.4kgで，1495号址（溝跡）出土。３は重さ3.6kgで，1742号址（井戸跡）から出土し，遺構の時期は15ｃ後半。４は重さ3.6kgで，３と同様1742号址からの出土。５～７は安山岩製の火輪。５は重さ6.8kgで，５Ｉ-60グリッドからの出土。６は重さ5.4kgで，５Ｉ-10・20グリッドからの出土。７は重さ5.8kgで，空風輪３，４と同じく1742号址からの出土。８はいわゆる「銚子石」といわれる砂岩，第100図－９・10は安山岩製の水輪。８は重さ9.8kgで，７と同様1742号址からの出土。９は重さ6.6kgで1611号址（井戸跡）からの出土。1611号址の時期は14ｃ後半と捉えられている。10は重さ5.8kgで，８と同様1742号址からの出土。11～13は安山岩製の地輪。11は重さ7.2kgで，５Ｉ－20・30グリッドからの出土。12は重さ8.8kgで，1645号址（井戸跡）からの出土。遺構の時期は15ｃ後半以降。13は重さ6.4kgで，四面に梵字が刻まれている。1495号址（溝跡）からの出土。14は安山岩製の15は「銚子石」製の宝篋印塔の笠部。14は重さ8.4kgで，1742号址（井戸跡）からの出土。1742号址からは五輪塔の３，４，７，８，10が出土している。15は重さ1.7kgで，６Ｈ－57グリッドからの出土。16，17は緑泥片岩製の武蔵型板碑である。16は上半部は欠損している。表面には種字のみ刻まれている。残存長40.5cm，幅18.6cm，厚さ2.5cm，重さ3.0kg，を測る。1722号址（井戸跡）からの出土で，共伴する遺物は12ｃ～14ｃ代の陶磁器を多く含むが，最新の遺物は古瀬戸後期Ⅳ新段階の腰折皿である。17はほぼ完存品で全長56.9cm，幅19.4cm，厚さ2.3cm，重さ5.0kg，を測る。表面には二条線，種字，蓮座，花瓶，花瓶の右側には文和三（四）年（1355）の紀年銘，左側には十月日の銘が刻まれている。850号址（井戸跡）からの出土し，共伴遺物には古瀬戸後期Ⅲ段階の灰釉壺式花瓶，土器鍋などが出土している。

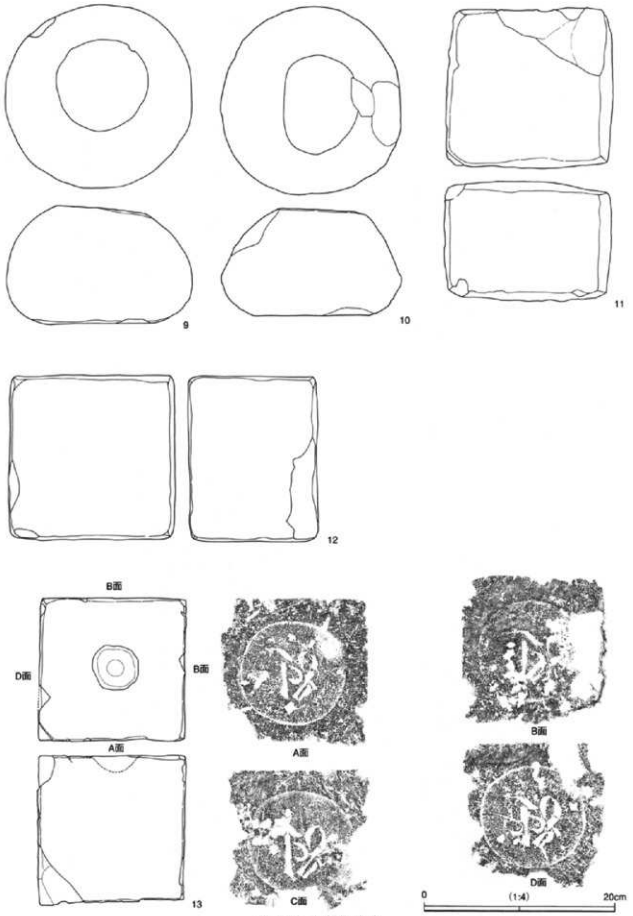
b．その他の石製品（第101・102図）

第101図－18～20は硯である。18は40%ほどの残存で，残存長6.4cm，残存幅4.8cm，厚さ1.6cm，を測る。石質は粘板岩。720号址（土坑）からの出土で，土器擂鉢・鍋が共伴している。19は30%ほど残存で，残存長6.6cm，残存幅5.7cm，厚さ2.8cm，を測る。石質は砂岩。７Ｉ－02グリッドからの出土。20はほぼ完品で，長さ16cm，幅4.6cm，厚さ1.5cm，重さ71.6ｇ，を測る。石質は泥岩。６Ｉ－85グリッドからの出土。

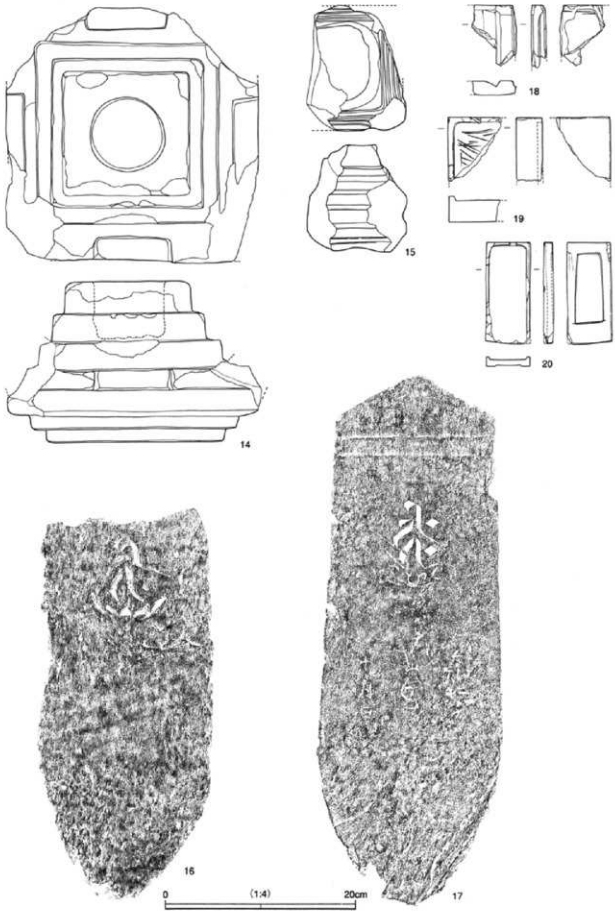
第102図－21・22は石臼で，21は1227号址（井戸跡）と６Ｉ－14グリッドから出土し接合する。22は1358号址（土坑）出土で，共伴遺物には登窯１段階の瀬戸美濃窯製鉄釉筒形碗，登窯１～２段階の志戸呂窯製筒形碗，などが出土している。23は石鉢で，残存部30%ほどの体部片で推定口径28.8cm，残存器高7.5cm，を測る。内面はよく摩耗している。６Ｇ－39および66グリッドから出土し接合する。24は滑石製の温石でほぼ完品である。長さ14.0cm，幅8.2cm，厚さ2.3cm，重さ385ｇ，を測る。右端部上位には径1.1cmの穿孔が認められる。25～36は砥石で，総数249点出土している。石質は25～30は凝灰岩，31～33は安山岩である。34は須恵器片，35は砂岩製五輪塔空輪部，36は緑泥片岩製の板碑片，とそれぞれの部材を再利用した転用砥石である。



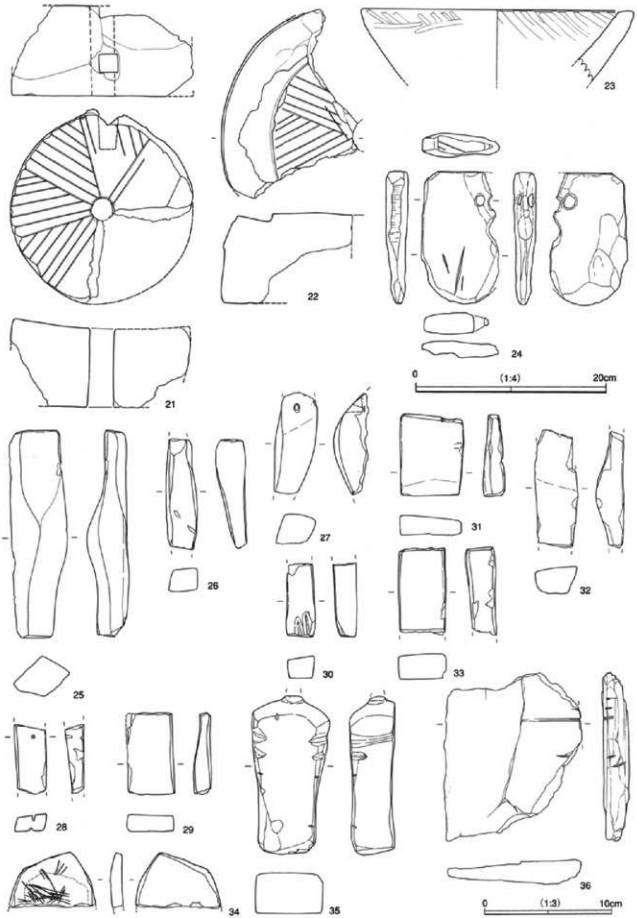
第99図　石製品（1）



第100図　石製品（2）



第101図　石製品（3）



第102図　石製品（4）

（4）金属製品（第103～106図，第4表）

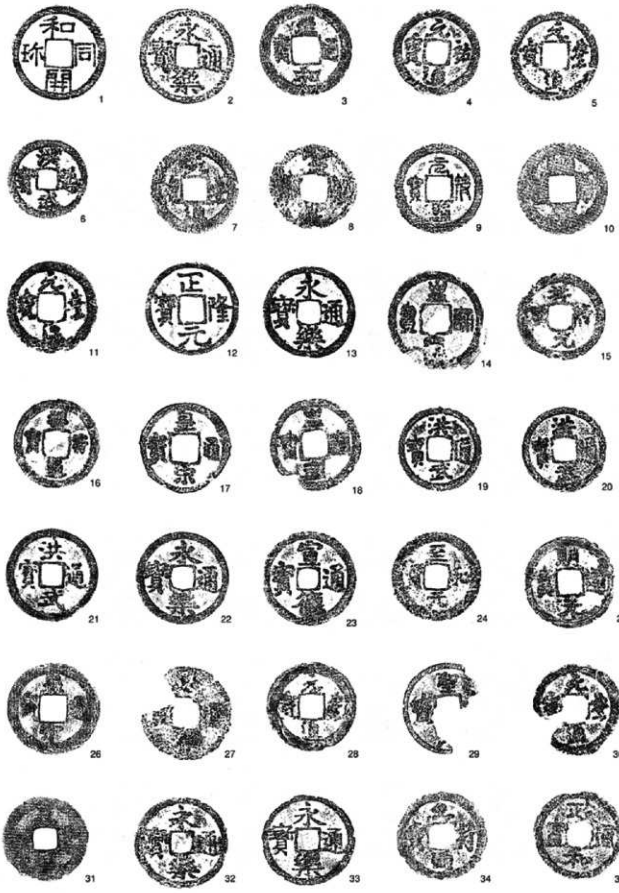
a．銭貨

銭貨は本遺跡から古代銭1枚（和同開珎），中世渡来銭124枚（永楽通寶42，元豊通寶12，皇宋通寶8，開元通寶8，洪武通寶7，熙寧元寶5，天聖元寶5，聖宋元寶4，元符通寶4，宣徳通寶3，元祐通寶3，治平元寶2，紹聖通寶2，政和通寶2，景祐元寶2，嘉祐元寶1，嘉祐通寶1，祥符元寶1，祥符通寶1，祥符□寶1，淳化元寶1，至和通寶1，至和元寶1，大観通寶1，淳熙元寶1，正隆元寶1，天禧通寶1，元□□寶1），銭銘不明渡来銭14枚，近世銭18枚（古寛永通寶10，新寛永通寶5，新古不明寛永通寶2，文久通寶1），が出土している。

銭銘が判読できる中世渡来銭124枚の内，唐銭8枚，北宋銭62枚，南宋銭1枚，金銭1枚，明銭52枚，の割合となる。124枚中で明銭52枚の占める割合は41.9%，永楽通寶（42枚）だけで33.9%，洪武通寶（7枚）だけで5.6%となる。

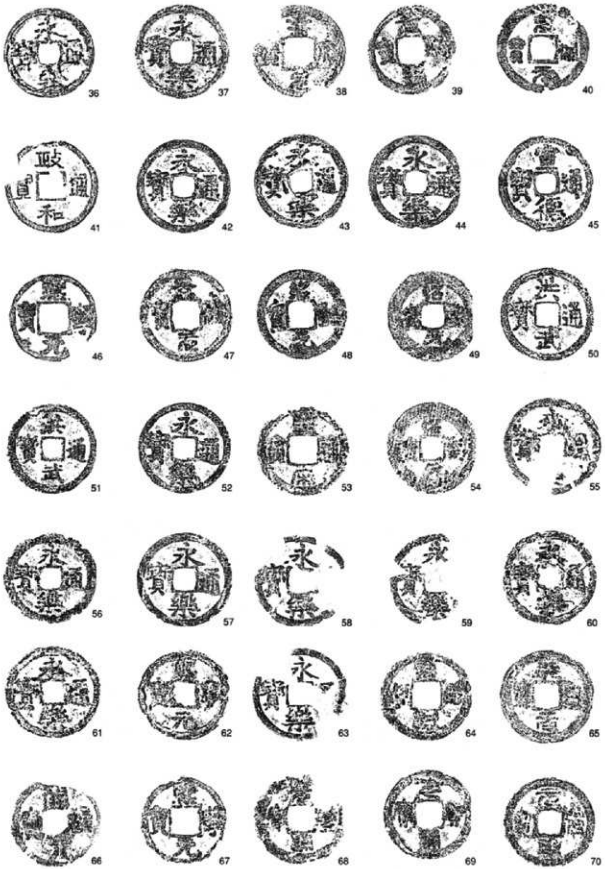
（5）木製品（第107図）

1は網台の目盛板と思われるもので，残存長24.6cm，幅2.9cm，厚さ1.5cm，を測る。2は用途不明の木製品で，表裏面に四角形の切込みが認められる。残存長26.4cm，残存幅5.2cm，を測る。3は桶の底板で，径14.5cm，厚さ1.4cm，を測る。4も桶の底板の残部で，径14.8cm，厚さ0.7cm，を測る。1～3は1742号址（井戸跡）からの出土。共伴遺物にはⅢa類のカワラケがまとまって出土している他に，古瀬戸後期Ⅲ～Ⅳ段階の瀬戸美濃窯製品が出土している。4は1772号址（溝跡）からの出土で，共伴遺物には古瀬戸後期Ⅰ～Ⅱ段階の瓶子などがある。



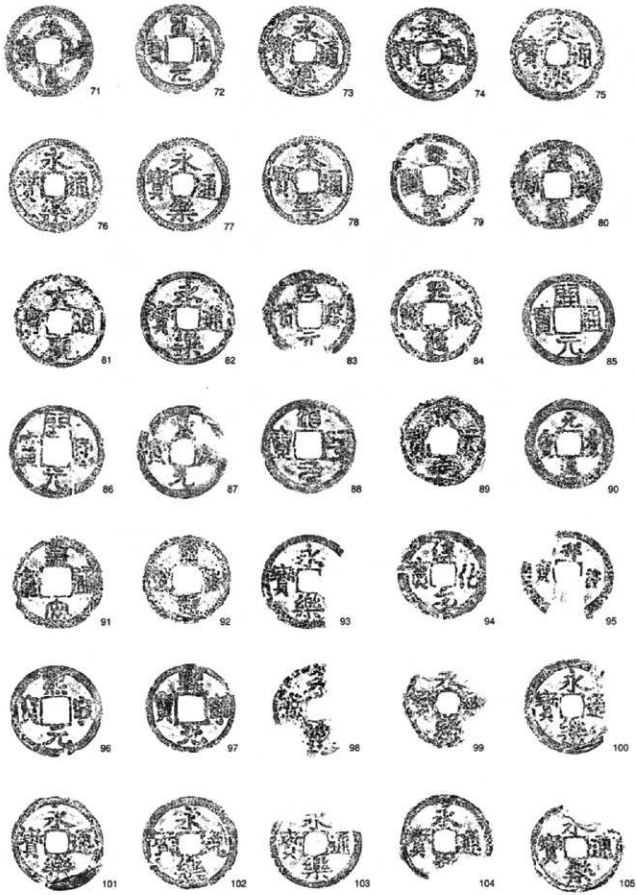
第103図　銭貨（1）

0　(1:1)　5cm



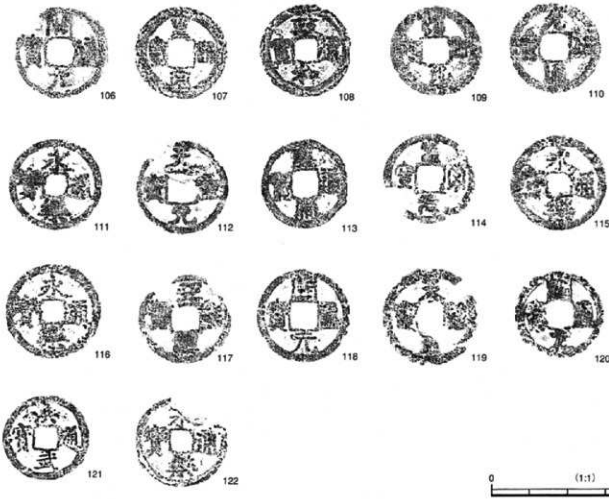
第104図　銭貨（2）

0　(1:1)　5cm



第105図　銭貨（3）

0　(1:1)　5cm


106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
0
(1:1)
5cm

第106図　銭貨（4）

第4表　古代・中世銭貨一覧表(遺構順)(1)

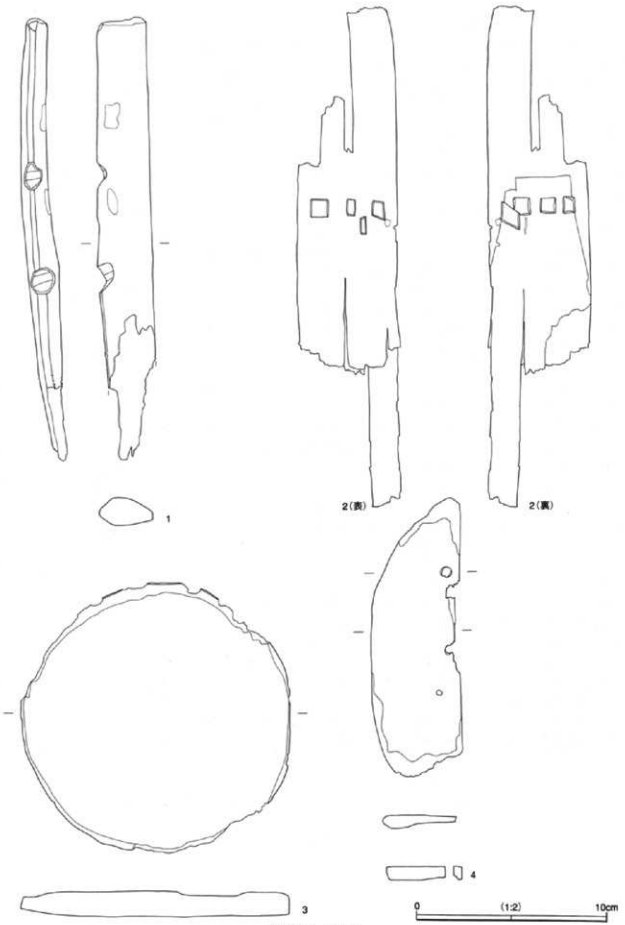
挿図番号	出土遺構	遺構の種類	銭貨名	書体	初鋳年	径 mm	法量 厚さ mm	重量 g	備考
103-1	245号址	縄文土坑	和同開珎		日本708年	25.0	1.4	2.3	銅銭
2	266号址	火葬施設	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.3	1.7	被熱
3	298号址	土坑	至和通寶	真書	北宋1054年	24.7	1.2	2.8	
4	481A号址	〃	元祐通寶	行書	北宋1086年	23.5	1.5	2.3	
5	481B号址	土坑墓	元豊通寶	行書	北宋1078年	24.0	1.4	2.4	
6	482号址	溝	洪武通寶	行書	明1368年	21.5	1.8	2.7	
7	540号址	地下式坑	元豊通寶	行書	北宋1078年	24.0	1.4	3.1	
8	576号址	方形土坑	天聖元寶	真書	北宋1023年	24.0	1.2	1.9	模鋳銭？
9	700号址	大型竪穴	元符通寶	篆書	北宋1098年	23.8	1.4	3.2	
10	700号址	〃	元符通寶	篆書？	北宋1098年	24.5	1.2	2.7	
11	721号址	土坑	元豊通寶	行書	北宋1078年	24.0	1.2	2.5	
12	721号址	〃	正隆元寶	真書	金1157年	24.8	1.6	2.4	
13	721号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	24.5	1.5	3.0	
14	758A号址	方形竪穴	皇宋通寶	篆書	北宋1038年	25.4	1.5	2.8	
15	800号址	土坑群	祥符元寶	真書	北宋1009年	23.8	1.0	2.3	
16	800号址	〃	祥符通寶	真書	北宋1009年	23.3	1.0	2.1	
17	800号址	〃	皇宋通寶	真書	北宋1038年	24.5	1.2	3.3	
18	800号址	〃	皇宋通寶	篆書	北宋1038年	24.5	1.1	2.9	
19	800号址	〃	洪武通寶	真書	明1368年	22.3	1.3	2.4	
20	800号址	〃	洪武通寶	真書	明1368年	22.6	1.1	2.6	
21	800号址	〃	洪武通寶	真書	明1368年	24.6	1.5	3.5	
22	800号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	24.6	1.4	3.3	
23	800号址	〃	宣徳通寶	真書	明1433年	25.0	1.0	2.9	
24	801号址	〃	至和元寶	真書	北宋1054年	24.0	1.3	2.6	
25	802号址	〃	開元通寶	真書	唐621年	24.5	1.4	3.6	銹着痕有
26	802号址	〃	皇宋通寶	真書	北宋1038年	24.4	1.1	2.8	銹着痕有
27	802号址	〃	皇宋通寶	篆書	北宋1038年	24.0	1.7	1.8	銭文明瞭 チョーク化
28	802号址	〃	元豊通寶	行書	北宋1078年	24.0	1.3	3.9	銹着痕有
29	802号址	〃	聖宋元寶	行書	北宋1101年	24.3	1.2	1.5	1/2欠
30	850号址	井戸	元豊通寶	行書	北宋1078年	23.8	1.0	0.9	チョーク化顕著
31	861号址	土坑群	元豊通寶	行書	北宋1078年	23.4	1.2	3.2	磨耗顕著
32	861号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.5	3.2	
33	1002号址	溝	永楽通寶	篆書	明1408年	24.5	1.3	3.0	
34	1359号址	土坑	元符通寶	行書	北宋1098年	24.2	1.1	2.2	
35	1359号址	〃	政和通寶	真書	北宋1111年	23.5	1.2	2.0	チョーク化顕著
104-36	1377号址	溝	永楽通寶	真書	明1408年	24.0	1.3	2.9	銹着痕有
37	1377号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.3	2.3	銹着痕有
38	1379号址	土坑	嘉祐元寶	真書	北宋1056年	23.5	1.3	1.6	銹着痕有
39	1379号址	〃	宣徳通寶	真書	明1433年	25.0	1.2	1.6	銹着痕有
40	1492号址	〃	聖宋元寶	篆書	北宋1101年	24.7	1.2	2.4	銹着痕有
41	1492号址	〃	政和通寶	真書	北宋1111年	24.6	1.1	1.3	銹着痕有
42	1492号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.6	3.1	銹着痕有
43	1492号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.6	3.4	銹着痕有
44	1492号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.3	2.9	銹着痕有

第4表　古代・中世銭貨一覧表(遺構順)(2)

掲図番号	出土遺構	遺構の種類	銭貨名	書体	初鋳年	径 mm	法量 厚さ mm	重量 g	備考
104-45	1492号址	土坑	宣徳通寶	真書	明1433年	25.3	1.7	4.5	宣徳＋政和銭着
46	1528号址	〃	熙寧元寶	真書	北宋1068年	23.8	1.3	1.8	
47	1538号址	火葬施設	景祐元寶	篆書	北宋1034年	25.0	1.2	3.2	
48	1538号址	〃	紹聖通寶	真書	北宋1094年	23.9	1.3	2.5	
49	1538号址	〃	紹聖通寶	真書	北宋1094年	24.5	1.3	3.5	
50	1538号址	〃	洪武通寶	真書	明1368年	23.8	1.5	3.2	
51	1538号址	〃	洪武通寶	真書	明1368年	25.0	1.4	3.1	裏上 浙
52	1538号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	24.5	1.6	3.5	
53	1731B号址	土坑墓	皇宋通寶	篆書	北宋1038年	24.4	1.1	2.1	銹着痕有　被熱
54	1731B号址	〃	紹聖通寶	行書	北宋1094年	24.3	1.2	2.6	銹着痕有　被熱
55	1731B号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.4	2.3	銹着痕有　被熱
56	1731B号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	24.8	1.4	2.5	
57	1731B号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.3	1.3	2.6	被熱　チョーク化
58	1731B号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.3	1.1	被熱　チョーク化
59	1731B号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	24.1	1.5	0.9	チョーク化
60	1731B号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	2.0	3.4	銹着痕有　被熱
61	1731B号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.5	3.2	銹着痕有　被熱
62	1731B号址	〃	熙寧元寶	真書	北宋1056年	24.0	1.6	0.8	銹着痕有　被熱
63	1731B号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.1	1.4	1.6	遺存不良
64	1731D号址	〃	嘉祐通寶	真書	北宋1056年	24.4	1.2	1.0	3点銹着
65	1731D号址	〃	天聖元寶	篆書	北宋1023年	25.0	1.1	2.3	銹着痕有
66	1731D号址	〃	開元通寶	真書	唐621年	23.0	1.2	3.5	3点銹着
67	1731D号址	〃	熙寧元寶	真書	北宋1068年	23.3	1.3	2.3	被熱　軽量
68	1731D号址	〃	元豊通寶	真書	北宋1078年	24.0	1.2	1.7	
69	1731D号址	〃	元豊通寶	真書	北宋1078年	23.7	2.1	4.5	下と銹着
70	1731D号址	〃	元祐通寶	行書	北宋1086年	24.2	1.7	3.9	銹着痕有
105-71	1731D号址	〃	元符通寶	篆書	北宋1098年	24.6	1.1	2.2	銹着痕有
72	1731D号址	〃	聖宋元寶	篆書	北宋1101年	24.0	1.5	3.6	銹着痕有
73	1731D号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.6	3.9	銹着痕有
74	1731D号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.6	1.7	3.2	銹着痕有
75	1731D号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.5	3.2	銹着痕有
76	1731D号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	24.0	1.4	3.4	銹着痕有
77	1731D号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	24.7	1.3	2.5	銹着痕有
78	1731D号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.5	3.5	銹着痕有
79	1732号址	〃	元豊通寶	篆書	北宋1078年	24.2	2.7	6.8	下と銹着
80	1732号址	〃	元豊通寶	真書	北宋1078年	24.0	1.4	2.5	銹着痕有
81	1732号址	〃	大観通寶	真書	北宋1107年	24.3	1.6	3.0	銹着痕有
82	1732号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.6	3.6	銹着痕有
83	1732号址	〃	淳熙元寶	真書	北宋1174年	24.0	1.7	1.9	銹着痕有　裏上に「十」
84	1733号址	〃	天聖元寶	篆書	北宋1023年	24.8	3.7	6.5	3点銹着
85	1737号址	〃	開元通寶	真書	唐621年	24.6	1.2	3.1	銹着痕有
86	1737号址	〃	開元通寶	真書	唐621年	24.6	1.1	1.8	銹着痕有
87	1737号址	〃	開元通寶	行書	唐621年	24.5	1.1	1.2	銹着痕有
88	1737号址	〃	紹聖元寶	篆書	北宋1094年	25.0	1.4	2.2	銹着痕有、縁辺一部欠

第4表　古代・中世銭貨一覧表(遺構順)(3)

挿図番号	出土遺構	遺構の種類	銭貨名	書体	初鋳年	径 (mm)	法量 厚さ (mm)	重量 (g)	備考
105-89	1737号址	土坑墓	元豊通寶	篆書	北宋1078年	24.0	1.3	3.2	銹着痕有
90	1737号址	〃	元豊通寶	行書	北宋1078年	24.4	1.3	3.5	銹着痕有
91	1746号址	〃	皇宋通寶	篆書	北宋1038年	25.0	1.1	1.9	
92	1746号址	〃	紹聖元寶	篆書	北宋1094年	24.0	1.5	3.0	
93	1746号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.1	1.7	1.6	約1/3欠損　被熱
94	1747号址	〃	淳化元寶	行書	北宋990年	24.2	1.4	2.2	遺存不良
95	1747号址	〃	祥符□寶	真書	北宋1009年	25.0	1.3	1.2	銹着痕有
96	1747号址	〃	熙寧元寶	真書	北宋1068年	24.7	1.2	2.2	銹着痕有
97	1747号址	〃	熙寧元寶	真書	北宋1068年	24.0	1.7	2.8	銹着痕有
98	1747号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	22.2	1.3	0.7	銹着痕有
99	1757号址	火葬施設	永楽通寶	真書	明1408年	24.4	1.0	1.3	縁辺部約1/3欠損
100	1766号址	土坑墓	永楽通寶	真書	明1408年	25.3	1.3	2.5	銹着痕
101	1766号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.3	1.3	3.7	銹着痕有
102	1766号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.3	1.2	3.7	銹着痕有
103	1766号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	24.5	1.4	1.6	銹着痕有
104	1766号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	24.8	1.4	2.5	銹着痕
105	1766号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.3	1.4	1.6	銹着痕
106-106	1776号址	〃	開元通寶	真書	唐621年	24.3	1.2	1.9	銹着痕有
107	1776号址	〃	皇宋通寶	篆書	北宋1038年	24.7	1.2	2.8	銹着痕有
108	1776号址	〃	政和通寶	真書	北宋1111年	24.6	1.1	2.7	銹着痕有
109	1776号址	〃	熙寧元寶	真書	北宋1068年	24.3	1.2	2.3	銹着痕有
110	1776号址	〃	元祐通寶	行書	北宋1086年	24.4	1.2	2.4	銹着痕有
111	1776号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.7	3.6	銹着痕有
112	1777号址	〃	天聖元寶	真書	北宋1023年	24.7	1.1	2.4	
113	1777号址	〃	皇宋通寶	真書	北宋1038年	24.2	1.4	3.1	
114	1777号址	〃	聖宋元寶	篆書	北宋1101年	24.2	1.5	2.3	
115	1777号址	〃	永楽通寶	真書	明1408年	25.0	1.6	2.6	
116	1777号址	〃	永楽通寶	真書	不明	25.5	2.2	3.0	
117	1787号址	〃	□□通寶	真書	明1408年	23.5	1.4	1.6	
118	1788号址	〃	開元通寶	真書	唐621年	25.0	1.3	2.5	
119	1801号址	溝	天禧通寶	真書	北宋1017年	25.5	1.2	1.8	
120	1807号址	土坑墓	開元通寶	真書	唐621年	23.0	1.5	1.9	
121	1807号址	〃	洪武通寶	真書	明1368年	23.0	1.4	1.4	
122	1817号址	土坑	永楽通寶	真書	明1408年	24.0	1.4	1.6	



第107図　木製品

第３章　中近世以外の遺構・遺物

第１節　古墳時代

（１）1210号址（竪穴住居跡）（第108図）

長軸約4.3m，深さ約24cmを測る。隅丸正方形を呈していたと考えられる。主柱穴は明瞭でない。南側壁際に入り口状施設を有する。主軸はほぼ真北である。

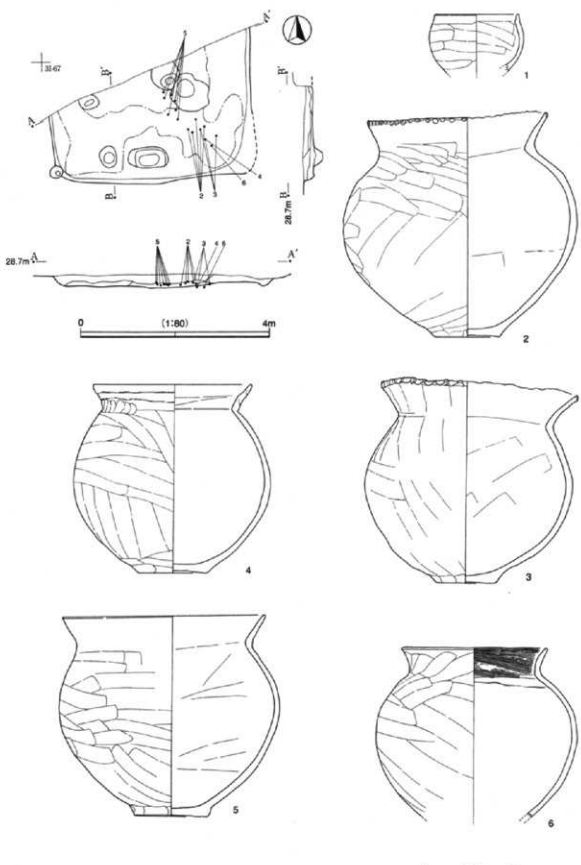
出土遺物は１は椀形土器で口径推定8.3cm，器高推定6.2cm，遺存度は全体の30%，胎土は密で混入物は多い。焼成は良好，調整は内面はヨコナデとヘラナデ，外面はヨコ方向のヘラ削りとヨコナデである。２は甕形土器で口径18.8cm，底径7.0cm，器高23.5cm，遺存度は全体の90%，胎土は密だが混入物は多い。焼成は良好，調整は内面はヘラ削りとヘラナデ，外面もヘラ削りとヘラナデで口縁部にキザミがある。３は甕形土器で口径20.5cm，底径6.6cm，器高21.2cm，遺存度は全体の90%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヘラ削りとヘラナデ，外面もヘラ削りとヘラナデで口縁部にキザミがある。４は甕形土器で口径16.6cm，底径7.5cm，器高21.0cm，遺存度は全体の55%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヨコナデとヘラナデ，外面はヨコ・斜位ヘラ削りとヨコナデとヘラナデ，ロクロ成形の底外調整は手持ちヘラ削りである。５は甕形土器で口径21.5cm，底径8.0cm，器高21.5cm，遺存度は全体の85%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヘラ削りとヘラナデ，外面もヘラ削りとヘラナデ，ロクロ成形の定外調整は木葉痕である。６は甕形土器で口径15.1cm，器高推定18.1cm，遺存度は全体の75%，胎土は密だが混入物は多い。焼成は良好，調整は内面は口縁部のみハケ目で以下はヘラナデ，外面はヘラ削りの後，斜位・ヨコナデである。

多くの甕形が床面近くに纏まって出土しており，竪穴住居跡の一括遺物として良いであろう。西上総地域に系譜をもつ輪積痕や口縁部刻目を有する。ヘラ整形が依然として主体を占め，現在の編年観では４ｃを下ることはない古墳時代出現期の所産であろう。

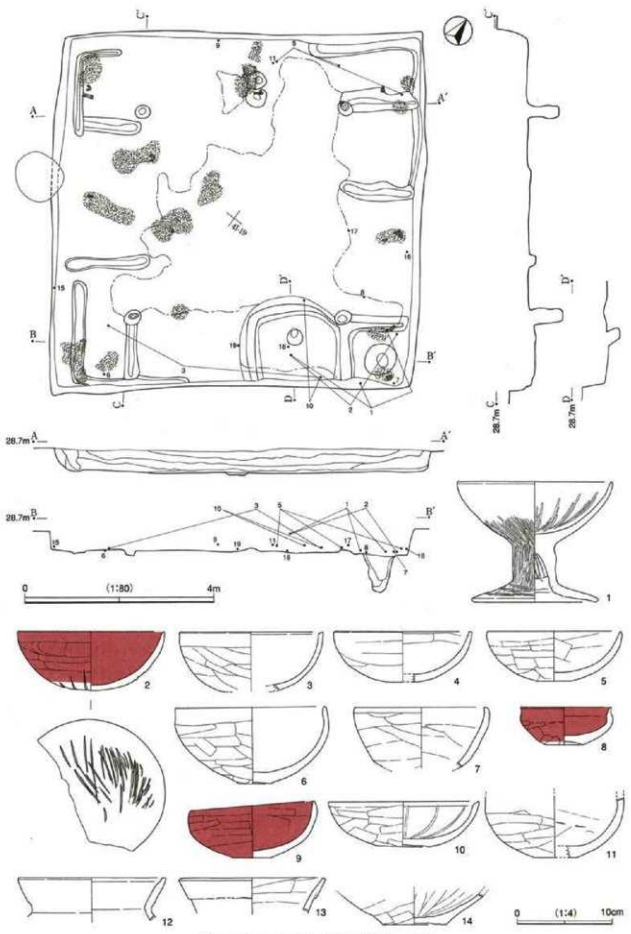
（２）1240号址（竪穴住居跡）（第109図，図版20）

長軸約7.9m，短軸約7.46m，深さ約48cmを測る。ほぼ正方形で，床面は堅く，間仕切り溝が各所に残る。主柱穴は明瞭でない。焼土や墨が散らばり火災を受けた可能性がある。南壁際にほぼ方形に巡る土手状の高まりがあり，柱穴も有することから入り口施設と考えられるが，石製模造品が出土しており工房スペースの可能性も否定はできない。

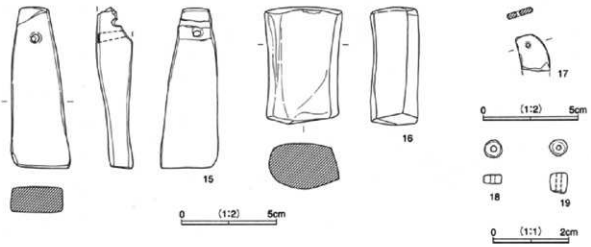
出土遺物は１は高杯形土器で口径推定16.1cm，底径推定13.4cm，器高推定12.7cm，遺存度は全体の55%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はミガキとヨコナデとヘラナデ，外面はタテヘラ削りとミガキとヨコナデである。２は杯形土器で口径推定15.4cm，器高推定6.2cm，遺存度は全体の50%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヨコナデ，外面はヘラ削り後ナデとヨコナデである。３は杯形土器で口径15.0cm，器高推定6.25cm，遺存度は全体の80%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヘラ削り後ナデとヨコナデ，外面もヘラ削り後ナデとヨコナデである。４は杯形土器で口径推定14.0cm，底径推定3.4cm，器高5.4cm，遺存度は全体の30%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヘラ削りとナデ，外面もヘラ削りとナデである。５は椀形土器で口径14.0cm，底径3.6cm，器高5.2cm，遺存度は全体の40%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヘラ削り



第108図　1210号址（竪穴住居跡）



第109図　1240号址（竪穴住居跡）（1）



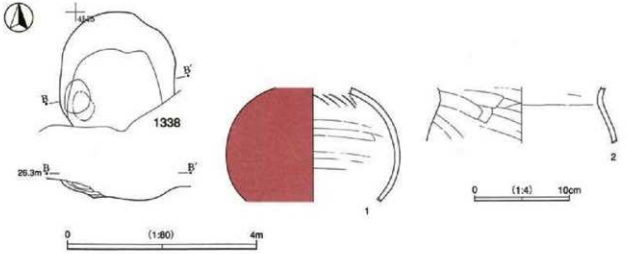
第110図　1240号址（竪穴住居跡）（2）

とナデ，外面もヘラ削りとナデである。6は鉢形土器で口径16.0cm，底径3.3cm，器高8.2cm，遺存度は全体の100%，胎土は密で混入物は少なく，雲母を少し含む。焼成は良好，調整は内面はナデ，外面はヘラ削りとナデである。7は杯形土器で口径推定13.6cm，器高推定6.4cm，遺存度は全体の20%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヘラ削りとナデ，外面もヘラ削りとナデである。8は鉢形土器で口径推定9.6cm，底径4.0cm，器高3.9cm，遺存度は全体の80%，胎土は密で混入物は多い。焼成は良好，調整は内面はナデ，外面はヘラ削りとナデである。9は椀形土器で口径推定13.0cm，底径2.0cm，器高6.0cm，遺存度は全体の80%，胎土は密で混入物は少なく，雲母少量を含む。焼成は良好，調整は内面はヘラ削りとナデ，外面もヘラ削りとナデである。10は杯形土器で口径推定16.0cm，底径推定5.7cm，器高4.9cm，遺存度は全体の60%，胎土は密で混入物は多い。焼成は良好，調整は内面はミガキとナデ，外面はヘラ削りとナデである。11は椀形土器で底径4.6cm，器高推定6.5cm，遺存度は全体の30%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヘラ削りとナデ，外面もヘラ削りとナデである。12は甕形土器で口径15.4cm，器高推定4.6cm，遺存度は全体の16%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヨコナデ，外面もヨコナデである。13は壺形土器で口径推定15.1cm，器高推定3.8cm，遺存度は全体の5%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面はヘラナデ，外面はヨコナデである。14は壺形土器で底径推定6.8cm，器高推定3.3cm，遺存度は全体の5%，胎土は密で混入物は多い。焼成は良好，調整は内面はヘラ削りとヘラナデ，外面もヘラ削りとヘラナデ，ロクロ成形の底外調整は全面手持ちヘラ削りである。15は砥石で最大長8.55cm，最大幅3.1cm，最大厚1.9cm，口内径0.4cmである。16は砥石で最大長6.2cm，最大幅4.15cm，最大厚2.6cmである。17は滑石製模造品で最大厚0.3cm，口内径0.2cmである。18は滑石製臼玉で最大径0.48cm，口内径0.15cmである。19はガラス玉で最大径0.48cm，口内径0.13cmである。

土師器の編年観から大まかに5世紀後半期～末葉の位置は与えられるが，細分編年はここではしない。

（3）1388号址（竪穴状遺構）（第111図）

ほぼ楕円形で長軸推定2.5m，短軸2.4m，深さ45cmを測る。出土遺物は1は壺形土器で器高推定12.1cm，遺存度は全体の5％，胎土は密で混入物は多い。焼成は良好，調整は内面はヘラナデ，外面はヘラ削り後丁寧なナデである。2は甕形土器で器高推定5.9cm，遺存度は全体の5％，胎土は密で混入物は多い。調整は内面ナデとヘラナデ，外面はヨコ・斜位方向ヘラ削りである。5世紀後半代である。

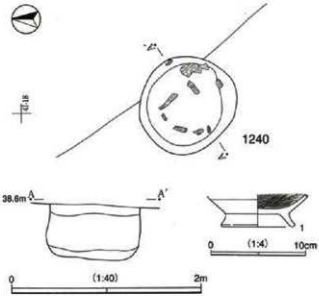


第111図　SI1388号竪穴状遺構

第2節　平安時代，その他

（1）1268号址（土坑）（第112図）

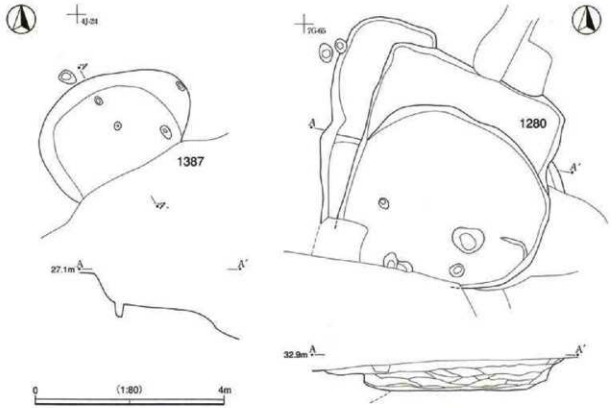
1240号址（竪穴住居跡）を切るほぼ円形の土坑である。炭化物が残る。長軸1.06n，短軸0.96m，深さ58cmを測る。出土遺物は1は高台付坏形土器で底径7.8cm，器高推定3.45cm，遺存度は全体の15%，胎土は密で混入物は少ない。焼成は良好，調整は内面は内黒ミガキ，外面は回転ナデ，ロクロ成形の底外調整はナデである。9世紀以降の平安時代の所産であろう。



第112図　1268号土坑

（2）1280号址（竪穴住居跡），1387号址（竪穴状遺構）（第113図）

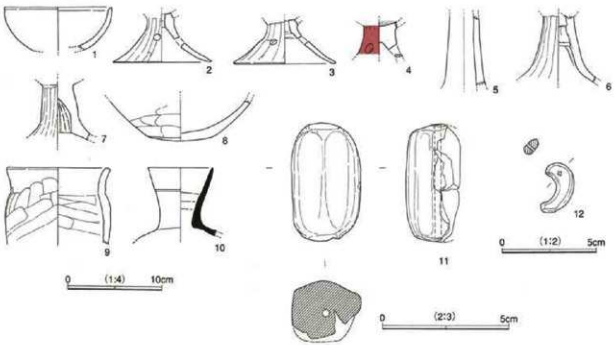
1280号は長軸推定6mを測る。長方形と呈する竪穴住居跡と思われるが詳細は不明である。1387号は床面に小さなピットを有し，長軸3.4m，短軸推定2.15m，深さ70cmを測る。ともに出土遺物は無い。



第113図　1280号址（竪穴住居跡），1387号竪穴状遺構

（3）遺構外出土遺物（第114図）

表採遺物である。1～4の古墳時代出現期～前期の小形高杯か小形器台，前期でこの地域特有の棒状の柱状脚高杯5，古墳時代中期の高杯7と続く。12は滑石製模造品で5世紀代の所産，10は初期の長頸壺で東海産と思われ6世紀末頃か。僅かな表採資料からも，本遺跡周辺では人々の長い継続的な営みがあったことが理解できる。



第114図　遺構外出土遺物

第4章　まとめ

第1節　中近世の検出遺構

墨古沢遺跡の発掘調査（調査面積38,642㎡）では以下の遺構が検出された。屋敷区画4カ所（区画1～4），宗教施設あるいは倉庫施設1カ所（区画5），作業場あるいは不浄の場1カ所（区画6），地下式坑36基，井戸跡78基，粘土貼土坑32基，大型竪穴状遺構16基，方形竪穴遺構13基，土坑墓25基，火葬施設34基，馬埋葬土坑9基，道路遺構1条，製鉄関連遺構2基，やぐら状遺構4基，大型不整形竪穴遺構1基，建物跡1棟，溝跡99条，方形土坑60基，土坑235基，シシ穴状遺構21基，である。

屋敷区画は4カ所検出されているが，遺跡内を通る幹線道路である南北道路と東西道路を起点にみると，区画2と区画3の屋敷が南北道路（北半部）に各々入口を向け相対峙している。区画1の屋敷は，東西道路（東半部）の東端部で2方向に分岐するが，遺跡の北東方向から入り込む支谷の西側に沿って谷津に向かって下る枝道に面して入口を向けている。そして幹線道路である南北道路には直接面していない。区画4の屋敷は北辺の一画が東西道路（西半部）に面しているが，正面入口は幹線道路には面していない。各屋敷の存続時期については詳細は次節で述べるが，区画1～3の屋敷群は15c末葉に成立し17c前半までは確実に存続している。しかし，区画4の屋敷は14c後半に成立し15c後半には廃絶している。本遺跡ではまず区画4の屋敷が登場し廃絶する頃に，区画1～3の屋敷群が成立し近世まで継続することが明らかとなった。14c代に成立した屋敷は区画4の一区画しか検出されていないが，単独で存続したとは言い切れない。なぜならば区画4は遺跡の西端で検出されており，さらに西側に集落として展開している可能性が考えられることと，区画1～3の屋敷群が大規模な削平を伴って造り出されそれ以前の遺構を破壊していることから，集落として当初から成立していた可能性は十分考えられる。

区画1～3の屋敷群は，出土遺物の検討から同時期に成立し少なくとも17c前半までは併存していたが，3カ所の屋敷に果たして階層差があったかどうか検討してみる。まず規模からみると，区画1が長辺34m，短辺33m，区画2が長辺26m，短辺20m，区画3が長辺48m，短辺13m，であるが，区画1は区画2，3に比べて面積比で約2倍あり，区画2，3はほぼ同じである。区画施設の構造をみると，区画1は削りだし土塁と溝，区画2は溝のみ，区画3は溝と段差，でそれぞれ区画されている。区画1の削りだし土塁の構造上での優位性が認められる。削りだし土塁の存在は，屋敷地を造成するために大規模な削平工事を始めるに際して，既に計画されていたことを示すものである。以上，規模と区画施設からみると，区画1の屋敷が区画2，3の屋敷に比べて階層的に優位にあるとしてよいであろう。ただ，区画1の区画および主屋の規模は県内で検出されている同時期の遺跡の事例と比べてみても，中規模以下といえる。このことから，区画1の屋敷主は大家族で構成される上層農民層と考えられる。

区画1の屋敷を集落（屋敷群）内において核となる屋敷とすれば，ひとつ問題となる点がある。それは区画1の屋敷が本遺跡内を通る幹線道路（南北道路と東西道路）に入口が面しておらず，台地上と谷津内を結ぶ枝道に面していることである。このことは，集落内において幹線道路よりも枝道の方が重要視されていたことを示しているものと思われる。谷津内には水田耕作が行われていたことから，集落は稲作生産を基盤としていたとすることができるであろう。

地下式坑36基，井戸跡78基，粘土貼土坑32基と，それぞれの遺構は多数検出されているが，井戸跡と粘

土貼土坑の分布状況をみると，区画１～３の屋敷群の内部ではほとんど検出されておらず，屋敷群の西側から区画５内部までの地区に集中して検出されている。この分布傾向は，まず２種類の遺構が基本的には屋敷内部に伴うような性格を有してはいなかった可能性が考えられる。つぎに２種類の遺構の分布域と１２ｃ～13ｃ代の常滑窯・渥美窯製品および古瀬戸後期段階の製品の分布状況（第115～118図）がほぼ重なることから，これらの遺構の大部分は15ｃ後葉までの時期と考えられる。このため，区画１～３の屋敷群の成立が15ｃ末葉と捉えられるので，時期的に，２種類の遺構の大部分は屋敷群に先行することになる。地下式坑の分布域は２種類の遺構よりさらに集中する傾向が強い。検出された36基の内29基が東西道路より南に分布し，区画１～３の屋敷群のみならず区画４の屋敷も含めて屋敷内からは全く検出されていない。地下式坑も井戸跡，粘土貼土坑と同様古瀬戸後期段階までの製品の分布域と重なることから，地下式坑もまた区画１～３の屋敷群に先行する遺構となる。

埋葬施設は土坑墓25基，火葬施設34基，馬埋葬土坑９基，が検出されている。土坑墓は東西道路より南に分布域が限定される。しかし，火葬施設の多くは東西道路南側に分布するが，東西道路北側の調査区北端の地区，区画１の屋敷内，区画２の屋敷周辺などにも点在して分布する。土坑墓は銭貨が複数枚出土する事例が多いことから，16ｃ代を中心とした時期と思われる。また，火葬施設も区画１の屋敷内から２基検出されていることから，やはり16ｃ代を中心とした時期であろう。土坑墓，火葬施設はともに区画１～３の屋敷群に居住していた人々の葬送施設とすることができる。馬埋葬土坑は調査区北端の区画６内で４基，東西道路以南で５基検出されている。基本的には土坑墓とは分布域は分離されているが，大型竪穴状遺構（343号址）内で共伴することから，土坑墓ほど明確な分布域の分離は認められない。

つぎに本遺跡は中世段階に大規模な造成を受けていることが明らかになったが，その過程についてふれてみたい。本遺跡の遺構検出面は区画１より一段低位の調査区北端地区および東西道路より南側は関東ローム層面であるが，区画１の内部から東西道路までは関東ローム層より下位層の常総粘土層で掘り方の浅い遺構も含めて検出されている。このことは，後者の場合遺構が掘り込まれる前に既に上位層である関東ローム層が削平されていたことを意味する。削平された規模は関東ローム層の堆積厚を考慮するならば，２ｍ～３ｍほどの厚さが想定される。中世段階における本遺跡の変遷は大別すると，①12ｃ～13ｃ代の常滑窯・渥美窯製品の時期，②区画４の屋敷および大部分の地下式坑，井戸，粘土貼土坑が機能していた14ｃ後半～15ｃ後葉の時期，③区画１～３の屋敷群が成立した15ｃ末葉以降の時期，の３期に分けられる。①の12ｃ～13ｃ代は該期の遺物が常総粘土層面で多数出土していることから，この段階で既に関東ローム層は削平されていたとみることもできるが，通常該期に共伴する中国磁器，山茶碗，カワラケ，等が全く出土せず生活感がないことと，該期の遺構が明確に認められないことから，この段階では大規模な削平は行われてはいなかったと思われる。②の14ｃ後半以降は該期の遺構が常総粘土層面で多数検出されていることから，この段階に大規模な削平が行われたのは間違いない。ただ，区画１の屋敷の成立が15ｃ末葉と考えられるので，区画１のあたりは削平は受けてはいなかった可能性が高い。③の15ｃ末葉は削り残しの土塁で区画された区画１の屋敷の成立からみて，再度この段階で大規模な削平が行われたと思われる。

第２節　中世～近世初頭の陶磁器・土器

本遺跡からは貿易陶磁器は中国製品が52点，国産陶器は瀬戸美濃窯製品524点（登窯２段階まで），志戸呂・初山窯製品（登窯２段階まで）39点，渥美窯製品50点，常滑窯製品1,098点，肥前窯製品２点（17ｃ前半まで），備前窯製品２点，カワラケ751点，土器鍋1,582点，土器擂鉢129点，土器香炉12点，土器火舎５点，がそれぞれ出土している。

中国製品は時期的にみて４期に分けられる（第５表）。第１期は13ｃ後半～14ｃ段階で，国産製品では渥美窯および常滑窯の古手の段階に相当する。しかし，この段階はまだ集落が成立する以前であることから，優品である青白磁の梅瓶と青磁盤は第２期以降の集落成立後まで伝世されたものと思われる。第２期は14ｃ後半～15ｃ前半段階で，青磁碗や白磁皿などの生活用器種で占められる。区画４の屋敷が14ｃ後半に成立していることから，この段階の屋敷で使用されたものであろう。第３期は15ｃ後半～16ｃ前半段階で，青磁稜花皿，Ｃ１群の白磁皿，Ｂ群の染付皿などの生活器種で占められる。区画４の屋敷が15ｃ後葉に廃絶し，区画１～３の屋敷が15ｃ末葉に成立しているが，おそらくこれらの中国製品は区画１～３の屋敷群で使用されたと思われる。第４期は16ｃ後半代の染付碗・皿群で瀬戸美濃窯大窯４～登窯１段階の製品と共伴して，区画１～３の屋敷群で使用されたものであろう。ところで本遺跡からは中国製天目茶碗が７点（４個体）出土している。一遺跡で４個体の出土は現段階では千葉県内の遺跡で最も多い数であるが，中国製天目茶碗の優品性や稀少性を重視すれば本遺跡は非常に格の高い遺跡となってしまう。しかし，前節でみたように本遺跡は上層農民層の屋敷群（村落）と捉えられており，中世後半段階の村落遺跡としては普遍的な構造の範疇に入ることから，中国製天目茶碗が有する属性とは落差が大きい。この点は本遺跡の整理作業の途上では中国製天目茶碗４個体は全て瀬戸美濃窯製品に分類されていたが，小野正敏氏と藤澤良祐氏の遺物実見時に指摘を受けて初めて判明した。このことを考慮すれば他の遺跡でも出土していた可能性は充分考えられる。そうであるならば，中国製天目茶碗は現段階の認識よりは県内に流入していたと思われる。

瀬戸美濃窯製品は古瀬戸前期Ⅲ～Ⅳからみられ，古瀬戸中期Ⅱ段階までは花瓶，底卸目皿，合子，水注，瓶子，といった特殊な器種に限られる。この時期は渥美窯と常滑窯の古手の製品と重なるが，該期の生活用器種である青磁・白磁の碗・皿，山茶碗，カワラケなどがほとんど出土していないことから，この段階の瀬戸美濃窯製品は墓域に伴ったものか，次の段階以降の屋敷で一部伝世品として使用されたものであろう。生活用器種の碗・皿類は古瀬戸中期Ⅳ段階から平碗と折縁深皿がみられ，古瀬戸後期Ⅰ段階からは天

第５表　中国製品集計表　　接合後破片数

器種 ＼ 時期		13C後	13C後～14C	14C後	14C後～15C前	15C前	15C後～16C前	16C後	不明	計	合計
青磁	碗	1(B1類)			12(D1類)	2(D2類)				15	21
	皿						2(稜花皿)			2	
	鉢					1				1	
	盤		1	2(端反皿)						3	
白磁	皿				4(B群)		2(C1群)		1	7	8
	坏				1(面取坏)					1	
染付	碗							3		3	15
	皿						5(B群)	6		11	
	坏						1			1	
その他	梅瓶	1(青白磁)								1	8
	天目茶碗								7(4個体)	7	
合計		2	1	2	17	3	10	9	8	52	

第6表　瀬戸美濃窯製品集計表

接合後破片数

器種	様式	古瀬戸前期 I	II	III	IV	古瀬戸中期 I	II	III	IV	中期	古瀬戸後期 I	II	III	IV古	IV新	後期	古瀬戸計	古瀬戸or大窯	大窯製品 1	2	3前	3後	4前	4後	大窯	大窯計	古瀬戸・大窯合計	登窯製品 1	2	3	4	1～4	登窯計
天目類	天目茶碗										1	3	2	1		2	13				1	2	1	1		10	23	1		1	5	2	11
													4								5							2					
碗類	平碗							2			4	9	19	13			41											98					
											5		5																				
	筒形碗																							1		1	1	1					3
																													2			
	丸碗																												2			2
	端反碗												1				1										1		1			1
小皿類	施釉小皿										8	11	15	16	11		81										81					
													8	14																		
	施釉はさみ皿																		11							11	11					
	腰折皿													11			11									11	11					
	端反皿																		2							3	3					
																			1													
	丸皿																			3						23	23	9	3			19
																				12	4		4					7				
	折縁皿																1							5		9	10					
											1									4												
	反り皿																											2				7
																												5				
	鉄釉皿																											16				16
	筒皿																							5		5	5					
	碗皿																									1	1					
																				1												
	輪禿皿																												6			6
皿類	折縁深皿							1			4	4	3	2			14										14					
	折縁中皿															2	2										2					
	直縁大皿													2			2										2					
	皿類																															
											15				17		32										32					
	瀬戸大皿																															
																								4		4	4					
	瀬戸戸林																															2
																													2			
	卸目付大皿												2				2										2					
擂鉢	擂鉢														1	7	13	24	2	1	2	8	3	1	8	27	64	5	2			10
															5							1	1						3			
卸皿	卸皿												1				4	3									4					
壺壜類	瓶子										11						11										11					
	瓶子or壺																11										11					
										8			3																			
	祖母懐茶壺																9	9									9					
	有耳壺																		1								1					
	徳利																								3	6	6					
																						3										
仲仏具	香炉											2					4										4			1		1
												2																				
	花瓶					2							1				6										6					
											2	1																				
	筒形容器											2					2										2					
	底部目皿					1											1										1					
その他	合子																2										2					
						2																										
	碗形鉢																2										2					
	小鉢										1		1																			
											2				1	3	6										6					
	水注																4										4					
				3									1																			
	水指																									1	1					
																					1											
	合計	0	0	0	0	1	2	0	3		15	29	43	37	31		98	332	34	16	4	3	10	10	2	11	102	458	36	12	1	6	2	78
				3			2			8		39	3	22	36					1	13	18	1	13				18	3			

目茶碗，緑釉小皿，も含めて定量的に出土するようになる。そしてこの時期の瀬戸美濃窯製品の分布状況から区画４の屋敷が成立したと考えた。それ以後は各段階毎に増減はあるものの，大窯期から登窯期まで継続して一定量出土している。ただ，古瀬戸中期Ⅳ～後期Ⅰ段階からみられる天目茶碗，平碗，緑釉小皿，折縁深皿については，緑釉小皿だけが古瀬戸後期Ⅳ新段階まで出土しているが，その他の器種は古瀬戸後期Ⅳ古段階までで，後期Ⅳ新段階は出土していない。後期Ⅳ古段階から後期Ⅳ新段階に移行する時期は１５ｃ後葉に当たるが，この時期は区画４の屋敷が廃絶し区画１～３の屋敷群が成立した頃となることから，後期Ⅳ古段階と後期Ⅳ新段階における器種の有無に屋敷の移動が反映しているものと思われる。

志戸呂・初山窯製品は古瀬戸後期Ⅳ古段階，大窯３後半段階，大窯４～登窯１段階の３期に限定される。古瀬戸後期Ⅳ古段階と大窯３後半段階は多様な器種がみられることから，瀬戸美濃窯製品のコピー商品として流通している。しかし，大窯４～登窯１段階は大皿と筒形碗に器種が限定されることから，ブランド商品で流通していた可能性が考えられる。

常滑窯製品は甕が２型式から11・12型式まで途切れることなく出土している。壺は６ａ型式～７型式と10，11・12型式の２時期に二分される。片口鉢は６ｂ型式を除いて５型式から11・12型式まで出土している。片口鉢の10型式が突出した出土点数となっているが，これは前後の型式と峻別が微妙なものは10型式に含めたためである。

第7表　志戸呂・初山窯製品集計表　　接合後破片数

器種＼様式	古瀬戸前期				古瀬戸中期				古瀬戸後期					古瀬戸計	古瀬戸or大窯	大窯製品						大窯計	古瀬戸・大窯合計	登窯製品				登窯計
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ古	Ⅳ新			1	2	3前	3後	4前	4後	大窯4～登窯1			1	2	3	4	
天目茶碗												3		3					5				5	8					
筒形碗																													4
緑釉小皿												1		1										1	4				
内禿皿																			1				1	1					
碗皿																			1				1	1					
大皿																			7			6	13	13					
擂鉢												1		3					4				4	7					
												2																	
香炉																			2				2	2					
水注														2										2					
												2																	
合計												5		9					20			6	26	35					4
												4													4				

第8表　常滑・渥美窯製品集計表　（型式別数値は口縁部のみ）　　接合後破片数

器種＼型式		1	2	3	4	5	6a	6b	7	8	9	10	11・12	小計	口縁部以外	合計
常滑	甕		1	2	1	1	5	7	1	8	4	6	2	38		
	壺						2	1	1			3	1	8	973	973
	片口鉢					4	5		5	6	11	46	2	79		
	小計		1	2	1	5	12	8	7	14	15	55	5	125	973	1098
渥美	甕		1	6										7	43	50
合計			2	8	1	5	12	8	7	14	15	55	5	132	1016	1148

第3節　陶磁器からみた遺跡の変遷

第115図の渥美窯・前期常滑窯製品出土分布図は，12c～13c代の製品の分布状況を示したものである。出土地点の傾向をみると区画1～区画4までの屋敷地区画内からはほとんど出土していないことが明らかである。集中して出土している地区は区画1，2，4の屋敷地の背後地と，区画5内の二ヵ所である。このことは，12c～13cの段階においては区画1～区画4の屋敷地はいまだ成立していないことを示していると考えられる。さらに12c～13c代の渥美・常滑窯製品が生活の場である屋敷で使用された可能性は，該期に共伴する陶磁器・カワラケが皆無に近いことを考慮すると低いように思われる。なお，区画1および区画3の東側でややまとまって出土している地区が認められるが，この地区は屋敷造成時に支谷側に向けて盛り土造成が施された地区であり，おそらく遺跡の西側から東側へ土砂の移動が行われた際に土と混じって動いた結果と思われる。

第116図は12c～16c代の常滑窯製品の甕・片口鉢の分布状況を示した図である。12c～13c代に比べれば屋敷内（区画1～4）および近辺で出土しており，生活の場で使用されている傾向がみられるが，大部分は12c～13c代の渥美・常滑窯製品と同様に区画1，2，4の背後地と区画5の宗教関連区画から出土している。このことは，第一に常滑窯製品が直接生活の場で使用されていないことを示しているものと思われる。第二に区画5から片口鉢が多く出土していることは，片口鉢が意外と宗教儀礼と関わりのある器種であることを示していよう。

第117図は瀬戸美濃窯古瀬戸後期段階の灰釉平碗の分布状況を示した図である。時期的には14c後葉～15c後葉となる。基本的には生活用品である平碗であるが，区画4の屋敷地以外の区画1～3の屋敷地からはほとんど出土していない。この段階（14c後葉～15c後葉）に入っても区画4以外の屋敷は機能していなかった可能性が，平碗の出土状況をみる限り考えられる。

同様な傾向は第118図でもみることができる。同図は瀬戸美濃窯古瀬戸後期段階の緑釉小皿の分布状況を示したものであるが，平碗と同様に区画4の屋敷地以外の屋敷地内からは出土していない。あくまでも遺物の出土位置が使用された場所とほとんど変わらないことを前提の上であるが，古瀬戸後期段階の平碗と緑釉小皿は区画1～3の3ヵ所の屋敷では使われていなかったとみられる。

第119図は瀬戸美濃窯擂鉢を古瀬戸後期段階，大窯段階，登窯段階に分けて分布状況を示した図である。この図から見られる最も大きな特徴は，大窯段階の製品が区画1～3の屋敷地とその周囲に集中することである。逆にそれまでの陶磁器出土の集中地区であった区画1，2，4の背後地，区画4，5では減少傾向が著しい。

この傾向は120図でも認められる。同図は瀬戸美濃窯天目茶碗を古瀬戸後期段階，大窯3段階，大窯4～登窯4段階に分けて分布状況を示したものであるが，119図と同様な傾向がみられる。第119，120図の分布状況を合わせて読み取るならば，15c後葉の古瀬戸後期段階までの生活領域が，大窯期開始段階の15c末葉以降になると区画1～3の屋敷地へ基盤が移転したものと捉えることができる。

第121図は瀬戸美濃窯大窯1～3段階の碗・皿類の分布状況を示した図である。また第122図は瀬戸美濃窯大窯4～登窯2段階の碗・皿類の分布状況を示している。同じ窯製品の碗皿類であるにもかかわらず二種類の図に分けた理由は，大窯3段階と4段階の境が西暦1590年に設定されているからである。西暦1590年（天正18）は日本史上小田原北条氏が豊臣秀吉に滅亡させられ，北条氏旧領は徳川家康の領地となった年である。本遺跡に近接する本佐倉城主の千葉氏も北条氏と同様滅亡したため，当地も徳川氏の領地とな

った。この歴史上の大変革において当遺跡に生活していた住民に果たして影響があったかどうかを遺物から読み取るために作図してみた。結論からいえば，量的な差はあるものの出土分布傾向は全くといっていい程変化はない。遺跡の性格上領主が替ったからといって住民も交替するほどの階層ではなかったからと思われる。

第123図は中国製品の分布状況を示した図である。特定の場所に集中する傾向は認められないが，染付製品は区画１～３を中心とした地区に，天目茶碗は区画１にややまとまる傾向がある。前者の傾向は染付製品は大窯製品と同時期に流通した可能性が高いこと，後者は区画１の屋敷が検出された屋敷群の中で核となることが遺物からも窺えることを，それぞれ示しているものと思われる。

第115図～第123図から陶磁器の出土分布状況によって遺跡がどのように変遷してきたのかをみてきたが，まとめてみると以下のようになる。

①12ｃ～13ｃ代の中世前半期においては，明確な区画を有する屋敷地はまだ成立していない。ただし，該期の遺物は大量に出土していることから，生活域とは異なった空間（例えば宗教空間）として遺跡は機能していた。

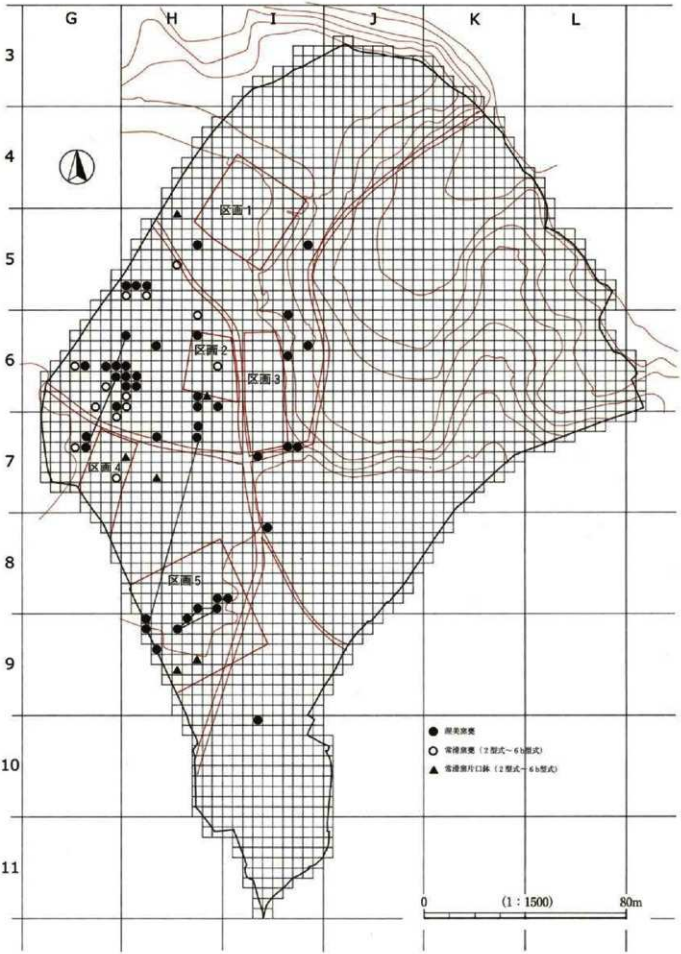
② 当遺跡で最も早く成立した屋敷は区画４の屋敷地で，14ｃ後葉以降の古瀬戸後期段階の時期である。さらに同じ時期に地下式坑，井戸，粘土貼坑等も区画４の屋敷地の北側から区画５にかけて構築されている。

③ 区画１～３の屋敷群は15ｃ末葉以降の大窯期段階に入って成立する。

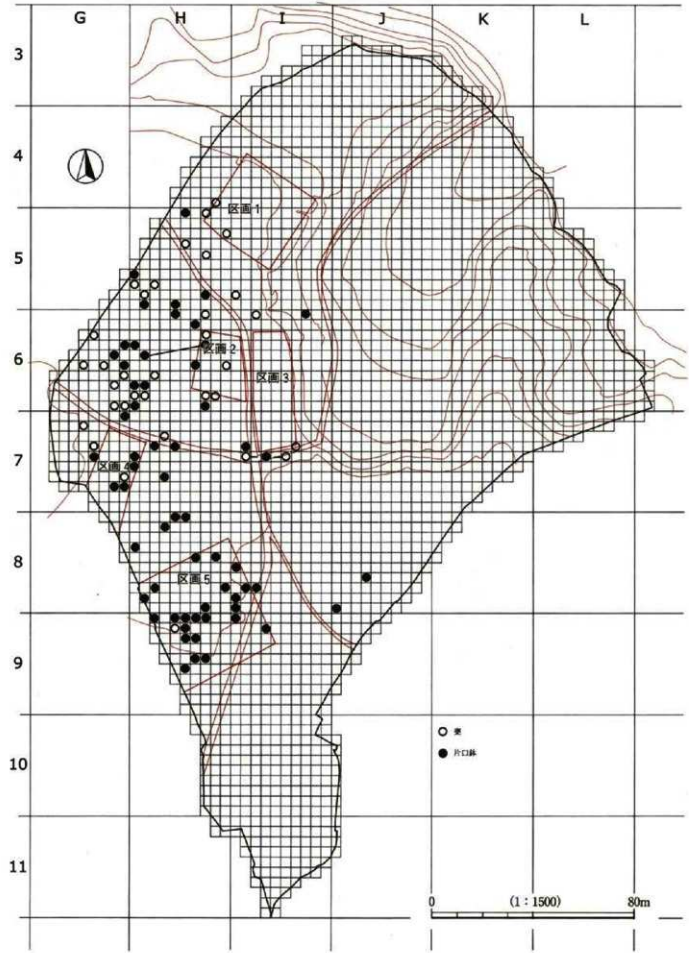
④ 15ｃ末葉以降に成立した村落は，近世に入っても大きな変化は認められない。

⑤ 区画１の屋敷が遺物からみても核となることが明らかになった。

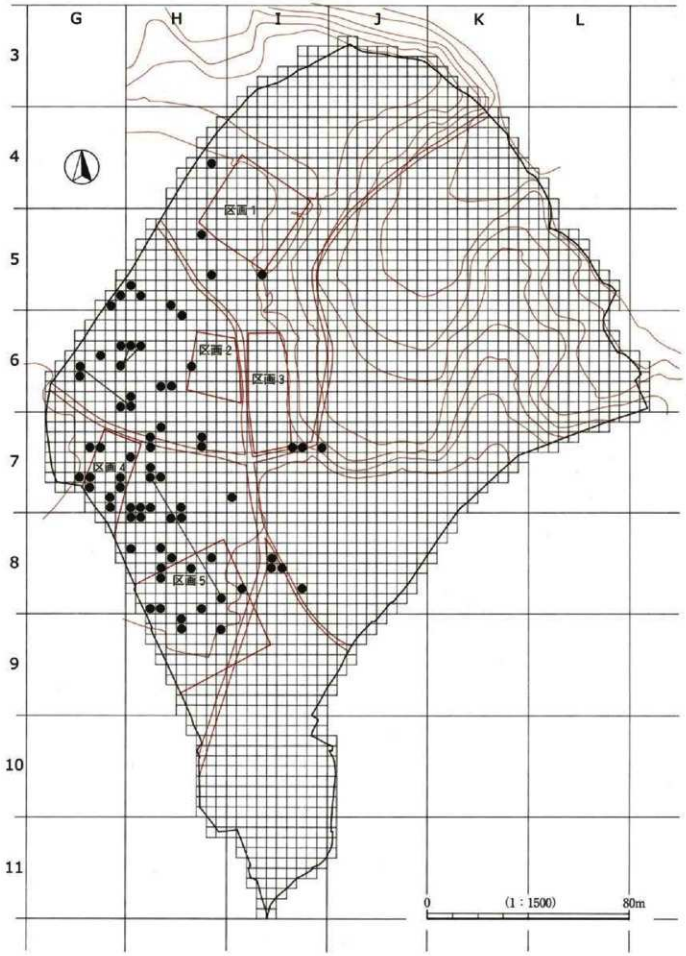
最後に第124図の陶磁器接合図について説明する。この図の主な目的な遺物の接合関係から土の動きが読み取れるのではと考え作図してみたが，残念ながら顕著な傾向はつかむことはできなかった。基本的には遺物集中地区内の接合が大部分で遠距離の接合はあまりなかった。逆にいえば出土した遺物は本来使われていた地点からあまり動いていないことを示しているといえよう。



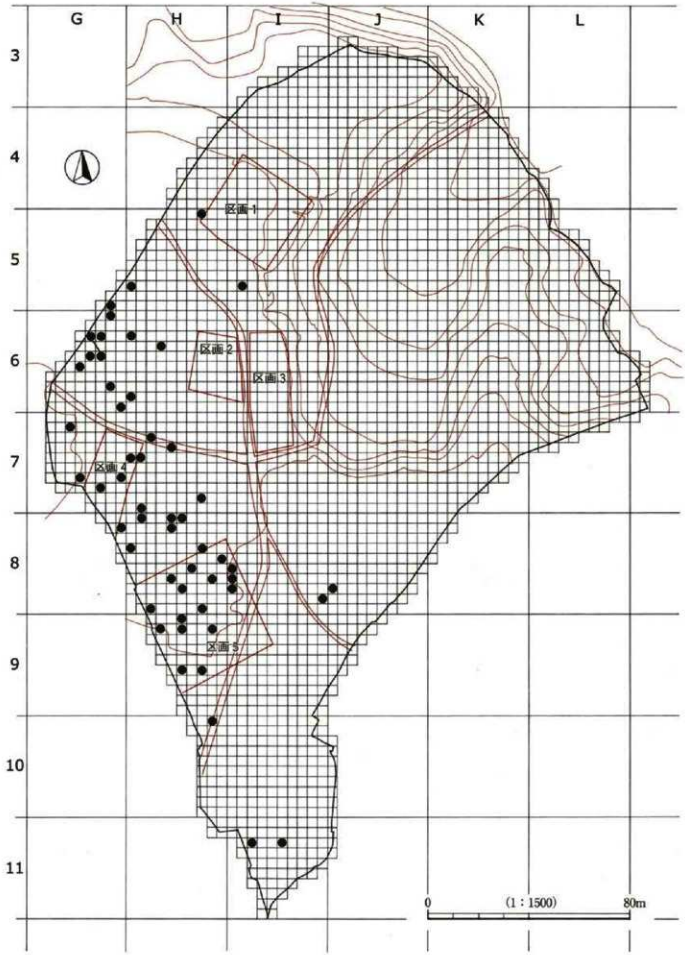
第115図　渥美窯・前期常滑窯製品出土分布図



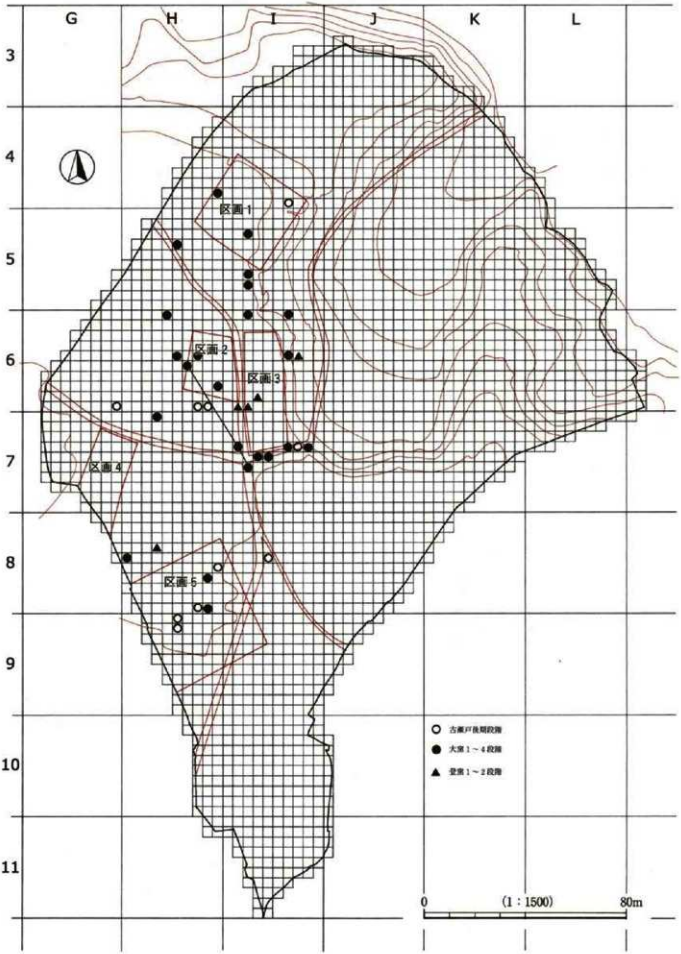
第116図　常滑窯製品出土分布図（甕・片口鉢）



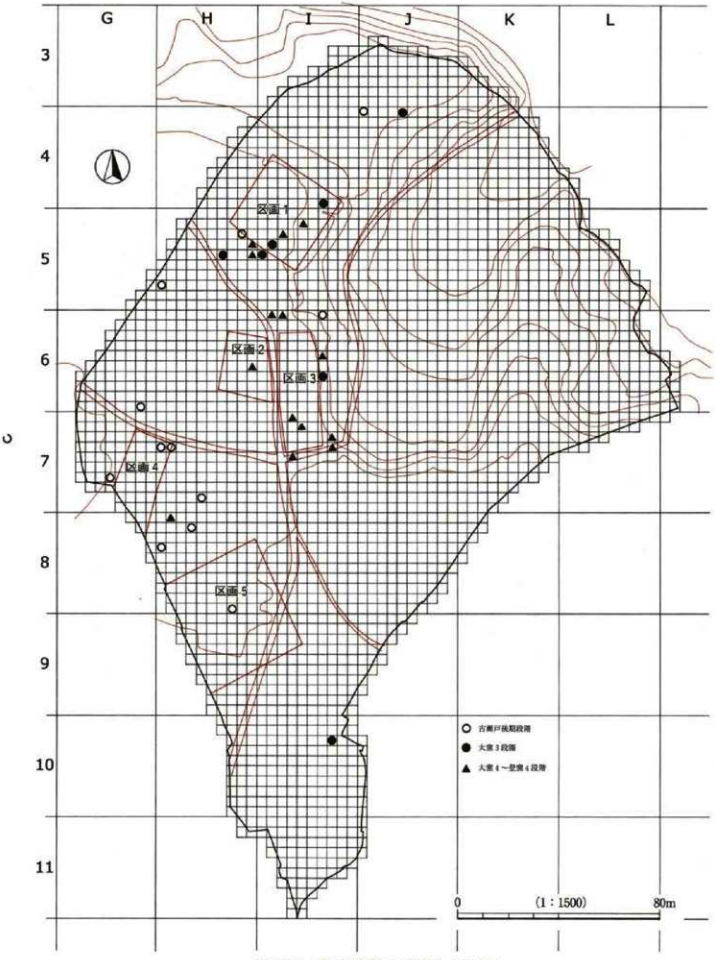
第117図　瀬戸美濃窯古瀬戸後期段階平碗出土分布図



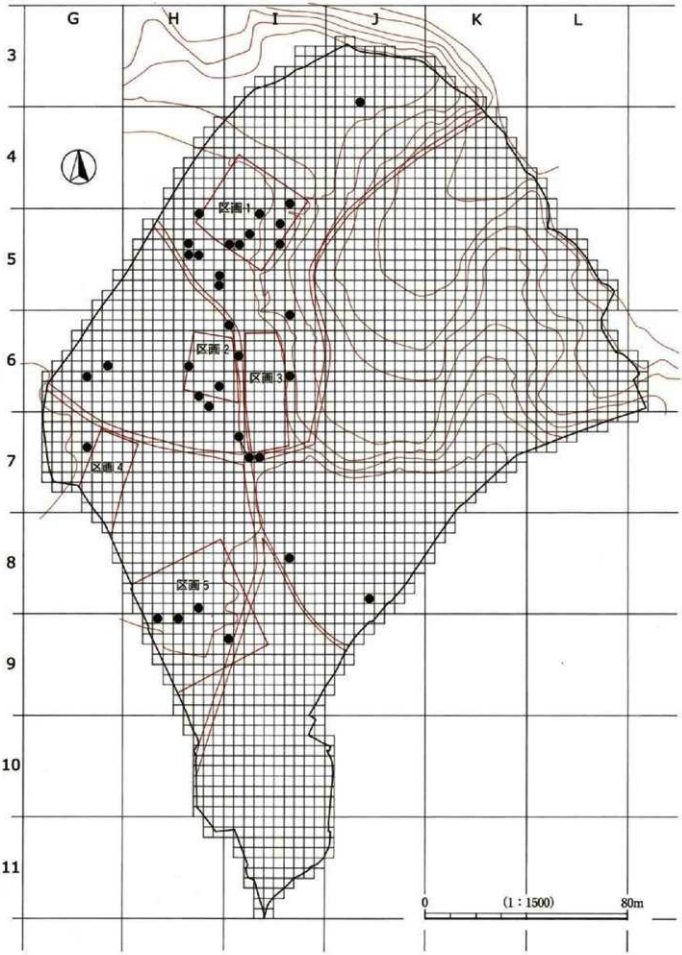
第118図　瀬戸美濃窯古瀬戸後期段階縁釉小皿出土分布図



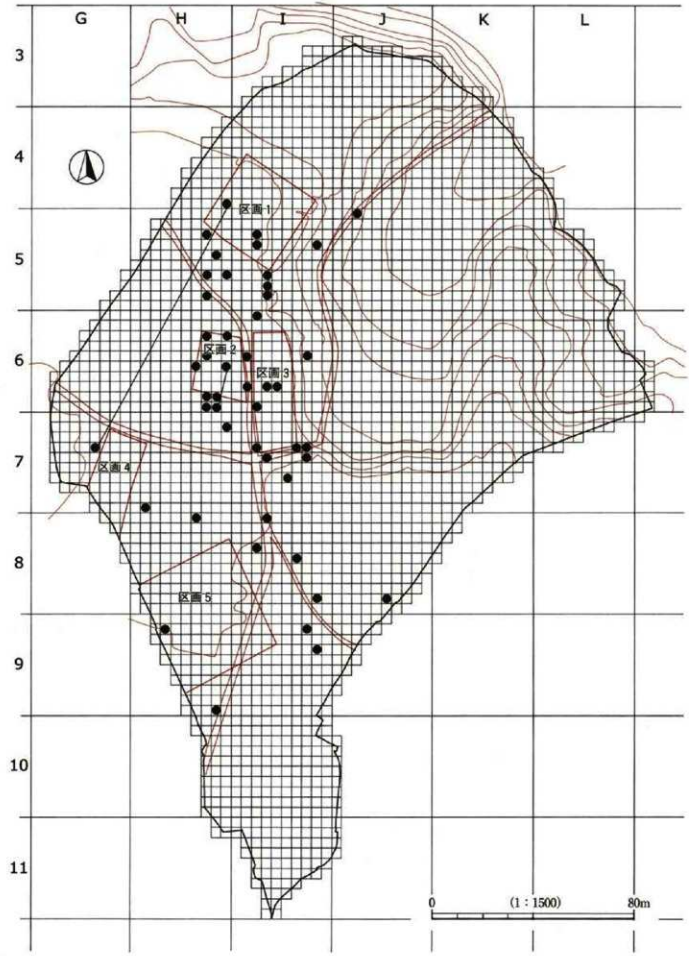
第119図　瀬戸美濃窯揺鉢出土分布図



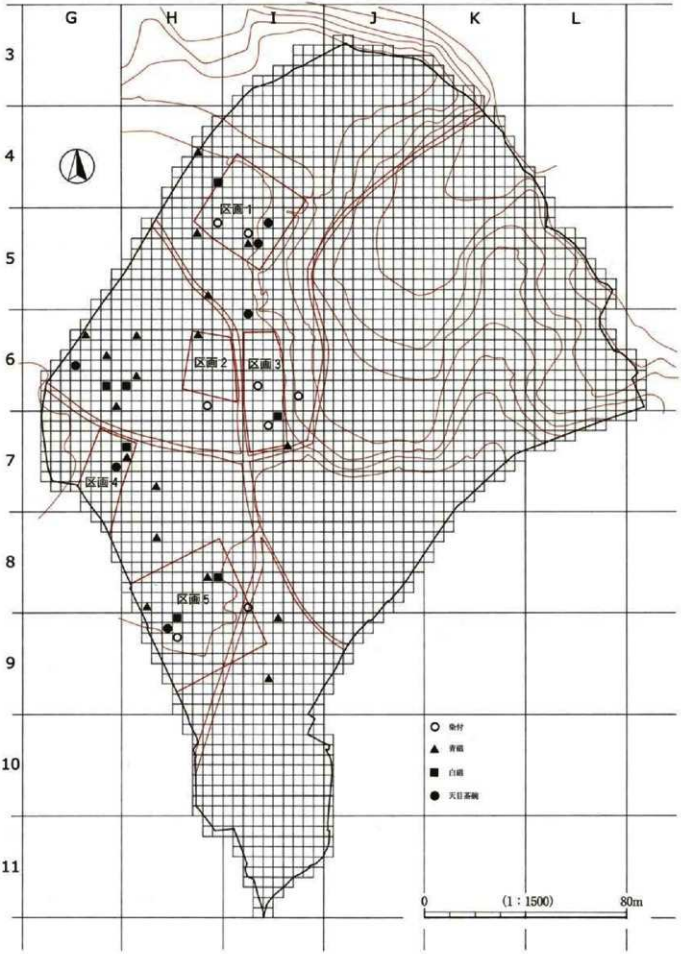
第120図　瀬戸美濃窯天目茶碗出土分布図



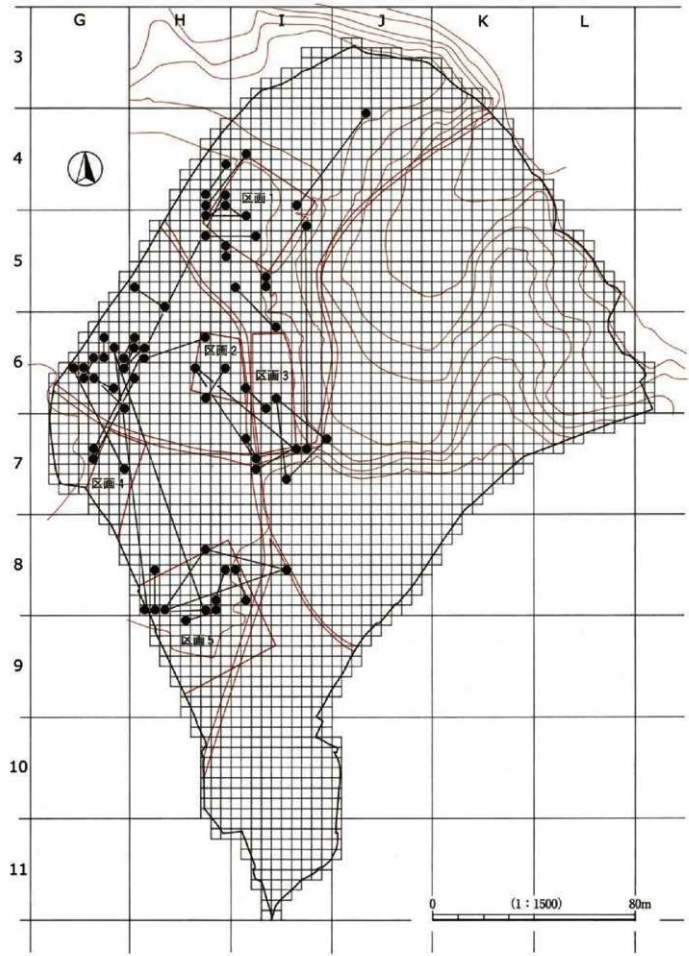
第121図　瀬戸美濃窯大窯１～３段階碗・皿類出土分布図



第122図　瀬戸美濃窯大窯４～登窯２段階碗・皿類出土分布図



第123図　中国製品出土分布図



第124図 陶磁器接合図

第4節　県内の主要な中世遺跡と墨古沢遺跡

墨古沢遺跡を始め県内の主要な中世遺跡から出土した陶磁器，土器の数量から，遺跡の性格による差異の有無，流通の問題，墨古沢遺跡の位置付け，などについて検討する。第9表は主要な中世遺跡から生産地別に何点出土しているか集計したものである。表を作成するにあたっては①瀬戸美濃窯製品が100点以上出土している遺跡，②生産地別に出土点数が分類されている，の2点を基準に成果が公表されている7遺跡と墨古沢遺跡の8遺跡を取り上げた。ただし，調査面積については各遺跡によって調査対象面積なのか本調査面積なのか判別できない事例が多いことから，報告書の記載に従った。因みに，墨古沢遺跡は調査対象面積は38,742㎡，本調査面積は27,342㎡である。また，取り上げた遺跡の発掘調査にあたって表土

第9表　千葉県内の主要中世～近世初頭遺跡陶磁器・土器出土点数表

遺跡名	標本城跡	笹子城跡	山谷	伯父名台	本佐倉城跡	生実城跡	中馬場	墨古沢
所在地	匝瑳郡光町	木更津市	袖ヶ浦市	千葉市	印旛郡酒々井町	千葉市	柏市	印旛郡酒々井町
調査面積	29,300㎡	9,900㎡	18,200㎡	19,700㎡	10,178㎡	15,200㎡	38,287㎡	38,842㎡
性格	基跡・城跡	城跡	市跡・基跡	村落跡	城跡	城跡	宿跡	村落跡
時期	13c ～15c末葉	15c後葉 ～16c中葉	13c後半 ～15c後葉	12c中葉 ～15c末葉	15c後葉 ～17c前半	13c ～17c前半	12c ～17c前半	12c後半 ～17c前半
中国陶磁	79	350	45	48	550	88	21	52
瀬戸美濃	540(擂鉢48)	1945(擂鉢1106)	118(擂鉢2)	161(擂鉢15)	793(擂鉢249)	1074(擂鉢698)	518(擂鉢99)	524(擂鉢71)
初山・志戸呂	2K(擂鉢10)	1	9(擂鉢2)	0	0	15	17(擂鉢9)	39K(擂鉢7)
肥前	0	0	0	0	0	0	18	10
常滑	440	416	883	529	347	881	546	1098
渥美	14	0	8	0	0	32	9	50
カワラケ	135	2207	96	26	1704	3282	545	751
土師鍋	1110	12	0	3	89	578	1248	1582
土器擂鉢	4	49	0	1	246	170	267	129
文献	1	2	3	4	5	6	7,8	

引用文献

1.『標本城跡・城山遺跡－ひかり工業団地埋蔵文化財調査報告2－』2000（財）東総文化財センター
2.『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書14－木更津市笹子城跡』2004（財）千葉県文化財センター
3.『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書9－袖ヶ浦市山谷遺跡』2001（財）千葉県文化財センター
4.『千葉東南部ニュータウン30－千葉市伯父名台遺跡－』2004（財）千葉県文化財センター
5.『千葉県印旛郡酒々井町　本佐倉城跡発掘調査報告書－戦国佐倉城の調査－』1995（財）印旛郡市文化財センター
6.『千葉市生実城跡－昭和63年度・平成3～6年度調査－』2002（財）千葉市文化財調査協会
7.『柏市埋蔵文化財調査報告書38　中馬場遺跡(第4次)』1999　柏市遺跡調査会
8.築瀬裕一「柏市中馬場遺跡の中近世遺物について」『房総中近世考古』第1号　2003　房総中近世考古学研究会

註

1.本表は中世瀬戸美濃窯製品が100点以上出土している遺跡を取り上げている。
2.近世陶器は17c前半まで集計している。
3.調査面積は調査対象面積で、実際の調査面積(本調査面積)より広い遺跡がある。
4.標本城跡は個体点数、それ以外の遺跡は破片点数で表示している。

除去を重機で行っている場合と手掘りで行っている場合があり，遺物の捕捉率に違いがある。このため本表では面積単位当りの出土点数は敢えて表示していない。

取り上げた8遺跡を存続時期で大別するとAタイプ＝15c後半～16c前半に廃絶する4遺跡（篠本城跡，笹子城跡，山谷遺跡，伯父名台遺跡），とBタイプ＝近世まで継続する4遺跡（本佐倉城跡，生実城跡，中馬場遺跡，墨古沢遺跡）に二分される。また，Aタイプの4遺跡は篠本城跡と笹子城跡が城跡，山谷遺跡が市跡あるいは宿跡，伯父名台遺跡が村落跡，Bタイプの4遺跡は本佐倉城跡と生実城跡が城跡，中馬場遺跡が宿跡，墨古沢遺跡が村落跡，と遺跡の性格は様々である。ところで発掘調査が遺跡の全面にわたって実施された場合はあまり問題はないが，遺跡の一部を対象とした場合は遺跡のどの地区を発掘調査したかによって成果が大きく異なる可能性が高い。例えば城跡では本丸，二ノ丸といった主郭部分とその外側の地区では，検出遺構と出土遺物には大きな違いがあることが多い。しかしながら本表を作成するにあたり，各遺跡とも成果を総体化して表示していることを予めお断りしておく。

中国陶磁

笹子城跡と本佐倉城跡が突出して出土量が多いことが明瞭である。同じ城跡でも篠本城跡と生実城跡は村落遺跡と比べてみてもせいぜい2倍程度である。笹子城跡は15c後葉から16c中葉にかけて西上総を領有した真里谷武田氏一族の居城と考えられ，国人領主層の居城とすることができる。本佐倉城跡は戦国時代には下総の盟主的存在であった千葉氏の居城であり，下総における中核的な城郭であった。篠本城跡は歴史的には全く不明で唯一「城山」地名が残されているのみである。発掘調査の結果上層農民層の城郭化した集落遺跡と捉えられている。生実城跡は16c中葉までは下総では千葉氏に匹敵する権力を有した原氏の居城として，16c中葉から16c末葉までは下総と上総の国境いを押さえる境い目の城として，1590年以降は徳川氏の家臣の城として機能していた。城の格式としてはかなり高い城であったといえる。笹子城跡と本佐倉城跡からの中国陶磁の出土量が多いことは，村落的な城郭である篠本城跡との格式の差として理解することができる。問題は笹子城跡よりも格式が高いと捉えられる生実城跡の方が比率としては低いことである。この点は笹子城跡と本佐倉城跡は主郭部も調査の対象となっているが，生実城跡では調査区が主郭部の周辺に限定されることから，城内の居住者の階層差が反映されているものと思われる。城跡以外の性格の遺跡では全体の中での中国陶磁の占める割合は極端な違いはない。

瀬戸美濃窯製品

擂鉢を除く瀬戸美濃窯製品の各遺跡毎の出土量は，Aタイプ（15c後半から16c前半に廃絶）の遺跡では篠本城跡492点，笹子城跡839点，山谷遺跡116点，伯父名台遺跡146点，Bタイプ（近世まで継続）の遺跡では本佐倉城跡544点，生実城跡376点，中馬場遺跡420点，墨古沢遺跡453点，である。Aタイプの遺跡では中国陶磁ほどではないものの，遺跡の性格によって依然として格差が存在しているようである。しかし，Bタイプの遺跡では調査面積比を考慮しても，遺跡間の格差はあるもののAタイプの遺跡に比べるとより格差は低くなっている。古瀬戸後期Ⅳ段階に県内では流入量が激増するが，それ以降の大窯期製品も含めて瀬戸美濃窯製品が村落レベルまで普及したことを示している。

擂鉢が瀬戸美濃製品の中で占める割合を各遺跡毎にみると，篠本城跡8.9%，笹子城跡56.9%，山谷遺跡1.7%，伯父名台遺跡9.3%，本佐倉城跡31.4%，生実城跡65.0%，中馬場遺跡19.1%，墨古沢遺跡13.5%，である。一見して篠本城跡を除く3カ所の城跡の比率が極めて高いことが分かる。瀬戸美濃窯産の擂鉢が県内に流通し始めるのは古瀬戸後期Ⅳ古段階からであるが，急増するのは後期Ⅳ新段階である。このため

古瀬戸後期Ⅳ古段階で廃絶する山谷遺跡では擂鉢の比率が極端に低く，表では示していないが常滑窯産の片口鉢の比率が高い。逆に古瀬戸後期Ⅳ新段階から始まる笹子城跡では擂鉢が1,106点出土しているが，常滑窯産片口鉢は僅か6点しか出土していない。古瀬戸後期Ⅳ古から後期Ⅳ新段階に移行する時期（1460年頃）に，粉食用器は常滑窯産片口鉢から一気に瀬戸美濃窯産の擂鉢が凌駕するようである。城跡，それも格の高い城跡で擂鉢の比率が高い理由は，瀬戸美濃窯産擂鉢と競合関係にあった土器擂鉢に関わるものと思われる。この点については土器擂鉢の項で検討する。

初山・志戸呂窯製品

8遺跡中6遺跡で出土している。墨古沢遺跡で見る限り初山・志戸呂窯製品が搬入する時期は，古瀬戸後期Ⅳ古，大窯3後半，大窯4～登窯1，の3段階である。このため，AおよびBタイプの遺跡に認められる。瀬戸美濃窯製品に比べれば数%以下の割合であるが，少量ながらも一定量県内に搬入していることが読みとれる。初山・志戸呂窯製品が出土していない伯父名台遺跡と本佐倉城跡はおそらく見落している可能性が考えられる。

常滑窯製品

瀬戸美濃窯製品と量的に対比すると，篠本城跡，笹子城跡，本佐倉城跡，生実城跡，の城郭遺跡では，常滑窯製品よりも瀬戸美濃窯製品の方が多く出土している。しかし，他の性格の遺跡では逆に常滑窯製品の方が瀬戸美濃窯製品より多く出土することが明らかである。このことから，常滑窯製品が村落遺跡では多様な使われ方をされていた結果とみることができる。

渥美窯製品

7遺跡（本佐倉城跡は最上層面のみの発掘調査のため除外）中5遺跡から出土している。渥美窯製品が搬入した12c～13c代に既に何らかの形で利用されていた事例が多いことが分かる。城郭であれば先行する館，あるいは村落では成立時期をこの段階に求めるのか，いずれにしても共伴遺物の検討が不可欠である。墨古沢遺跡と篠本城跡では先行して墓域に利用されていたことが，山谷遺跡では既に市として利用されていたことが，それぞれ考えられる。

カワラケ

地域における拠点的城郭であった笹子城跡，本佐倉城跡，生実城跡，の3遺跡での出土量が突出して多い。拠点的城郭が有する一種の「都市的な場」では，主郭部のみならず主郭部周辺でも村落と比べれば格段に多くのカワラケを消費していたものと思われる。しかし，同じ城郭遺跡でも篠本城跡は他の同時期の山谷遺跡および伯父名台遺跡とあまり変わらない出土量である（瀬戸美濃窯製品との対比）。篠本城跡が他の3カ所の城跡とは異なり村落的な性格を有していたからであろう。もう一つの特色は，同じ村落的な遺跡でもAタイプの遺跡（山谷遺跡，伯父名台遺跡）に比べBタイプの遺跡（中馬場遺跡，墨古沢遺跡）の方が，瀬戸美濃窯製品より多く出土するようになる。16c代に入ると村落においてもカワラケ文化が前代に比べより浸透したものと思われる。カワラケの用途には宴会，儀礼，照明具，などが想定されるが，墨古沢遺跡の事例でみると遺構から一括して数個体出土していることが多いことから，儀礼関連に伴って使用されることが多くなったのであろう。

土器鍋

8カ所の遺跡を千葉県内において地域別にみてみると，東部地区（篠本城跡），南部地区（笹子城跡・山谷遺跡），中央地区（伯父名台遺跡・生実城跡），北部地区（本佐倉城跡・墨古沢遺跡），西部地区（中

馬場遺跡），に分けられる。出土量を地域別に比べると先ず南部地区が極端に少ないことが明瞭である。山谷遺跡の廃絶が15ｃ後葉，笹子城跡の廃絶が16ｃ中葉，であることから，この地区には少なくとも16ｃ中葉まではほとんど搬入しなかったといえる。中央地区では直線距離で僅か２kmしか離れていない伯父名台遺跡（３点）と生実城跡（578点）では出土量に極端な差が認められる。このことは，伯父名台遺跡の廃絶が15ｃ末葉，生実城跡は17ｃ以降も継続することに起因しているものと思われる。中央地区では15ｃ代まではほとんど搬入されなかった土器鍋が，16ｃ代に入ると多量に搬入されるようになったのであろう。北部地区では本佐倉城跡で89点，墨古沢遺跡で1,582点出土しているが，両遺跡は17ｃ前半代まで継続しかつ15ｃ後葉以降は時期的に重なる。しかも両遺跡は直線距離で僅か３kmしか離れていない。しかし，出土量には極端な違いがある。このことは，遺跡の性格の違い（城郭と村落）が現われているものと思われる。東部地区（篠本城跡）および西部地区（中馬場遺跡）では15ｃ代から土器鍋は大量に搬入されていたとみられる。

土器擂鉢

土器擂鉢と同じ用途である瀬戸美濃窯および初山・志戸呂窯製の陶器擂鉢と対比してみると（土器擂鉢を１とする），東部地区の篠本城跡（１：14.5），南部地区の笹子城跡（１：22.6），山谷遺跡（0：4），中央地区の伯父名台遺跡（１：15），生実城跡（１：4.1），北部地区の本佐倉城跡（１：1.01），墨古沢遺跡（１：0.6），西部地区の中馬場遺跡（１：0.4）となる。

東部地区の特色は15ｃ代に限ってみれば陶器擂鉢が卓越する地区といえる。土器鍋は大量に搬入しているが土器擂鉢は伴っていないようである。南部地区は陶器擂鉢が土器擂鉢を凌駕する地区で，土器鍋と同様ほとんど搬入していない。おそらく，海上交通を介して生産地の東海地方から直接搬入されたことが反映しているのであろう。中央地区は陶器擂鉢が生産され始められた古瀬戸後期Ⅳ段階から大窯１段階までは，陶器擂鉢が卓越する地区であったが，16ｃ代になると徐々に土器擂鉢の割合が増していったようである。ただし，土器擂鉢に逆転することはなかった。これは，中央地区の２カ所の遺跡が東京湾に近いことから，より海上交通の影響を受けたものと思われる。北部地区では陶器擂鉢と土器擂鉢の出土量が拮抗するようになるが，本佐倉城跡の方が墨古沢遺跡よりも陶器擂鉢の占める割合が若干高い。これは，土器鍋と同じく城郭と村落の遺跡の性格の違いが反映している。西部地区は北部地区以上に土器擂鉢の比率がより高くなる。

陶器擂鉢と土器擂鉢の比率および擂鉢以外の瀬戸美濃窯製品と常滑窯製品の出土状況から，瀬戸美濃窯製品が千葉県内に主にどのルートで搬入されたのか考えてみる。ただし，県南端部の安房地区，夷隅・長生・山武・海上地区の太平洋岸は一定量出土した遺跡がないため県内全域を対象とすることができないので，検討が可能な程度の出土量が得られる地区について見てみる。最も瀬戸美濃窯製品が多くみられる地区は，市原市・袖ヶ浦市・木更津市にかけての東京湾東岸部＝西上総地区である。この地区は東海地方で生産された東海系羽釜や西日本産の滑石製石鍋が他の地区よりも多く出土していることから，東海地方で船積みされた陶器が東京湾経由で直接搬入した可能性が高い。次に多くみられる地区は現在の千葉市域である中央地区である。この地区は東京湾の最奥部に面することから，西上総地区と同様海上交通によって搬入されたものと思われる。ただ，土器擂鉢がそれなりに出土していることと，東海系羽釜や滑石製石鍋が西上総地区ほど出土していないことを考慮すれば，西上総地区か東京湾西岸部の品川や神奈川の湊で積み替えられて搬入した可能性も考えられる。篠本城跡が所在する匝瑳郡光町という狭い地域で，しかも15

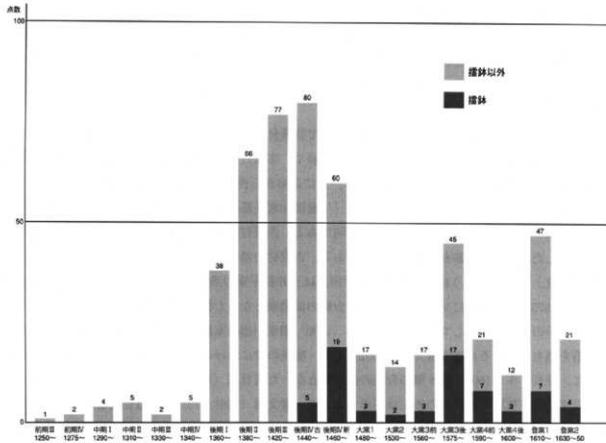
c後半代に限定される資料に制約されるが，この地域では篠本城跡の近隣で芝崎遺跡，中島遺跡の発掘調査が実施され（両遺跡とも平成17年度に（財）東総文化財センターから報告書刊行予定），15c代を中心とした居館跡や集落跡が検出されている。これらの遺跡からは古瀬戸後期段階の瀬戸美濃窯製品が多数出土している。しかも大形の破片資料が目に付く。また，篠本城跡の擂鉢については土器擂鉢よりも陶器擂鉢の方が卓越する。この地区の以上のような出土傾向をみると，現段階では周囲の地区に比べ瀬戸美濃窯製品の出土量が多いことが指摘できる。3カ所の遺跡の調査担当者である道澤明氏は，この地区では瀬戸美濃窯製品は東京湾経由ではなく太平洋岸から直接搬入されている可能性に言及している（平成17年度千葉県遺跡調査研究発表会）。本佐倉城跡と墨古沢遺跡の所在する印旛地区は印旛沼に，中馬場遺跡の所在する柏市域は手賀沼と，それぞれ湖沼に面している。両地区とも瀬戸美濃窯製品は各遺跡から500点以上出土していることから，かなりの量が搬入していたことが窺える。しかし，擂鉢に関しては土器擂鉢の占める割合が他の地区に比べ高いことから，商品価格の面では他の地区よりは割高な地区であったと言えよう。

第5節　瀬戸美濃窯製品の搬入状況

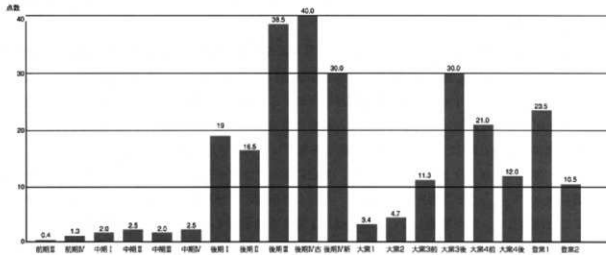
第125図は墨古沢遺跡における瀬戸美濃窯および初山・志戸呂窯製品の出土点数を各期別にグラフ化したものである。なお，複数期にまたがって時期判定されたもの（例えば古瀬戸後期Ⅰ～Ⅱ）については，各期の出土点数に応じて按分している。しかし，各期の時期設定幅には違いがあるため（例えば古瀬戸後期Ⅰは20年間，後期Ⅱは40年間，大窯1は50年間，大窯2は30年間），各期10年当りの出土点数に置き換えて作図したのが第126図である。

墨古沢遺跡では古瀬戸前期Ⅲ段階から出土が認められるが，中期Ⅳ段階までは各期数点の出土である。一定量まとまって出土し始めるのは後期Ⅰ段階以降からで，碗・皿・盤といった日常生活器種が主体を占めるようになる。本遺跡に村落が初めて形成された時期である。以後古瀬戸後期段階を通じてⅣ古段階をピークに多量に出土している。ただし125図では分からないが，126図では後期Ⅱ段階で一端出土量が減少する。後期Ⅳ古から後期Ⅳ新段階になると出土量はやや減少し，大窯1段階になると急減する。125図より126図の方がより極端で前段階の後期Ⅳ新より大窯1は1／10ほどに減少する。この時期の出土量の増減を県内の同時期の遺跡でみると，笹子城跡と中馬場遺跡では若干減少する程度で，生実城跡では逆に増加する。そして出土量が急減するのは次の大窯2段階に認められる。このことから瀬戸美濃窯製品が本遺跡において大窯1段階に入ると搬入量が減少したとは考えにくい。大窯1段階は古瀬戸後期Ⅰ段階に成立した村落が大規模な土木工事を伴って造り替えられた時期に当たることから，おそらくは村落の再編の影響が反映しているものと思われる。

大窯2～大窯3前半段階は古瀬戸後期段階と比べると出土量は少ない。これは本遺跡と同様に近世まで継続する中馬場遺跡と生実城跡でも同じ傾向が認められる。この傾向は大窯2～大窯3前半段階（16c中葉～16c後葉）では県内に搬入される瀬戸美濃窯製品が減少したことを示している。再び搬入量が増加するのは大窯3後半段階からである。この段階は瀬戸美濃窯製品を補完する初山・志戸呂窯製品も一定量含まれる。大窯4段階には若干出土量が減少するが登窯1段階に入ると再び増加する。大窯4段階以降は瀬戸美濃製品では志野釉の皿が主体を占めている。またこの段階の特徴として，肥前（唐津），備前，といった瀬戸美濃窯製品以外の窯製品が若干共伴するようになる。



第125図　瀬戸美濃窯製品各期別出土点数



第126図　瀬戸美濃窯製品各期別（10年当たり）出土点数

第6節　墨古沢遺跡の歴史的位置付け

発掘調査によって明らかにされた墨古沢遺跡の中世以降の遺跡変遷について要約してみる。先ず最初に12c後半以降墓域として使われ始められた。次に14c後半に入ると大規模な削平工事を伴って村落が形成された。しかし，15c末葉になると再び削平工事や盛り土造成を伴って新たに村落が再編された。この時形成された村落は17c前半までは存続した。

以上のような遺跡の変遷を周辺の歴史的環境の中で位置付けてみたい。遺跡が所在する酒々井町墨地区が史資料上で最初に確認されるのは香取造営料足納帳で，応永17年（1410）に墨郷に栗飯原三郎の所領の三町余や御料所一町余があったことが知られる。次に遺跡から西に700mの墨字広畑で出土した鰐口である。鰐口には明応九年（1500）の紀年名と共に「下総国印東荘墨郷勝福寺常住鰐口」の銘文がある。なお勝福寺は伝承や史資料・記録もなく所在地は不明である。古沢村は明治8年墨村に合併されるまで近世を通して存続した村で，本遺跡が所在する地区である。古沢村の初見史料は天正18年（1590）10月の「松平伊昌知行書立」で「ふつそう村」とある。松平伊昌は五井松平家の当主で，『寛政重修諸家譜』によれば天正3年（1575）16歳の時に父親と共に長篠の合戦の前哨戦となった長篠城籠城戦に，さらに天正12年の小牧・長久手の合戦に参陣している。天正18年（1590）関東が徳川家康の領国になったことから印旛郡内に2000石を領有した。その後文禄元年（1592）文禄・慶長の役における出撃基地であった肥前名護屋城在陣を経て，慶長5年（1600）関ヶ原の合戦の前哨戦となった伏見城（京都市伏見区）の籠城戦で戦死している。松平伊昌戦死後の古沢村の領主は不詳であるが，寛文期（1661～73）以降は佐倉藩領となり幕末まで続く。古沢村は近世を通して隣村の墨村への依存度が高く，当村の名主はある時期から墨村の名主が兼帯していたといわれる。本遺跡では17c後半以降の調査成果については割愛したため，考古資料からは遺跡の変遷は不明である。しかしながら17c後半以降も陶磁器は出土していることから何らかの使われ方をしていたのは確かである。例えば村落の中核的な屋敷（区画1），は，近世のある時期から栗主神社が建てられていたといわれる。

次に本遺跡の周辺の中世遺跡に目を向けてみる。墨りゅうがい城跡（第3図および第127図）は発掘調査区から西北西に800mの位置に所在する。城跡は印旛沼に注ぐ河川の一つである高崎川左岸に位置し，河川に対して南から北へ張り出す舌状台地先端部に占地する。城跡の標高は先端部の主郭（郭Ⅰ）で18m，主郭の下の水田面との比高差は8～9mを測る。城跡の構造はⅠ～Ⅲの3カ所の郭から構成される。規模は東西，南北共に150mほどである。Ⅰ郭が主郭でⅢ郭とは直角に2度屈曲する上幅15mほどの空堀で画されている。Ⅱ郭はⅠ郭よりも4mほど低位で，北辺に沿って土塁が築かれている。Ⅲ郭は南辺を現在切り通し道になっているところを想定しているが，それより南側の方が高所であることから，Ⅲ郭を確実に郭とすることは難しい。城が機能していた時期は，Ⅰ郭とⅡ郭を画する空堀の上幅が大規模なことと2度屈曲する構造であることから，16c後半代とみることが出来る。この時期は墨古沢遺跡では区画1～3の屋敷から構成される村落が機能していた。

墨りゅうがい城の性格は，軍事的には対岸に位置する墨古市場遺跡の存在を考慮すれば（第3図），墨りゅうがい城と墨古市場遺跡を結ぶ高崎川を渡河する街道を押さえる機能が考えられる。さらに墨地区では現在墨りゅうがい城跡の他には城跡は認められないことから，古沢村も含めた墨村住民の緊急時の避難場所としても使われていたと思われる。

墨古市場遺跡は墨りゅうがい城跡の対岸高崎川の右岸に北から南に張り出す舌状台地に立地する遺跡で

ある（第3図）。発掘調査が全く実施されていないので遺跡の性格は不明であるが，「市場」地名が残されていることから，中世段階にこの場所に市場が開かれていた可能性がある。そうであるならば，当遺跡は本佐倉城から太平洋岸の成東，東金地区へ向かう脇街道沿いに位置する。この街道は墨りゅうがい城の東端を通り墨古沢遺跡で検出された東西道路に繋がるものと考えられる。

第127図　墨りゅうがい城跡概念図（池田1995より）

本佐倉城跡は本遺跡から北西に約3kmのところに位置する。本佐倉城は戦国時代には鎌倉時代以来下総守護を勤めた千葉氏の居城として，近世に入っても慶長10年（1615）に佐倉城が築かれるまでは徳川氏の重臣層が城主として入り，戦国時代から近世初頭まで下総における政治的中心地であった。また，城跡周辺の発掘調査によって城下町が広範囲に展開し，さらに城下町は惣構といわれる土塁や堀で周囲を防御されていたことが近年明らかにされた。このことから本佐倉城は政治的拠点ばかりでなく，経済的にも文化的にも下総の中心地であった。墨古沢遺跡と本佐倉城とその城下町との関係を具体的に知る史資料はないが，距離的にみて当遺跡で検出された村落は本佐倉城の直轄領的位置付けが可能と思われる。そうであるならば，出土遺物の組成から，例えば瀬戸美濃窯製品の搬入量の多寡，中国製天目茶碗の複数個体の出土，16c後半以降の中国製染付の一定量の出土，村落遺跡としてはカワラケの出土比率が高いことなど，本佐倉城との関係の強弱が捉えられるかもしれない。この点は「宿」遺跡に想定され，しかも同時期で遺物組成が近似する柏市中馬場遺跡との比較検討が必要となろう。

ところで，本書では墨古沢遺跡の性格を特に検討もなく村落遺跡としてきた。しかし人々が集住した場

所は村落の他にも都市，宿，市などがあり，そのような「都市的な場」を墨古沢遺跡の性格の一つに考えられなくもない。例えば遺跡内には路面幅３ｍほどの道路が南北，東西両方向に通っており，屋敷も道路に面して入口を設けていることは，「都市的な場」を考えさせる材料の一つである。しかしながら，宿とすれば戦国時代に下総では最大の都市であった本佐倉城下町とは近接しすぎて宿の運営は難しい。市も同様で近接する墨古市場遺跡との関係からみて可能性は低いと思われる。ただ墨古市場遺跡の市開催日数如何によっては市が開催されていた可能性を全く否定することは出来ないが，墨古沢遺跡を宿や市といった商業的集落とする積極的な根拠は乏しいといえる。

近年千葉県内で検出された中世村落や城館の発掘調査事例をもとに，それらの構造の時期的変遷を解明しようとする考論が相次いで発表されている（笹生1999，櫻井2003，簗瀬2004，柴田2005）。これらの論考から導き出された中世村落の変遷は，先ず12ｃ～13ｃ代に沖積平野部に散村形態の村落が現われ14ｃ後半以降には集村化し，台地上でもこの時期から集村化した村落が登場する。しかし，15ｃ後葉から16ｃ前葉にかけて村落のみならず城館も含めて廃絶する事例が多くみられる。逆に墨古沢遺跡のように廃絶することなく近世まで継続する事例もあるが，何れにしても15ｃ後葉から16ｃ前葉の時期が中世村落の再編期にあたることは間違いない。この時期はちょうど墨古沢遺跡では14ｃ後半に成立した村落（区画４の屋敷）が再編され新たな村落（区画１～３の屋敷）が成立した時期にあたる。この時期に廃絶せず近世まで継続する村落も，存続するためにはそれまでの村落構造を根底から改変する必要があったようである。

最後に残された課題について述べる。遺物，特に陶磁器については小野正敏，藤澤良祐両氏により全点を対象に産地，時期，器種等についてご教示を受けたことから，陶磁器と遺跡の関わりについては明らかに出来たことが多々あった。それに反して個々の遺構については，発掘調査時に得られた詳細なデータをほとんど使用することなく検討を加えることができなかった。このため各遺構が集中して検出された地区（例えば区画１・２・４で囲まれた地下式坑，井戸，粘土貼土坑集中地区や区画４）の性格は不明なままなり，最終的に村落全体の景観を復元することが出来なっかたのが最も大きな課題といえる。

引用文献

『角川日本地名大辞典12　千葉県』1984　角川書店
『日本歴史地名大系第12巻　千葉県の地名』1996　平凡社
池田誠「墨りゅうがい城跡」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』1995　千葉県教育委員会
笹生衛「東国中世村落の景観　変化と画期－西上総周東・周西郡内の事例を中心に－」『千葉県史研究』第七号　1999　千葉県
櫻井敦史「県内における中世村落の発展について－百姓居宅の区画から－」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅳ　2003　市原市文化財センター
簗瀬裕一「房総の中世集落－台地上集落を中心に－」『中世東国の世界２南関東』2004　高志書院
柴田龍司「考古学からみた中世房総の城館と村・町」『城郭と中世東国』2005　高志書院

写真図版

1．遺跡周辺航空写真（南東から）

2．遺跡周辺航空写真（南から）

図版2

1．遺跡周辺航空写真（南から）

2．遺跡周辺航空写真（北から）

1．中国製品

2．瀬戸美濃窯製品（1）

1．瀬戸美濃窯製品（2）

2．瀬戸美濃窯製品（3）

図版5
墨遺跡公園内
墨古沢
調査区
調査区
墨木戸
墨古沢南Ⅰ
墨新山
藤株Ⅱ
0
1：1000
50m
道路新設予定

区画 1 全景（南から）

区画 1 全景（南東から）

区画 1 北東部斜面（北東から）

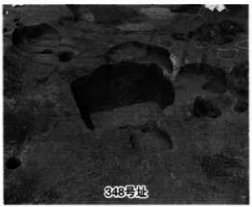
区画 3 全景（真上から）

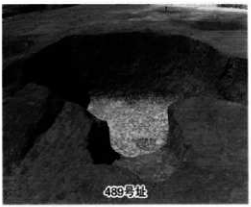
区画 2 全景（北から）

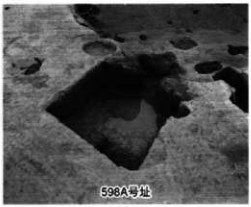
区画 4 全景（東から）

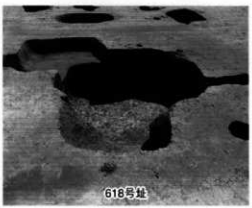
区画 5 全景（南東から）

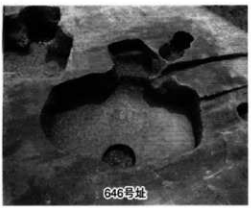
区画 5 全景（北西から）



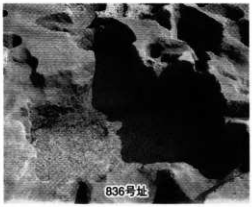


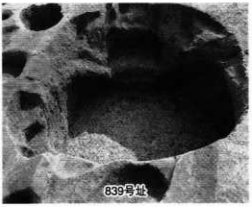


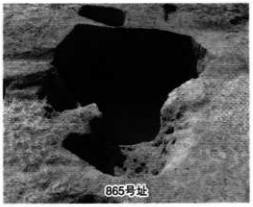


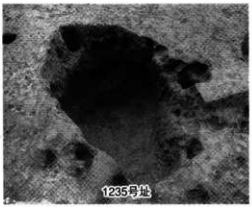


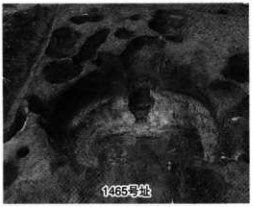
地下式坑（1）



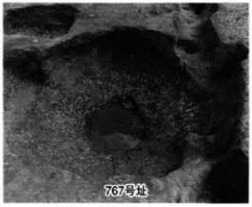


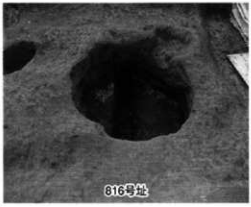


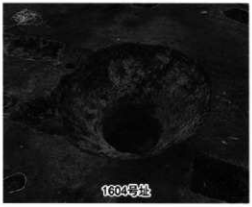




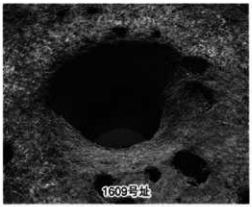
地下式坑（2）

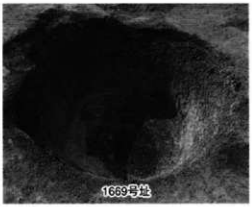


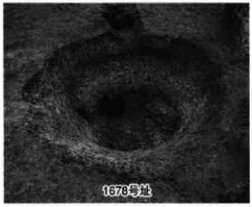


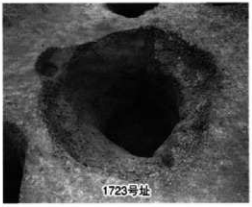


井戸跡（1）

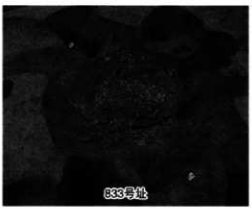


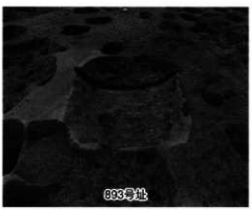




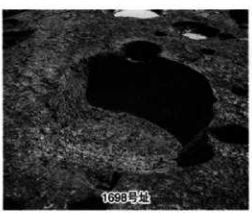


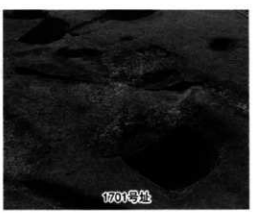
井戸跡（2）

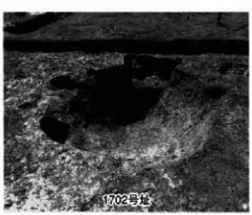




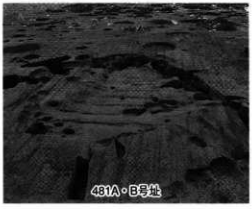
粘土貼土坑（1）

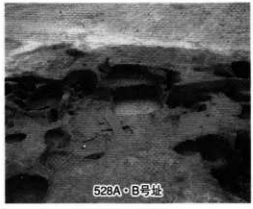


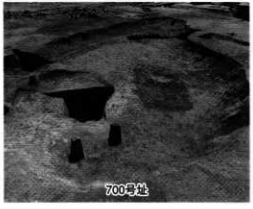


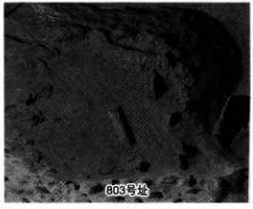


粘土貼土坑（2）





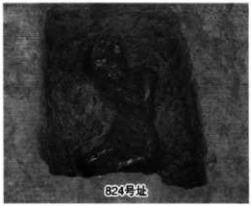




大型竪穴状遺構

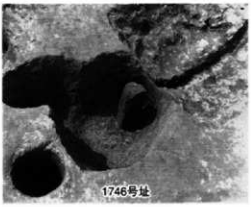
530号址（方墜）

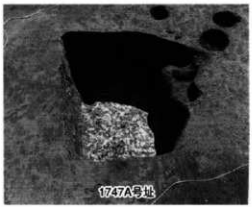
582号址（方墜）

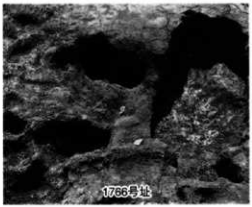

824号址

854A号址

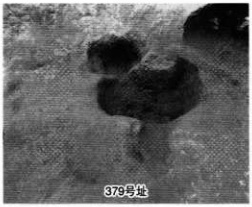
1731号址


1746号址

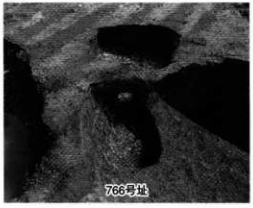

1747A号址

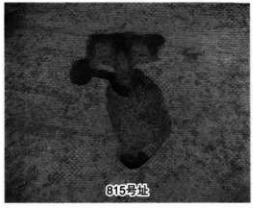

1766号址

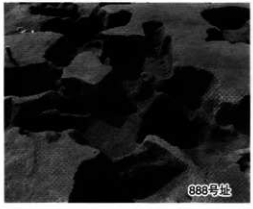
方形竪穴遺構・土坑墓


379号址

483号址


766号址


815号址

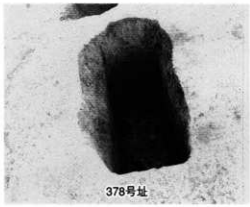

888号址

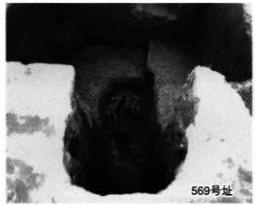
1063号址

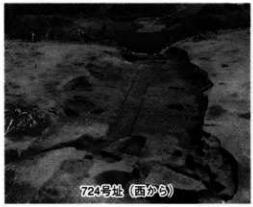
1717号址

1757号址

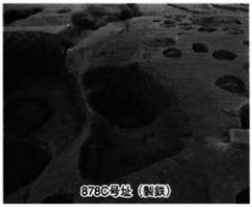
火葬施設





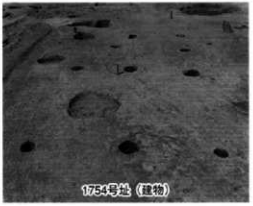


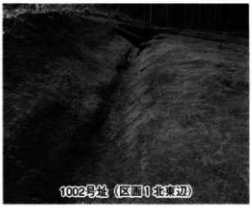
馬埋葬土坑・道路遺構


878C号址（製鉄）

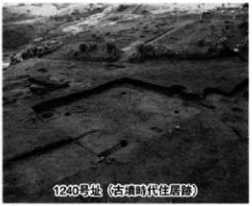
1143号址（やぐら状）

1356号址（やぐら状）


1754号址（建物）


1002号址（区画1北東辺）

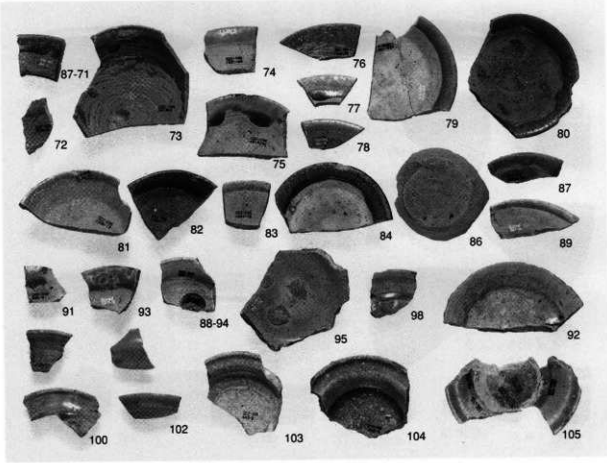
1002号址


1240号址（古墳時代住居跡）

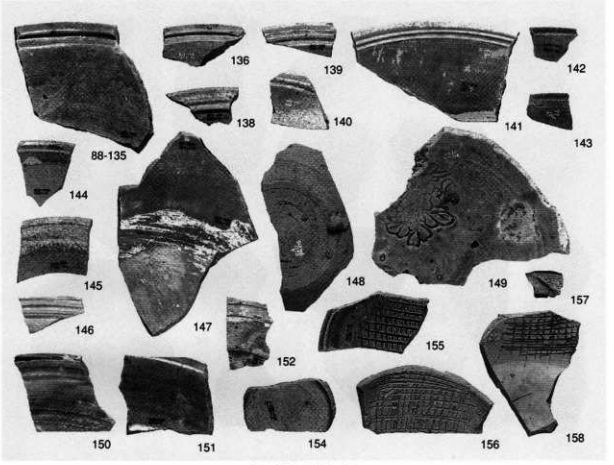
1240号址東隅

その他の遺構

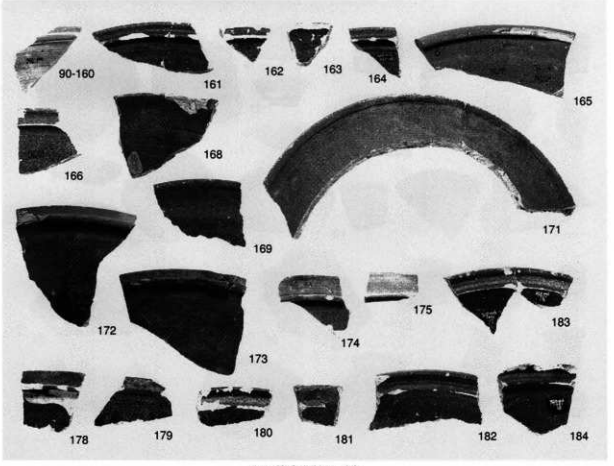
瀬戸美濃窯製品（4）



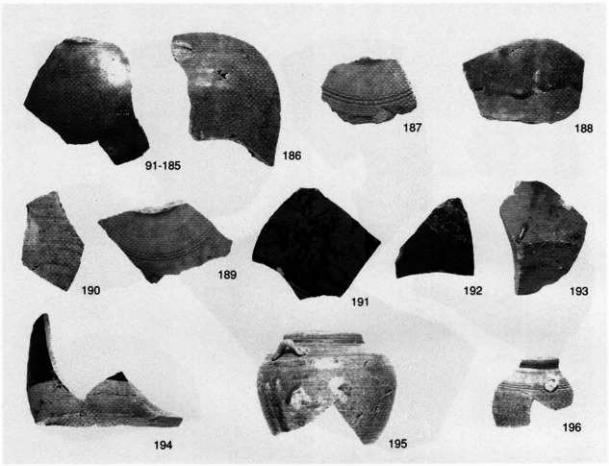
瀬戸美濃窯製品（5）



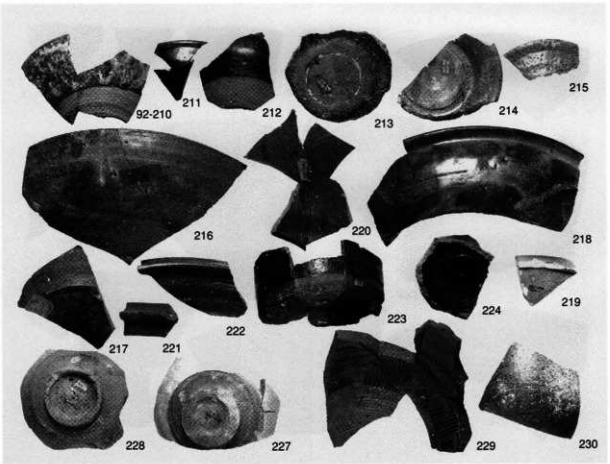
瀬戸美濃窯製品（6）



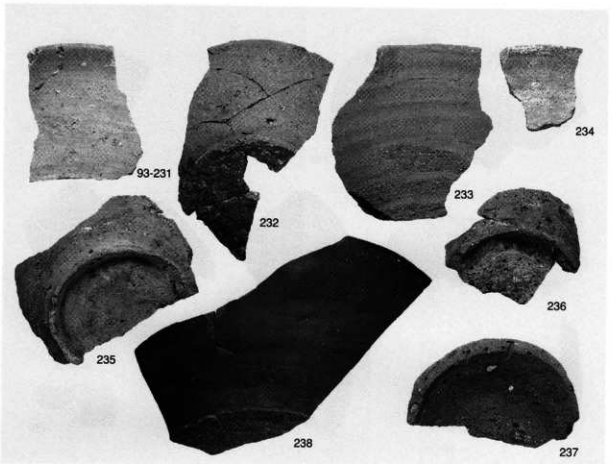
瀬戸美濃窯製品（7）



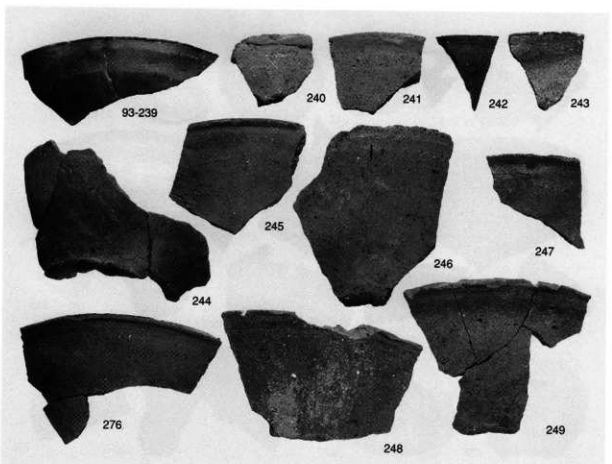
瀬戸美濃窯製品（8）



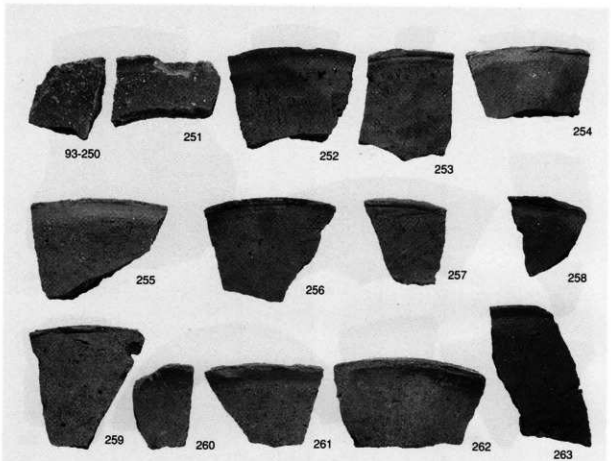
志戸呂・初山窯，肥前窯，備前窯製品



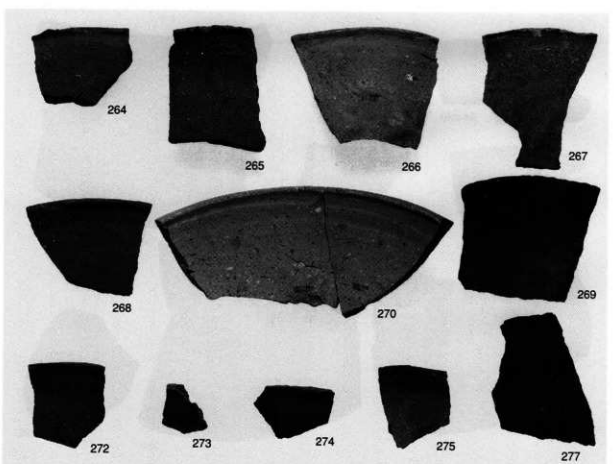
常滑窯製品（1）



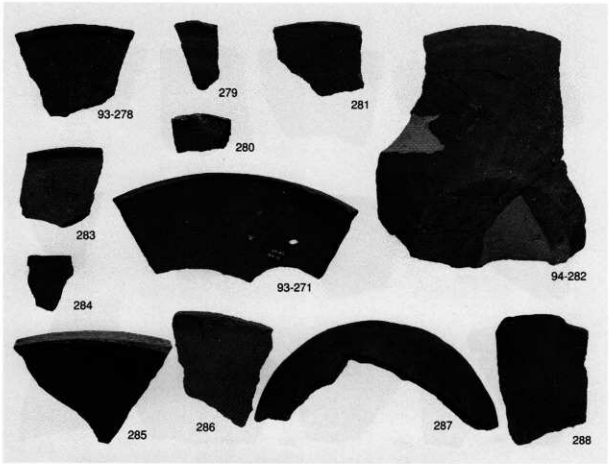
常滑窯製品（2）



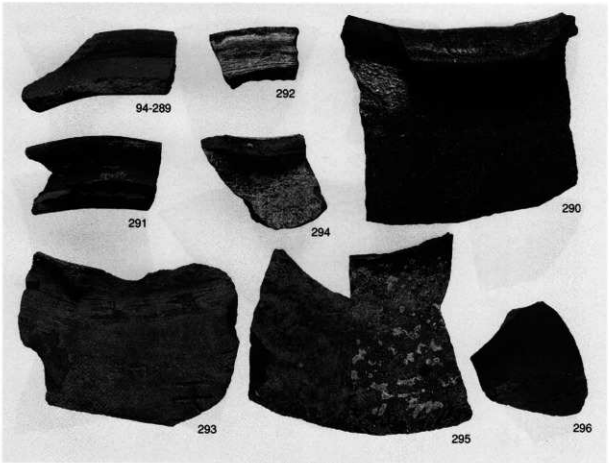
常滑窯製品（3）



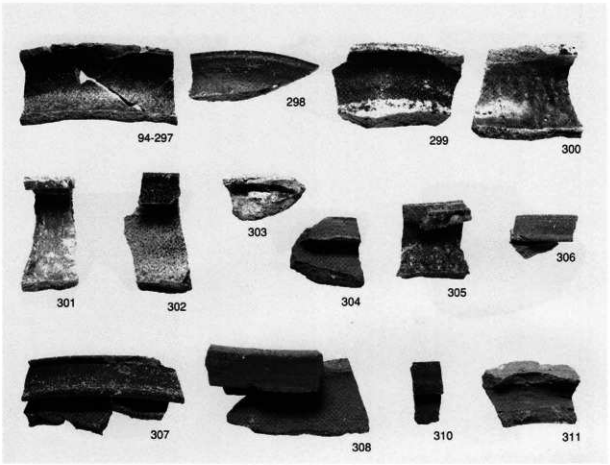
常滑窯製品（4）



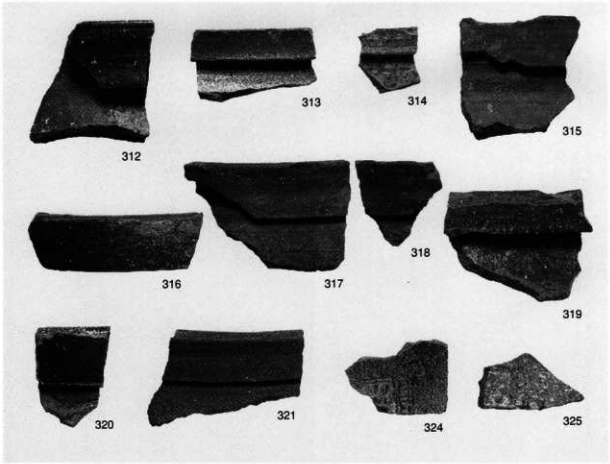
常滑窯製品（5）



渥美・常滑窯製品（1）

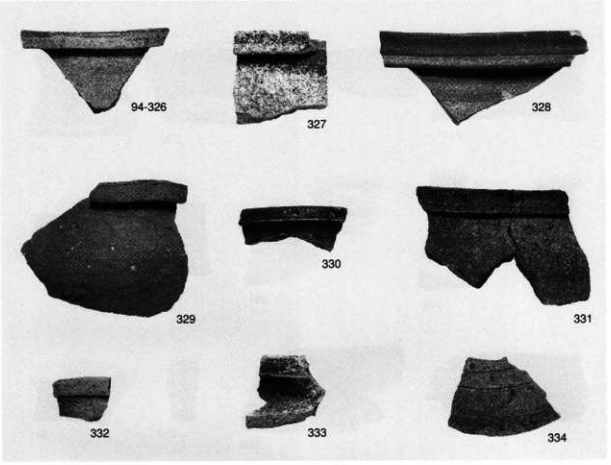


渥美・常滑窯製品（2）

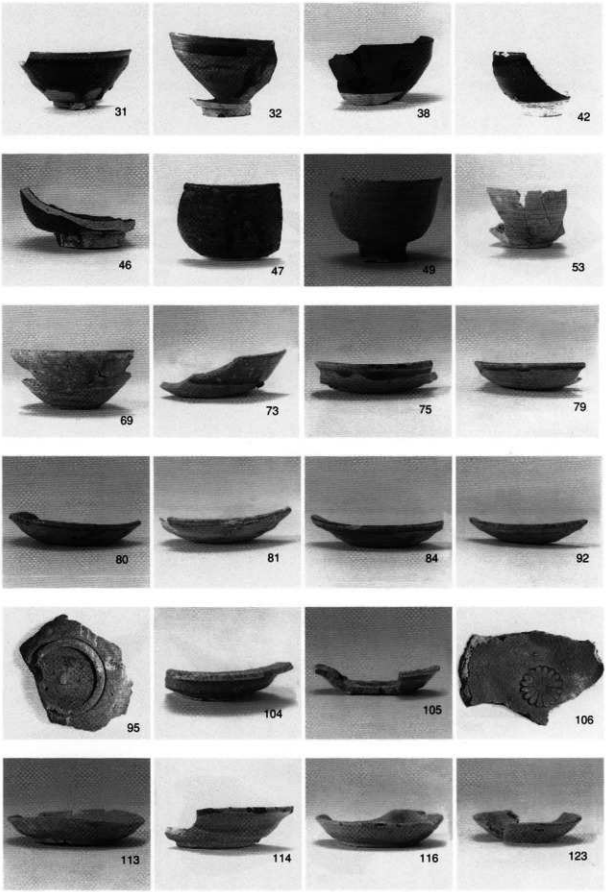


常滑窯製品（6）

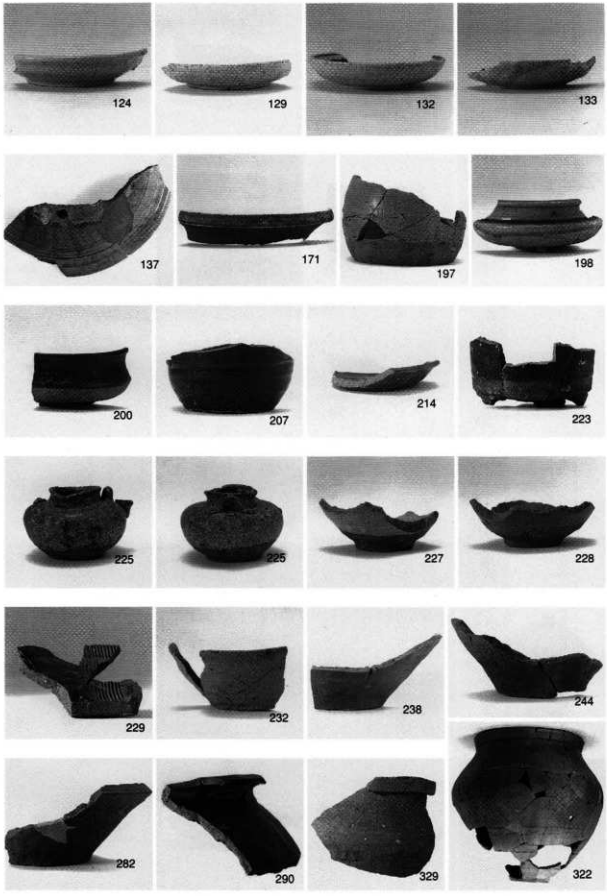
図版28



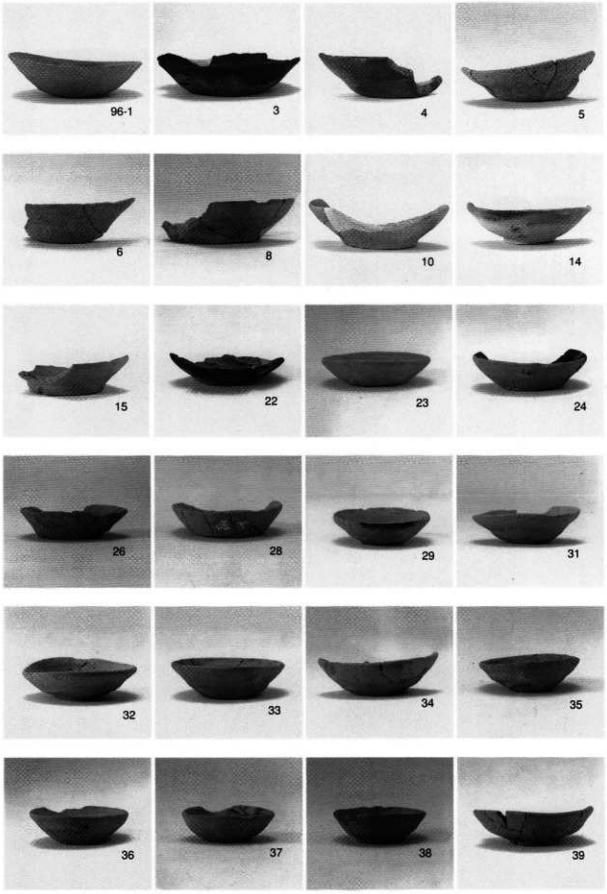
常滑窯製品（7）


31
32
38
42
46
47
49
53
69
73
75
79
80
81
84
92
95
104
105
106
113
114
116
123

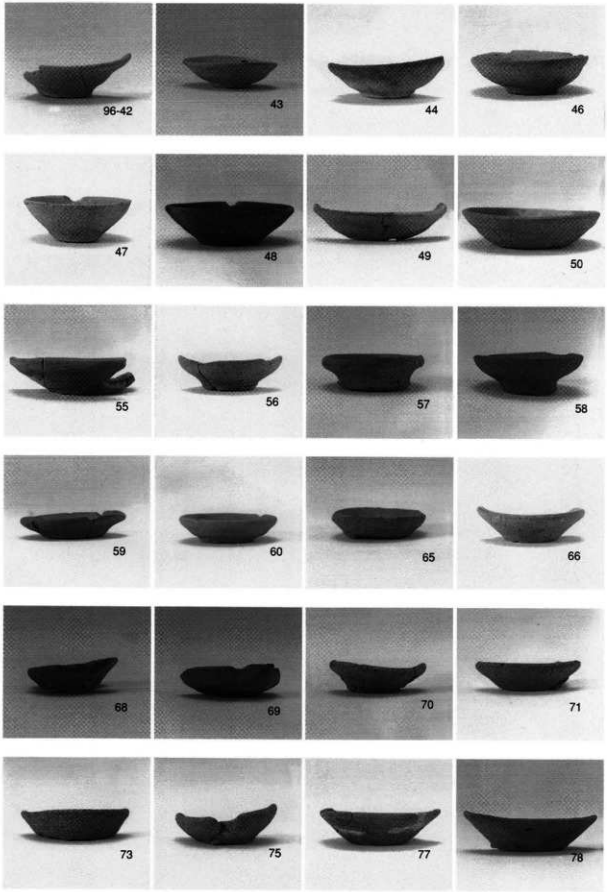
瀬戸美濃窯製品（9）



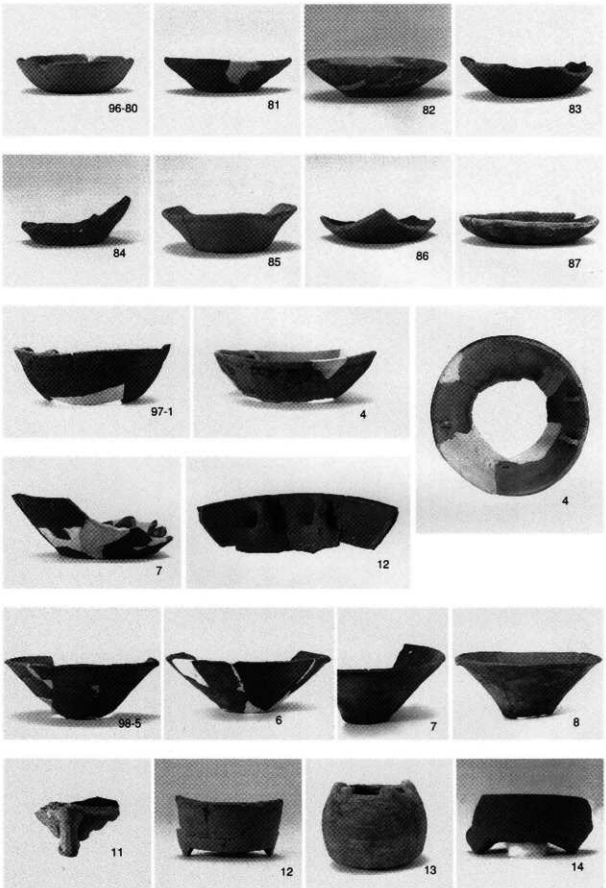
瀬戸美濃・志戸呂・初山・肥前・備前・常滑・渥美窯製品



カワラケ（1）


96-42
43
44
46
47
48
49
50
55
56
57
58
59
60
65
66
68
69
70
71
73
75
77
78

カワラケ（2）



カワラケ（3）、上器鍋・擂鉢・香炉

報告書抄録

ふりがな	ひがしかんとうじどうしゃどうみとせんしすいばーきんぐえりあまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書3
副書名	酒々井町墨古沢遺跡　中世編
巻次	3
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第542
編著者名	柴田龍司
編集機関	財団法人　千葉県教育振興財団
所在地	〒284－0003　千葉県四街道市鹿渡809－2　　TEL043-422-8811
発行年月日	西暦2006年3月24日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
すみふるさわいせき 墨古沢遺跡	ちばけんいんばぐん 千葉県印旛郡 しすいまちすみのだい 酒々井町墨字台 1337－1ほか	12322	006	35度 42分 33秒	140度 17分 00秒	19990701～ 20010831	38,742	酒々井パーキングエリア増築事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
墨古沢遺跡 中世編	集落跡	古墳時代	住居跡　2軒	土師器，砥石，滑石製臼玉，ガラス玉	
			竪穴状遺構　1基	土師器	
		平安時代	土坑　1基	土師器	
	集落跡 墓地跡	中世～近世前半	屋敷地　4区画 宗教施設　1区画 作業施設　1区画 溝　99条 井戸跡　78基 シシ穴状遺構　21基 火葬施設　34基 地下式坑　36基 土坑墓　25基 土坑　235基 粘土貼土坑　32基 馬埋葬土坑　9基 方形土坑　60基 方形竪穴遺構　13基 人型竪穴状遺構　16基 道路遺構　1条 製鉄関連遺構　2基 やぐら状遺構　4基 人型不整形竪穴遺構1基 建物跡　1棟	陶磁器 （中国磁器） （瀬戸美濃窯） （初山・志戸呂窯） （肥前窯） （備前窯） （常滑窯） （渥美窯） カワラケ 土器擂鉢・鍋・香炉 銭貨 石塔 温石 硯 砥石 木製品	12c後半以降墓域として使われ，14c後半には村落が形成されたが，15c後半になって新たに村落が再編され近世まで継続する変遷過程が明らかになった。

千葉県教育振興財団調査報告第542集

東関東自動車道水戸線酒々井PA
埋蔵文化財調査報告書3
－酒々井町墨古沢遺跡－
中世編

平成18年3月24日発行

編　集　財団法人　千葉県教育振興財団

発　行　東日本高速道路株式会社関東支社
台東区北上野一丁目10番14号

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地2

印　刷　株式会社　エリート情報社［印刷出版局］
成田市東和田415番地10